

群の鉢形土器であり、体部に流水状工字文が展開する。5・6は、8群の深鉢であり、体部に平行沈線が巡る。

2) 分析グリッド外

⑤ II f 層 (図III-3-5-4)

7は2a群の深鉢であり、列点文が巡り磨消繩文が施される。8は9b群の鉢であり、口唇直下に弧状沈線が連続する。

⑥ II e 層 (図III-3-5-4)

9は4群の香炉形土器であり、体部には三叉文が施される。10は3~8群の粗製壺である。

⑦ II d 層 (図III-3-5-4)

11・12は2a群の深鉢であり、沈線および磨消繩文が施される。13は9b群の鉢あり、口唇直下に弧状沈線が連続する。14~16は8群の鉢であり、14・16には体部上半に粘土粒で区切られた結節沈線と流水状工字文が巡る。15は体部上半に粘土粒で区切られた結節沈線と向かい合った矢羽状沈線が巡る。17は8群の浅鉢であり、口唇直下および体部上半に粘土粒で区切られた結節沈線が巡る。18は7群の壺であり、口唇部に突起を有する。19は2b群の人面付香炉形土器である。

⑧ II c 層 (図III-3-5-4)

20は2b群の深鉢形土器の波状口縁部であり、波状中央部に円状の隆帯が施される。21は3~8群の粗製深鉢である。

⑨ II b 層 (図III-3-5-4)

22は3~8群の粗製壺である。

(江戸)

B. 石器・礫 (表III-3-5-1、図III-3-5-5~6)

4,933点、226.5kgの石器・礫を検出した。剥片・碎片1,298点、搬入礫3,056点が多くを占める。剥片石器は尖頭器、石鎌などの定型石器186点、スクレイパーなどの不定形石器255点である。また、

表III-3-5-1 第5遺物集中区出土石器・礫の層位別・種別出土量表

	II a	II b	II c	II d	II e	II f	その他	計
尖頭器	3	3	1	1				8
石鎌	44	38	13	28	2	4	1	130
石椎	6	3	1	14		1	1	26
小型石錐	9	0						9
石匙	2	4	3			1		10
石墻	1	2		4	3			10
スクレイパー	1	3	2					6
微細剥離のある剥片	57	62	41	58	3	5	3	229
小型スクレイパー	6	3	1	1				11
磨石・敲石類	20	38	10	26	3	1	4	102
石皿・台石類	1	1						2
砥石	1		2	4		1	1	9
石鍬								0
磨製石斧			2					2
その他(擦切・扁平石器)				1	1			2
石核	2	10	3	5			3	23
メノウ石核								0
剥片	25	60	30	27	9	1	3	155
小型柱状剥片	2	1	1	1				5
砂片	229	148	250	159	269	55	28	1,138
異形礫								0
搬入礫	753	588	480	867	170	150	48	3,056
計	1,162	964	840	1,196	460	219	92	4,933

石皿・台石類などの礫石器は 113 点であり、これらの全点数に占める割合は 11% と他の集中区よりも高い。

定型の剥片石器の内訳は尖頭器 8 点、石鏃 130 点、石錐 26 点、石匙 10 点で、石鏃が 70% を占める。不定形の剥片石器はスクレイパー 6 点、微細剥離のある剥片 229 点、メノウ製を主とする小型石錐 9 点、小型スクレイパー 11 点であり、微細剥離のある剥片が多い。礫石器は石皿・台石類 2 点、磨石・敲石類 102 点、砥石 9 点と磨石・敲石類が多い。不定形の剥片石器を除いた定型石器と礫石器にしめる割合をみると石鏃 44%、磨石・敲石類 34% とかなり、石鏃の割合が高い。

石器製作に関わる石核・剥片・碎片は、1,321 点で点数全体の 27% にとどまる。

異形礫はほとんどない。搬入礫は 3,056 点で点数全体の 62% とかなり高い。

層位別にみると、II a 層～II e 層の 6 つの層うち、II a 層～II d 層の数が多い。各器種の割合をみると、剥片・碎片は下層ほど高くなる一方、尖頭器・石鏃・搬入礫が低くなる。

図III-3-5-5-1～4 は尖頭器である（以下図III-3-5-5 は省略）。8 点出土した。分類別の内訳は木葉形 4 点（1・2）、菱形 2 点（3）、山形 1 点（4）、半月形 1 点である。

5～7 は石鏃である。内訳は、凸有 b 類 76 点（58%）、凸有 c 類 9 点、凸有 d 類 7 点、凸有 a 類 5 点、凸有 f 類 11 点、平基有茎鏃・円基鏃各 1 点、分類不明 14 点がある。石材は、頁岩 112 点、メノウ 17 点である。

凸有 b 類は 2 点図示した（5・6）。5 の左右の機能部に微細剥離がみられる。凸有 c 類は 1 点図示した（7）。7 は基部が直線的である。

8 は石錐である。つまみ部が成形され長い錐部をもつ。9 は台形の石鏃である。10 は縦型石匙である。11 はメノウ製の小型スクレイパーである。縦型剥片の両側縁に刃部を作り出す。12 は打面が 1 箇所で同一方向の打撃を加えて剥片を得ている。13 は黒曜石の楔形石核である。

14・15 は磨石・敲石類である。14 は表裏面に凹痕と磨耗痕、上下側面に敲打痕がある。15 には線状の敲打痕が表裏側面に認められる。16・17 は砥石である。双方とも幅 5cm ほどの帯状の研ぎ面がある。18 は擦切具で、板状節理のある安山岩が用いられる。

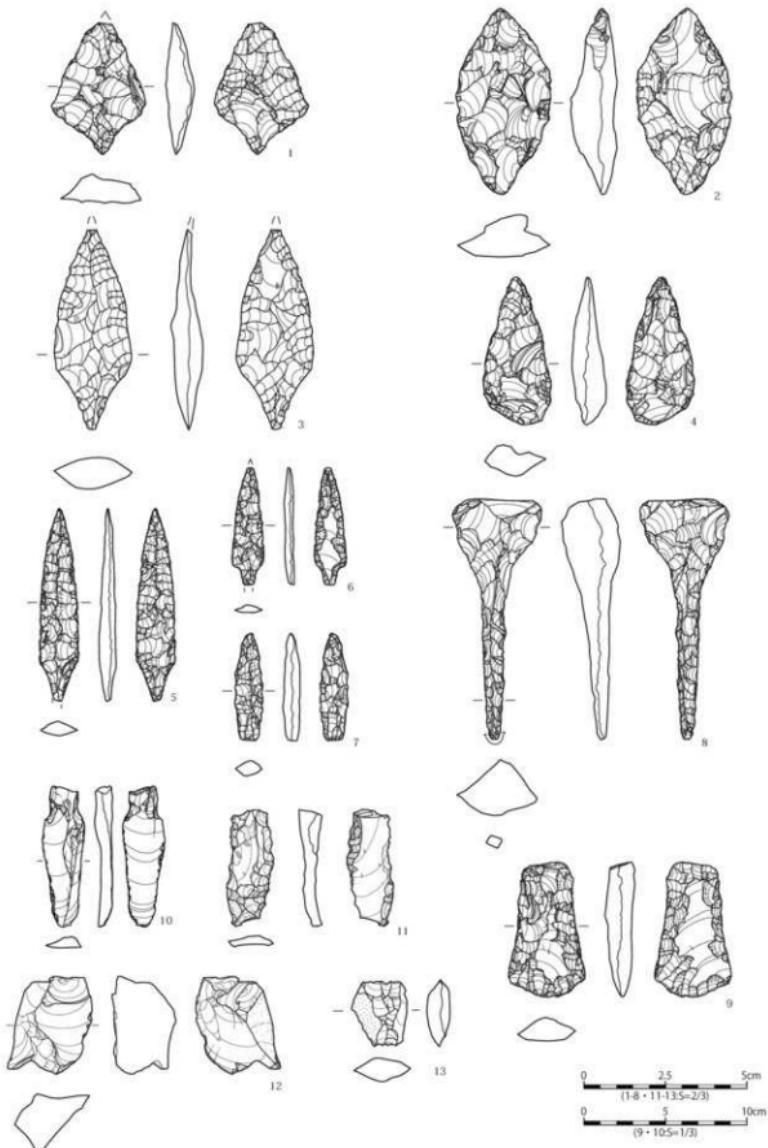
C. 土製品（図III-3-5-7）

土製品はミニチュア土器、蓋形土製品、筒形土製品、土製耳飾、環状土製品、土版の 6 種がある。1 はミニチュア土器である。壺形で肩の形から大洞 C 式頃に属す。2 は小型の蓋形土製品で頭部に B 突起がつく。3 は筒形土製品である。土管状で全体形は不明である。4 は土製耳飾である。貫通孔を中心に渦巻文が施される。5 は環状土製品で歯車形である。6 は土版で四分の一ほどが残存する。7 は異形の土玉で中央に沈線が巡る。

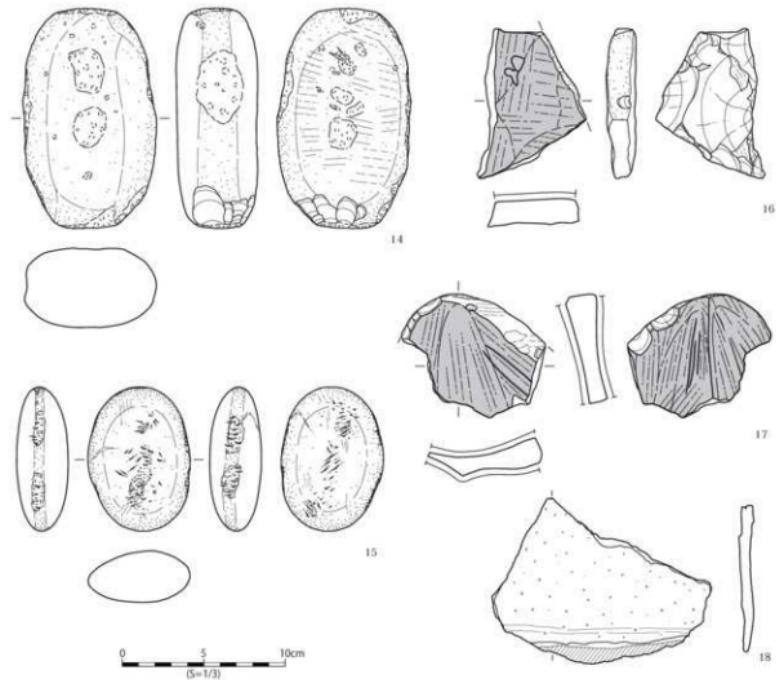
D. 石製品・石製玉類（図III-3-5-7）

石製品は石棒、石刀、石製丸玉がある。8 は石棒の一部で、端部のほか表裏面を欠く。9 は石刀である。幅 4cm で幅広の刀身である。沈刻線を巡らす。10 は石製丸玉である。

（上條信彦）



圖III-3-5-5 第5遺物集中區出土石器(1)

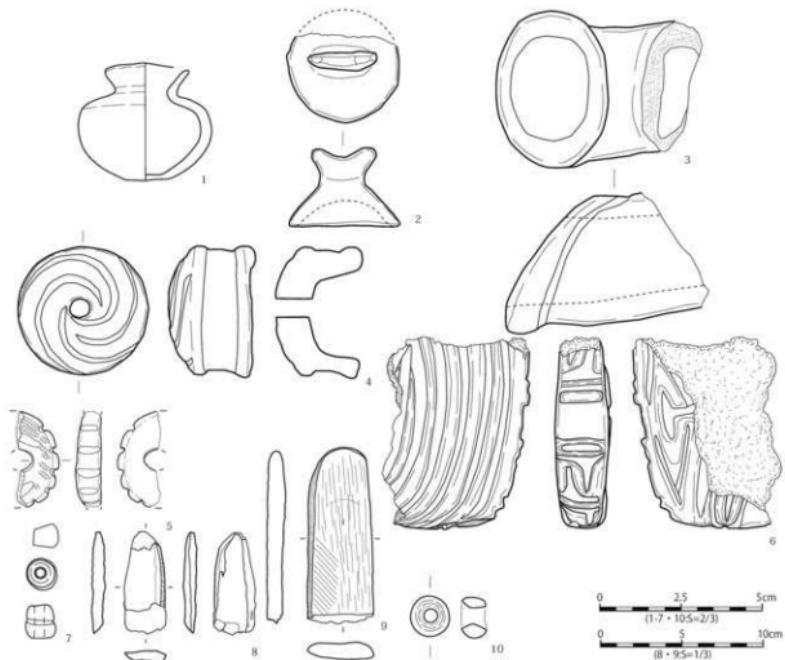


図III-3-5-6 第5遺物集中区出土石器(2)

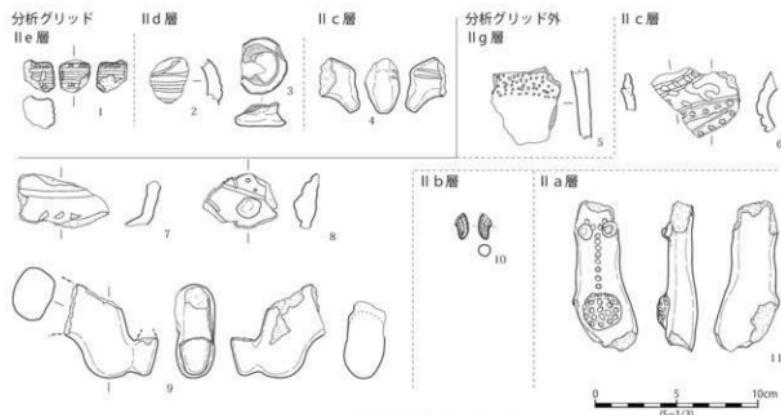
E. 土偶 (図III-3-5-8)

1は土偶の胸部で、腰の張り出し部分と思われる。沈線による工字文が施されている。2は細片であるが、土偶の胸部とみられる。平行沈線がみられる。3は土偶の脚部である。中空土偶とみられる。底は円形を呈する。文様はない。4は中実土偶の腕部で、平行沈線がみられる。5は中空土偶の胸部で、刺突文を施している。6～8は遮光器土偶の胸部で、隆帶に刺突列や入組沈線文を施している。全体に磨滅している。9は土偶の脚部で、膝が屈折している。10は土偶の腕部で、全体に刺突文を施す。11は土偶の胸部で、正中線と腹部に刺突文を施す。砂礫が多く胎土は不良である。

(榎原)



図III-3-5-7 第5遺物集中区出土土製品・石製品



図III-3-5-8 第5遺物集中区出土土偶

6. 第6遺物集中区

概要

【位置・確認】遺跡の中央、縦列砂丘の北側の緩斜面(グリッド X=120～134,Y=60～120)に位置する。検出面はⅡa層である。【規模・形状】南北 14 m、東西 60 m の長方形を呈する。

(1) 第6西遺物集中区

【位置・確認】第6遺物集中区の西側、標高約 9 m に位置する(図III-3-6-1)。X=122～126,Y=70 の計 3 グリッドを分析グリッドとして設定した。検出面はⅡa層である。

【出土遺物】土器、土製品、石器・石製品が出土した。土器では、第2b群～第9b群土器が出土し、口縁部カウント数は 149 点である。土製品では、土偶、耳飾、土製丸玉、棒状土製品、円板状土製品が出土している。石器・石製品では、剥片石器(尖頭器・石鏃・石錐・石匙・異形石器・スクレイパー・小型石錐)、石核、岩偶、独鉛石などが出土している。

【時期】下限を示す時期の土器は第8群土器(北海道系の第9群は除く)である。第6西遺物集中区では、グリッドごとで同一層位として取り上げた。以下層位ごとに土器の特徴を記載する。また、各群の層位ごとの出土状況をグラフで示す(図III-3-6-2)。

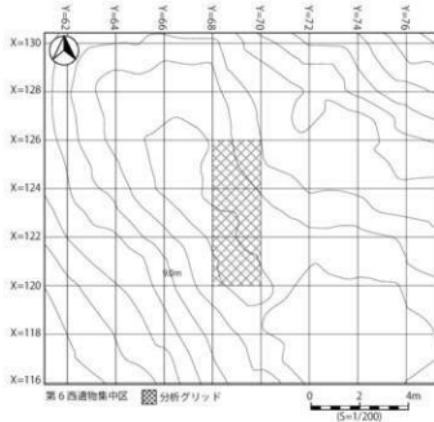
A. 土器

① Ⅱh層(図III-3-16-3)

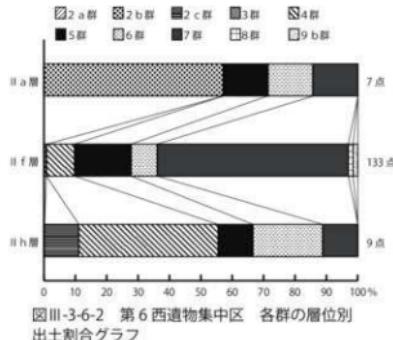
2b群の注口土器 1 点、4群の深鉢 3 点、6群の鉢 1 点、3～6群の深鉢 3 点、7群の鉢 1 点の計 9 点出土した。その内図化したのは 1 点である。1 は 2b群の注口土器であり、口頸部から体部上半にかけて多数の貼瘤が施され、間に刻目と弦線が巡る。

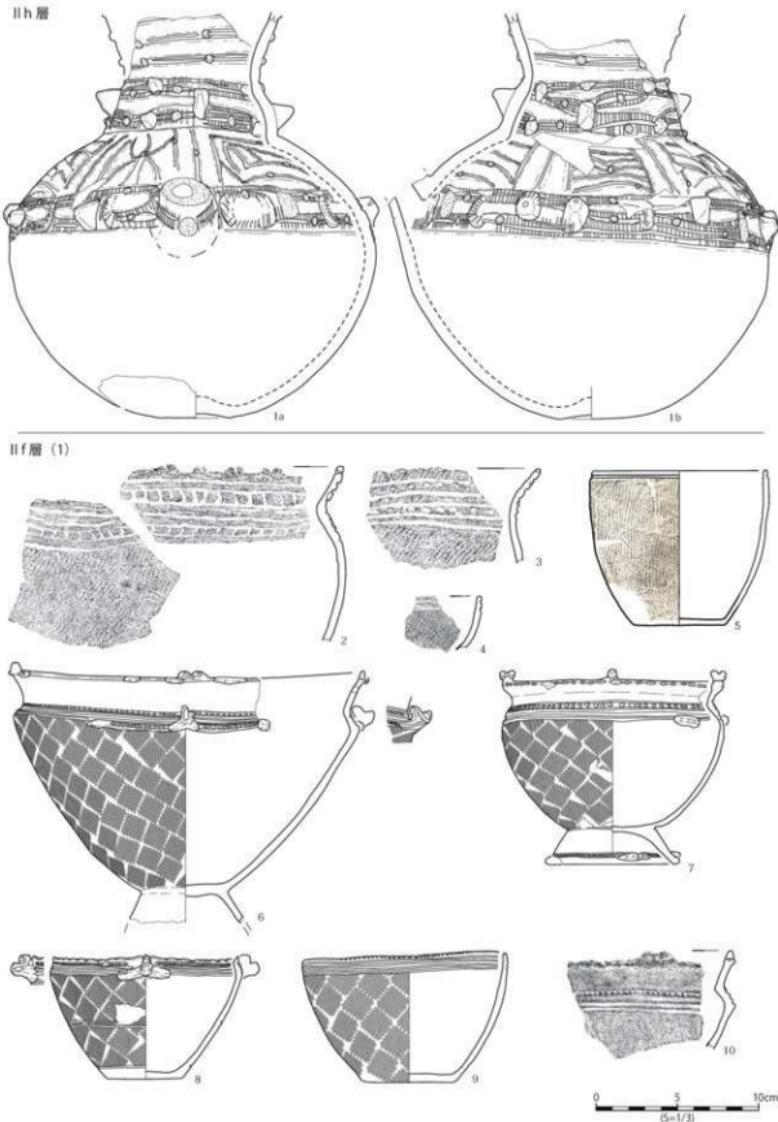
② Ⅱf層(図III-3-6-3・4)

2b群の深鉢 1 点、4群の深鉢 12 点、5群の深鉢 8 点、鉢 14 点(赤彩資料 1 点含む)、浅鉢・皿 1 点(赤彩資料)、6群の深鉢 1 点、鉢 7 点、浅鉢・皿 2 点、注口 1 点、3～6群の深鉢 48 点、7群の深鉢 34 点、鉢 26 点、

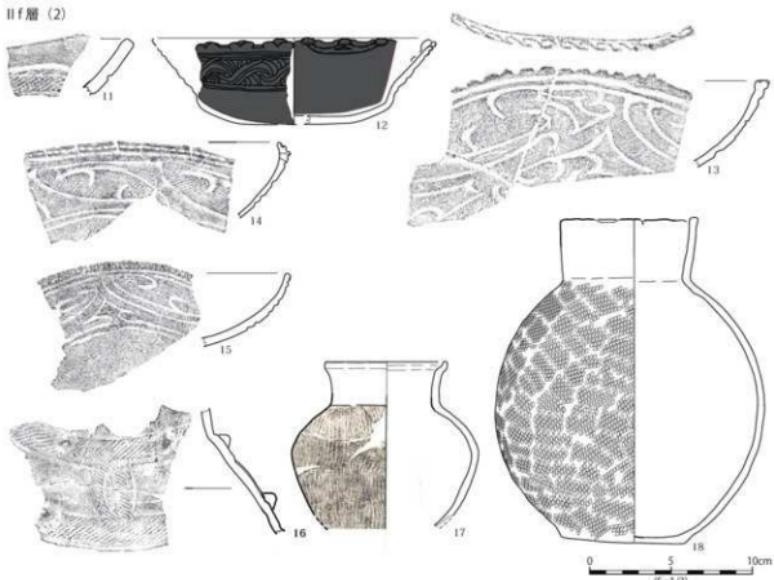


図III-3-6-1 第6西分析グリッド位置図





図III-3-6-3 第6西遺物集中区・分析グリッド出土土器(1)



図III-3-6-4 第6西遺物集中区・分析グリッド出土土器(2)

浅鉢・皿 15点（赤彩資料2点含む）、壺6点、8群の深鉢2点、3～8群の鉢1点（赤彩資料）、浅鉢、皿2点（全点赤彩資料）、壺11点、9b群の鉢2点の計194点出土した。その内図化したのは17点である。2は5群の壺であり、口頸部に刻目文と横位沈線が2条巡る。3は5群の鉢であり、口頸部に列点文が2条巡る。4は9b群の鉢であり、口縁部に横位沈線とそれに繋がるノの字状の沈線が巡る。5は6群の深鉢であり、口縁部に1条の横位沈線が巡る。6・7は7群の台付鉢であり、口唇部および体部上半に突起を有し、口頸部に列点文と横位沈線が巡る。8～10は7群の鉢である。8は口頸部に列点文と横位沈線が巡り、体部上半は大型の突起を有する。9は口縁部に数条の横位沈線が巡る。10は口唇部に突起を有し、口頸部に列点文と横位沈線が巡る。11は2a群の浅鉢の波状口縁部である。12は5群の浅鉢であり、内・外面にベンガラが塗布される。口唇部にB突起が連続し、口縁内部にB突起に沿うように丸状の隆帯とそれらをつなぐ帶状の隆帯が施される。体部上半は羊歯状文的な入組文が展開する。13・14は6群の浅鉢・皿であり、体部に雲形文が展開する。15は7群の浅鉢であり、体部上半に雲形文が展開する。16は2b群の注口であり、体部は貼瘤と帶状文が巡る。17は7群、18は3～8群の粗製壺である。

(江戸)

B. 石器・礫 (表III-3-6-1、図III-3-6-5)

1,937点、40.3kgの石器・礫を検出した。剥片・碎片1,124点、撒入礫554点が多くを占める。剥片石器は尖頭器、石鎌などの定型石器158点、スクレイバーなどの不定形石器26点である。また、石皿・台石類などの礫石器は67点で、不定形剥片石器が少なく、定型剥片石器の数が多い。

定型の剥片石器の内訳は尖頭器 6 点、石鏃 140 点、石錐 5 点、石匙 2 点で、石鏃が 88% と圧倒的である。不定形の剥片石器はスクレイパー 19 点、微細剝離のある剥片 1 点、メノウ製を主とする小型石錐 5 点、小型スクレイパー 1 点である。礫石器は石皿・台石類 1 点、磨石・敲石類 66 点と磨石・敲石類が多い。不定形の剥片石器を除いた定型石器と礫石器にしめる割合をみると石鏃 62%、磨石・敲石類 29% と石鏃の割合がかなり高い。

石器製作に関わる石核・剥片・碎片は、1,132 点で点数全体の 58% を占める。

異形礫はほとんどない。搬入礫は 554 点で点数全体の 28% にとどまる。

主体の遺物包含層が II f 層のみであるため、層位別な傾向はうかがえない。

表III -3-6-1 第6西遺物集中区出土石器・礫の層位別・種別出土数表

	II a	II b	II c	II d	II e	II f	II g	II h	その他	計
尖頭器	1					3			2	6
石鏃	17					14	6	2	101	140
石錐						1			4	5
小型石錐						5				5
石匙									2	2
石皿						2			3	5
スクレイパー						19				19
微細剝離のある剥片						1				1
小型スクレイパー						1				1
磨石・敲石類						3		1	62	66
石皿・台石類									1	1
砥石										0
石錐										0
磨製石斧										0
その他（擦切・扁平石器）										0
石核						7				7
メノウ石核						1				1
剥片	38					267		17		322
小型柱状剥片						9				9
碎片	187					585		21		793
異形礫										0
搬入礫	6					197		13	338	554
計	249	0	0	0	0	1,115	6	54	513	1,937

1～3 は尖頭器である。6 点出土した。分類別の内訳は木葉形が 2 点(1)、菱形 2 点(3)、山形 1 点、ト形 1 点(2) である。

4 は石鏃である。140 点出土し、内訳は凸有 b 類 57 点(41%)、凸有 a 類 22 点(16%)、凸有 c 類 4 点、凸有 d 類 2 点、凸有 f 類 2 点、平基有茎鏃 19 点、未成品 5 点、分類不明 26 点である。石材は、頁岩 114 点、メノウ 25 点、黒曜石 1 点である。アスファルト付着資料は 2 点ある。4 は、平基有茎鏃である。

5・7 はメノウ製の小型スクレイパーである。5 は短冊形、7 は三角形の側縁を刃部とする。6 は縦型石匙である。8～11 は石核である。8・9 は上下両面に打面が設けられ、両設打面から交差するよう剥片が剝離される。10・11 は打面を上の 1箇所に設定し、同一方向から剥片を得ている。

C. 土製品・土製玉類・石製品(図III -3-6-6)

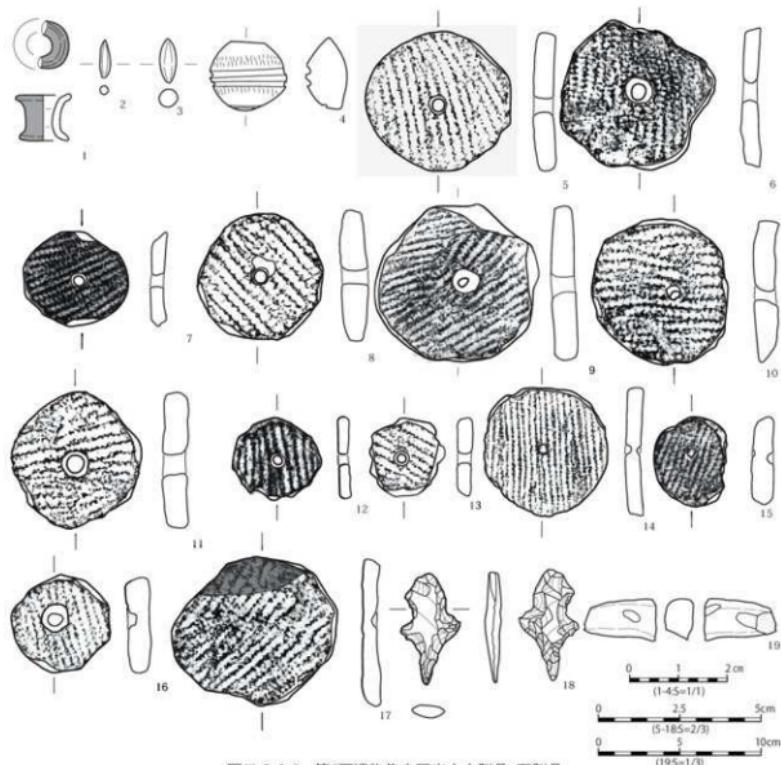
土製品・土製玉類は土製耳飾、棒状土製品、円板状土製品、土製丸玉の 4 種類がある。1 は土製耳飾である。全面に赤色顔料が塗布される。2・3 は長さ 1cm 未満、径 2.3mm の小型品である。両端が細くなる。4 は土製丸玉である。中央に 2 本の沈線が巡り、その周りに線状の刺突文が巡る。5～17 は円板状土製品である。17 以外は穿孔がある。石製品は 2 種類ある。18 は異形石器、19 は独鉛



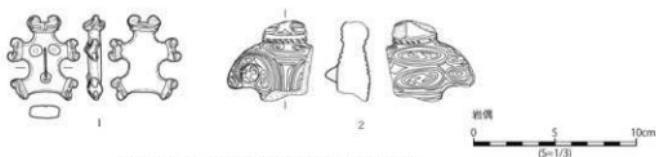
図III-3-6-5 第6西遺物集中区出土石器

石である。

(上條信彦)



図III-3-6-6 第6西遺物集中区出土土製品・石製品



図III-3-6-7 第6西遺物集中区出土土偶・岩偶

D. 土偶・岩偶 (図III-3-6-7)

1はX字形土偶の完形品である。頭部や四肢には角状突起で二股に分かれている。乳房の膨らみのほか、沈線に刺突を入れた正中線がみられる。2は岩偶である。頭頂部、左腕、胸部下半が欠損している。入組沈線文や渦巻文を胸部に施している。

(榎原)

(2) 第6東遺物集中区

【位置・確認】第6遺物集中区の東側、標高約7mに位置する(図III-6-7)。X=126～128,Y=114～116の計3グリッドを分析グリッドとして設定した。検出面はII b層である。【出土遺物】土器、土製品、石器・石製品、骨角器が出土した。土器では、第7群土器がまとまって廃棄されており、良好な層位資料が得られた。口縁部カウント数は1,134点である。土製品では、土偶・耳飾・棒状土製品・ボタン状土製品、円板状土製品、ミニチュア土器が出土している。石器・石製品では、剥片石器(尖頭器・石鎌・石錐・石鏸・石斧・石刀、垂飾、岩偶、有孔石製品が出土している。

【時期】下限を示す時期の土器は第7群土器である。

A. 出土土器について

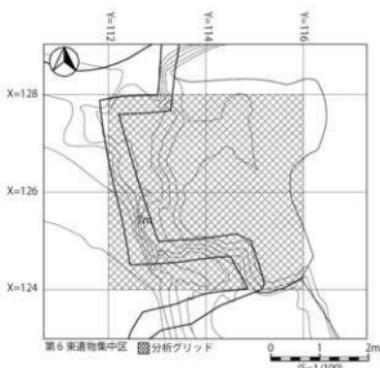
第6東遺物集中区は、7群の土器が多量に出土した。以下分布図とともに層位ごとに土器の特徴を記載する。

① II g 6層(図III-3-6-8・14～17)

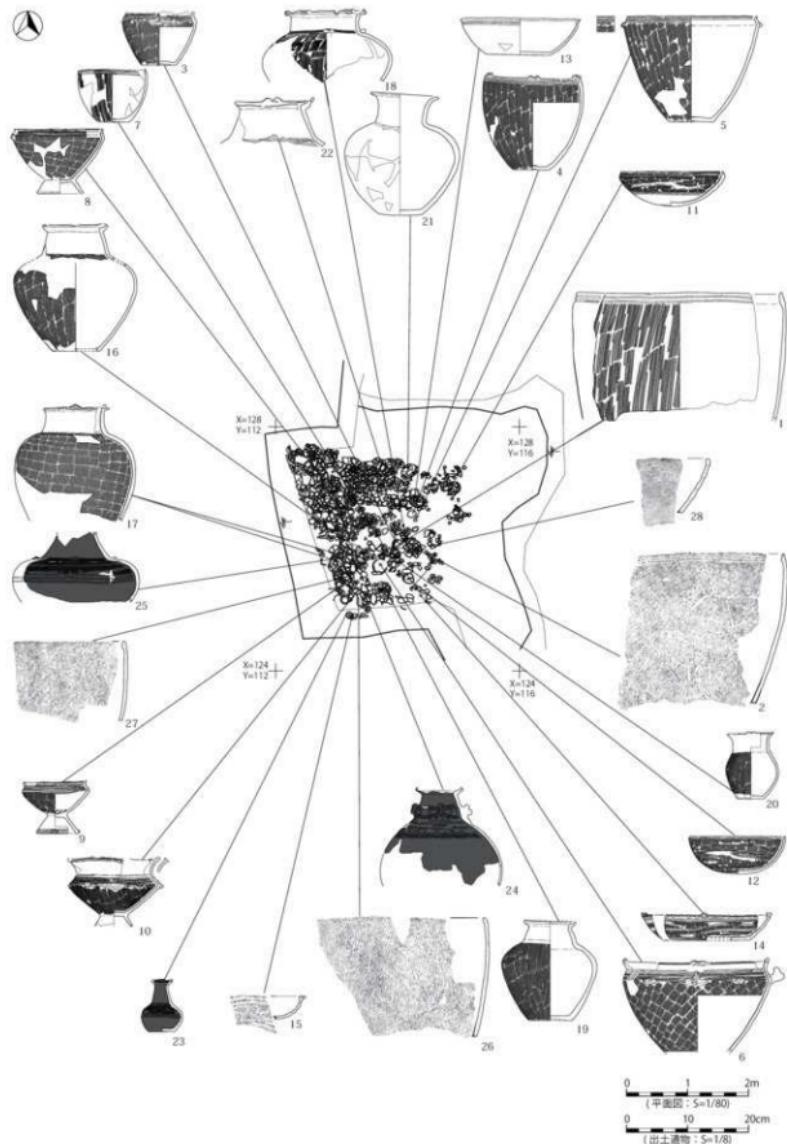
分析グリッドの全面にわたって廃棄されており、7群の深鉢44点、鉢118点(赤彩資料3点含む)、浅鉢・皿11点、壺33点、器種不明土器4点の計210点出土した。その内図化したのは28点である。1・2は7群の深鉢形土器であり、口縁部に数条の横位沈線が巡る。3～7は7群の鉢であり、3・6は体部上半に大型の突起を有し、口頸部に列点文および横位沈線が巡る。4・5・7は口縁部に数条の横位沈線が巡る。体部は雲形文が展開する。8～10は、7群の台付鉢であり、口頸部に数条の列点文と横位沈線が巡る。9は内部にベンガラ塊を有する。10は体部上半に大型の突起を有する。11～13は、7群の浅鉢であり、11・12は体部に雲形文が展開する。13は無文である。14・15は、7群の皿であり、体部に雲形文が展開する。16～25は7群の壺であり、口頸部は無文で体部との境目に数条の横位沈線が巡る。17・18・22は口唇部、口唇直下および口頸部と体部の境目にB突起を有する。23～25には赤彩が施される。23は体部上半に雲形文が展開する。24は外面に水銀朱が塗布され、口頸部にB突起をつなぐ連弧状の隆帯が施される。25は外面にベンガラが塗布され、体部上半に雲形文が展開する。26～28は、7群の粗製深鉢である。

② II g 5層(図III-3-6-9・17・18)

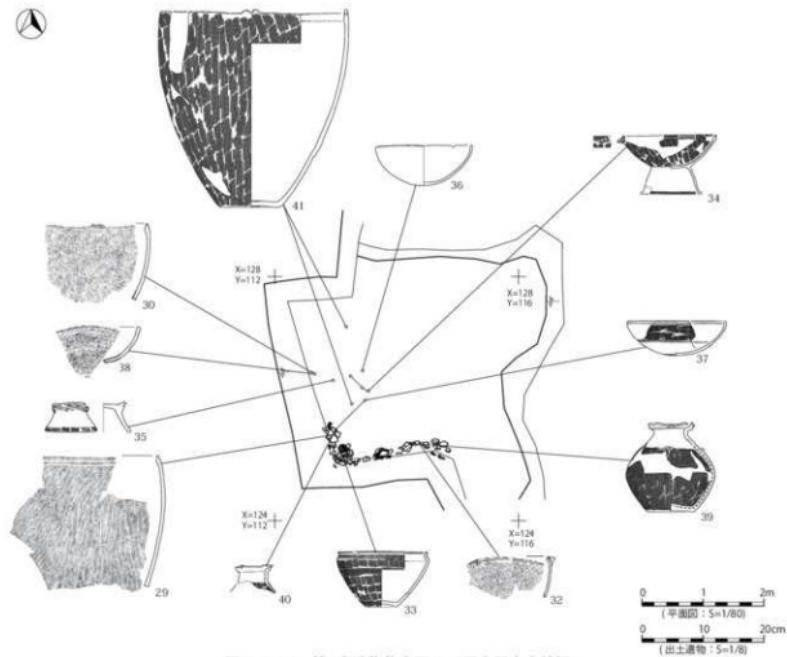
グリッドX=124・126,Y=114に散発的な廃棄状況がみられ、7群の深鉢17点、鉢31点、浅鉢・皿11点、壺7点の計66点出土した。その内図化したのは13点である。29・30は、7群の深鉢であり、口縁部に横位沈線が巡る。31～33は、7群の鉢であり、口縁部および口頸部に列点文か横位沈線



図III-3-6-7 第6東遺物集中区分析グリッド位置図



图III-3-6-8 第6束遺物集中区 II g6層土器出土状况

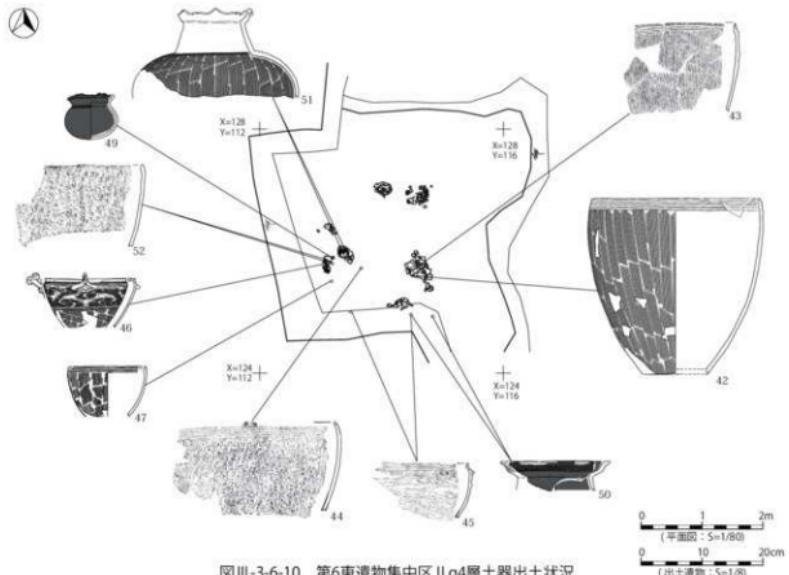


図III-3-6-9 第6東遺物集中区 II g5層土器出土状況

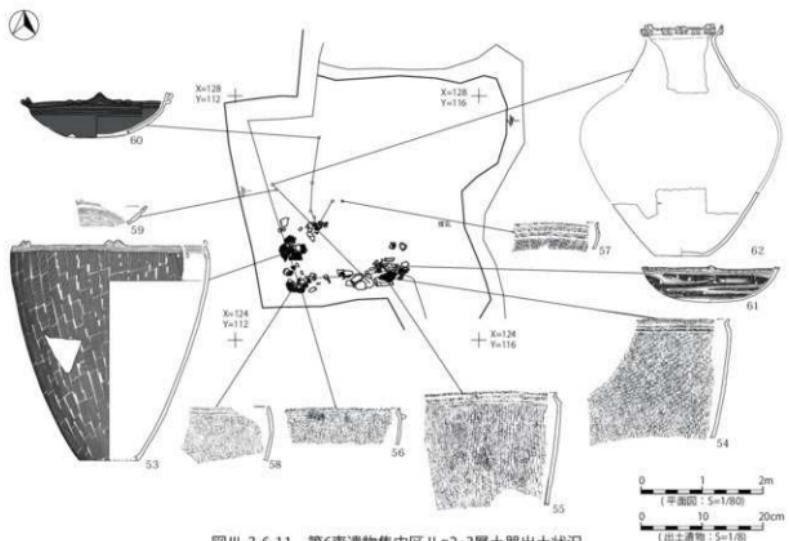
が巡る。32は口頭部に突起を有する。33は体部に羽状縞文が施される。34は7群の台付鉢であり、口頭部に列点文および横位沈線が巡り、突起を有する。台部は器高の約半分を占め、下端に縞文が施される。35は7群の台部であり、羊歯状文が巡る。下端は縞文が施される。36～38は、7群の浅鉢であり、36は無文である。37は体部上半に雲形文が展開する。38は外面にベンガラが塗布され、口縁部と体部中央に2条の沈線が巡る。39・40は、7群の壺であり、口唇部に突起を有し、口頭部は無文である。41は、7群の粗製深鉢である。

③ II g 4層 (図III-3-6-10・19)

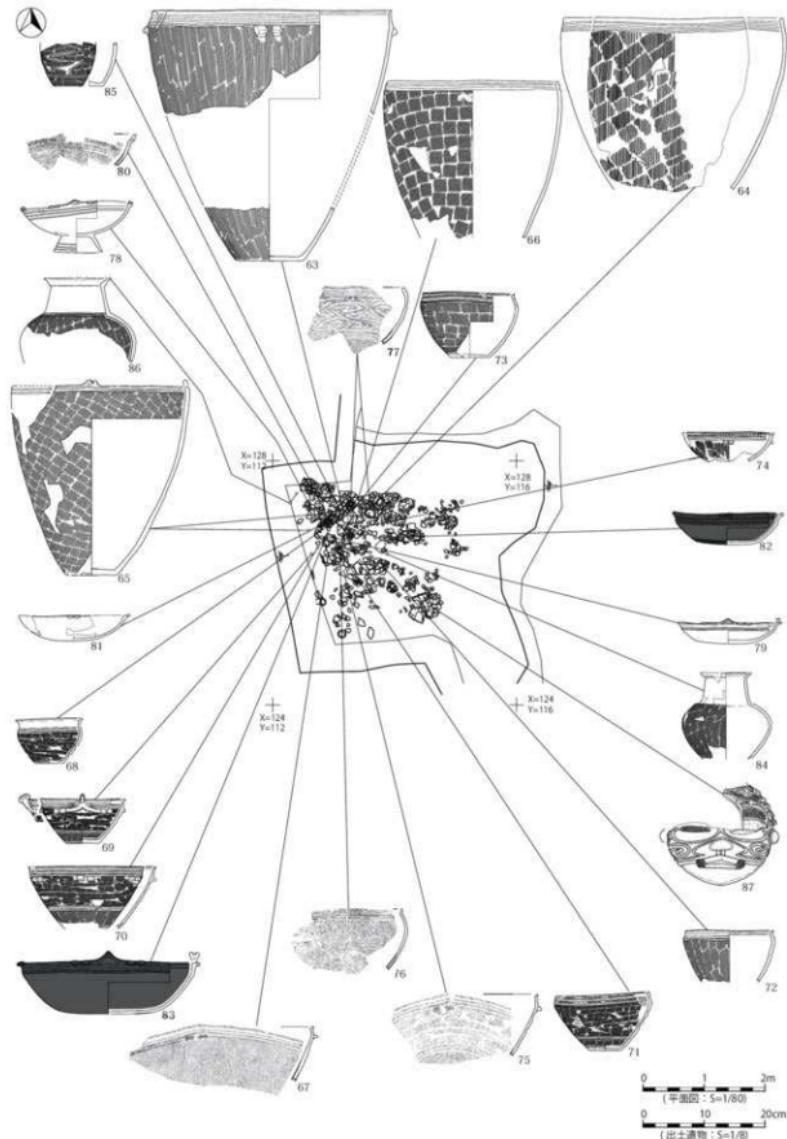
グリッド X=126,Y=114 に散発的な廃棄状況がみられ、7群の深鉢 56 点、鉢 64 点、浅鉢・皿 4 点、壺 27 点の計 151 点出土した。その内図化したのは 11 点である。42～44 は 7 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。45～47 は 7 群の鉢であり、45・46 は体部に雲形文が展開する。46 は付根に三叉状の彫去が施された大型の突起を体部上半に有する。47 は口縁部に列点文および横位沈線が巡る。48 は 7 群の浅鉢であり、口唇部に山形突起を有し、口唇直下に B 突起を有する。口頭部には横位沈線が巡る。49～51 は 7 群の壺である。49 はやや小型の壺であり外面にベンガラが塗布され、口唇部に B 突起を 2 つ有する。50 は外面にベンガラが塗布され、口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。51 は口唇部に山形突起と B 突起が交互に連続する。52 は 7 群の粗製深鉢である。



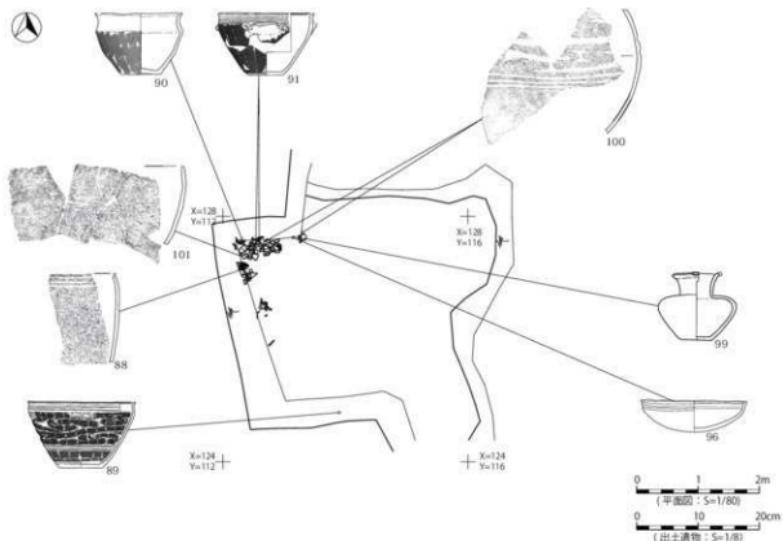
图III-3-6-10 第6集中区II g4層土器出土状况



图III-3-6-11 第6集中区II g2+3層土器出土状况



図III-3-6-12 第6束遺物集中区 II f4層土器出土状況



図III-3-6-13 第6東遺物集中区 II f1~3層土器出土状況

④ II g 2・3層（図III-3-6-11・20・21）

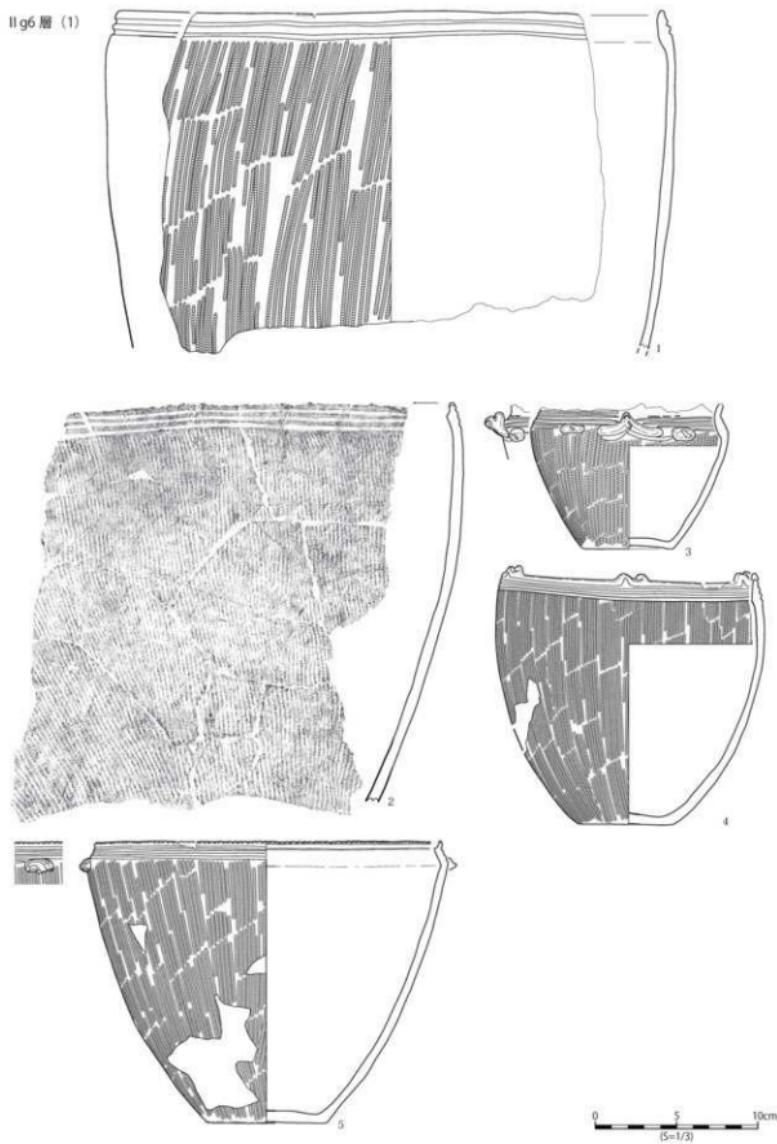
グリッド X=124, Y=114 の南東隅を中心とし、廃棄状況がみられ、7群の深鉢 34点、鉢 33点、浅鉢・皿 11点、壺 10点の計 88点出土した。その内図化したのは 10点である。53～55は7群の深鉢である。口縁部に数条の横位沈線が巡る。53は口唇部に中間を沈線により区画し、外面に三叉状の彫去が施された突起を有する。54・55は口唇直下に列点文が巡る。56・57は、7群の鉢である。56は口唇直下に列点文が巡り、口頭部に2条の横位沈線が巡り間にB突起を有する。57は口唇直下から口頭部にかけて列点文と横位沈線が交互に巡る。58は7群の深鉢である。59・60は、7群の浅鉢であり、内・外面にベンガラが塗布される。59は体部に雲形文が展開される。60は口唇部に沈線による刻みのある山形突起と両脇に2つのB突起を有し、口縁部に横位沈線が巡る。61は7群の皿であり、口唇部は外側を向いた弧状沈線が連続し、体部に雲形文が展開する。62は7群の大型の壺であり、口唇部および口唇直下に多数の突起を有する。

⑤ II g 1層

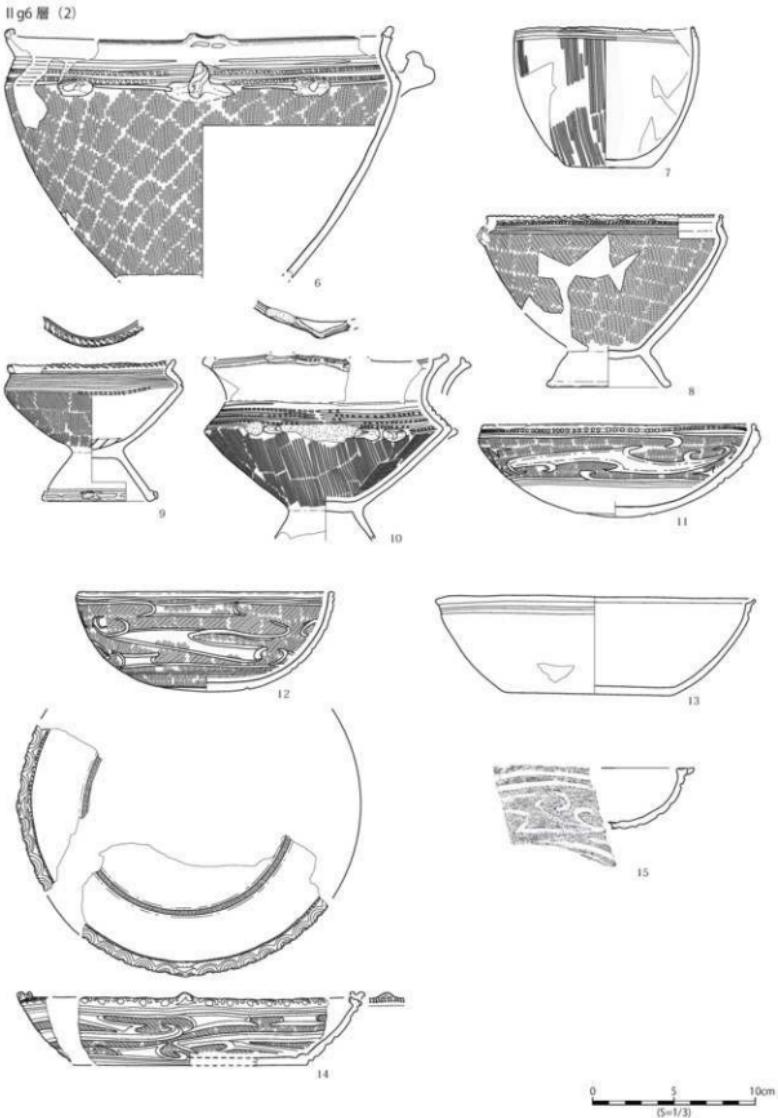
7群の鉢 1点が出土した。

⑥ II f 4層（図III-3-6-12・22～25）

II g 6層と同様にグリッド全面に土器が廃棄されている状況であり、7群の深鉢 71点、鉢 145点、浅鉢・皿 27点、壺 18点の計 261点出土した。その内図化したのは 23点である。63～66は7群の深鉢である。口縁部および口頭部に数条の横位沈線が巡る。67～77は7群の鉢である。67・72～74・76は、口縁部および口頭部に数条の列点文と横位沈線が巡る。沈線間か沈線下にB突起を有する。68～71・75・77は口縁部や口頭部に数条の横位沈線が巡り、体部に雲形文が展開する。

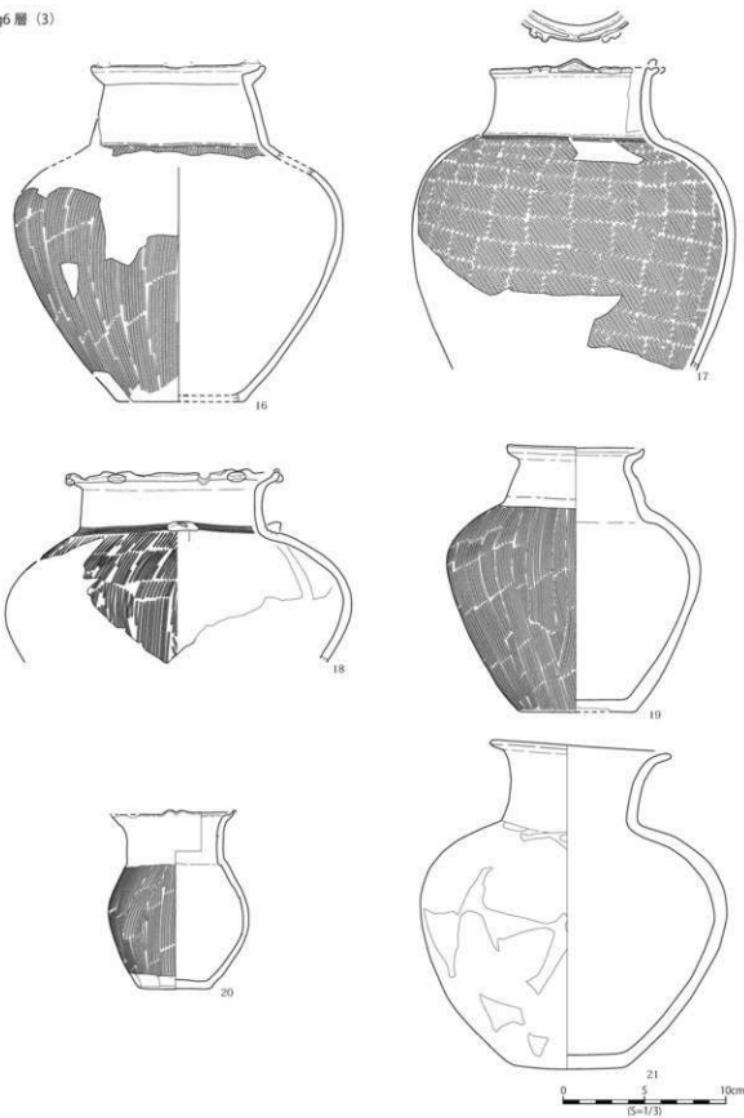


図III-3-6-14 第6束遺物集中区・分析グリッド出土土器 (1)



図III-3-6-15 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (2)

II g6 層 (3)

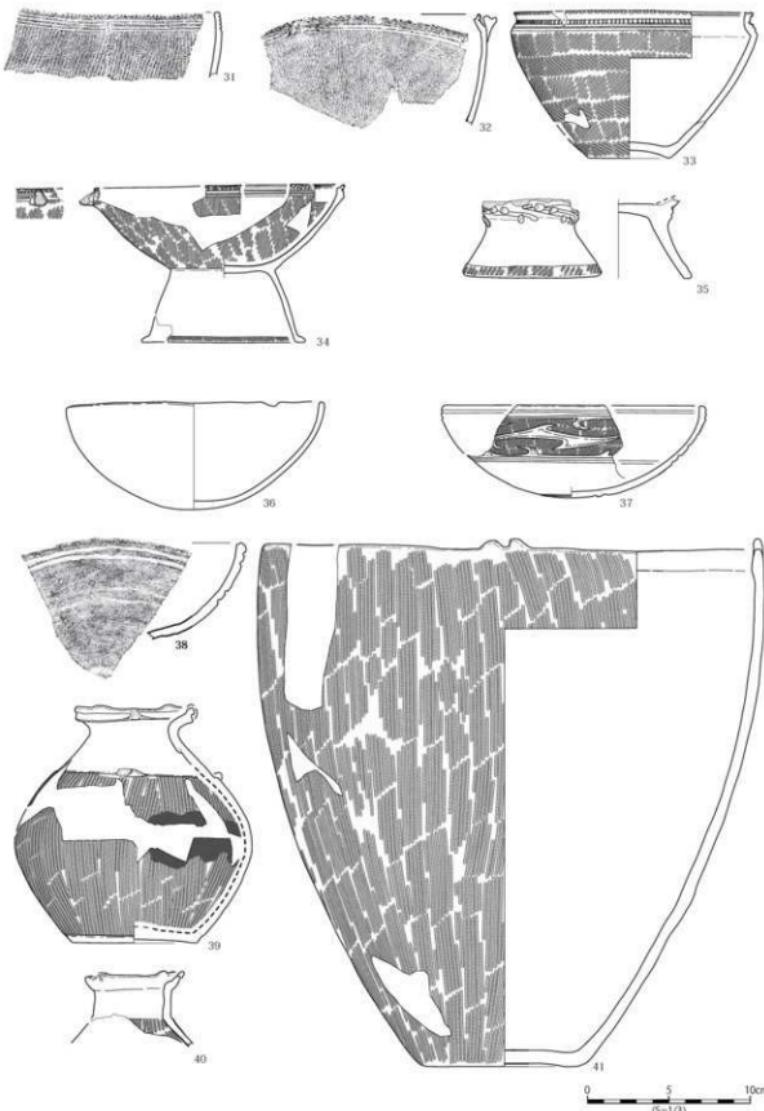


図III-3-6-16 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (3)

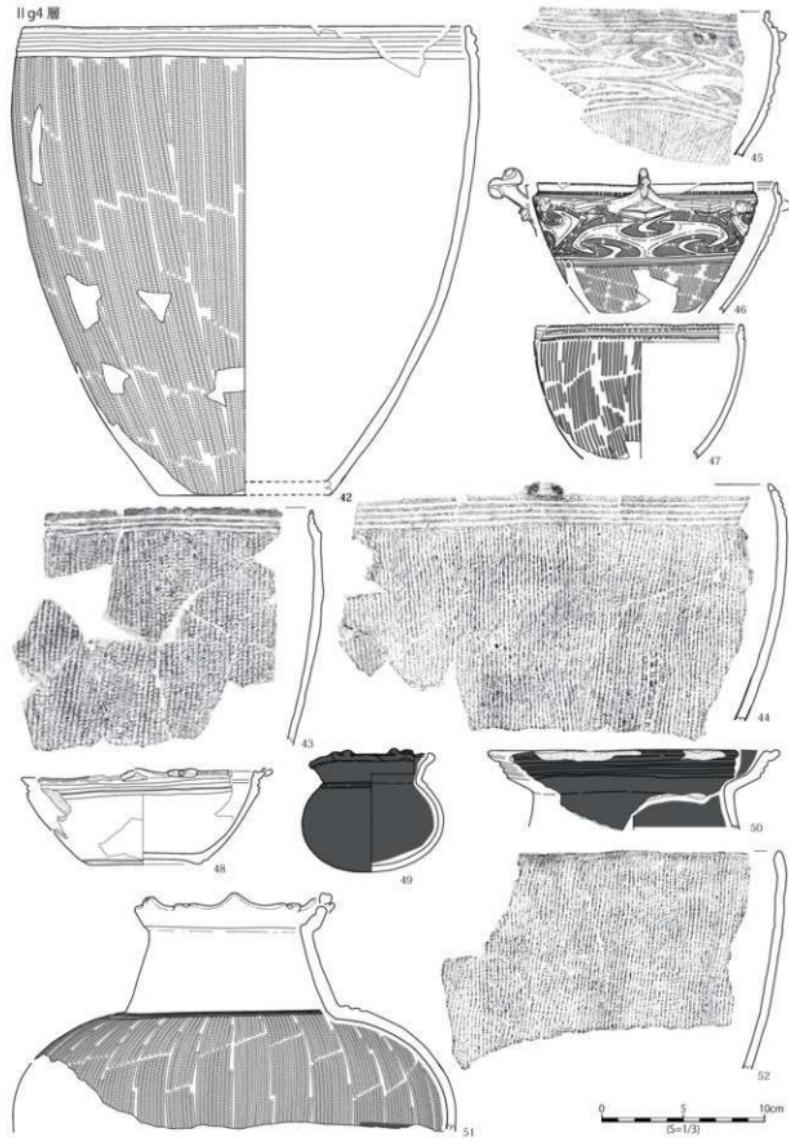


図III-3-6-17 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (4)

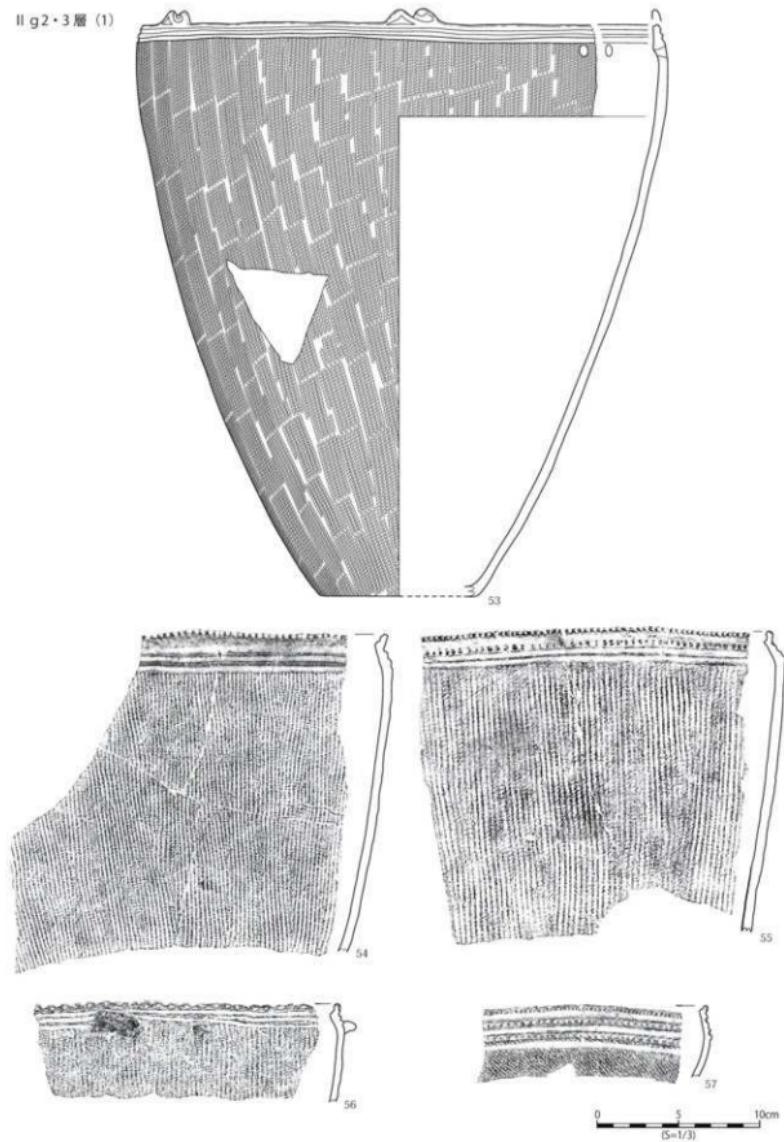
IIg5層 g (2)



図III-3-6-18 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (5)

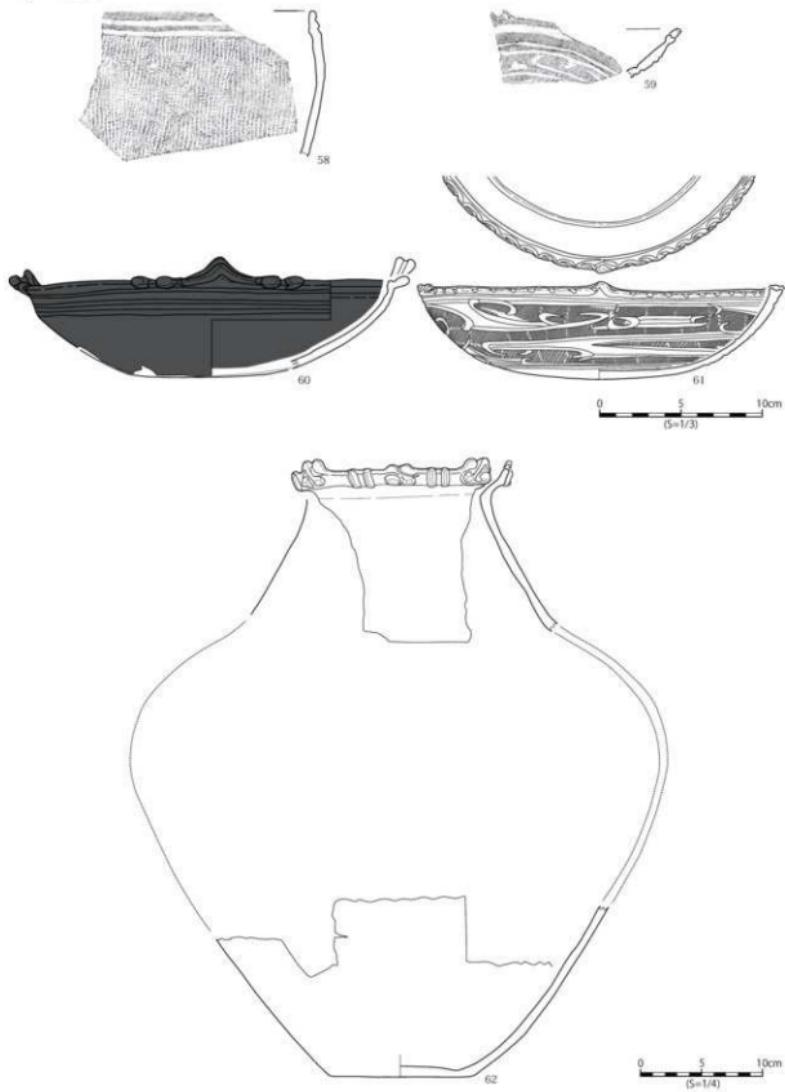


図III-3-6-19 第6束遺物集中区・分析グリッド出土土器(6)

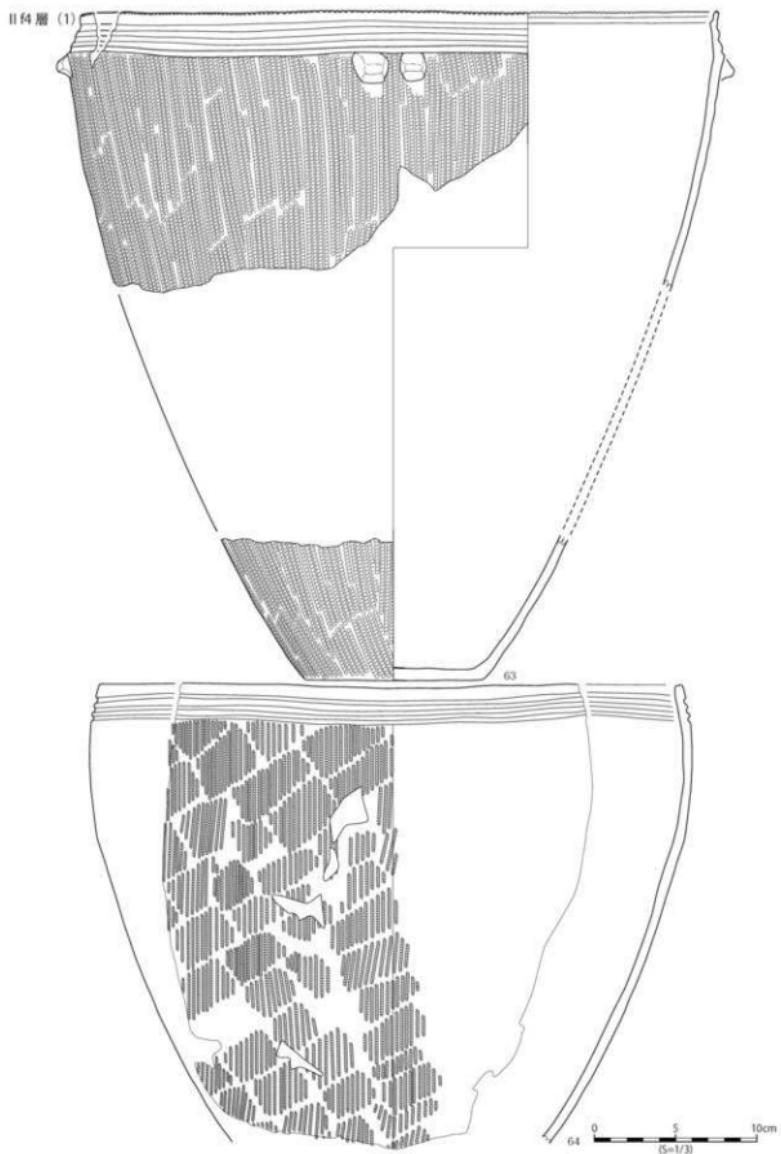


図III-3-6-20 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器(7)

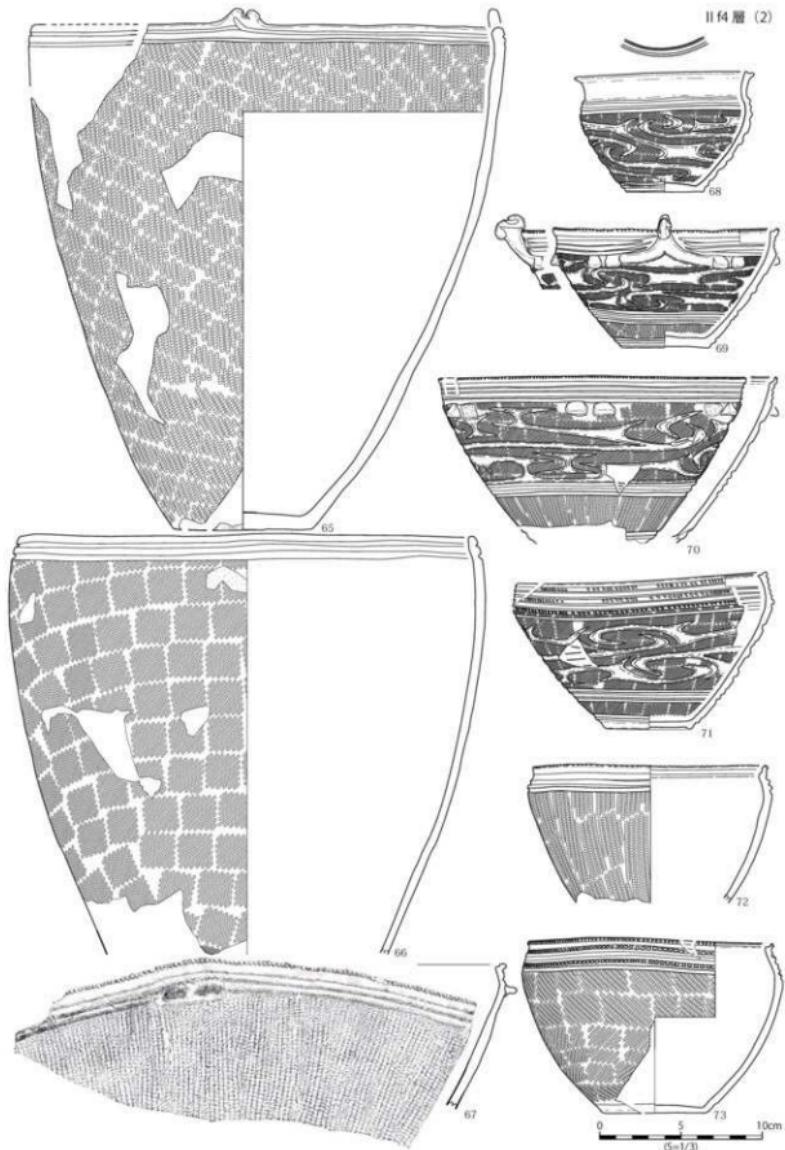
図2・3層(2)



図III-3-6-21 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器(8)



図III-3-6-22 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (9)



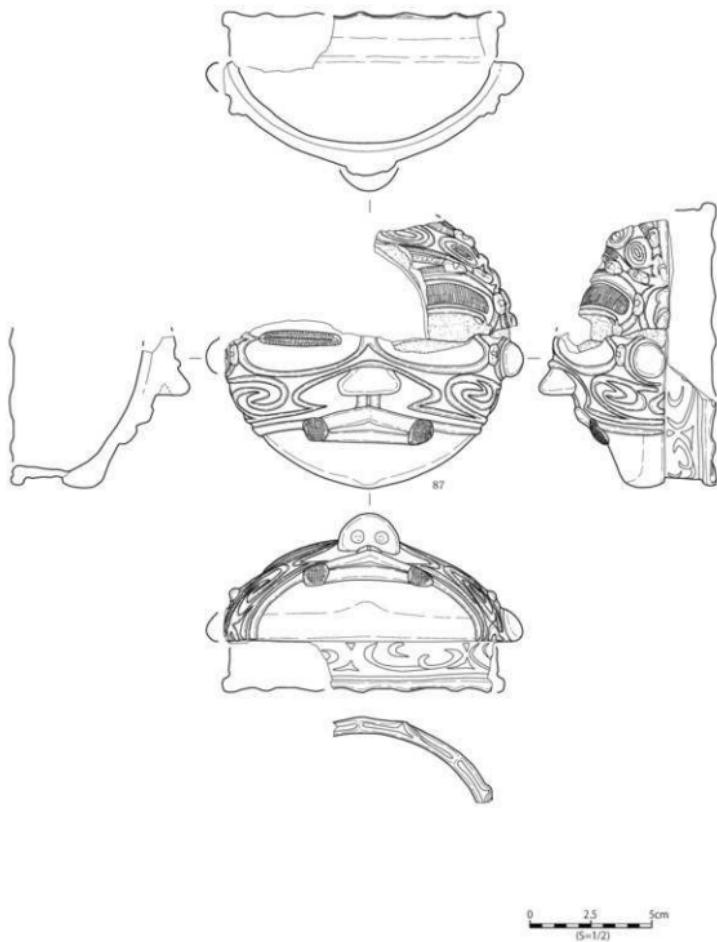
図III-3-6-23 第6東遺物集中区・分析グリッド出土器 (10)

II4層(3)



図III-3-6-24 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (11)

II4 層 (4)



図III-3-6-25 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (12)

また沈線下の体部上半にB突起もしくは大型の突起を有する。78は7群の台付鉢であり、口唇部に山形突起と両脇にB突起を有する。口縁部および台部には3条の横位沈線が巡る。79～83は、7群の浅鉢である。口唇部は山形突起もしくはB突起を有する。79・80・82・83は口縁部に数条の横位沈線が巡る。80・82・83は内・外面にベンガラが塗布される。84～86は7群の壺である。84・86は体部に縦位の繩文が施される。85は体部に雲形文が展開する。87は人面形浅鉢である。口唇部は口縁の突起に沿った沈線が断続的に巡る。口頸部は三叉文と弧状沈線が巡る。土器の体部から底部にかけて人面の装飾が沈線や突起で施される。

⑦ II f 1～3層（図III-3-6-13・26）

グリッドX=124,Y=112の北西隅を中心に廃棄状況がみられ、7群の深鉢29点、鉢71点、浅鉢・皿27点、壺15点の計142点出土した。その内図化したのは15点である。88は7群の深鉢であり、口縁部に3条の横位沈線が巡る。89～92・94は7群の鉢である。89は体部上半に雲形文が展開する。90は口頸部が無文である。91・92・94は口頸部に数条の横位沈線が巡り、体部上半にB突起を有する。93は7群の深鉢であり、口唇部には二山状の突起間に山形突起を有し、横位沈線が口頸部上下に2条ずつ巡る。95～97は7群の浅鉢である。97は口唇部の山形突起の付根に三叉状の彫去が施される。口縁部は数条の横位沈線が巡る。95は内・外面に、97は外面にベンガラが塗布される。98～100は7群の壺である。98は外面にベンガラが塗布され、口唇部は中間に沈線による刻みが入る。口唇直下にはB突起を有する。99は無文である。100は体部上半に雲形文が展開する。101・102は7群の粗製深鉢である。

⑧ II c層～II e層（図III-3-27）

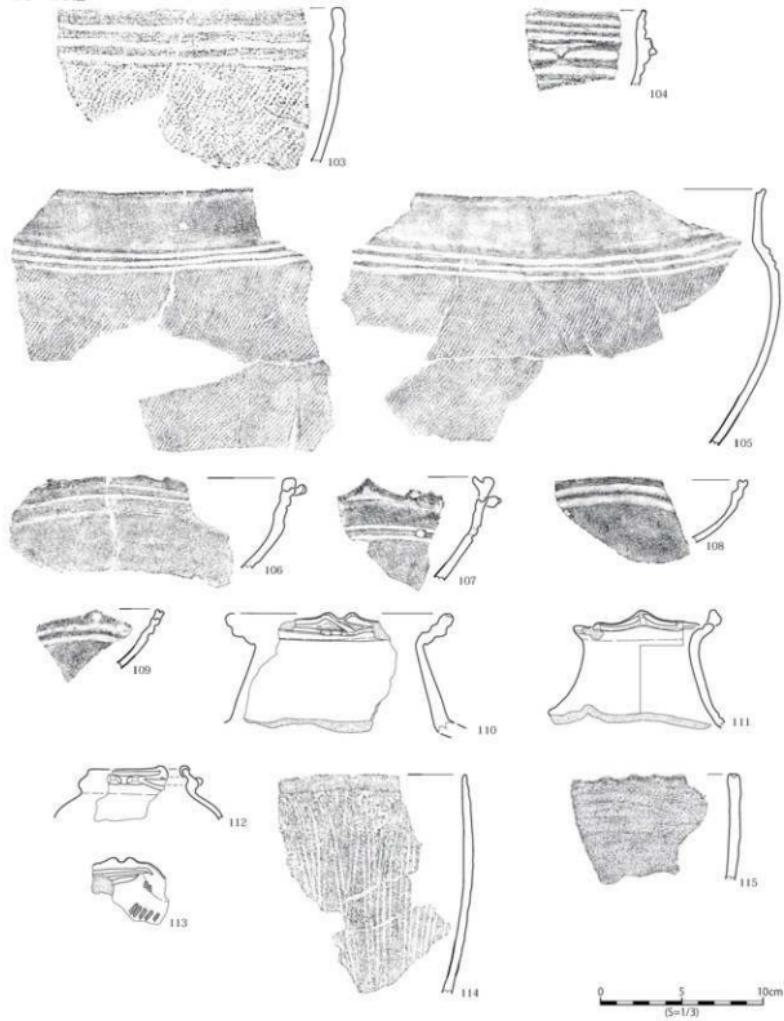
7群の深鉢59点、鉢96点、浅鉢・皿30点、壺27点、片口2点、器種不明土器1点の計215点出土した。その内図化したのは13点である。103は7群の深鉢であり、口縁部に3条の横位沈線が巡る。104・105は7群の鉢である。104は口頸部に横位沈線が巡り、体部上半に間に粘土粒で区切られた結節沈線が巡る。105は体部上半に3条の横位沈線が巡る。106～109は7群の浅鉢である。口頸部もしくは口縁部に2条の横位沈線が巡る。107・109は口唇部に山形突起を有し、106・107は口唇直下にB突起を有する。107・109は内・外面にベンガラが塗布される。110～112は7群の壺である。110は口唇部に二山状の突起と口唇直下にB突起を有する。111は口唇部に山形突起に沿う沈線が断続的に巡り、内・外面にベンガラが塗布される。112は口縁が内反し、口唇部に小ぶりな突起をもち口唇直下に突起に沿う沈線が巡る。口縁部はB突起を有する。113は7群の片口形土器である。口唇部に二山状の突起を有し、口縁部は横位沈線が巡る。片口部は口縁を尖らせた形状である。114・115は7群の深鉢である。114は体部に縦位の条線文が施される。

（江戸）



図III-3-6-26 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (13)

IIc～IIe層



図III-3-6-27 第6東遺物集中区・分析グリッド出土土器 (14)

B. 石器・礫 (表III-3-6-2、図III-3-6-28~31)

1,078点、25.8kgの石器・礫を検出した。剥片・碎片464点、搬入礫321点が多い。剥片石器は尖頭器、石錐などの定型石器209点、スクレイパーなどの不定形石器23点である。また、石皿・台石類などの礫石器は43点で、不定形剥片石器と礫石器が少なく、定型剥片石器の数が多い。

定型の剥片石器の内訳は尖頭器13点、石錐146点、石錐35点、石匙5点、石窓10点で、石錐のほか石錐が多い。不定形の剥片石器はスクレイパー17点、微細剝離のある剥片3点、小型スクレイパー3点である。礫石器は石皿・台石類2点、磨石・敲石類38点、砥石3点である。不定形の剥片石器を除いた定型石器と礫石器にしめる割合をみると石錐57%の割合がかなり高い。

石器製作に関わる石核・剥片・碎片は、478点で点数全体の44%を占める。このうち石核が占める割合は2.7%と他の集中区に比べて高い。

異形礫はほとんどない。搬入礫は321点で点数全体の30%にとどまる。

層位ごとの器種ごとの割合をみると、II d層とII f層、II g層で組成が大きく変わる。II d層とII f層では碎片・搬入礫が下層ほど低くなるのに対し、II g層では剥片・碎片が下層ほど高くなる。II d層では石匙、小型スクレイパー、磨石・敲石類、小型柱状剥片、石核、II f層とII g層では石錐、石錐が多く、石窓、石核が一定量みられ、II d層に比べ小型スクレイパー、磨石・敲石類、小型柱

表III-3-6-2 第6東遺物集中区出土石器・礫の層位別・種別出土数表

	II a	II b	II c	II d	II e	II f	II f1	II f2	II f3	II f4	II g	II g1	II g2	II g3	II g4	II g5	II g6	II h	その他	計
尖頭器					3		2				1			1	2	3		1	13	
石錐				3			10	6	10	24	1		2	4	28	13	11	1	33	146
石錐				1			2	2	6	1	1			2	13	1	5	1		35
小型石錐																				0
石匙											1									5
石窓							2													5
石窓							1	3			1	3			2					10
スクレイパー				5				1			1	2			1	3	4			17
微細剝離のある剥片											1		1							3
小型スクレイパー				1	2															3
磨石・敲石類					8						3			4	2	1	3		17	38
石皿・台石類											1							1		2
砥石							1												2	3
石錐																				0
磨製石斧							1											1		2
その他(擦切・裏平石器)																			2	2
石核						2		2	2	6							1			13
メノウ石核						1														1
剥片		5	6	51			5		20	68		1	1	11	4	19				191
小型柱状剥片						2														2
碎片		31	11	95		1	7		36	18		1	3	20	11	37				271
異形礫																				0
搬入礫		63	5	1	64	25	2	12	12	25	27		3	17	2	40		23	321	
計		63	47	18	234	31	4	40	22	99	155	3	0	5	17	95	38	127	2	78,1,078

状剥片といった玉造り関連の道具が少ない。

1~5は尖頭器である。13点出土した。分類別の内訳は木葉形9点(1~5)、菱形1点、山形2点、分類不明1点である。

6~9は石錐である。146点出土した。分類別にみると凸有b類69点(63%)と最も多く、次に多いのは凸有a類7点(6%)である。そのほか凸有c類7点、凸有f類4点、凸有d類2点、平

基有茎鐵 6 点、凹基無茎鐵 3 点、円基鐵・凹基有茎鐵各 1 点、未成品 4 点、分類不明 42 点がある。石材は、頁岩 126 点、メノウ 16 点、黒曜石 2 点、赤チャートと水晶各 1 点である。アスファルト付着資料は 18 点あり、基部が変色した資料が 2 点ある。

6 は円基鐵である。7 は平基有茎鐵である。8 は凸有 c 類である。基部が変色する。9 は凸有 f 類である。アスファルトが付着し、8 と同様に基部が変色する。

10～16 はメノウ製の小型石錐で II f3 層と II g4 層でまとまって出土した。全て棒状で長さ 1.4 ～ 2.0cm、径 3 ～ 4mm にまとまる。

17～20 は石匙である。17 は縦型で全体が丁寧に整形され、先端が尖る。18・19 は横型、20 は斜型である。21～24 は石箆である。21・23 はイチョウ形に広がる。22 は頭部が尖る。24 は細長い台形である。23 はメノウ製でその頭部にはアスファルトが残る。

25～32 はスクレイバーである。25・26 は横型剥片の下辺に刃部を作り出す。27～31 は縦型剥片の両側縁に刃部がある。32 には側縁と下辺に刃部がある。

33～35・37～39 は微細剝離のある剥片である。33～35 は縦型剥片の側縁に微細剝離がある。37 はメノウである。37～39 は横型剥片が利用される。36 はメノウ製の小型スクレイバーである。33 と 38 には基部にアスファルトが付着する。40 は黒曜石製の石核である。41 は磨製石斧の刃部である。42 は擦切具で側縁が摩滅する。43 は磨石・敲石類である。下面に剥落がある板状の敲石である。

C. 土製品（図III-3-6-32）

土製品はミニチュア土器、土製耳飾、円板状土製品、棒状土製品、ボタン状土製品の 5 種類がある。1～7 はミニチュア土器である。1・2・4・6・7 は壺形で 6・7 は無頸壺である。6 の体部には入組文がある。3 は蓋形である。5 は底部が橢円形の異形皿とみられる。工字文があり大洞 A 式に属す。8 は土製耳飾で全面に赤色顔料が塗布される。9～15 は円板状土製品である。土器片を利用しており、14・15 以外は有孔である。16・17 は長さ 2cm 未満の小型の棒状土製品である。16 は両端が細くなる。18 は無孔のボタン状土製品である。

D. 石製品・石製玉類（図III-3-6-33）

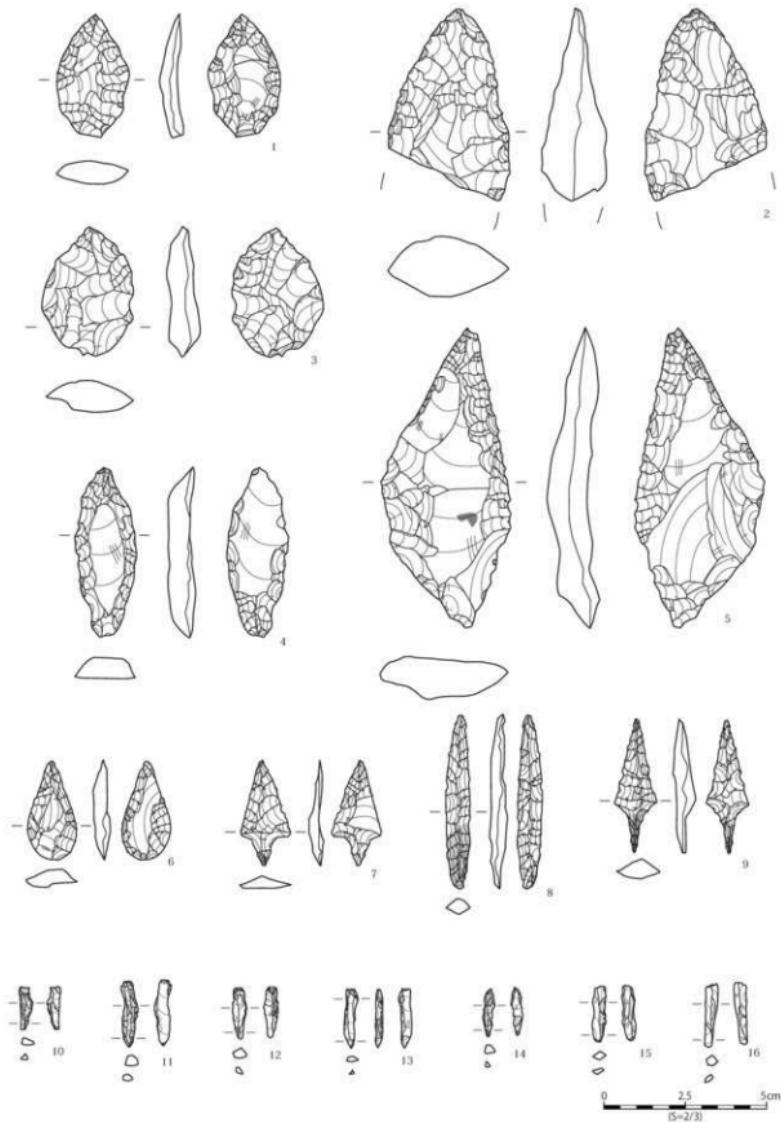
石製品・石製玉類は異形石器、石棒、石刀、石製丸玉、有孔石製品、垂飾の 6 種類がある。1・2 は異形石器である。いずれも複数の抉りがある。3・4 は石刀である。いずれも方形の柄頭がある。5～15 は石製の丸玉であり、5 は玉素材、6～8 は研磨段階の未成品、9～15 は完成品である。16 は頁岩の自然礫に穿孔された有孔石製品である。17 は緑色凝灰岩製の垂飾である。

（上條信彦）

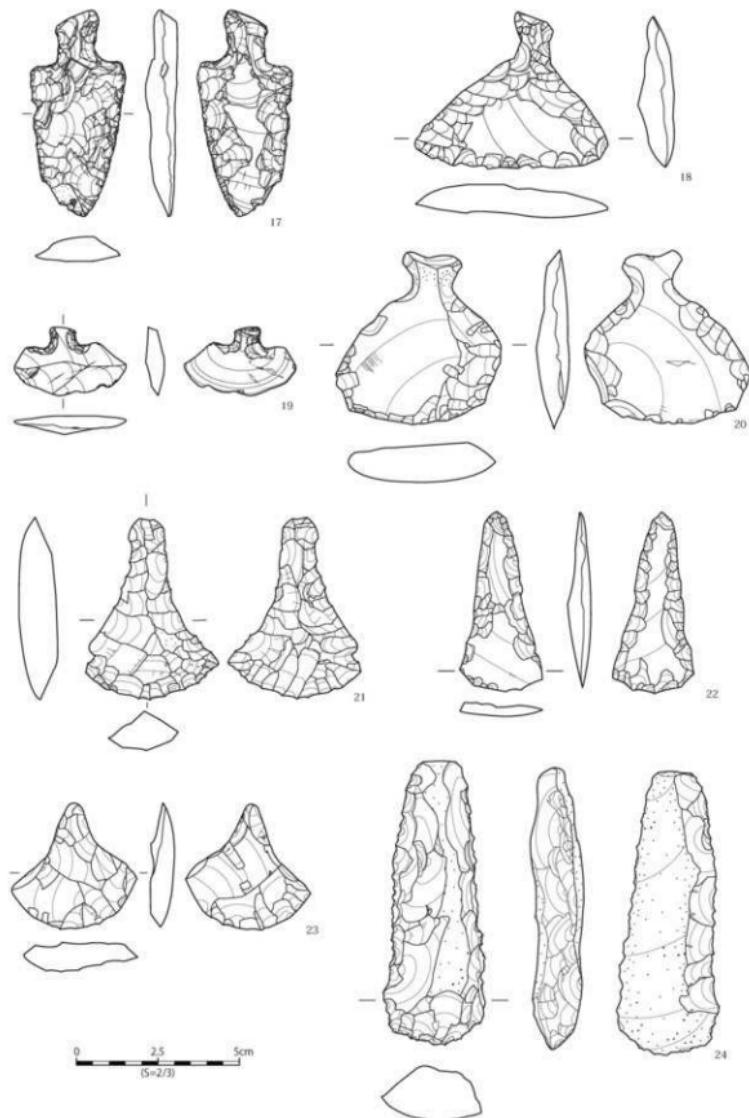
E. 土偶（図III-3-6-34）

1 は中実土偶の脚部とみられ、粗雑なつくりである。2 は中空土偶の胴部である。磨消繩文による工字文や刺突文が施されている。

（榎原）



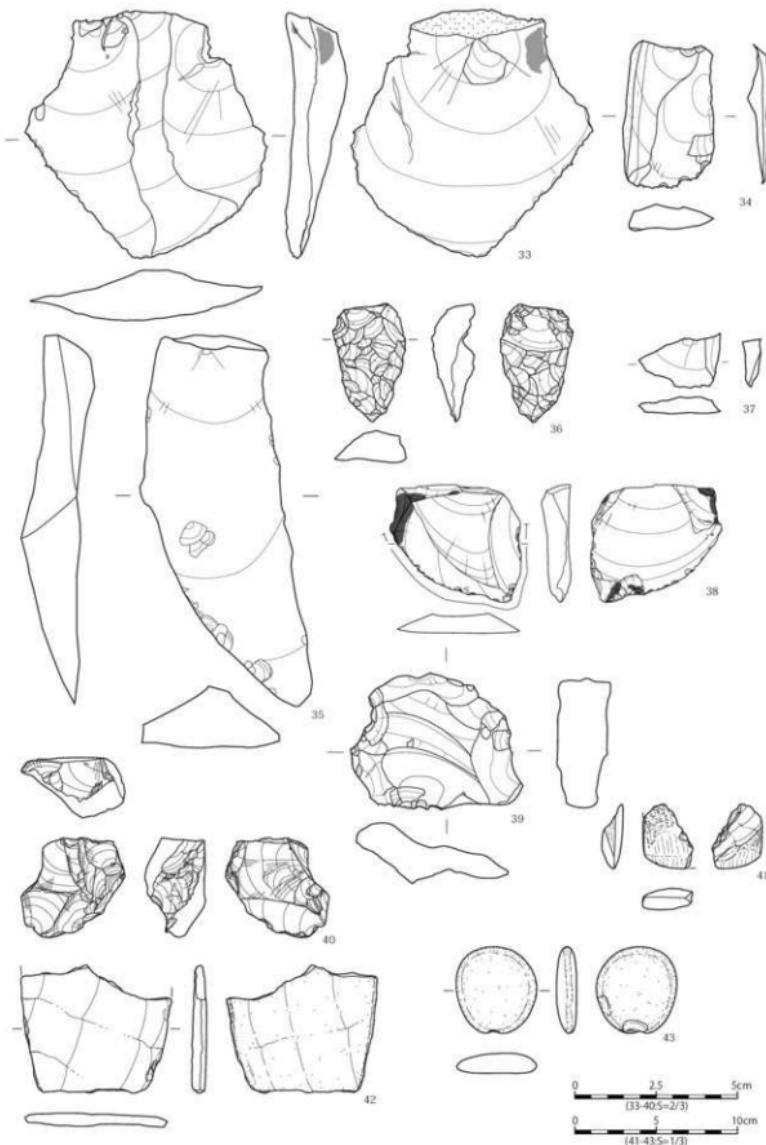
図III-3-6-28 第6東遺物集中区出土石器(1)



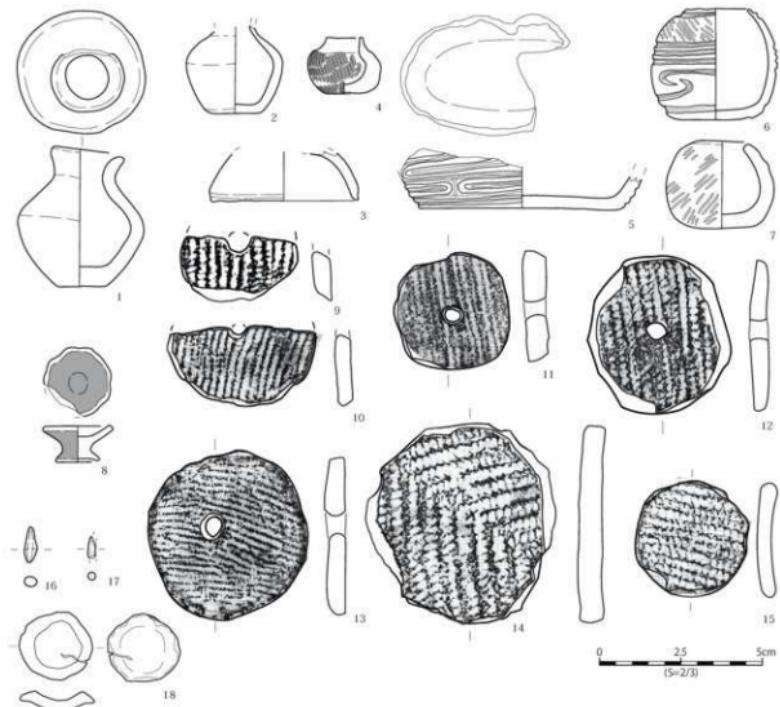
図III-3-6-29 第6束遺物集中区出土石器(2)



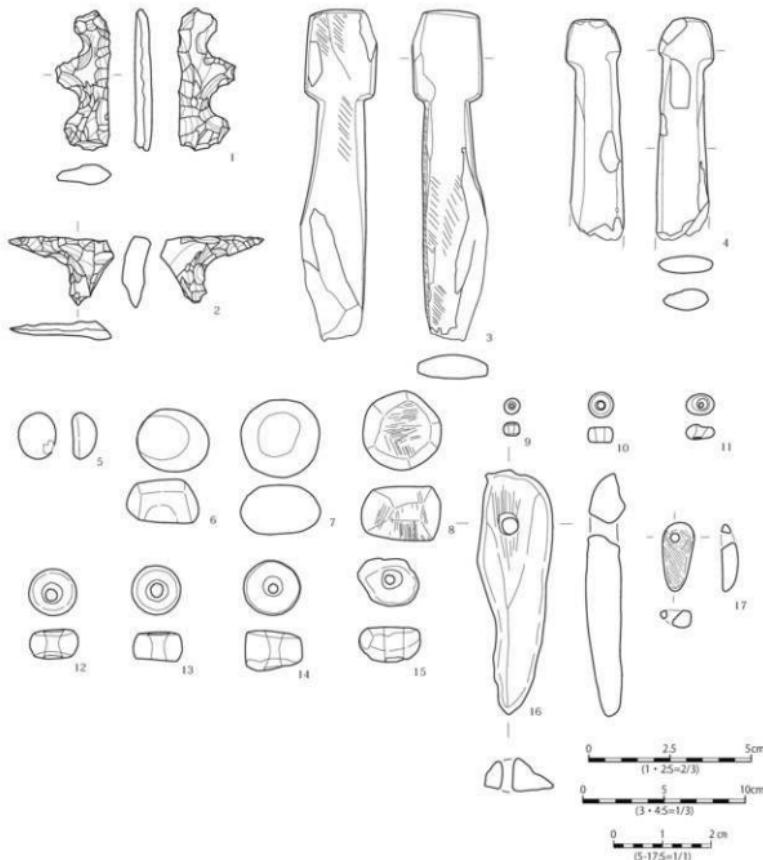
图III-3-6-30 第6東遺物集中区出土石器(3)



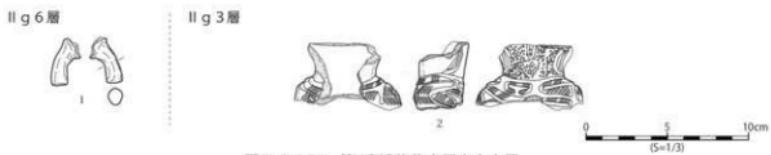
図III-3-6-31 第6集中区出土石器(4)



图III-3-6-33 第6束遺物集中区出土土製品



図III-3-6-33 第6東遺物集中区出土土石製品



図III-3-6-34 第6東遺物集中区出土土偶

7. 5トレンチ・7トレンチ

(1) 5トレンチ (図III-3-7-1)

5トレンチでは、層位ごとの出土数の後に土器の特徴を記載する。

- ① II h 層 4群の深鉢2点、6群の鉢1点の計3点出土した。
- ② II f 層 3群の深鉢1点、3~6群の深鉢1点の計2点出土した。
- ③ II b 層 2b群の深鉢1点、2c群の鉢1点、4群の深鉢5点、鉢1点、5群の深鉢2点、壺1点、3~6群の深鉢6点、7群の鉢2点、9b群の深鉢2点の計21点出土した。
- ④ II a 層 3~6群の深鉢2点が出土した。

5トレンチ全体では、計28点出土し、その内図化したのは6点である。1は4群の深鉢であり、口縁上部は2重の弧線が巡り、体部上半は2条の横長の列点文の間に入組三叉文が展開する。2は3群の深鉢であり、口唇部に三山状の突起を有し、口縁部は横長の列点文が巡る。3は9a群の深鉢であり、口縁部に突瘤が施される。4は4群の鉢であり、口頭部に多条沈線が巡る。5は、5群の壺であり、口頭部から体部上半にかけて列点文が巡り、入組文と三叉文が展開する。6は4群の注口土器であり、注口下部に突起と渦巻状沈線が施される。

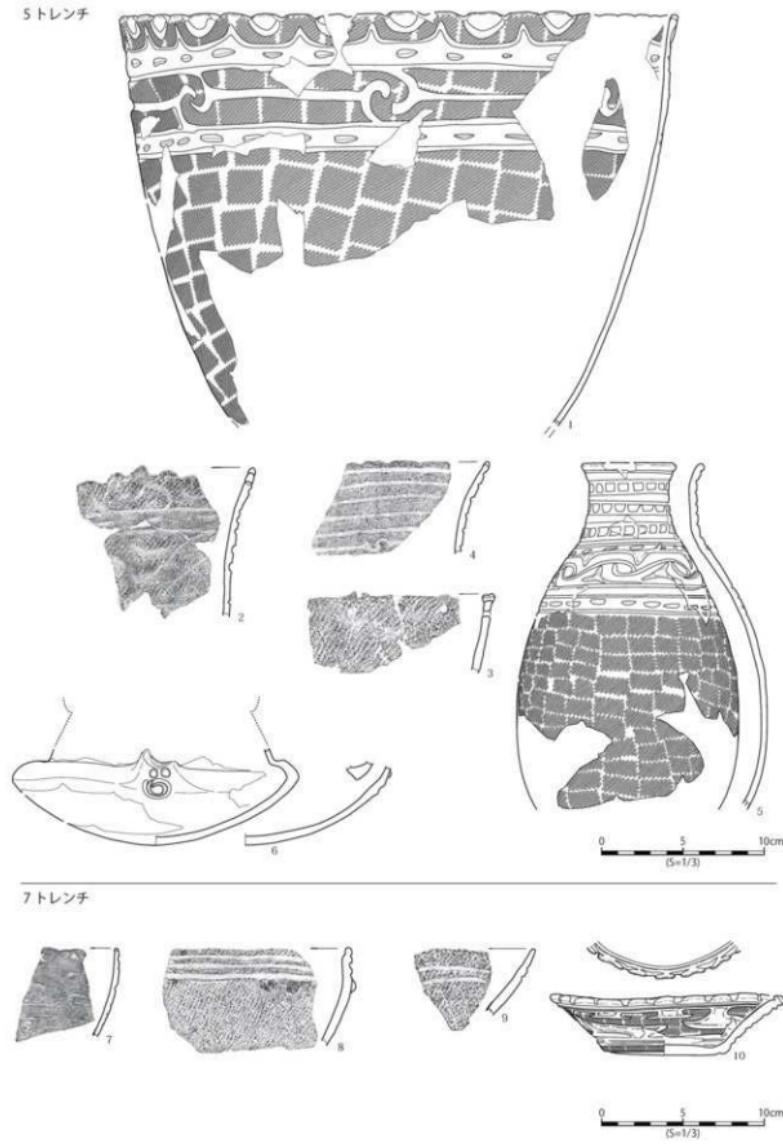
(2) 7トレンチ (図III-3-7-1)

7トレンチでは、5トレンチと同様層位ごとの出土数の後に土器の特徴を記載する。

- ① II f 層 4群の鉢1点、3~6群の深鉢1点、3~8群の鉢1点、壺1点の計4点出土した。
- ② II d 層 4群の深鉢1点、5群の深鉢1点の計2点出土した。
- ③ II b 層 4群の深鉢5点、鉢1点、5群の深鉢1点、鉢1点、3~6群の深鉢4点、注口土器1点、7群の深鉢9点、鉢5点、浅鉢・皿5点、壺1点、8群の深鉢7点、3~8群の深鉢1点、壺3点、群不明の浅鉢1点の計45点出土した。
- ④ II a 層 4群の深鉢1点、5群の深鉢1点、鉢1点、3~6群の深鉢2点、壺1点、3~8群の鉢1点の計7点出土した。

7トレンチ全体では、計58点出土し、その内図化したのは4点である。7は4群の鉢であり、口唇直下に弧状沈線が巡る。体部上半に2条の横位沈線が巡る。8は7群の鉢であり、口縁部に3条の横位沈線が巡り、沈線下にB突起を有する。9は群不明の浅鉢であり、口縁部に2条の横位沈線が巡り、体部には斜状沈線が施される。10は7群の皿であり、口唇部は付根に三叉状の彫去が施され、体部には雲形文が展開する。

(江戸)



図III-2-7-90 5トレンチ・7トレンチ出土土器 (14)

第4節 遺構外出土遺物

前項までは、遺構内の出土遺物に関して記載してきたが、その他遺構に伴わない遺物も多量に出土している。そこで、この節では、遺構外から出土した各種遺物について、述べることとする。

1. 土 器

土器に関しては、明確に時期の特定できる遺物を可能な限り抽出した。以下時期の古い順から記載していく。

(1) 第1群土器（図III-4-1-1）

1点図化した。1は中期中葉の体部破片であり、粘土紐による隆帯があり、その間を馬蹄形の押圧縄文で埋める。

(2) 第2a群土器（図III-4-1-1）

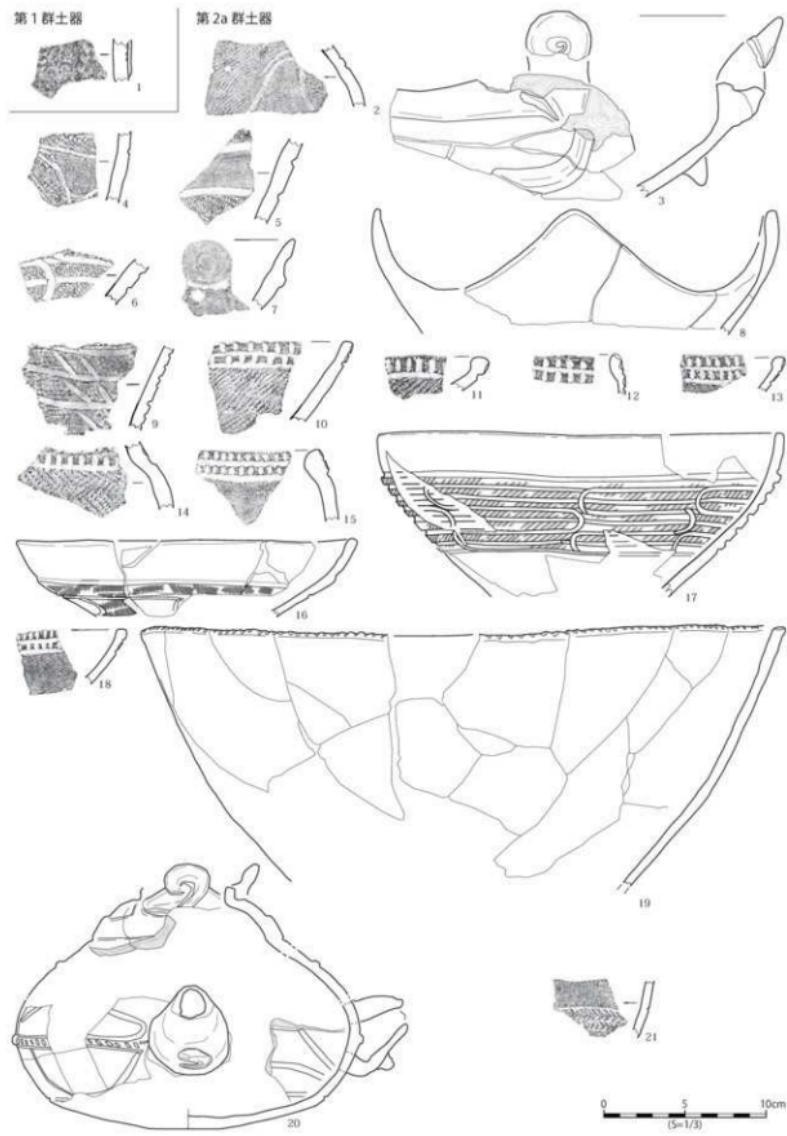
20点図化した。3～5、7～9は深鉢であり、3・7・8は大波状口縁で、3・7は装飾的把手を有する。6、10～19、21は鉢であり、10～15・18は口頸部に刻目文を有する。16・17は口頸部に無文帯を有し、体部には縄文を施した後、平行沈線と弧状の沈線を組み合わせた文様が施される。18は磨消文様が施される。21は鉢の体部破片で沈線間に斜行沈線が交互に施される。19は無文の鉢であり、口唇部に刻目が施される。20は注口土器であり、口縁部に装飾的な突起を有し、肩部及び体部に刻み目を有する隆帯が施され、隆帯間に弧状の沈線が施される。

(3) 第2b群土器（図III-4-1-2～4）

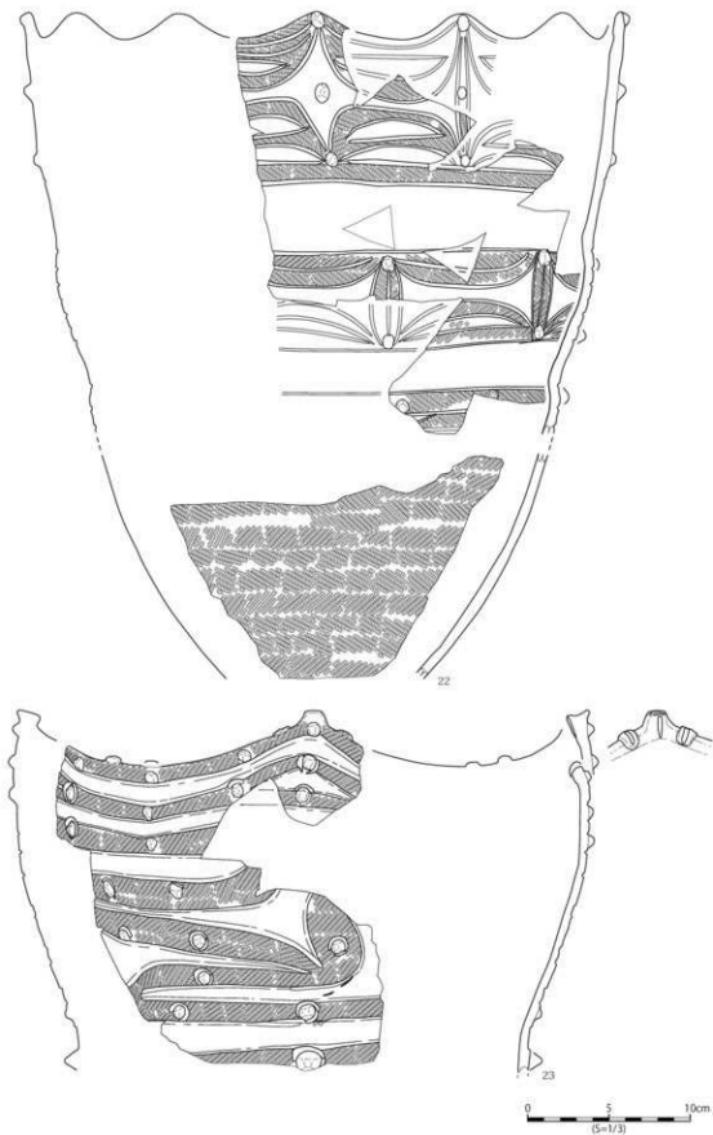
22点図化した。22～29は深鉢である。22・23は口頸部と体部の屈折点が器高の半分ほどに位置し、口頸部及び体部上半には貼瘤を均等に配し、その間に幅の狭い帯縄文が施される。24は器形は22・23と同様であるが、貼瘤を口縁直下、体部上半に横位に配し、その間に帯縄文が施され、他の部分は無文帯を呈する。25～27、29は山形突起を有する深鉢の突起部であり、突起の形状に沿って貼瘤が配置され、その貼瘤間を2条ないし3条の平行沈線が施される。28は深鉢の体部破片で、斜格子状の沈線が施される。30・34は壺か注口土器であり、30は3条の横位平行沈線間に3条の縦位平行沈線が施されている。34は口頸部に1条の帯縄文が施され、上部に突起が施される。31～33・35は注口土器であり、31・35は貼瘤間に多条沈線が直線状あるいは弧状に施される。32は貼瘤間に入組帶縄文が施される。33は無文である。36～43は香炉形土器であり、36・37は同一個体である可能性が高く、台部を有し、体部上半から頂部にかけて、貼瘤を取り囲む様に弧状あるいは直線状の多重沈線が施される。38～40は頂部であり、人の体部上半の装飾が施されている。40は頂部に貼瘤が貼付されている。41・42は体部であり、41は方形区画状及びその対角線上に斜交した多条沈線が施され、各連結部に穿孔がみられる。42は貼瘤の周間に多条沈線が施されている。43は口縁部であり、三角状に二条の沈線が施される。

(4) 第2c群土器（図III-4-1-4）

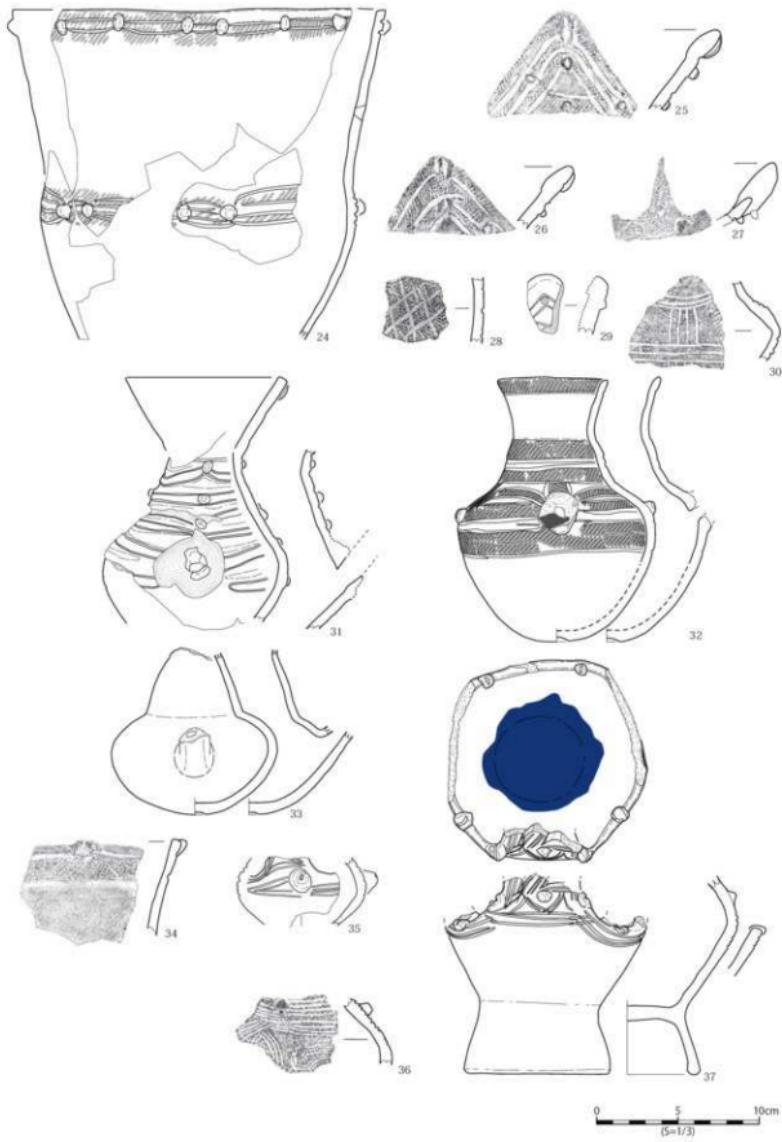
11点図化した。44～52は深鉢であり、44～48は山形突起を有する口縁部で、44～46は頂部が二叉に別れた突起の器形に沿って刻み目文が施されている。47は突起部下に平行な刻目文が施さ



図III-4-1-1 遺構外出土第1群・第2a群土器



図III-4-1-2 遺構外出土第2b群土器(1)

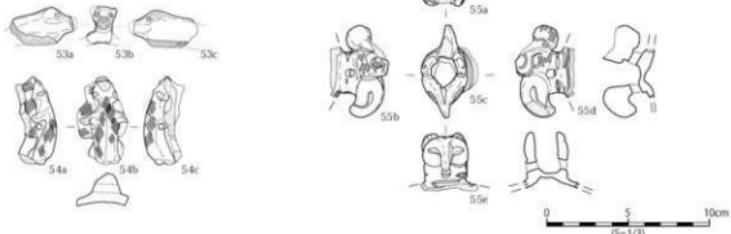


図III-4-1-3 遺構外出土第2b群土器(2)

第2b群土器



第2c群土器



0 5 10cm
(5=1/3)

図III-4-1-4 遺構外出土第2b群土器(3)・2c群土器

れる。48は突起部下に弧状の沈線が施されている。49・50は平坦口縁下に横位の刻目文が施され、体部には入組帶繩文が施されている。51・52は体部に入組帶繩文が施されている。53～55は香炉形土器の頂部であり53・54は動物形、55・56は人頭形の装飾が施されている。

(5) 第3群土器（図III-4-1-5）

9点図化した。56・57は深鉢であり、口縁上部にはB突起が連続的に配され、その突起を弧状の沈線で区画している。56は口頸部文様帯を横長の列点文で区画し、その中に2段の入組帶縄文が施され、その連結部に三叉文が配置される。57は口頸部文様帯列点文で区画し、その中に連結する渦巻状文が施文され、その渦巻状の連結部に三叉文が配置される。58～61は鉢であり、58はB突起が4単位配置され、口頸部には魚眼状三叉文を2段配置し、その間に横長の列点文が施されている。59は連続したB突起が配置され、口縁上部には横位のS字状文、口頸部には連結部に三叉文を配置する入組帶縄文が施されている。60・61は体部破片である。62・63は注口土器であり、体部に渦巻状文が施され、62には縦位に平行沈線で区画された中に三叉文が施されている。

(6) 第4群土器（図III-4-1-6～8）

24点図化した。64～66は深鉢である。64は小波状口縁下に連続したS字状文が施され、体部との区画文として横長の列点文が施される。65は小波状口縁下に連続したノの字状文が配され、その下に連続した山形文を上部に有する横長の列点文により口頸部文様帯と区画している。口頸部には入組三叉文が施されている。66は連続したB突起が配置された口縁部下に連続したS字状文が施され、沈線間をミガキにより無文帯とした区画内に冗長な入組三叉文が施されている。

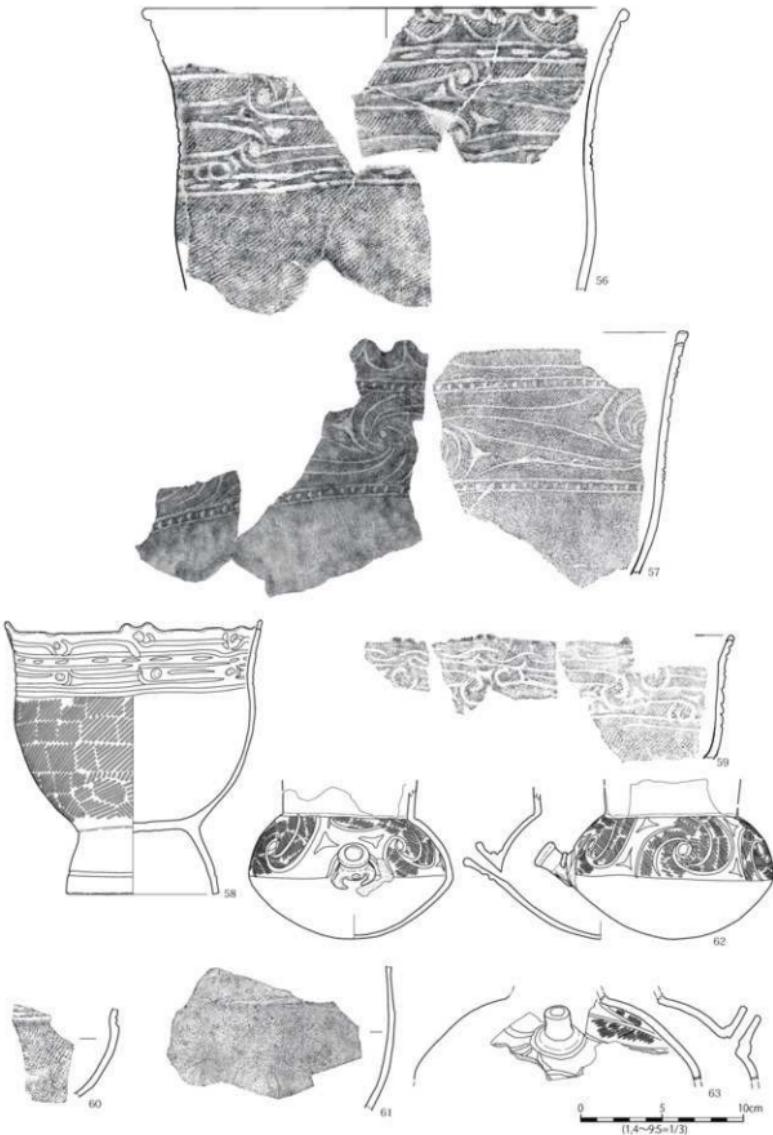
67～75は鉢である。67は小波状口縁下に2条の平行沈線が施され、口頸部には入組三叉文が距離を置いて施され、その間に上下に向かい合う弧線文が施されている。68は口縁部下に横長の列点文が配置され、その下に入組三叉文が施されている。69は小波状口縁下に円弧文が配置され、その下に連続山形文を上部に有する横長の列点文に区画された中に入組三叉文が施されている。70は平坦口縁下に平行沈線で区画された中に三叉部が連結しない入組三叉文が施されている。71は小波状口縁下に横長の列点文が施されている。72は連続するB突起下に連続した横位S字状文が施され、沈線間で区画された口頸部文様帯には入組三叉文が施されている。73はランダムに配置された横位S字状文が施されている。74はB突起を有する口頸部に2段の入組三叉文が施されている。75はB突起下に三角文が、その下に入組三叉文が施されている。

76～79は壺である。76は口頸部に連結した入組三叉文が施され、体部には入組三叉文が施されている。77は頸部に列点文が施され、体部には三叉文の他端が円弧状を呈する文様が横位に施される。78は頸部には連結部に刺突を有する入組三叉文、体部には渦巻文が施文され、赤色顔料が塗布されている。79は体部に菱形文の他端が渦巻文を呈する文様が施文され、赤色顔料が塗布されている。

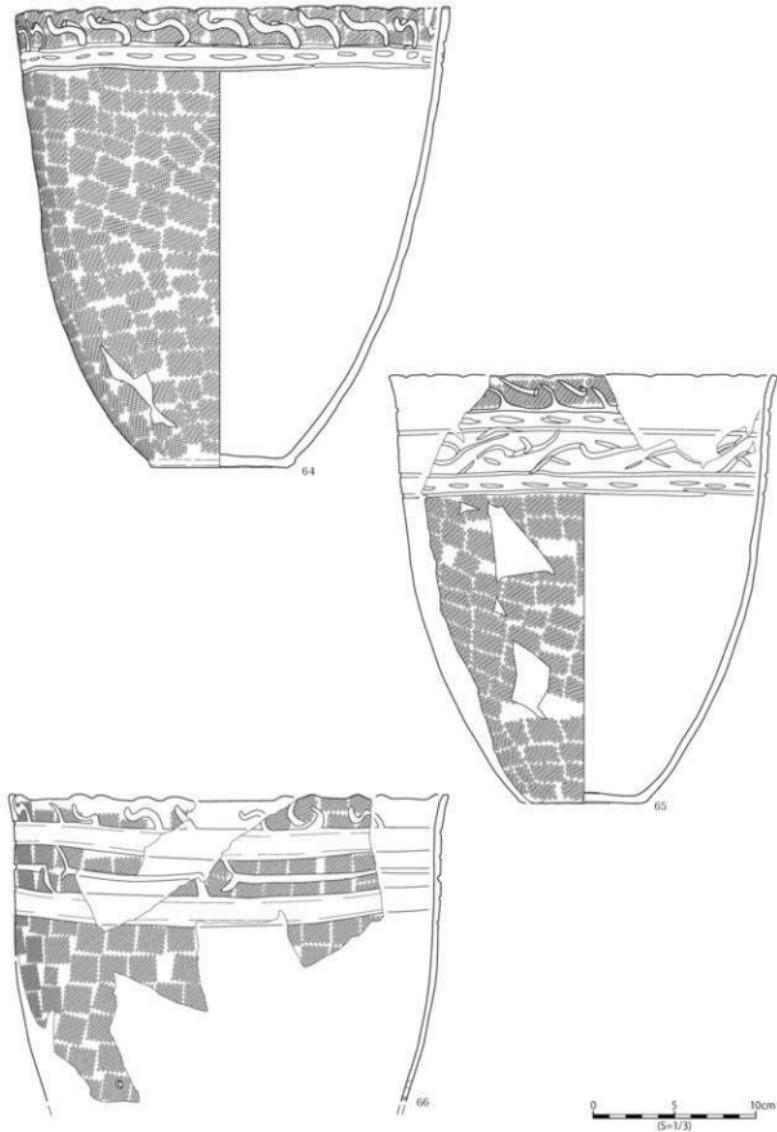
80～87は注口土器であり、82・86・87は3段作り、その他は2段作りである。口縁部には二条の沈線（80）、三叉文（83～85）が施され、体部上半には入組文と入組部に三叉文が施文されるもの（82・84）がみられる。

(7) 第5群土器（図III-4-1-9）

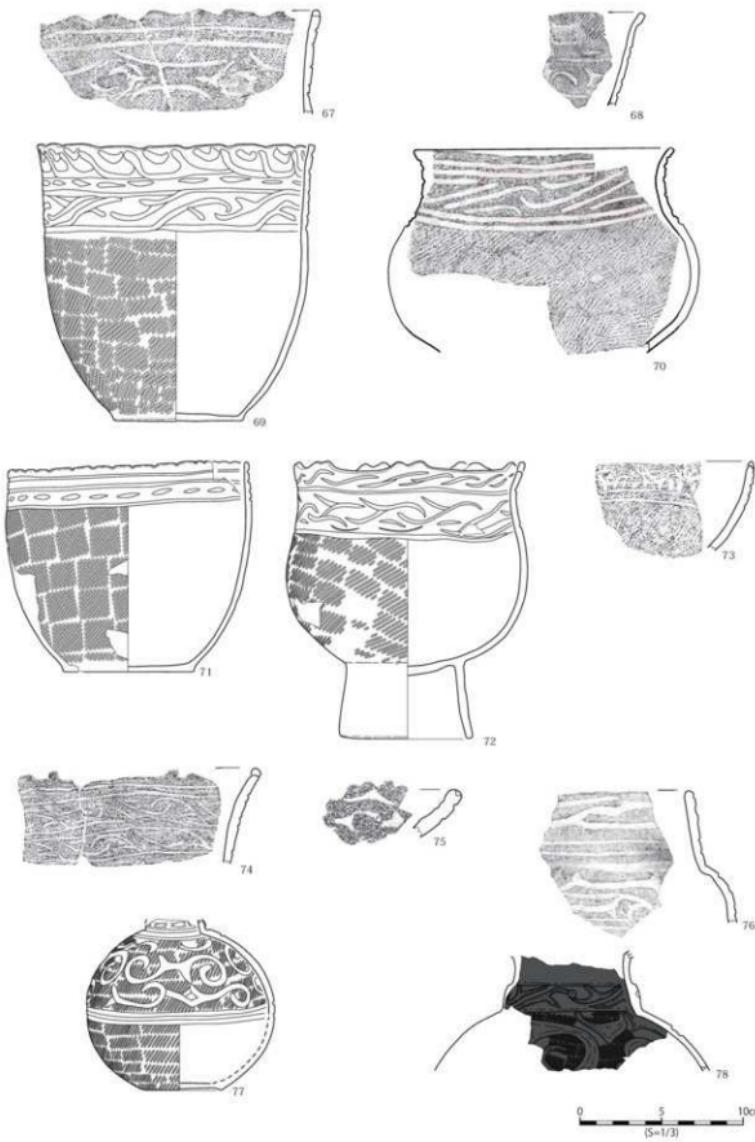
7点図化した。88～90は鉢であり、口唇部にはB突起（88）、刻目（89）、B突起+刻目（90）が施され、口頸部には羊歯状文が施文されている。91は壺であり、沈線間で区画された中にZ字文を横位に連続的に配置し、上下に刻目を充填している。赤色顔料が塗布されている。92～94は注口土器で、92は口頸部に入組三叉文、体部に列点文が施されている。93は口頸部にJ字文が施されている。94は体部上半に羊歯状文と列点文が施されている。



图III-4-1-5 遗構外出土第3群土器



図III-4-1-6 遺構外出土第4群土器（1）

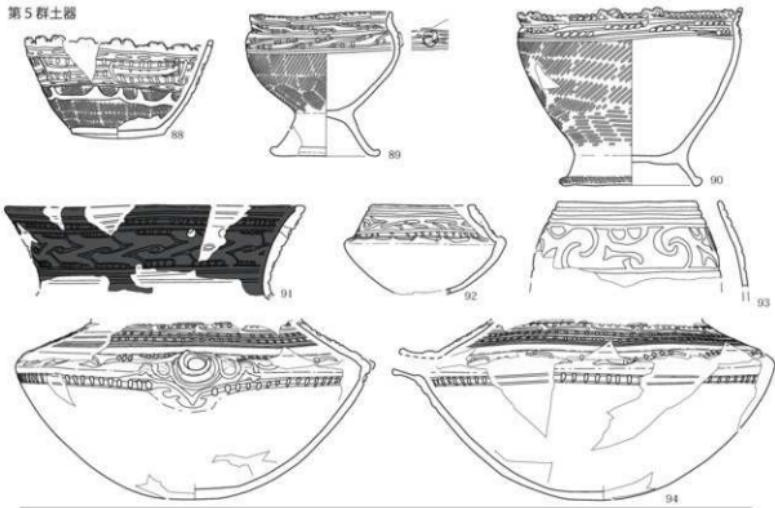


図III-4-1-7 遺構外出土第4群土器 (2)

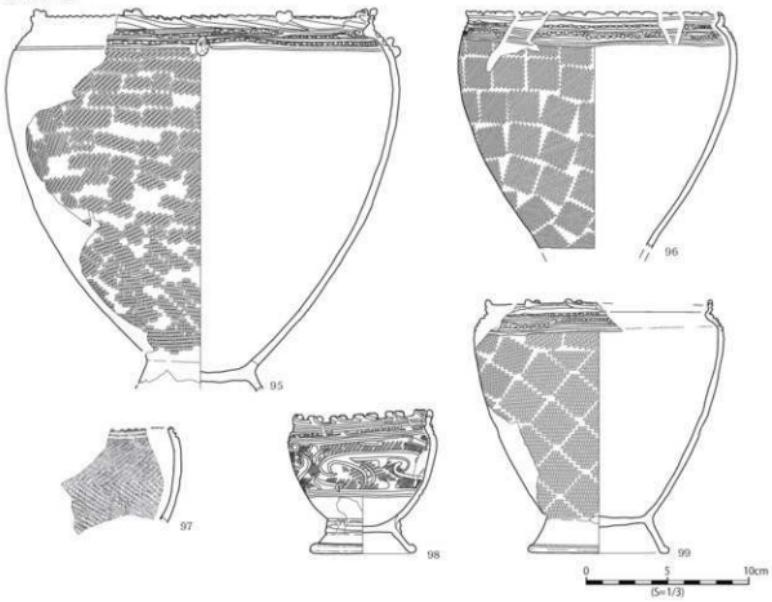


図III-4-1-8 遺構外出土第4群土器（3）

第5群土器



第6群土器



図III-4-1-9 遺構外出土第5群土器・第6群土器（1）

(8) 第6群土器 (図III-4-1-9・10)

19点図化した。95～101は鉢であり、95・96・99・100は簡略化した羊歯状文が施されている。97は体部に非結節羽状縄文が施文されている。98は体部に雲形文が施文されている。101はコップ形を呈し、口縁部に列点文が施文されている。102～112は浅鉢であり、102は列点文、その他は雲形文が施文されている。113は注口であり、口頸部にはZ字文が施文され、体部上半及び下半には雲形文が施文されている。

(9) 第7群土器 (図III-4-1-11～18)

67点図化した。114～128は鉢であり、大型の突起を有するもの (114～117・119～121・124・126・128)、平行沈線あるいは刻目文のみのもの (117・122～126・128)、雲形文を有するもの (116・118～121、127) がみられる。

129～159は浅鉢・皿であり、129は体部に渦巻文が施文されている。132は簡略化された羊歯状文、133・143は平行沈線のみであり、浅鉢・皿には珍しく縄文が施文されている。130・131・134～142・144～159は雲形文が施文されており、その中には内外面にベンガラが塗布されているもの (134・135)、大型突起を有するもの (135)、底面に文様が施文されているもの (159) がある。

160～172は壺であり、160・161は体部上半に雲形文が施文され、赤色顔料が塗布されている。163は体部上半を横位及び縦位の平行沈線で方形に区画し、その間に上下端から向かい合わせに伸びるL字状の沈線が施文されている。162・164・169は連繫入組文が施文されたいわゆる聖山式の壺である。165も聖山式と考えられるが、欠損しているため不明である。赤色顔料が塗布されている。167・168・170は縄文のみである。171は無文の壺であり、外面にベンガラが塗布され、底部に短い脚部を4ヶ所に有する。172は向きの異なる鋸歯文が2段施文されている。

173・174は注口土器であり、屈折部に連続して突起が貼付されている。

175は香炉形土器の頂部であり、頂部に貫通した穿孔がみられる。

176～179は片口土器であり、176～178は口縁端部に片口部を作り出しており、179は口縁下を穿孔し、穿孔部下に片口部を貼り付けている。

180は粗製の深鉢であり、口縁部内面が肥厚している当遺跡では7群に特徴的にみられる器形であり、縦走の条線文が施文されている。

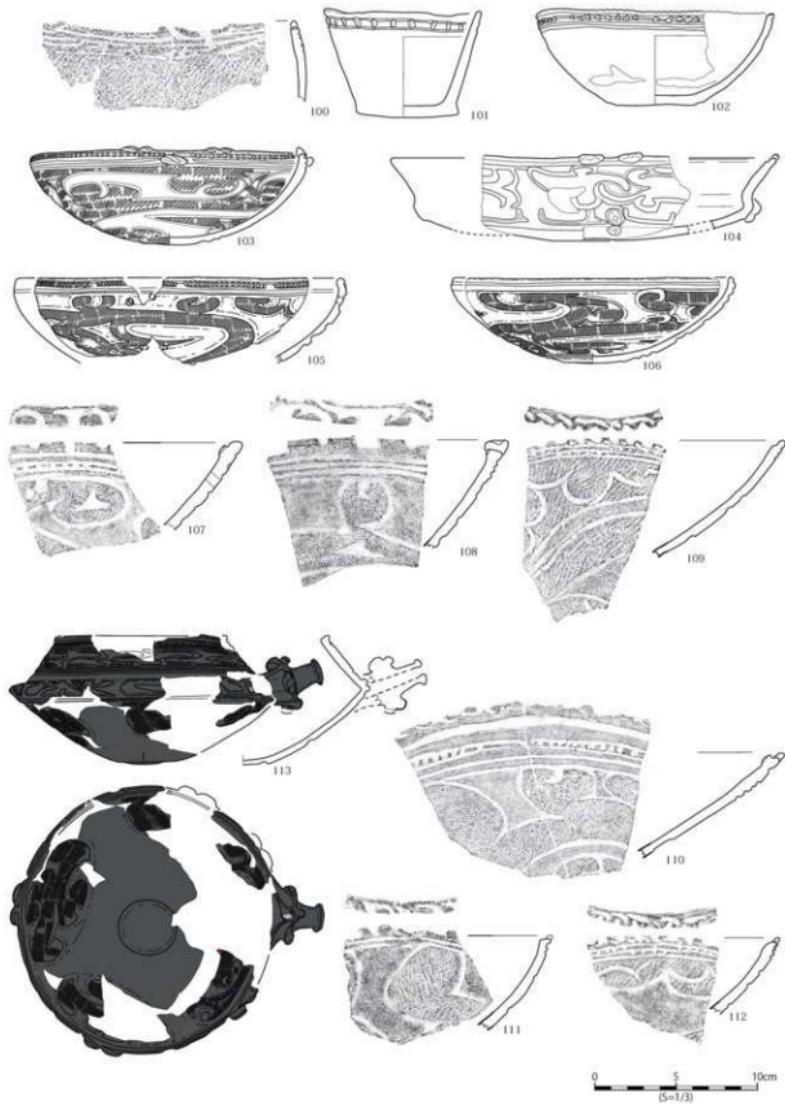
(10) 第8群土器 (図III-4-1-18～20)

29点図化した。181は半精製の深鉢であり、口縁部に平行沈線が施文される。

182～187は鉢であり、182・183は口縁直下に縄文が施文され、その下に平行沈線と眼鏡状隆帯が施文される。体部には上半に工字文が施文されている。184～186は山形突起を有する口縁直下は無文であり、体部には工字文が施文される。187はB突起状の山形文を有する口縁部には刺突文が施文され、体部には工字文間に連繫入組文を有するいわゆる聖山Ⅱ式相当の文様が施文される。

188～207は浅鉢であり、188は矢羽状文が施文され、赤色顔料が塗布されている。189・196は工字文間に連繫入組文を有するいわゆる聖山Ⅱ式相当の文様が施文され、189は内外面、196は内面に赤色顔料が塗布されている。204・205は平行沈線が施文されている。その他は全て工字文が施文されており、赤色顔料の塗布が確認されたものは193～195・197・198・200～206である。

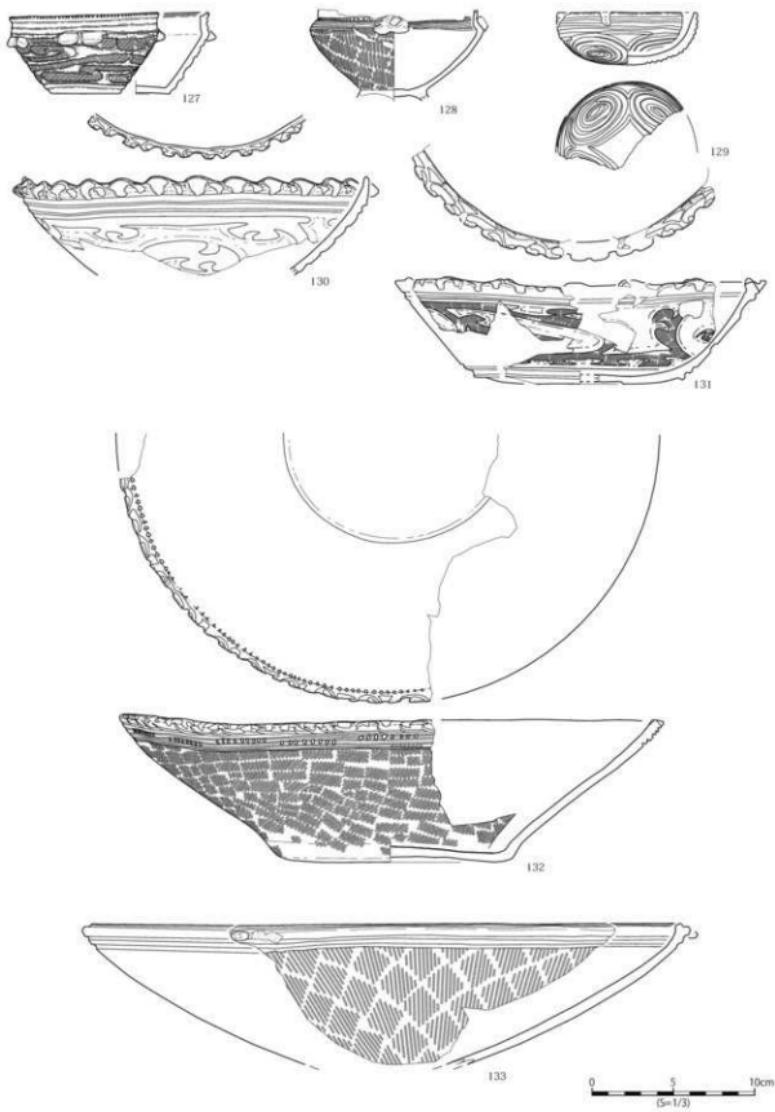
208～210は壺であり、208は口頸部に列点文が施文されている。209・210は単独の山形突起を有し、その直下にB突起を配置している。体部には工字文が施文されている。



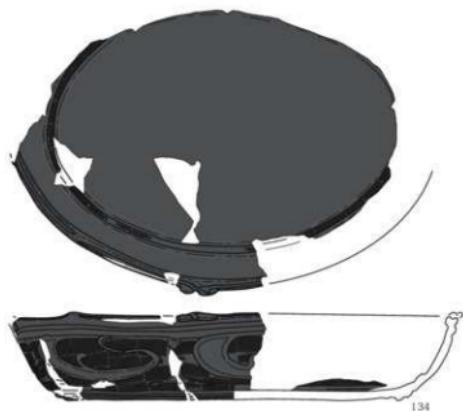
図III-4-1-10 遺構外出土第6群土器(2)



図III-4-1-11 遺構外出土第7群土器(1)

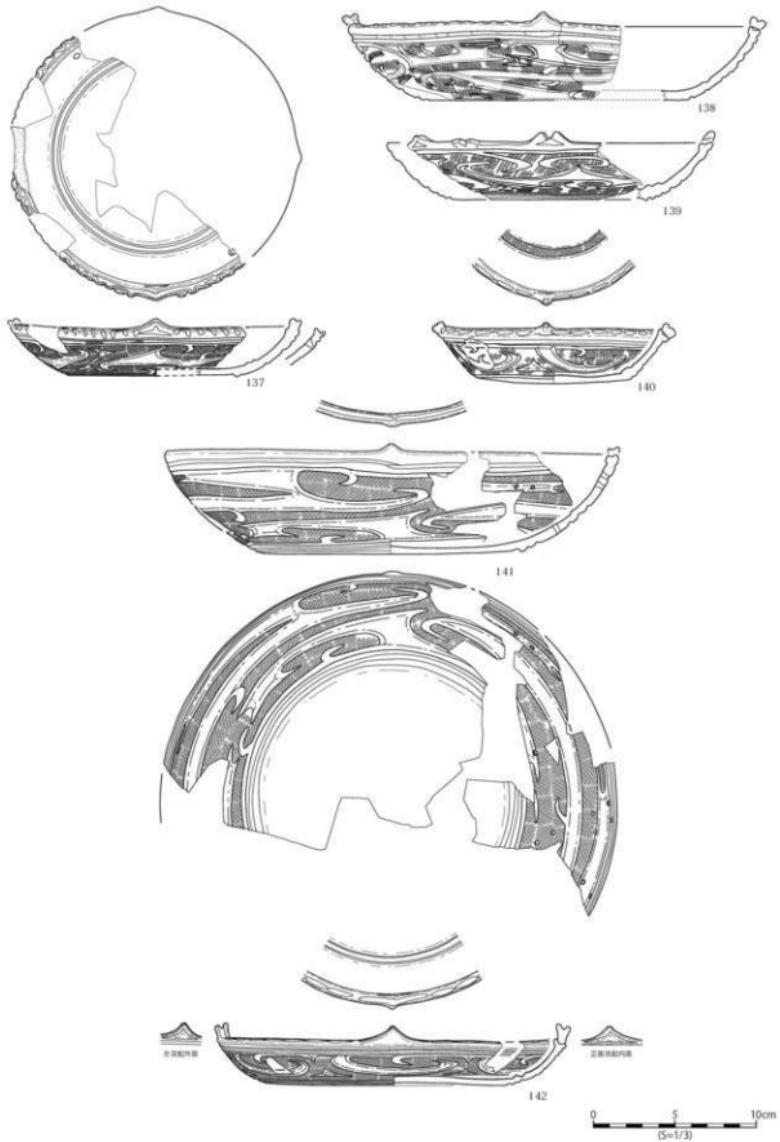


図III-4-1-12 遺構外出土第7群土器(2)

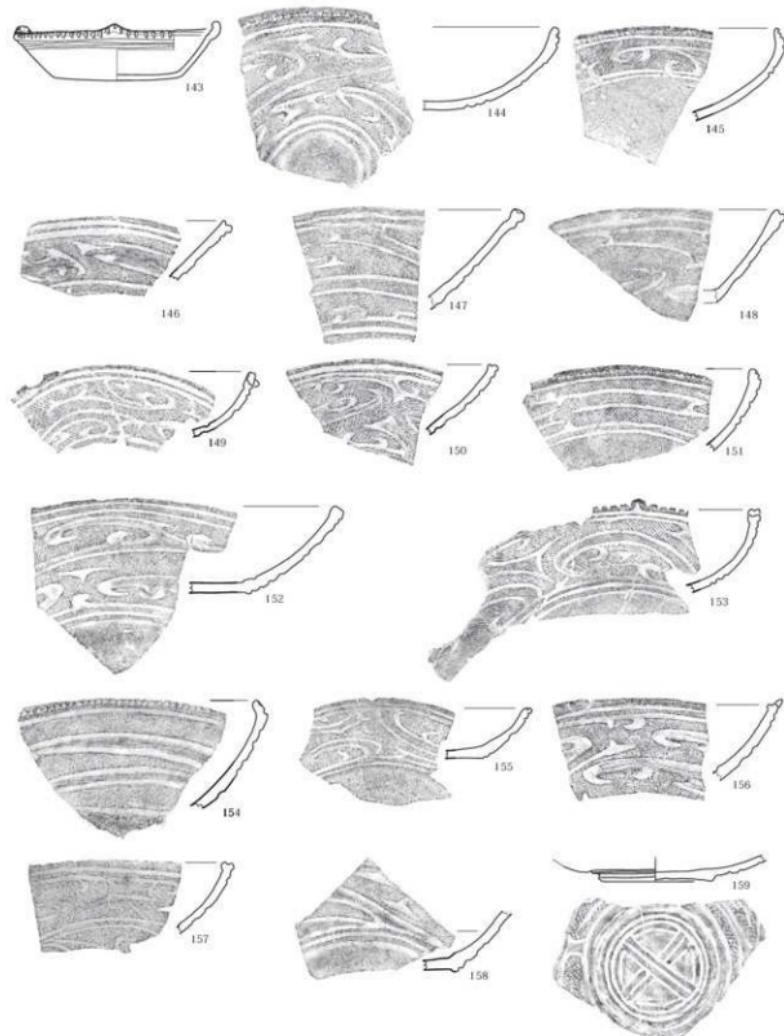


0 5 10cm
(5=1/3)

図III-4-1-13 遺構外出土第7群土器 (3)



図III-4-1-14 遺構外出土第7群土器 (4)



図III-4-1-15 遺構外出土第7群土器 (5)



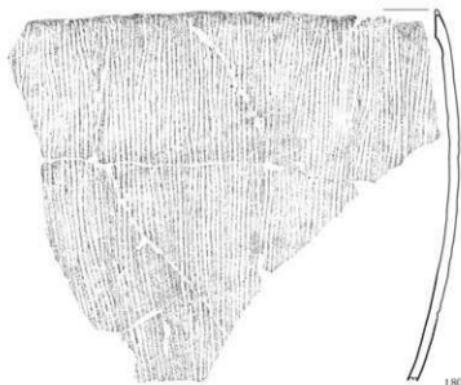


図III-4-1-16 造構外出土第7群土器(6)

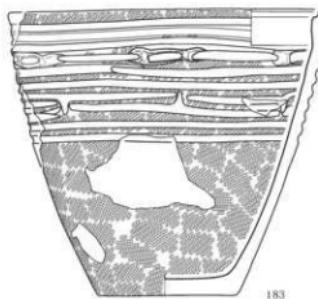
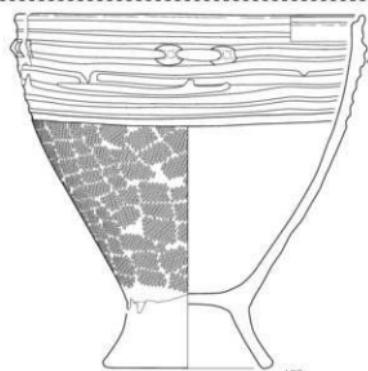
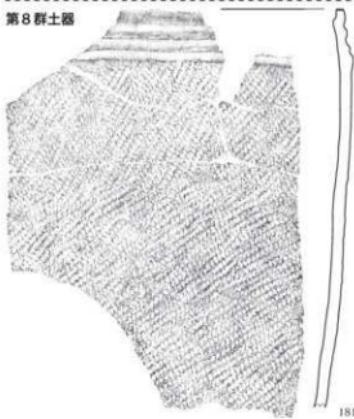


図III-4-1-17 遺構外出土第7群土器(7)

第7群土器

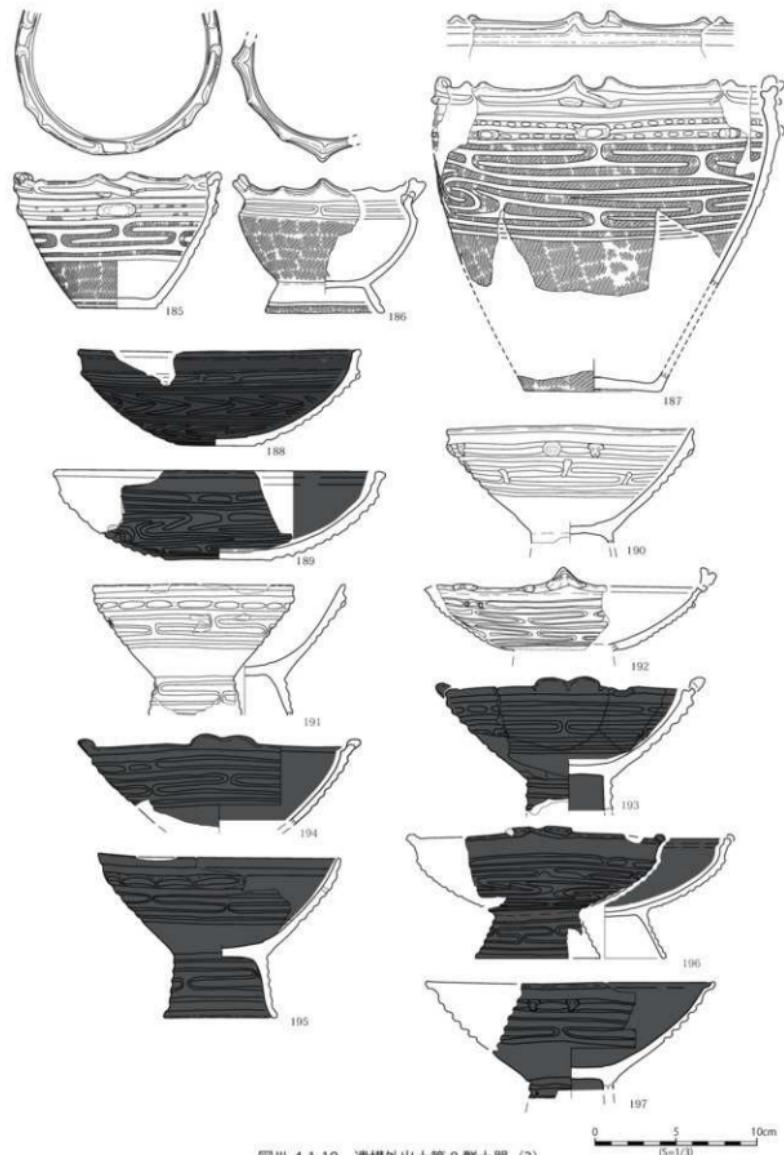


第8群土器

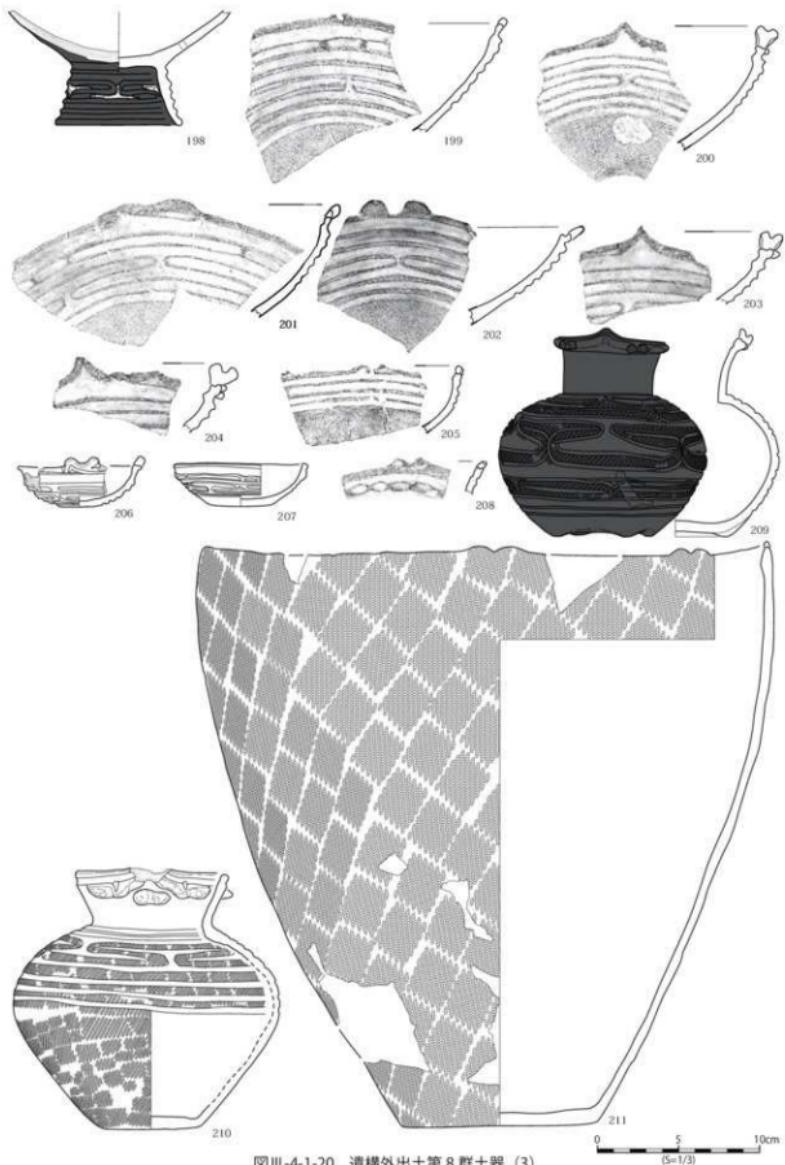


0 5 10cm
(S=1/3)

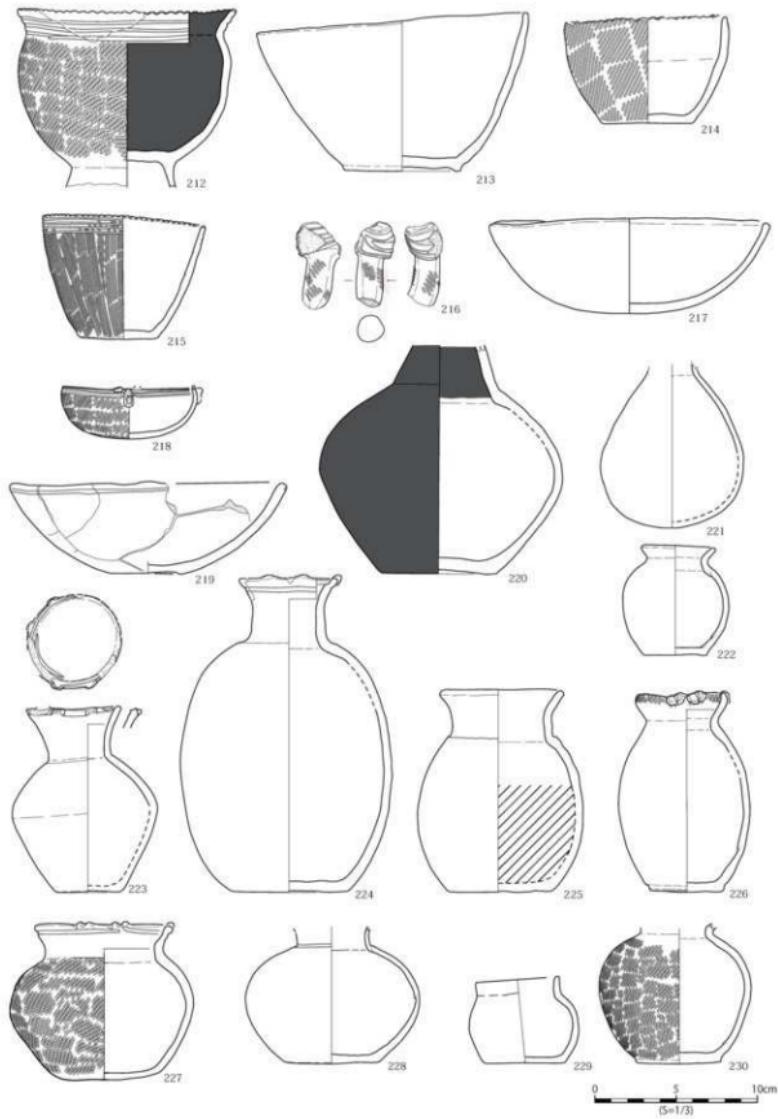
図III-4-1-18 遺構出土第7群土器 (8)・第8群土器 (1)



図III-4-1-19 造構外出土第8群土器(2)



図III-4-1-20 造構外出土第8群土器 (3)



図III-4-1-21 遺構外出土第3~8群土器 (1)

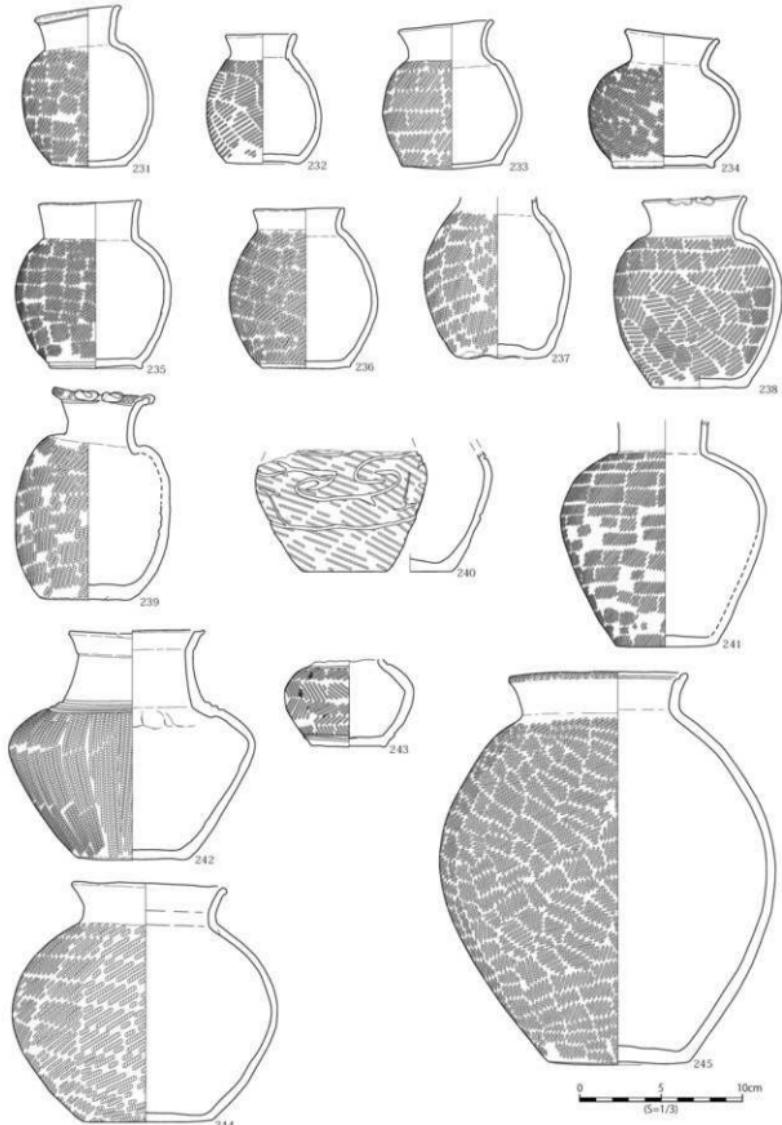
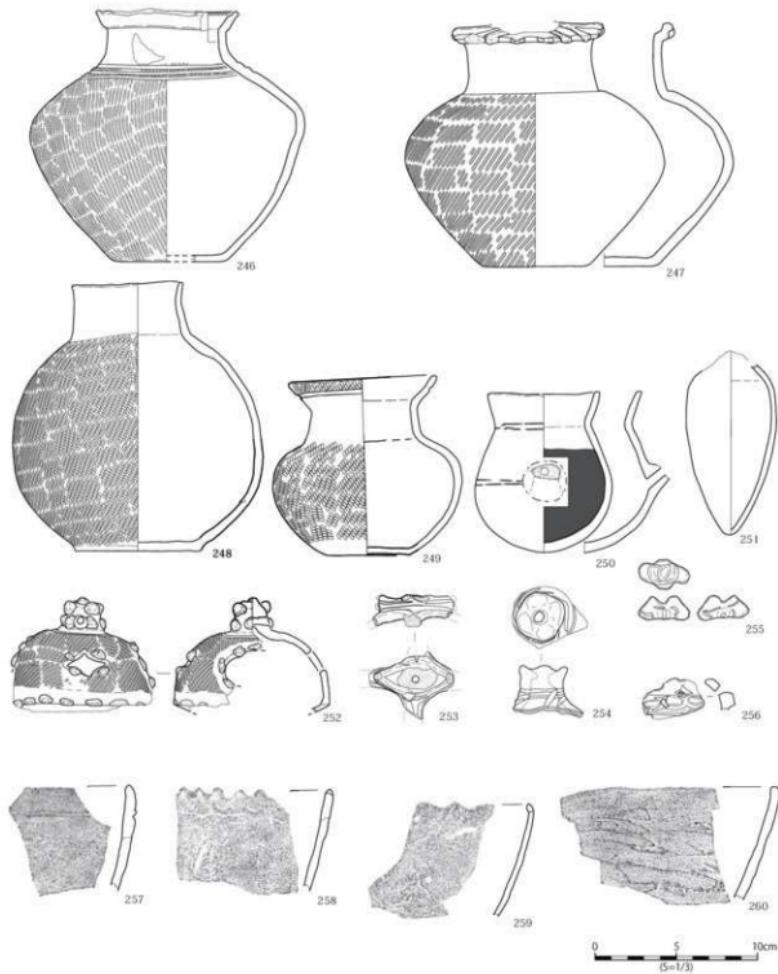
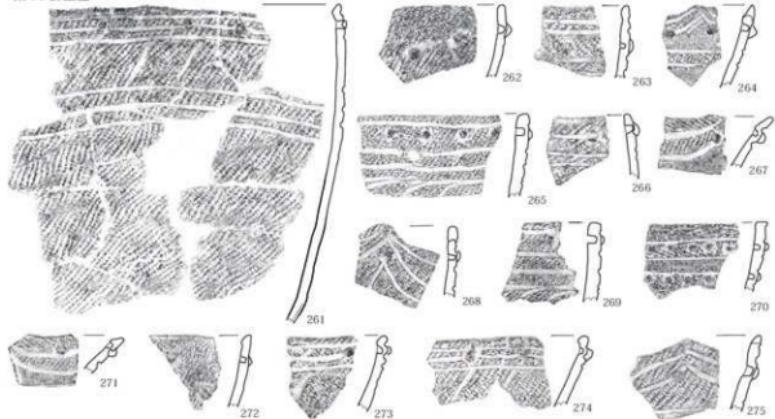


図 III-4-1-22 遺構外出土第3~8群土器 (2)

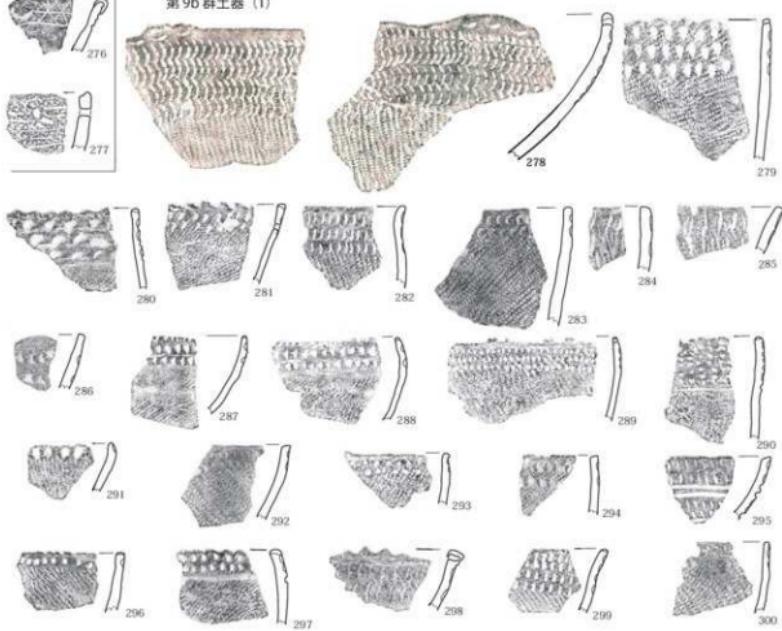


図III-4-1-23 遺構外出土第3~8群土器(3) 土器

第9a群土器

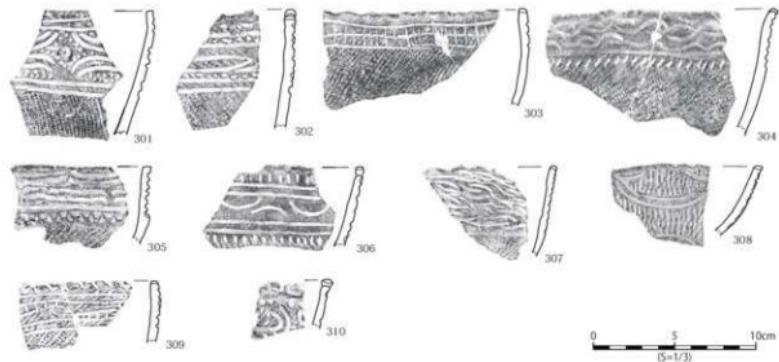


第9b群土器(1)



0 5 10cm
(5=1/3)

图 III-3-1-24 遗构外出土第9a群土器·第9b群土器(1)



図III-4-1-25 遺構外出土第9b群土器(2)

211は粗製の深鉢であり、LRの縦走縄文が施文されている。

(11) 第3～8群土器(図III-4-1-21～23)

49点図化した。212～216は鉢であり、212は平行沈線が施文されている。213は無文である。214・215は縄文施文のみである。216は突起部である。

217～219は浅鉢であり、217は無文であり、218・219は平行沈線が施文される。

220～249・251は壺であり、赤色顔料が施されている。220を除き、いずれも無文あるいは縄文施文のみの粗製のものである。251の器形は口縁部が欠損しているため正確な形状は不明であるが、長胴の尖底で類例の無い器形である。

250は無文の注口であり、内面に赤色顔料が塗布されている。252から256は香炉形土器であるが特徴的な文様が無いため時期不明である。

257～260は無文の深鉢であり、作りの粗雑さから製塩土器である可能性が高い。

(12) 第9a群土器(図III-4-1-24)

17点図化した。261～277は当該期に特徴ある瘤付土器である深鉢の口縁部破片であり、北海道の堂林式にみられる突瘤が施されるのが特徴である。

(13) 第9b群土器(図III-4-1-24・25)

33点図化した。278～300は数段にわたり列点文が施される。301は平行沈線により区画された文様帶の中心部を刺突し、それを取り囲むように菱形状に平行沈線を配置し、空隙を刺突文で充填している。302は数段の刺突列に平行沈線及び三叉文が施文されている。303は細い平行沈線間に不規則な刻目文が施文される。304は口縁部に連続した横位S字状文が施文されている。305・307は口縁部に不連続な横位沈線がランダムに配置されている。306は刻目文で区画された中に向かい合う弧線文が交互に施文されている。308は二重の弧線文の内外に刺突列が充填されている。309は羊歯状文的な刻目文が施文されている。310は刺突列の下に弧線文が施文されている。

(藤原)

2. 石 器

(1) 概要 (表III-4-2-1)

本調査は遺跡の一部を調査したに過ぎないが、出土量は、235,564点、8,855.8kgにのぼる(表III-4-2-1)。石核・剥片などを除いた道具としての石器は、個数全体の19%の44,055点、2,178.3kg以上にのぼる。その内訳は表III-4-2-1のとおり、微細剥離のある剥片16,117点(37%)、石錐9,190点(21%)、磨石・敲石7,760点(18%)の順で多い。包含層の堆積が厚かった集中区での出土量が多い。

重量別にみると、原石を含む搬入礫が6,259.3kgあるが、これを除くと磨石・敲石類1,276.7kgが最も大きく、石皿・台石類610.9kgが続く。いわゆる礫石器が多いが、石器の材料となる原石も多い点が注目される。

土器の検出状況から、石器もおおよそこの時期範囲の様相を示す比較的一括性が高い資料と考えられる。

遺物包含層が砂質のため、フライに掛けられて遺物が採集された。そのため、資料の見過ごしは少ないとみられる。また遺物包含層が砂層中にあり、礫を含まないことから石器を含む礫の多くが人の手によって搬入されたとみられる。ただし、石器の中には長年の風砂により表面が摩滅しているもののが少なくない。

整理に際して、尖頭器、石錐、石錐、石匙といった定型の剥片石器は全資料を対象とした。スクレイパー、微細剥離のある剥片などの不定形刃器、磨石・敲石類、台石・石皿類、砥石といった礫石器、搬入礫、石核、剥片・碎片といった石器製作に関わる資料は遺構内および抽出された遺物集中区を対象に検討した。遺構内検出資料と遺物集中区資料については、第2節・第3節で各記述を行った。

観察は、材質・製作法・分類(形状・機能)・大きさ(長さ・幅・厚さ・重量)について行った。重量の表記は、小形石器については1/10g単位、大形石器(50g以上)については1g単位で示している。刃部角は、剥片未加工の微細剥離のある剥片は腹面全体と、背面の稜と刃縁を結んだ線分との角度、調整加工のあるスクレイパー(SC)は、剥離作業によって形成された刃部の稜と刃縁を結んだ線分との角度でそれぞれ、刃長の中央部分を測定した。

以下遺構内・集中区を含めた全体の各器種の傾向について述べる。

(2) 尖頭器 (図III-4-2-1-1～図III-4-2-2-30)

長軸3～5cm程度の剥片の両面全縁辺を調整し刺突機能が付加された資料である。全体で659点みられた。ただし、検討の結果、一部に刃部が側縁にありスクレイパー的な用途が推定される類型がある。本報告ではこれを含めて分類区分の一つとした。

木葉形：平面形が木葉形を呈し、茎部と刃縁との境界が不明瞭かつ基部の返しが不明瞭なもの。419点。(1～9)

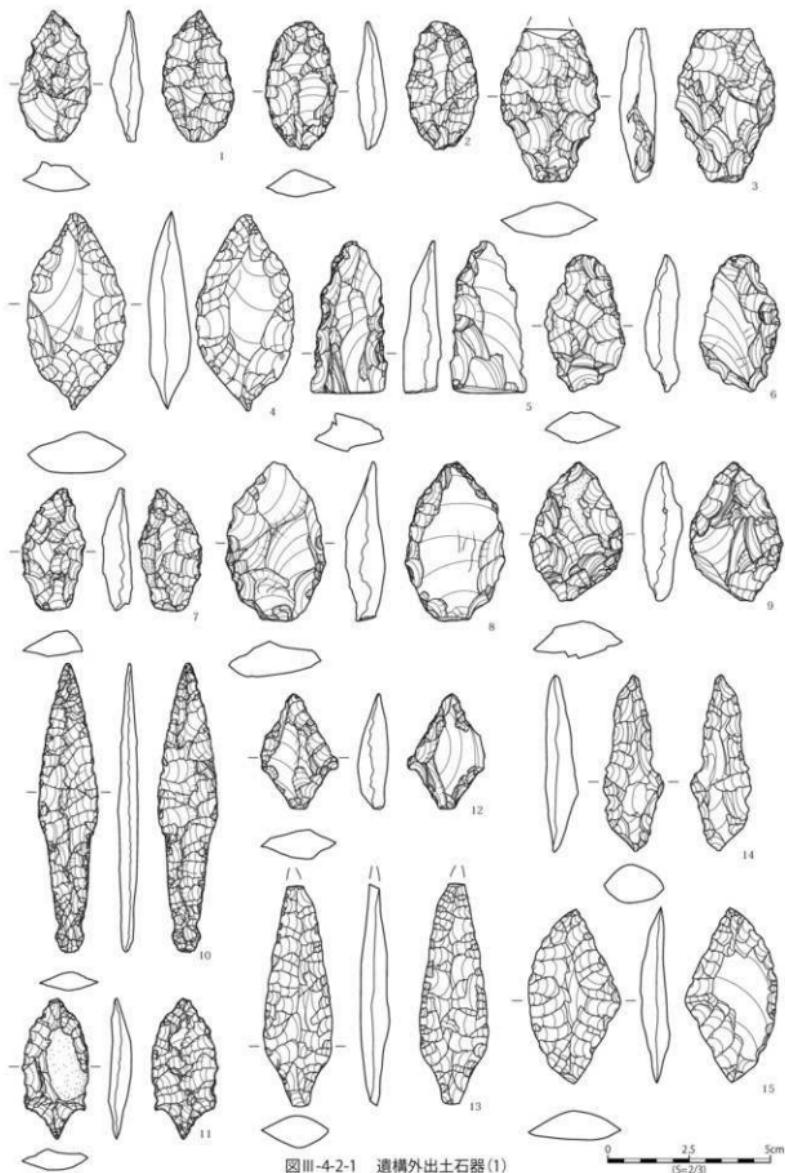
木葉形(有茎)：有茎で平面形が木葉形を呈し、茎部と刃縁との境界が明瞭なもの。3点。(10・11)

菱形：有茎で平面形が長菱形で、基部と刃縁との境界が明瞭なもの。102点。(12)

菱形(有舌)：有茎で平面形が長菱形で、基部と刃縁との境界が明瞭なもののうち、長方形の茎部を

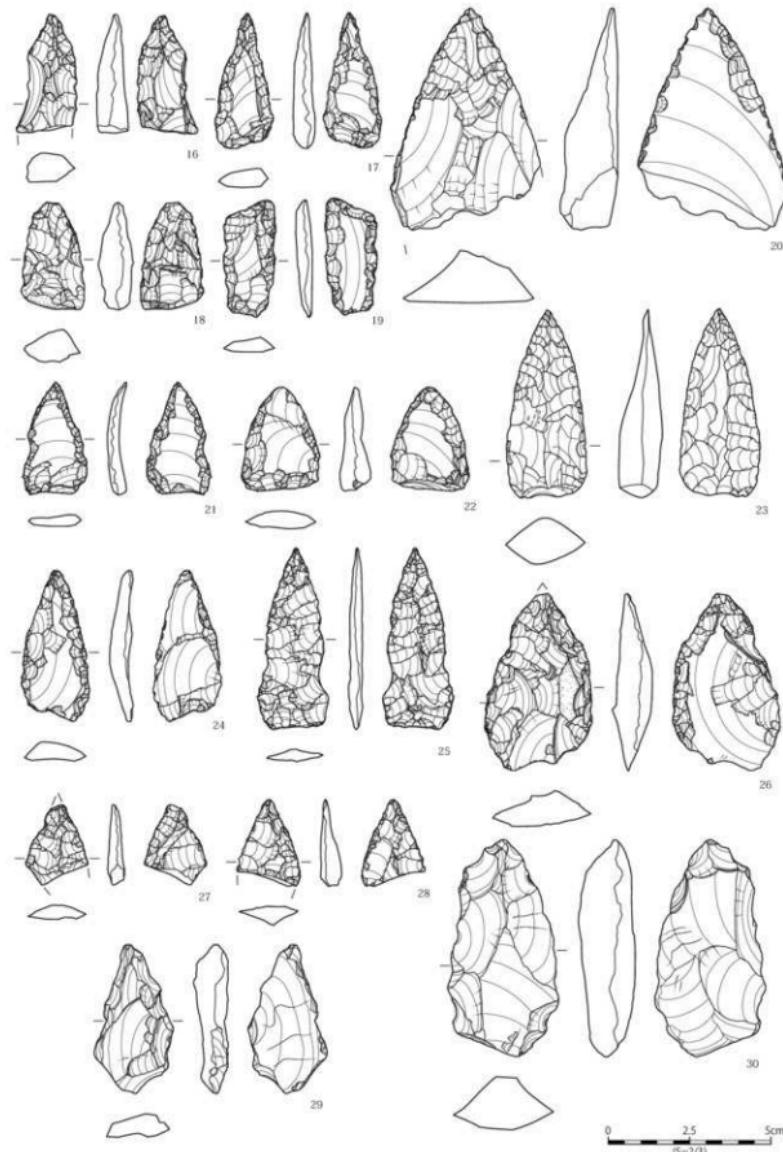
表III-4-2-1 石器・礫の地区別・種別出土数表

参考 1 踏入器は端小を除く。
参考 2 一は主要にはあるがカウントしなかつた部分。



图III-4-2-1 遗址出土石器(1)

0 2.5 5cm
(5=2/3)



図III-4-2-2 遺構出土石器(2)

作り出すもの。5点。(13)

山形：無茎平基であるもの。67点。(16～25)

異形：菱形（有舌）のうち、茎部に抉りをいれるもの。2点。

以下はスクレイパー的な用途も含まれる。

ト形：木葉形尖頭器の基部側縁に突起を作りだすもの。12点。(14・15)

半月形：木葉形に類似するものの、左右の刃縁の形態が不均衡で一方の刃縁が直刃に近いもの。32点。

(26)

そのほか、破損あるいは未完成で形態が不明瞭なものが17点ある(27～30)。

抽出グリットの101点をみると木葉形が60点、山形が17点、菱形が13点、半月形が6点、ト形が3点、菱形（有舌）が1点、分類不明が1点出土しており、木葉形が主体である。木葉形は凸基が多く、菱形は凸基のみの出土であり、凸基は木葉形と菱形が主体である。なお、木葉形は円基の出土も多い。山形のみ平基がみられた。刃部形態は木葉形・菱形・山形・半月形・ト形については外湾するものが主体である。

分布をみると、X=92,Y=82が14点で最も多く、第1・第5遺物集中区での出土が多い。

a. 大きさ

抽出グリット分の101点のうち、完形品69点を対象とする。長さは2.0cm～6.0cm、幅は1.0cm～3.0cmに集中する。分類別に見ると、木葉形は長さが3.0cm～6.0cm、幅が1.0cm～4.0cmのものと、長さ8.0cm～9.0cm、幅4.0cm付近に分布が集中しており、大きく外れるものもある。菱形は長さが約2.0cm～4.0cm、幅が1.3cm～3.0cm付近に集中する。山形は長さ2.0cm～6.0cm、幅が1.0cm～3.0cm付近に集中する。半月形は長さ3.0cm～6.0cm、幅1.0cm～3.0cmのものと長さ7.0cm～8.0cm、幅4.0cm付近のものに分布がみられる。ト形は長さ2.0cm～5.0cm、幅1.0cm～3.0cmに分布する。平基有茎は長さ5.0cm～6.0cm、幅2.0cm～3.0cmに分布する。

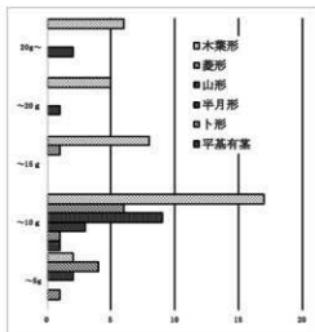
厚さは木葉形が平均1.1cmで、0.7cm～1.1cmの薄いものと1.5m以上の厚いものに集中する。菱形は平均0.9cmで、0.7cm～1.1cmに集中し、1.1cm以上の数は減る。山形は平均0.7cmで、0.5cm～0.7cmに集中する。半月形は平均1.3cmで、厚いものが多い。ト形は平均0.6cmで、薄いものが多い。

重さは木葉形が5g～10gに分布が集中しているが、5g以下のものが少なく、20g以上の重みのあるものも出土している。菱形は5g～10gに集中しているが、5gのものも多く出土している。山形はト形はすべて10g以内に収まっている。半月形はまばらな分布である。木葉形や半月形が軽量なものと重みのあるものが混在している一方で、菱形や山形、ト形は軽量なものが多い(図III-4-2-3)。

b. 石材

抽出グリット分の全101点を対象とする。大部分が頁岩

87点(抽出グリット出土数の86%)を占めている。頁岩以外の石材はメノウ11点(11%)、玄武岩4点(4%)である。



図III-4-2-3 尖頭器の重さ

武岩 2 点、黒曜石 1 点である。木葉形でメノウ 6 点と他の分類に比べて多い。

c. 素材

抽出グリット分の 101 点のうち、98 点で観察・推定可能であった。縦長剥片 92 点、横長剥片 6 点と縦長剥片が主体である。

d. 残存状況

抽出グリット分の 101 点のうち、97 点を対象とする。完形のものが 70 点 (70%)、破損しているものが 27 点 (29%) である。木葉形が 58 点中 20 点 (34%)、山形が 17 点中 5 点 (30%) と他の分類に比べて破損率が高い。ト形と半月形は全て完形である。破損箇所は下半部の欠損が 10 点 (10%) が多い。他の破損箇所はおおよそ同程度の割合である。なお、欠損後に加工がみられるものが 2 点ある。

e. 使用痕

菱形 1 点の刃部に磨耗痕が確認できる。アスファルト付着が 101 点中 4 点 (4%) ある。形態別の内訳は木葉形 1 点、菱形 1 点、菱形 (有舌) 1 点、半月形 1 点、である。すべて完形品に付着している。うち、図III -3-4-29-4 は一側縁辺にアスファルトが付着している。このような遺物の出土例として青森県川原平 (1)・(4) 遺跡、秋田県下台遺跡・平鹿遺跡、岩手県九年橋遺跡、宮城県北小松遺跡などが挙げられる。アスファルト付着部分に木の柄を装着して用いられ、スクレイパー機能を有していたと考えられる (鹿又 2014)。

(3) 石鐵 (表III -4-2-2、図III -4-2-4-31 ~ 図III -4-2-6-100)

全側線に両面剥離調整が施された石鐵は 9,190 点出土した。基部形態と茎部の有無で分類した。

凸基：底辺（基部）の形状が突出するもの。7,157 点。

凸基有茎：茎部有。7,120 点。

凸基無茎：茎部無。37 点。

平基：底辺（基部）の形状が直線になっているもの。363 点。

平基有茎：茎部有。309 点。

平基無茎：茎部無。54 点。(91)

凹基：底辺（基部）の形状がくぼむもの。79 点。

凹基有茎：茎部有。9 点。(31)

凹基無茎：茎部無。70 点。

円基：基部がなく底辺（基部）の形状が弧状のもの。52 点。

異形：刃部や基部に抉りをいれ変形させるもの。57 点。(94 ~ 100)

さらに、数の多い凸基有茎鐵は全体形から a ~ f の 6 細分した。

a 菱形：凸基辺が直線で、全体形が菱形を呈するもの。787 点。(32 ~ 34)

b 内湾：凸基辺が内湾するもの。5,300 点。(35 ~ 75)

c 梯形：凸基辺と刃部との境界が不明瞭で、全体形が棒状を呈するもの。416 点。(76 ~ 80)

d 木葉形：凸基辺と刃部との境界が不明瞭で、全体形が木葉形を呈するもの。

尖頭器の木葉形の小型に属す。310 点。(81 ~ 87)

表III-4-2-2 石鏡の類型別の地区別・層位別出土数表

e 五角形：両側の刃部辺が折れ曲がり、全体形が五角形を呈するもの。7点。(88)

f 売広がり：両側の刃部下半が内反りし、刃部の裾が広がった形状を呈するもの。300点。(89・90)

以上より、例えば「凸基有茎鐵のa菱形」を「凸有a類」と表記した。

そのほか、破損により分類不能1,108点、未成品374点がある。

石材は、7,852点(86%)が珪質頁岩である。続いてメノウ1,218点(11%)、黒曜石83点(0.7%)、赤チャート35点(0.3%)、水晶2点である。

大きさ平均は凸有a類 $3.3 \times 1.5 \times 0.5\text{cm}$ 、1.9g、凸有b類 $3.0 \times 1.3 \times 0.5\text{cm}$ 、1.6g、凸有c類 $3.2 \times 0.9 \times 0.7\text{cm}$ 、2.1g、凸有d類 $3.2 \times 1.5 \times 0.7\text{cm}$ 、3.1g、凸有e類 $4.3 \times 1.4 \times 0.5\text{cm}$ 、2.3g、凸有f類 $3.6 \times 1.4 \times 0.5\text{cm}$ 、1.8g、平基無茎鐵 $2.6 \times 1.5 \times 0.3\text{cm}$ 、0.8g、平基有茎鐵 $2.4 \times 1.5 \times 0.4\text{cm}$ 、1.0g、凹基無茎鐵 $2.8 \times 1.3 \times 0.4\text{cm}$ 、1.7g、凹基有茎鐵 $1.3 \times 2.5 \times 0.5\text{cm}$ 、1.1g、円基鐵 $3.1 \times 1.7 \times 0.6\text{cm}$ 、2.7gである。分類ごとに比較すると、長さは $3.0 \sim 3.5\text{cm}$ の範囲に集中するが、平基有茎鐵や凹基無茎鐵は 3cm 未満の小型のまとまりがある。重さは $1.0 \sim 3.1\text{g}$ の範囲で、凸有d類と円基鐵がやや重い。形態的には長さと幅の比が2:1に近いのは、凸有a類、凸有b類、凸有d類、凸有f類、凹基無茎鐵、円基鐵の6つである。凸有c類は3:1に近く、細長い。

アスファルト付着は530点(5%)である。凸基有茎107点、平基有茎3点、平基無茎1点、凹基無茎29点、円基1点、計141点にみられた。各分類中、凹基無茎鐵が30%と大きい。このうち、集中区では付着率10%と比較的大きい。さらにSK内では付着率30%であり、副葬品として矢が入れられた可能性を示す。

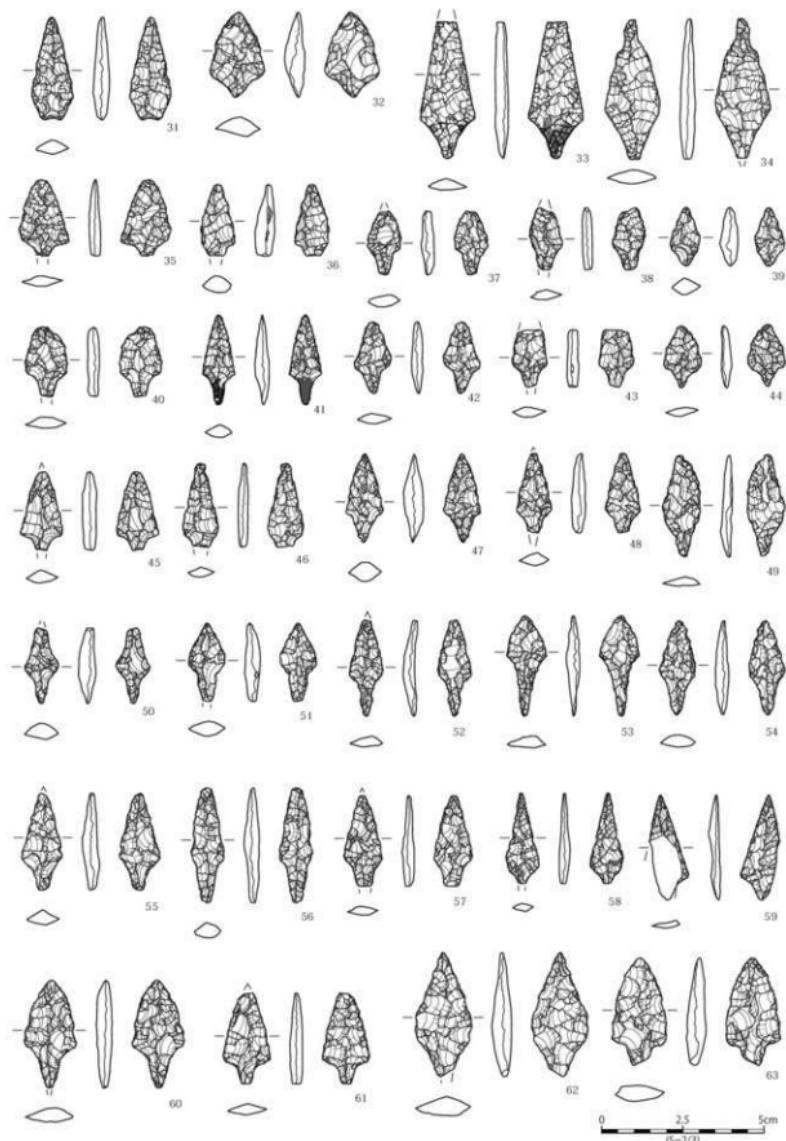
分布をみると、第6西遺物集中区周辺のX=126～134,Y=66～72の範囲が多い。特にX=130,Y=68では113点出土した。そのほか第2東遺物集中区周辺のX=94～100,Y=110～118の範囲も多い。

分類別にみると、凸有a類は遺跡全体でみられる。特に第6西遺物集中区では10点以上出土する地点が多い。最も数の多い凸有b類も第6西遺物集中区に多いほか、第1遺物集中区、第2遺物集中区でも20点以上出土する範囲がある。凸有c類も第6西遺物集中区のほか、第1遺物集中区、第2東遺物集中区に多い。一方、凸有d類や凸有f類は、第6西遺物集中区では少なく、第1遺物集中区、第5遺物集中区に多い。平基有茎は第6西遺物集中区に多い。

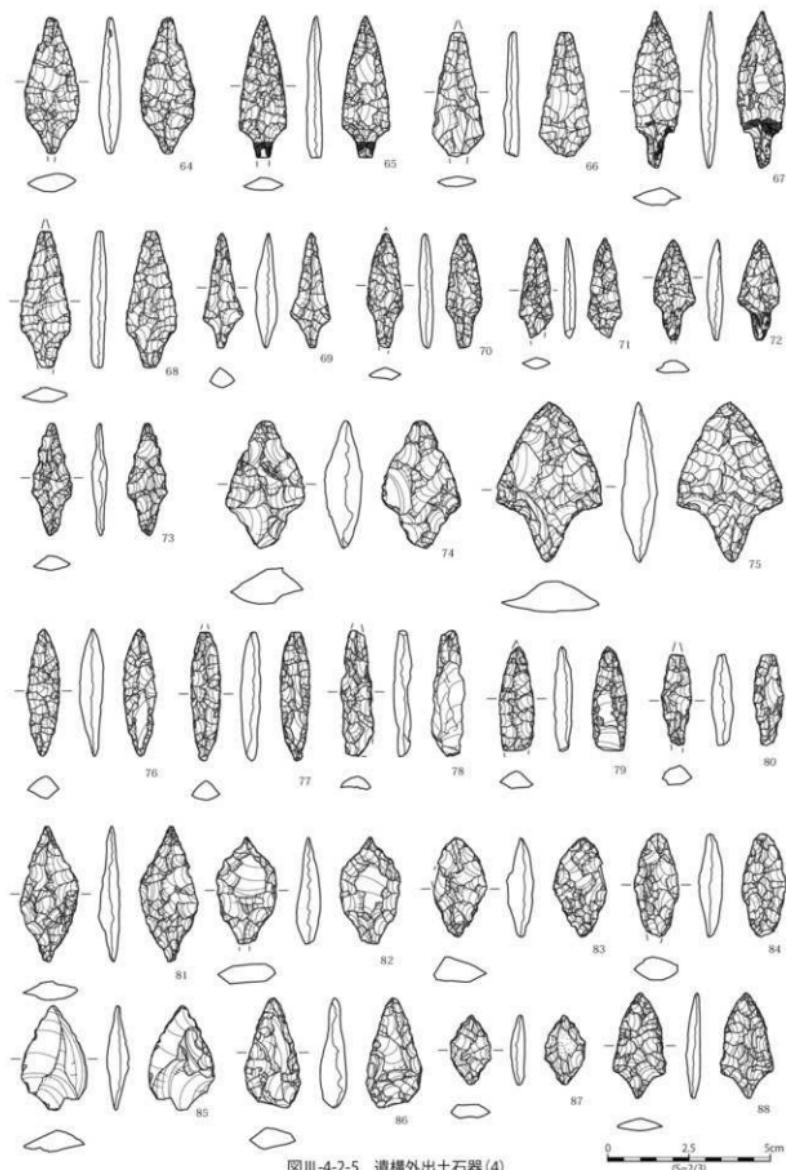
各集中区を層位別にみると、円基鐵と凸有c類は近い層位から出土する傾向にある。例えば、第2遺物集中区(II f層)、第1遺物集中区(II e層、II a層)、第4遺物集中区(II e層)が挙げられる。分層が詳細に行われた第6東遺物集中区についてみると、下層(II g層)に凸有c類、中間層(II f～g層)で平基有茎がある。また、II f4層に平基有茎、円基鐵がある。

(4) 石錐(図III-4-2-6-101～113)

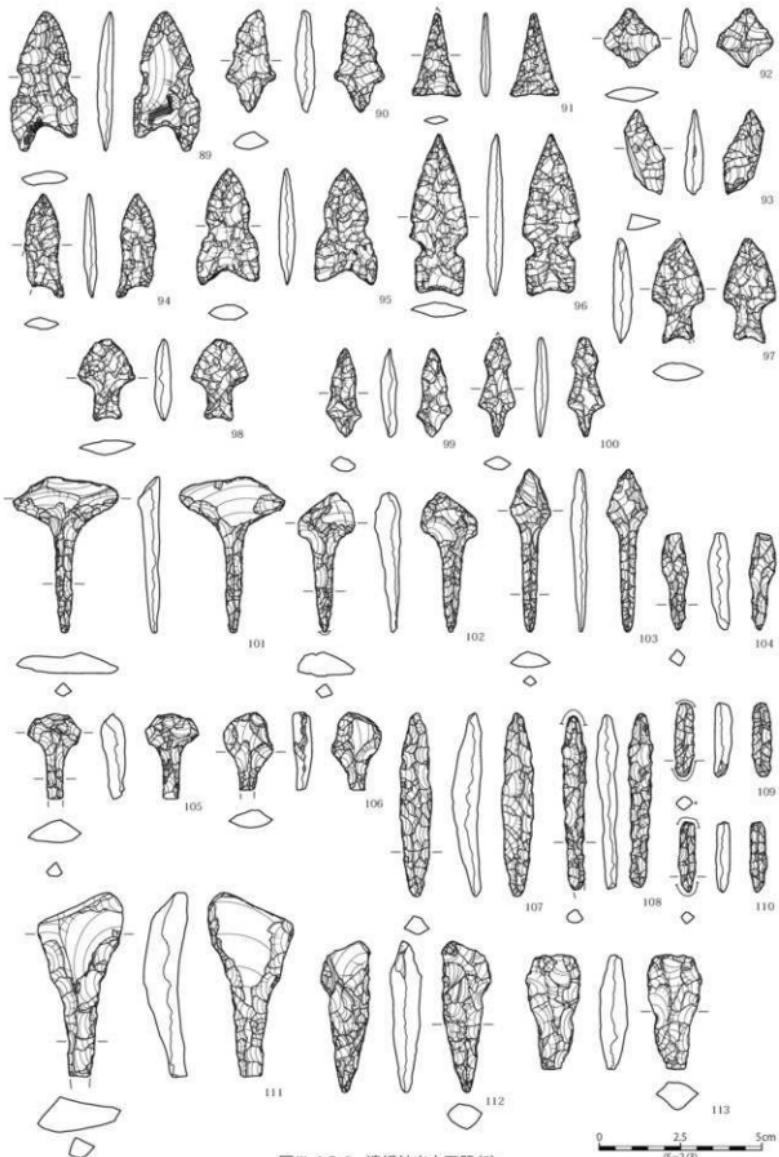
長い尖部を持ち、穿孔作業が想定される資料である。縄文石器に一般的な頁岩製の全体形が調整されたタイプと、メノウ製主体でバイボーラーテクニックにより作り出された長さ約 2.5cm 未満、幅 $1 \sim 3\text{mm}$ の細長い細石刃様のタイプに大別される。後者は、玉造りの穿孔具と考えられることから、「小型石錐」として後述する。



図III-4-2-4 遺構出土石器(3)



図III-4-2-5 遺構出土石器(4)



図III-4-2-6 遺構出土石器(5)

全体で 1,136 点、3,239.2g 検出した。頭部と錐部の調整から四区分される。

精類：つまむことのできる頭部つまみ部と長い錐部をもち、錐部の数が 1 つのもの。そのうち、つまみ部全周が両面調整により円形あるいは三角形に整形されるもの。125 点。(101 ~ 106)

上下類：全体形をみたとき、頭部つまみ部がみられず、頭部と錐部の境界が不明瞭な棒状のもの。錐部の数が上下 2ヶ所にある場合が多い。261 点。(107 ~ 110)

粗類：つまむことのできる頭部つまみ部と長い錐部をもち、錐部の数が 1 つのもの。そのうち、頭部が整形されない、あるいは粗いもの。293 点。(111 ~ 113)

異形：つまむことのできる頭部つまみ部と長い錐部をもち、錐部の数が 1 つのもの。そのうち、頭部が両面調整により抉りを入れるなど変形されるもの。10 点。

そのほか、頭部欠損し、錐部のみで分類不能が 247 点ある。

このように、粗類が全体の 25% と大きく、続いて上下類が 23% と続く。石材は頁岩 1,064 点、3105.8g と 9 割以上を占める。つづいてメノウ 7 点ある。付着物として、アスファルトがある。7 点で確認された。内訳は上下類 1 点、粗類 2 点、精類 1 点、異形 1 点、不明 2 点で、不明 2 点以外は頭部に付着する。出土地点は、SK 内 50 点、SX01 内 16 点、遺構外 1,070 点である。アスファルト付着率は SK 内が大きい。

以上のうち、集中区内の 142 点について計測と細分を行った。

a. 大きさ

石錐の長さ平均 36.4mm、幅平均 16.5mm、厚さ平均 7.3mm、重さ平均 3.5g だった。

石錐の全体長と全体幅の比をみると、すべて 1:1 の比率よりも下に位置する。最大長 20 ~ 40mm 前後、最大幅 5 ~ 20mm 前後に集中する。それぞれの平均値 (36.4mm、15.9mm) もその中に収まる。上下類は 2 点を除き全体幅が 10mm 前後に収まる。緩やかな傾斜ではあるが、最大長が伸びるにつれて幅広になっていく傾向にある。

b. つまみ部

つまみ部とは、人間の指ないし木・骨角製の柄が装着されると推測される部分である。長さは全体長から錐部の長さを引いた値を利用した。つまみ幅は全体幅と同値をとった。そのためつまみ部と錐部の差異が明瞭な精類と粗類を主に扱う。

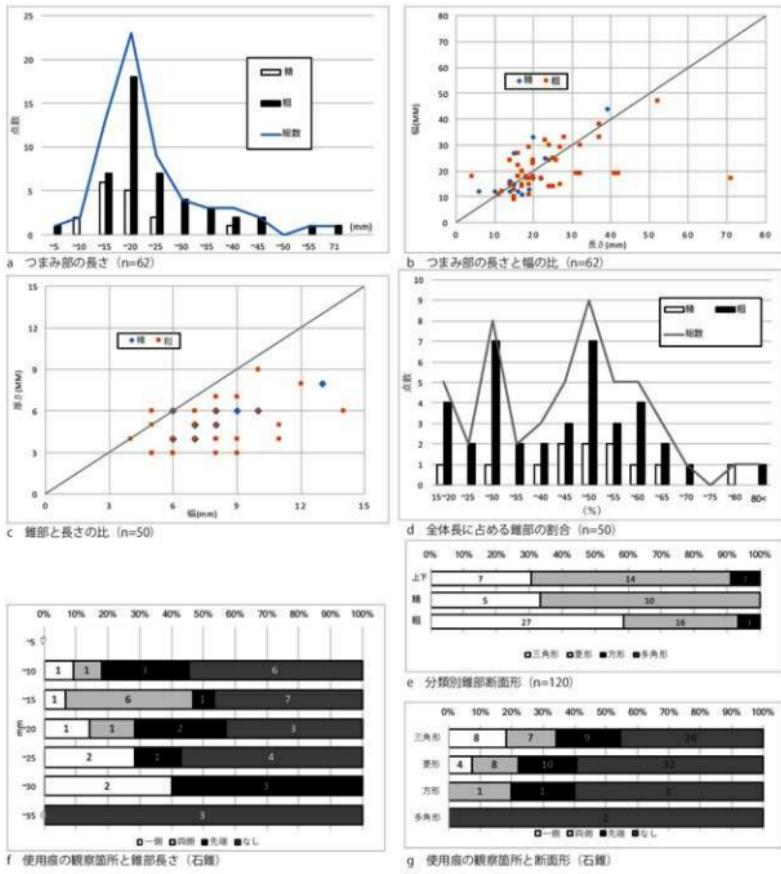
つまみ部の長さを 5mm 単位で区切り、棒グラフにして表した (図III-4-2-7-a)。折れ線グラフは精粗の合計値である。長さは 11 ~ 15mm の間で増加し、16 ~ 20mm でピークになる。以降は錐部が長くなるにつれ出土点数が少なくなる。特に粗類は 16 ~ 20mm の間が突出している。一方、精類は 10 ~ 20mm の範囲にまとまりがみられる。

つまみ部の長さと幅の比率はおおよそ 1/1 の線の近辺に集まる (図III-4-2-7-b)。

c. 錐部

錐部の長さは 7 ~ 14mm に集中する。粗類が顕著である。錐部の長さ・幅・厚さの関係をみると、長い錐部を作出しても幅に大きな変化はない (図III-4-2-7-c)。つまみ部と錐部の幅を比較してみると、錐部長さと幅の関係性のように錐部は一定の幅を保つ。

長さについて、全体長のうち錐部がどれほどの割合を占めるかの割合を検討した (図III-4-2-7-d)。5% 区切りでグラフを作成した結果、大きく 2 つの山が現れる。粗類が顕著で、30% 前後と 50% 前



図III-4-2-7 石錐の大きさと使用痕

表III-4-2-3 石錐の使用痕観察表

種類	位置	上下	精	粗	小片
摩減	一側	1	0	2	0
	両側	5	1	2	0
	先端	7	3	4	0
微細剥離	一側	3	1	4	0
	両側	2	3	2	0
使用痕なし		0	0	2	0
		15	4	29	22

後に集中する。

d. 使用痕（図III-4-2-7-f・g）（表III-4-2-3）

使用痕の種類と位置を、肉眼による観察から確認した。観察はルーペを用いて、使用痕のありそうな位置にライトで強い光を当てて確認した。

確認できた使用痕には微細剥離と摩滅がある。

微細剥離は連続しない1mm以下の剥離を認定した。摩滅は肉眼で観察できる石器表面の摩り減りを指す。

石錐で使用痕が確認できた資料は46点（36%）あり、そのうち摩滅痕のみの資料は28点、微細剥離痕のみの資料は17点あった。また、両方を有する資料が1点ある。

分類別で精類67%、上下類54%である。また、上下類は摩滅、とくに先端部もしくは両側辺のどちらかに使用痕が良く現れる一方、つまみ付錐は均一的に使用痕跡が広がる。

（5）小型石錐

メノウ製主体でバイポーラーテクニックにより作り出された長さ約2.5cm未満、幅1～3mm程度の細長い細石刃様のタイプで、1箇所以上の尖部が形成され、二次加工が認められるもの、あるいは肉眼観察で微細剥離等の使用痕跡が認められるものとした。計2,775点出土した。うち遺構・集中区外が2,494点ある。平面形によってA棒状とBつまみ付に二区分した。A棒状2,345点、Bつまみ付は346点にのぼる。

石材はメノウ製を主体とするほか、棒状に割れる水晶が28点みられる。

出土分布について、個数20点以上のグリッドはX=124～128,Y=54～58のⅢ層上面に集中する。第6西遺物集中区付近に位置する。特にX=128,Y=56のⅢ層上面では74点がまとまって出土した。統いて多いのはX=114～120,Y=86～90のⅡa層およびⅢ層上面である。ここも第6遺物集中区の中央に当たる。そのほか10点以上の範囲はX=122以上の第6遺物集中区に当たるグリッドで濃密である。第6東遺物集中区Ⅱg6層からは、469点の小型石錐の素材となる小型柱状剝片がまとまって出土している。そのほかX=92～96,Y=74～76で10点以上の範囲がある。一方、第2～5遺物集中区では少ない。

a. 大きさの検討

遺構・集中区内出土の132点について計測、細分を行った。長さ平均16.4mm、幅平均6.6mm、厚さ平均3.8mm、重さ平均0.5gである。小形石錐は、最大長が10mm以上25mm未満にほぼ収まる。最大幅は10mm以下に集中する。すべて1/1の直線下に収まる。

つまみ付に長い個体が多い傾向にあるが、極端な差はない。幅と厚さの関係は、つまみ付が全体的に幅も厚さとともに比較的大きい。

b. つまみ部

つまみ付については、つまみ部の長さと幅の比を検討した。つまみ部長さは11～15mmが最も多い。幅に関しては、6～10mmに集中する。両者の比は、比率1:2から2:1の範囲に収まる。1/1よりもやや下方に集中する傾向がみられる。長さは5～15mmに集中する。

c. 錐部（図III-4-2-8-a）

つまみ付き小形石錐における錐部の長さ・幅・厚さの関係を調べた。錐部の幅に対し、長さはさほど変化は見られず、幅と厚さに関してても1:1前後にまとまる。

錐部の長さは2点を除き1~8mmに集まり、幅は2点を除いて2~7mmのうちに収まる。同値を出す個体が多く存在し、2~4mmに集中する。

石錐と同様、つまみ付き小型石錐において、全体長における錐部が占める割合を出した。その結果、全体長の15%から30%が錐部の割合として集中する。50%を超える資料は確認されなかった。

d. 錐部の断面形

錐部の断面形を石錐同様、形状で1三角形、2菱形、3方形、4多角形に細分した。

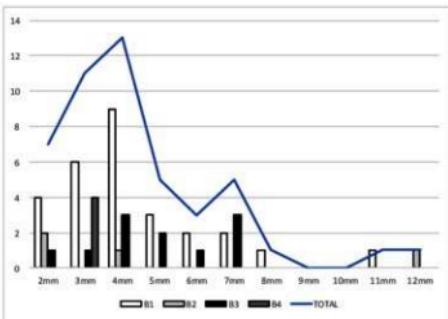
棒類の断面は三角形29点と方形33点があり、方形のものが上回る。そのほか菱形3点、多角形8点ある。多角形は全て五角形である。一方、つまみ付き小型石錐は、棒類とは異なり、三角形が33点と最も多く、それに次ぐ方形は17点と約半分である。そのほか菱形9点、多角形（五角形）1点と少ない。

e. 使用痕（図III-4-2-8b・c）（表III-4-2-4）

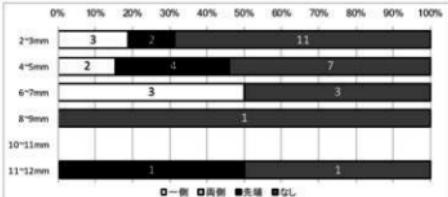
小形石錐に残る使用痕の種類と位置について、前述の石錐と同じ方法で観察した。

小形石錐で使用痕が確認できた資料は45点（33%）あり、そのうち摩滅痕のみの資料は22点、微細剥離痕のみの資料は21点あった。双方確認できた資料は2点ある。

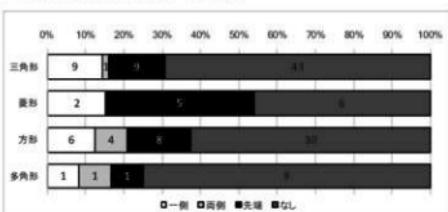
使用痕の位置は先端部のみと一側辺に使用痕が確認できるケースが多い。



a. 錐部の長さ (n=42)



b. 使用痕の観察箇所と錐部長さ (小形石錐)



c. 使用痕の観察箇所と断面形 (小形石錐)

図III-4-2-8 小形石錐

表III-4-2-4 小形石錐の使用痕観察表

種類	位置	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4
摩滅	一側	0	0	2	0	0	1	1	0
	両側	0	0	1	0	0	0	0	0
	先端	2	2	4	0	6	1	4	0
微細剥離	一側	4	0	3	0	7	1	1	0
	両側	0	0	2	1	1	0	1	0
	先端	1	0	1	0	0	2	0	0
使用痕なし		21	1	20	6	19	4	10	1

表III -4-2-5 石匙の地区別・類型別出土数表

個数	SK内	SX01	第1遺物集中区	第2西遺物集中区	第2東遺物集中区	第3西遺物集中区	第3東遺物集中区	第4遺物集中区	第5遺物集中区	第6西遺物集中区	第6東遺物集中区	集中区外	計
縦型	4	3	30	7	10	3	1	4	4	1	2	141	210
縦尖型	3	1	1	5								19	29
斜型	7	3	15	2	1	2	1	1	4	1		89	126
斜尖型												1	1
横型	5	4	16	4	5	2	1	1	1		3	110	152

(6) 石匙 (表III -4-2-5、図III -4-2-9-114～139)

刃器のなかでつまみ部を有する資料である。531点、10,016.7g検出した。SK内20点、SX01内11点のほかは全て遺構外から検出された。

分類はつまみ部を上にした場合、つまみ部の延長線と刃縁とを結ぶ角度から下記三分類を行った。

縦型：つまみ部を上にした場合、つまみ部の延長線と刃縁がほぼ平行になるもの。210点。(114～121)

縦尖型：縦型のうち、刃部の先端部が尖るもの。29点。(122～124)

斜型：つまみ部を上にした場合、つまみ部の延長線と刃縁の角度が30-60度になるもの。127点。(125～129)

斜尖型：横型のうち、刃部の先端部が尖るもの。1点。

横型：つまみ部を上にした場合、つまみ部の延長線と刃縁の角度が80-90度になるもの。159点。(130～138)

刃部の欠損で不明6点(139)あった。

そのほか、つまみ部に抉りを入れる異形の縦型石匙が1点ある。

SK内20点、SX01内11点、SD01内3点のほかは、遺構外検出である。

遺構内・集中区検出資料93点については大きさ、石材について検討した。大きさ平均は縦型6.8×3.2×2.7cm、24.5g、縦尖型6.5×4.0×1.2cm、24.9g、斜型6.3×4.8×2.6cm、22.0g、横型4.7×5.4×1.7cm、28.1gで横型がやや重い。石材は頁岩85点、メノウ5点で頁岩が多い。

付着物にはアスファルトがある。19点に付着する。内訳は縦型8点、斜型9点、横型2点で全体の組成に比べて、斜型への付着率が大きい。アスファルトは、全てつまみ部の頭部を巡るように付着する。使用痕は刃部に光沢と微細剥離が観察される。

集中区別にみると、縦型と斜型がSK内、SX01、第1遺物集中区、第4遺物集中区に多いのに対し、縦尖型は第2西遺物集中区に多い。横型は縦型と同じ区でみられるが、縦型のおよそ半分という区が多い。

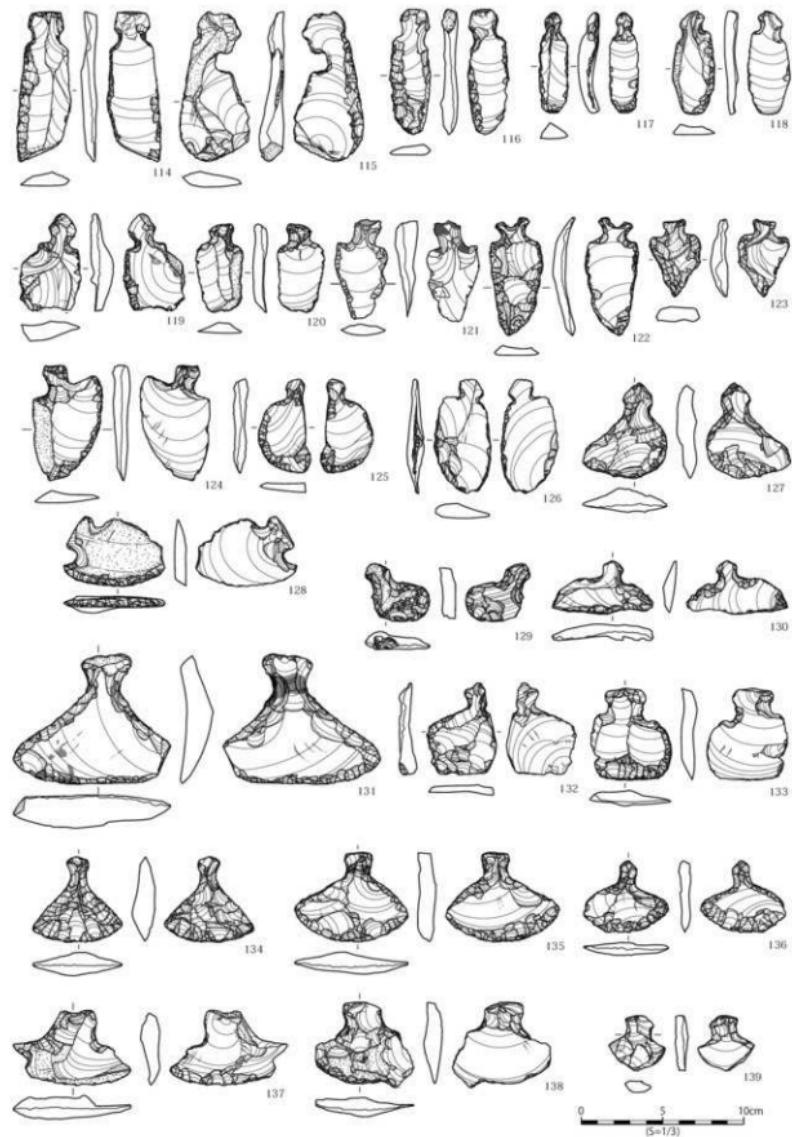
(7) 石鎧 (表III -4-2-6、図III -4-2-10-140～図III -4-2-11-161)

刃器のうち、下辺に比較的鈍い刃部角をもつ刃部を形成する資料で、木や骨の切削や獸皮の皮なめしといった搔器と同じ用途が推定される資料。539点、6,824g出土した。平面形で5分類した。

短冊形：左右側縁が線対称で細い長方形を呈するもの。51点。(140)

台形：左右側縁が梯形で上辺が狭く、下辺が広がるもの。187点。(141～148)

尖形：三角形状で、上端が尖り、下辺が広がるもの。尖頭器の可能性が残るもの。135点。(149～



図III-4-2-9 遺構出土石器(6)

表III -4-2-6 石器の地区別・類型別出土数表

個数	SK内	SX01	遺物集中区									集中区外	計
			第1西道	第2東道	第3西道	第3東道	第4遺物	第5遺物	第6西道	第6東道	集中区		
短冊形			1	1	1		1		1		48	51	
台形	4	4	24	2	1	2	3	6	2	6	133	187	
尖形	1	1	5	1	6				2	1	117	134	
斧形	4	1	15		3		3	3		2	40	71	
T字形			7	1	4				1	1	70	84	

152)

T字形：上半部は細く、下方が大きく広がる逆T字形を呈するもの。85点。(153～157)

斧形：側縁が大きくえぐられ下方が大きく広がるもの。69点。(158～161)

破損による不明が12点ある。

重さ平均14.3gで、短冊形20.2g、台形15.4g、尖形14.5g、T字形13.4g、斧形9.0gと形態によってばらつきがある。遺構内、集中区検出の32点の大きさ、石材を検討した結果、長さ×幅×厚さの平均は4.6×2.5×0.9cmである。内訳は短冊形5.5×2.7×1.1cm、台形4.6×2.4×0.9cm、尖形5.0×2.7×1.1cm、T字形4.0×3.4×0.9cm、斧形4.6×2.9×0.9cm、で各分類の長さと厚さには大差なく、幅はT字形のみ若干広い。石材は頁岩、メノウ、玄武岩、安山岩が用いられる。頁岩27点と85%を占め、メノウ3点と続く。分類ごとの石材差は見出せない。

遺構内・集中区ごとの分布をみると、第1遺物集中区にまとまり、遺物量の多いSX01や第4遺物集中区では少ない。集中区の違いによる形態の極端な違いは見出せないが、第4遺物集中区・第5遺物集中区では尖形とT字形がない。

アスファルトが付着するものが3点ある。内訳は台形2点、短冊形1点である。いずれも上半部に付着しており、柄に取り付けられていたことをうかがわせる。

(8) スクレイパー（刃部形成のある剥片）（図III -4-2-12-162～171）

刃器のうち、長さ2cm以上で剥離調整による明瞭な刃部を形成する資料（剥片加工）とした。このうち、つまみ部を有する石器は石匙として区別した。SK内、SX01および各集中区から432点、5,333.3g抽出した。そのほかの遺構出土資料は割愛したため、実際の出土数はより多い。また本遺跡で特徴的な技法で作出された長さ2cm未満のスクレイパーは小型スクレイパーとして後述する。打点を上にした際の刃部位置によって6分類した。

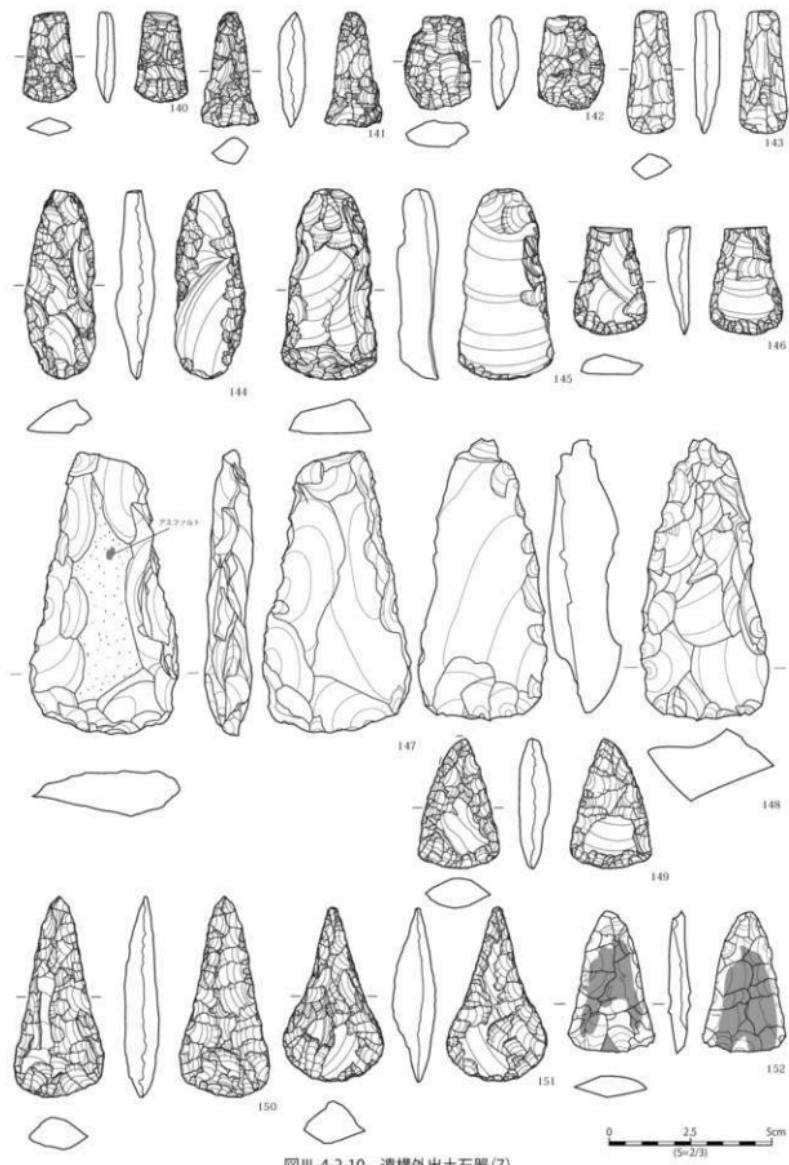
側類：側縁の左右両方もしくは片側に刃部を形成するもの。刃部角が鋭く、削器状を呈するもの。

359点。

うち縦型剥片を素材とするもの（タテ側と表記）が327点（162～164）、横型剥片を素材とするもの（ヨコ側と表記）が32点（165・169・170）ある。縦型剥片を素材とするものがスクレイパー全体の76%を占めており、最も多い。

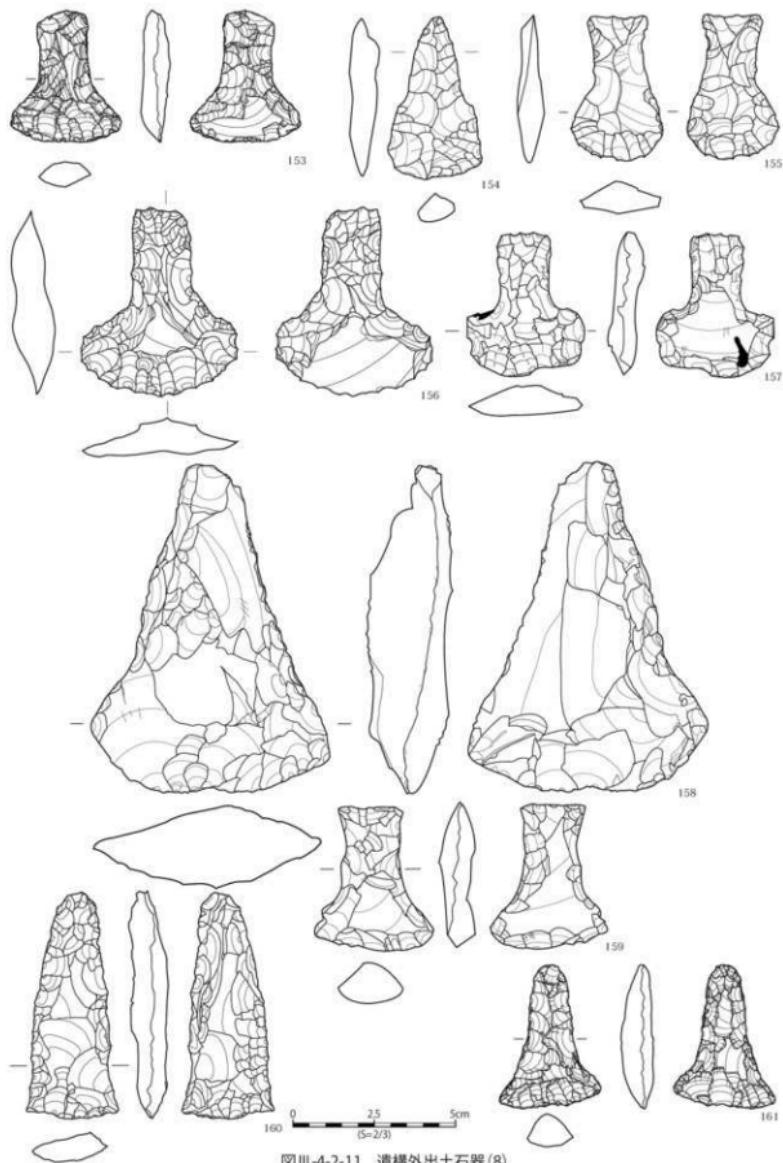
側+下類：側縁の左右両方もしくは片側、および下端部に刃部を形成するもの。11点。

うち縦型剥片を素材とするもの（タテ側+下と表記）（166）が7点、横型剥片を素材とするもの（ヨコ側+下と表記）（169・170）が4点ある。



図III-4-2-10 遺構外出土石器(7)

0 2.5 5cm
(5=2/3)



図III-4-2-11 遺構出土石器(8)

下類：刃部に刃部を形成するもの。刃部角は他に比べ鈍く、搔器状を呈する。80点。

うち縦型剥片を素材とするもの（タテ下と表記）が6点、横型剥片を素材とするもの（ヨコ下と表記）（167・168）が74点ある。

上下類：剥片の上下端部に刃部を形成するもの。3点。数は少ない。

縦型剥片を素材とするもの（タテ上下と表記）が1点、横型剥片を素材とするもの（ヨコ上下と表記）が2点ある。そのほか、横型剥片側縁と上下辺部に刃部を形成するもの（ヨコ側+上下と表記）（171）が2点ある。

刃部数は一ないし二辺のものが多い。ノッチは5点に見られた。分類別ではタテ側2点、ヨコ側1点、ヨコ下2点にあり、数が少ない横型剥片のスクレイパーに多い。重さ平均はタテ側15.8g、ヨコ側16.3g、タテ側+下35.9g、ヨコ側+下18.2g、タテ下29.8g、ヨコ下16.0gであり、剥片の形態では縦型剥片、下端部に刃部を形成するものに大型の剥片が用いられている。計測を行った土坑内94点についてみると、縦長剥片を用いたスクレイパーは、長さ平均3.2cm、幅平均1.0cm、厚さ平均1.2cm、横長剥片を用いたスクレイパーは、長さ平均1.1cm、幅平均4.0cm、厚さ平均1.4cmである。石材別では94点中、頁岩86点、メノウ5点、黒曜石2点、安山岩1点である。分類別の石材差はほとんどない。

アスファルトが付着するものが94点中5点（5%）で確認できた。基部あるいは側面に付着しており柄の存在が考えられる。また1点には全面付着しておりアスファルト塊が検出されていることから、アスファルト加工時の箇として用いられた可能性がある。

なお、土坑内からは94点出土しているが、ほとんどが覆土内検出で、副葬品としての出土状況は見出せない。

（9）打製石斧（図III-4-2-12-172）

大型の鎹形石器で、2点出土した。172は長さ13.7cmであり、石鎹の平均長さ約5cmより際立つて大きい。細身であり、刃部の使用痕は微弱で、関東・中部地方の打製石斧とは用途が異なるとみられる。

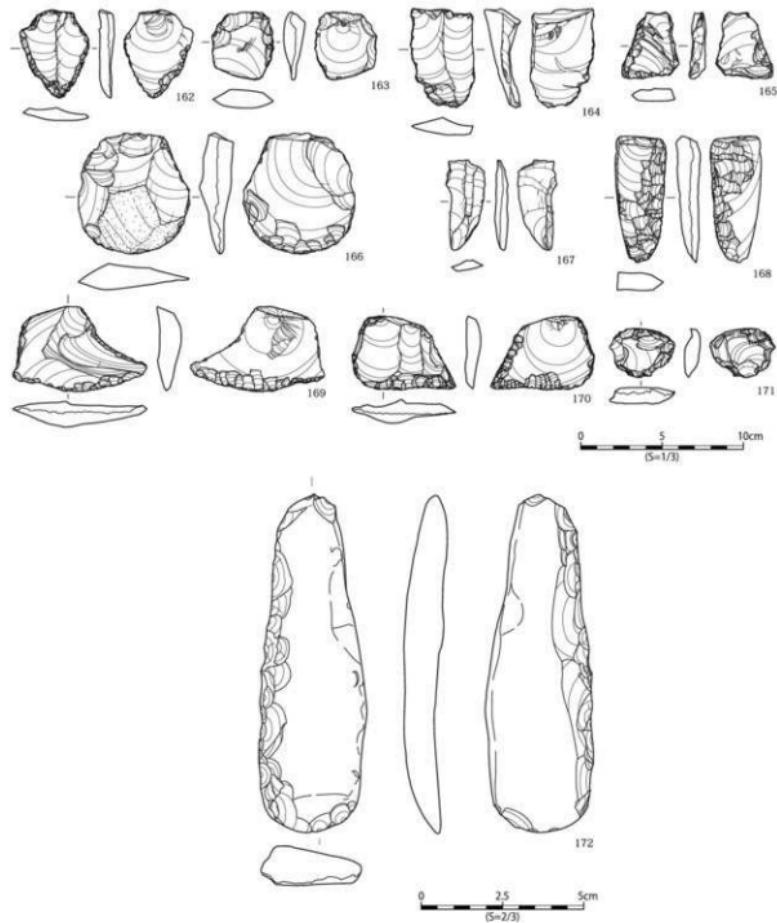
（10）微細剥離のある剥片（RF）

不定形剥片に微細な剥離痕を有する資料を一括した。剥片を加工せずその周辺を適宜使用し、刃こぼれや磨痕を有する。いわゆるU.F.、使用痕ある剥片（剥片無加工）である。16,116点、171,555gを検出した。うち集中区検出の985点についてスクレイパーと同じく6つに分類した。

側類：781点。縦型剥片を素材とするもの（タテ側と表記）が681点、横型剥片を素材とするもの（ヨコ側と表記）が100点ある。縦型剥片を素材とするものが微細剥離のある剥片全体の69%を占めており、最も多い。

側+下類：41点。うち縦型剥片を素材とするもの（タテ側+下と表記）が20点、横型剥片を素材とするもの（ヨコ側+下と表記）が21点ある。

下類：163点。うち縦型剥片を素材とするもの（タテ下と表記）が6点、横型剥片を素材とするもの（ヨコ下と表記）が157点ある。



図III-4-2-12 遺構外出土石器(9)

上下類は認められない。

刃部数は一辺のみが多い。ノッチは5点に見られた。分類別ではタテ側2点、ヨコ側3点にあり、数の少ない横型剥片のスクレイパーに多い。くさび形石器に該当するものが6点含まれる。

アスファルト付着がタテ側に1点ある。刃縁を対反側の側面に付着しており柄が取り付けられたとみられる。

土坑内あるいは集中区検出の掲載資料121点の大きさと石材を検討した。重さ平均はタテ側9.1g、

ヨコ側 6.2g、タテ側十下 3.6g、ヨコ側十下 10.4g、タテ下 6.8g、ヨコ下 14.8g であり、スクレイパーより一回り小さく、剥片の形態では横型剥片を用いたものに大型の剥片が用いられる。また、スクレイパーと同じく下辺に刃部を形成するものに大型の剥片が用いられる。縦長剥片のものは、長さ平均 3.2cm、幅平均 2.5cm、厚さ平均 0.8cm、横長剥片のものは、長さ平均 2.8cm、幅平均 3.3cm、厚さ平均 1.0cm である。スクレイパーに比べて縦長剥片の長さと横長剥片の幅が近似しており、もとの石核の大きさが同じであることがうかがえる。また、縦長・横長剥片いずれも方形に近い不定形であることが分かる。

石材別では 121 点中、頁岩 85 点、メノウ 27 点、黒曜石 7 点、チャート 1 点、凝灰岩 1 点である。チャートは赤チャートである。スクレイパーと比較して、メノウが多い点は、次で述べる小型スクレイパーのほとんどにメノウが用いられていることと関係する。分類別の石材差がほとんどない。

土坑内からは 97 点出土しているが、ほとんどが覆土内検出で、副葬品としての出土状況は見出せない。

(11) 小型スクレイパー (表III-4-2-7)

主にメノウ製の小形・細長の小石刃状の剥片を用いた微細な剥離痕を有する資料を一括した。目安として長さ 2cm 未満、重さ 1g のものを対象とした。3,251 点検出した。その量は北東北で最多である。集中区におけるスクレイパー・微細剥離のある剥片を合わせた刃器類 3,062 点中 420 点、13% をしめる。小型石錐同様バイボーラーテクニックで作出される。形態によって 4 分類した。

短冊形：細長の小石刃状を呈するもののうち長方形を呈するもので、356 点。

三角形：細長の小石刃状を呈するもののうち、下端部が尖る細長い三角形を呈するもので、側縁に剥離調整による明瞭な刃部を形成している資料。401 点。

円形：小形・細長の小石刃状の剥片の周縁に剥離調整による明瞭な刃部が巡り、円形・梢円形を呈する資料。40 点。

不定形：上記の 2 分類に属しない形態の資料。2,454 点。

不定形が最も多く、小型スクレイパー全体の 75% を占める。

石材はメノウが 90% を占め主体的である。遺構別・集中区別にみると、第 4 遺物集中区で短冊形、第 1 遺物集中区で三角形が多い。一方 SX01 を含めたほかの集中区ではかなり少なく、遺跡内での差が明瞭である。

表III-4-2-7 小型スクレイパーの地区別・類型別出土数表

SK 内	SX01	第 1 週邊 集中区	第 2 西邊 物集中区	第 2 東邊 物集中区	第 3 西邊 物集中区	第 3 東邊 物集中区	第 4 遺物 物集中区	第 5 遺物 物集中区	第 6 西邊 物集中区	第 6 東邊 物集中区	集中区外	計	
短冊形	3	5	27	4	2	1	3	46	3	0	0	262	356
三角形	0	8	55	2	2	1	1	3	0	0	0	329	401
円形	0	1	11	0	0	0	1	1	1	0	0	25	40
不定形	1	21	76	36	14	5	0	79	7	1	3	2,211	2,454
計	4	35	169	42	18	7	5	129	11	1	3	2,827	3,251

(12) 磨石・敲石類 (表III-4-2-8、図III-4-2-13-173～図III-4-2-16-198)

採集砾をそのまま使用した資料で、磨耗痕、敲打痕といった使用痕が観察される。7,761 点、1,277kg 検出された。砾石器のなかでは最も数が多く、搬入砾を除くと総重量が最もある。このうち、7,733 点について使用痕の観察位置とその種類によって 7 つに大分類した。

表III-4-2-8 磨石・敲石の地区別・類型別出土数表

	SK内	SX01	第1遺物 集中区	第2西道 物集中区	第2東道 物集中区	第3西道 物集中区	第3東道 物集中区	第4遺物 集中区	第5遺物 集中区	第6西道 物集中区	第6東道 物集中区	集中区外
磨類	2	16	6	1	10	1		6	2			198
凹類	2	30	47	3	16	3	1	21	17	1	1	399
敲類	13	65			14	26				8	3	1138
敲板	27		211	12	170		3	98	42	51	26	3674
敲球			37	5	5			3	7	1	1	174
敲棒	3		15	1	13			14	2	5	3	201
磨+敲	3	2										
凹+敲	5	29	59	3		5	1	36	22		3	599
凹+敲+磨			13	4		1		5	7		1	81

磨類：表面もしくは裏面に磨耗痕があるもの。狭義の磨石。242点。(173～175・179)

凹類：表面もしくは裏面に集中的な敲打による凹痕があるもの。狭義の凹石。541点。(176～178)

敲類：側面もしくは端部に敲打面があるもの。狭義の敲石。6,071点。(180～188)

敲類は礫形状と敲打痕の位置に関連が認められたため、礫形状を加えて細分した。

敲類：楕円礫の上下側面に敲打痕があるもの。いわゆる一般的な敲石。1,267点。

敲板類：平面楕円形、扁平板状礫の上下に敲打痕があるもの。4,314点。(180～185)

敲棒類：細長い棒状礫の上下側面に敲打痕があるもの。257点。(186)

敲球類：球状礫の側面に敲打痕があるもの。233点。このうち、側面に複数の敲打面が重なり合うように巡る凸多面体敲石が9点ある。(187・188)

磨+磨類：表面もしくは裏面および側面に磨耗面があるもの。0点。

磨+敲類：表面もしくは裏面に磨耗面、さらに側面もしくは上下面に敲打面があるもの。5点。

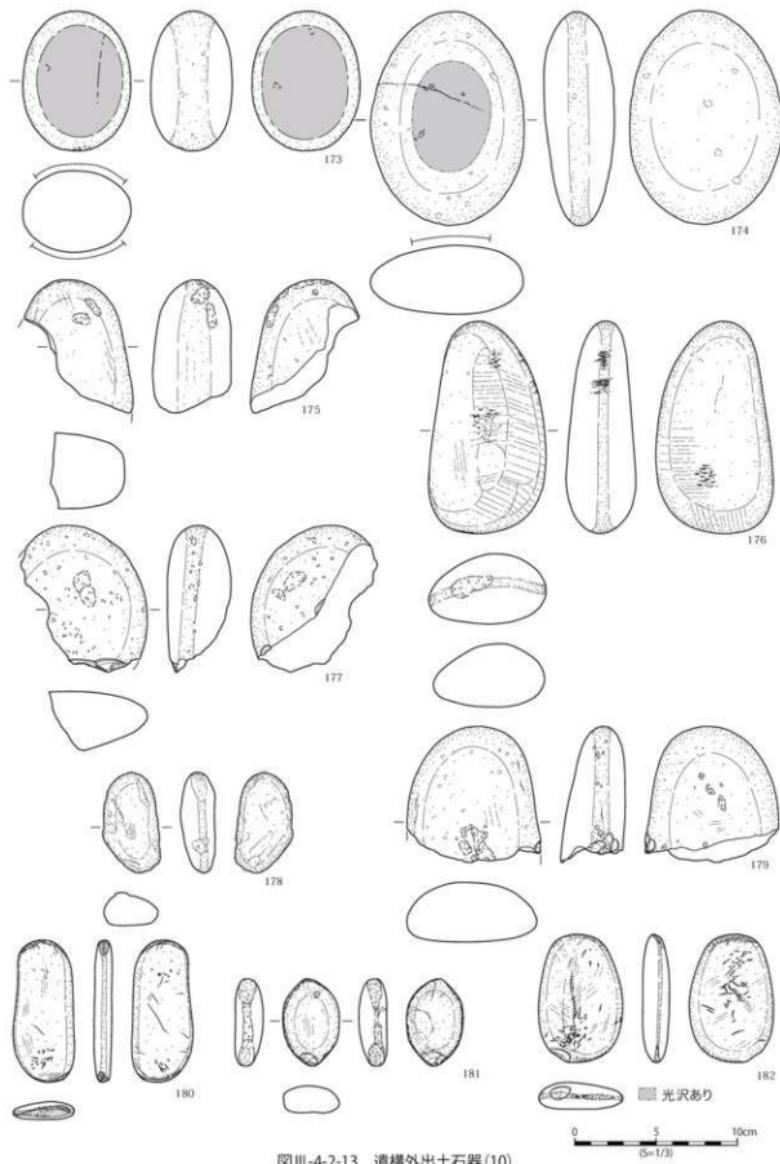
凹+敲類：表面もしくは裏面に凹痕、さらに側面もしくは上下面に敲打面があるもの。762点。(190・192・197)

凹+敲+磨類：表面もしくは裏面に凹痕と磨耗痕、さらに側面もしくは上下面に敲打面があるもの。112点。(191・193～196・198)

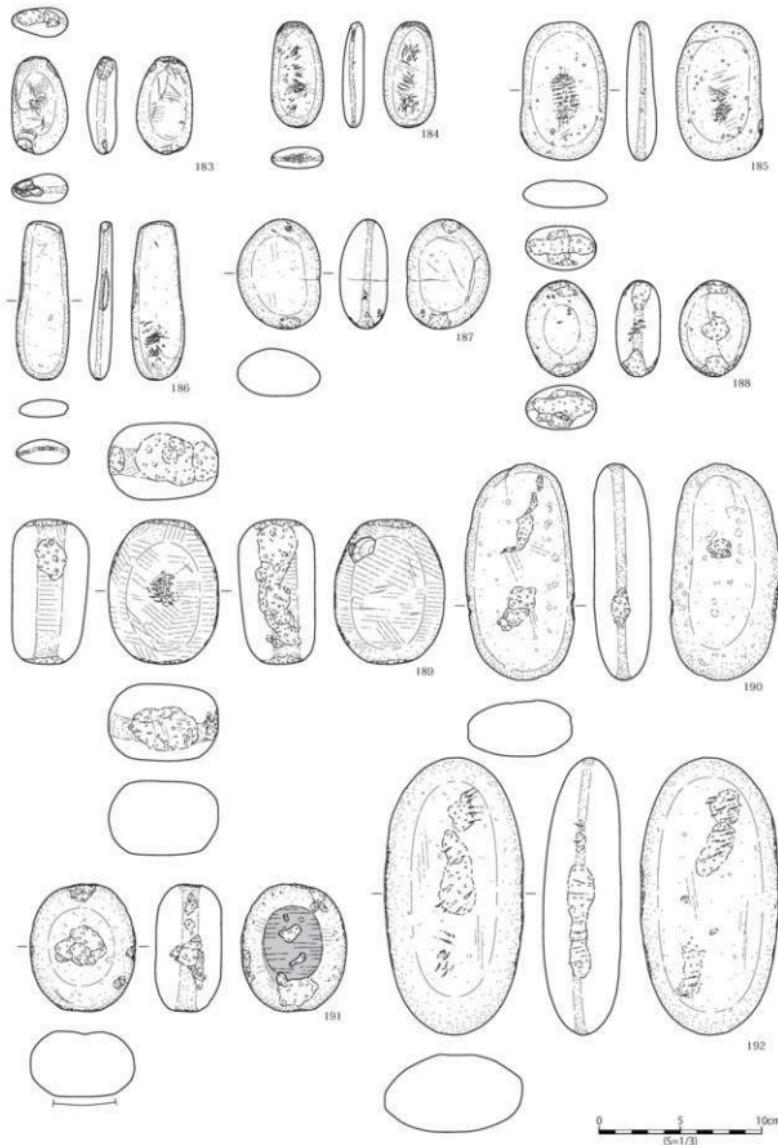
分類別では、敲類が全体の78%と主体的である。敲類を含む側面に敲打痕を伴う類型は6,950点で磨石・敲石類全体の90%を超える。一方、磨類や磨+敲類といった磨耗痕のある類型は359点で全体の5%に満たない。磨+磨類がない点も注目される。主体を占める敲類のなかでは敲板類が特に多い。この種の敲石は、玉造りに伴う小型石錐作成のための小型剥片を作る際に用いられる場合が多い。

1つの石器に複数の使用痕を伴うものは、879点で全体の11%に過ぎず、ほとんどが単一の使用痕で構成されることが分かる。

大きさと石材について、実測を行った126点について検討した。大きさの平均は8.4×6.1×3.6cm、352gである。分類別の大きさ平均は磨類9.1×7.5×5.3cm、497g、凹類9.0×6.6×3.6cm、359g、敲類6.6×4.6×2.4cm、113g、磨+敲類8.5×7.5×4.9cm、529g、凹+敲類10.8×7.6×4.5cm、562g、凹+敲+磨類11.5×8.2×5.6cm、796gである。凹+敲+磨類が大きく、敲類が極端に小さい。敲類をさらに細分類別にみると、敲類6.1×4.9×3.7cm、132g、敲板類6.8



図III-4-2-13 遺構出土石器(10)



図III-4-2-14 遺構出土石器(11)

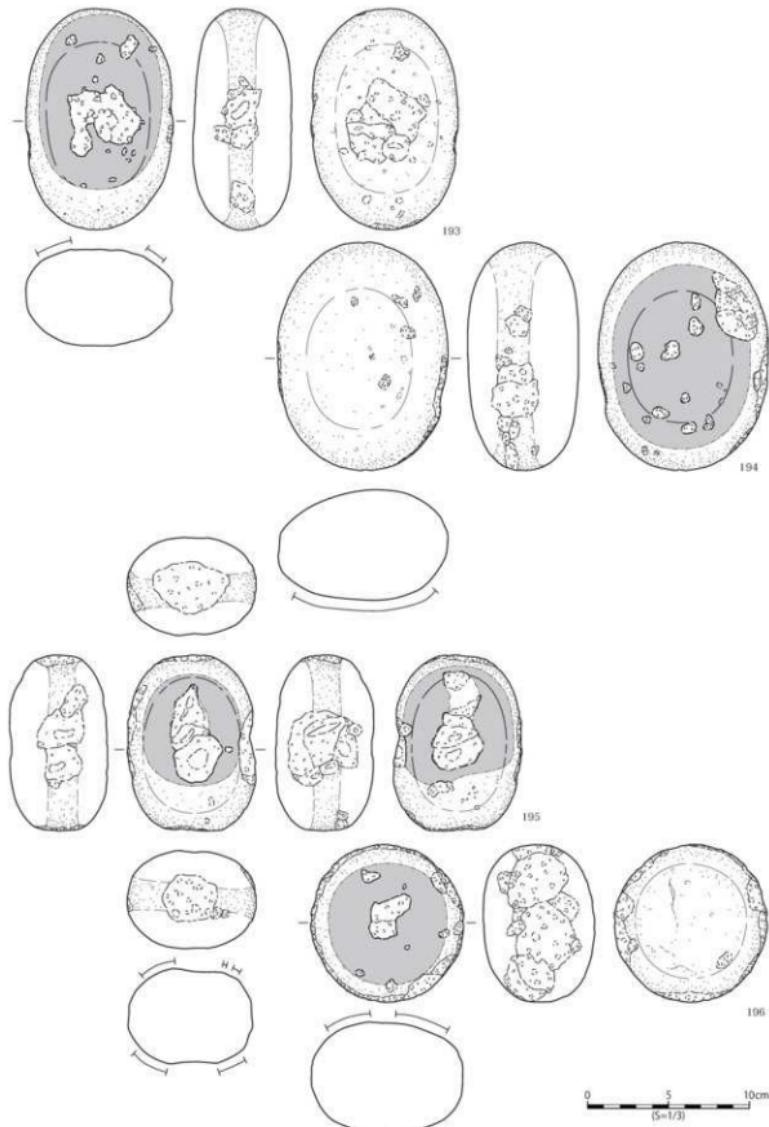
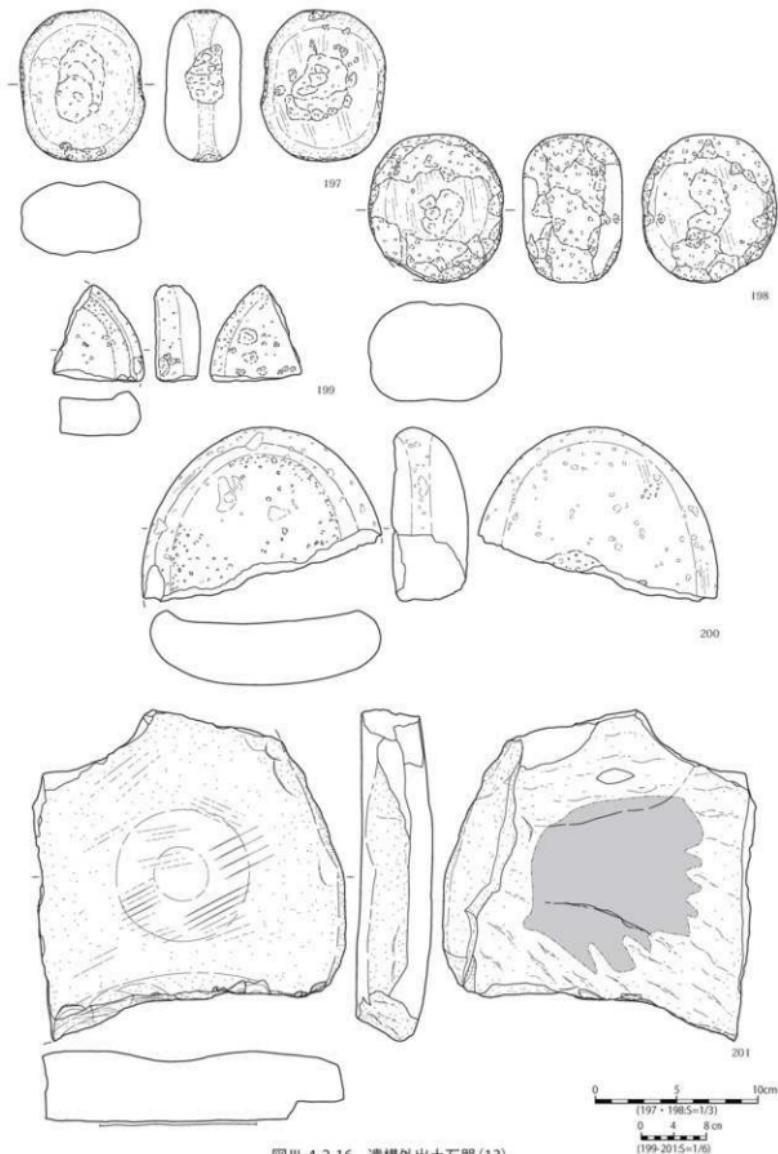


圖 III-4-2-15 遺構外出土石器 (12)



図III-4-2-16 遺構出土土石器(13)

× 4.6 × 1.9cm、95g、敲球類 6.3 × 4.7 × 2.8cm、120g、敲棒類 7.0 × 3.3 × 1.4cm、49g であり、敲類が他に比べて小さいのは、各形態を特徴づける幅と厚さが小さいことに起因していることが分かる。

石材は、砂岩、頁岩、安山岩、凝灰岩、ドレライト、粘板岩、花崗閃綠岩、ひん岩、メノウ、礫岩と 10 種類に及ぶ。分類別にみると、磨耗痕・凹痕を伴う類型には安山岩が 7 割以上占めるのに対し、敲類は安山岩・頁岩・花崗閃綠岩が各 3 割程度の割合を占める。メノウ・ドレライトは敲打痕を伴う類型にある。

遺構別の割合をみると、敲球類が第 1 遺物集中区、第 2 東遺物集中区、第 4 遺物集中区、第 6 西・東遺物集中区で平均より高く、土坑内、SX01、第 2 西遺物集中区、第 3 西・東遺物集中区、第 5 遺物集中区では低い。磨耗痕を伴う類型は第 1 遺物集中区、第 2 西遺物集中区で高い。

付着物には赤色顔料とアスファルトが確認できた。赤色顔料は 60 点あった。磨類 23 点、凹+磨 17 点、凹類 8 点と多く、磨石・敲石類で多数を占める敲打痕を作った類型には少なく、磨耗痕を伴う類型が多い。特に磨類の割合が高く、赤色顔料精製用に用いられたことが分かる。アスファルトは 6 点に付着し、凹類 2 点、敲類 4 点に見られる。なかでも敲類 1 点には下面に付着しており、塊を粉碎するような行為があったと推定される。

(13) 石皿・台石類（表III-4-2-9、図III-4-2-16-199～図III-4-2-18-206）

使用痕跡で判断される石器のうち大形かつ片手での持ち上げが困難な資料で、対象物を加工するために、据え置かれる下石。589 点、610kg 出土した。使用前無加工のいわゆる台石と、外形と凹部を作り出した石皿がある。上條（2015）における分類では台石は I 平 b 類（台石と表記）もしくは I 平敲類（台石敲と表記）に該当する。石皿の多くは II B 類に該当する。石皿 II B 類は全面が連続敲打により整形されるので凹部には明瞭な縁部を作り出す。I 平 b 類は使用面の断面が平坦で表面の広い範囲に磨耗痕が認められる。I 平敲類は石器製作用といった硬物質を敲いた際にできる敲打痕の集中を残す。

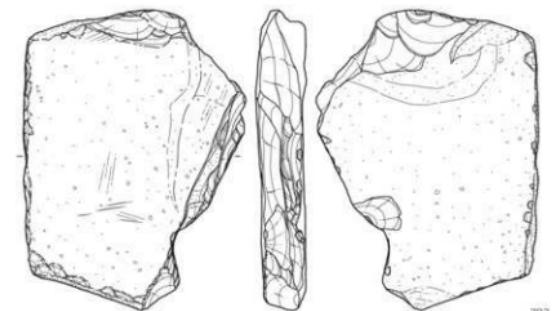
石皿は 59 点（199～201）、台石 I 平 b 類は 447 点（202～205）、台石 I 平敲（台石敲）（206）は 83 点検出された。いずれも破損品が多く完形は少ない。石皿には有脚が 2 点ある。有脚石皿は後期に多く、晩期には少ない。いずれも SX01 出土であることをふまえると他の遺跡からの搬入品の可能性がある。

大きさは SX01 の台石 I 平 b 類が 69kg と最大である。他にも SX01 では 10kg 以上の台石が 2 点ある。これらは完形に近く、大きさや残存状況を含めて特異である。石材は台石が板状節理のある安山岩であるのに対し、石皿は多孔質の安山岩が用いられている。

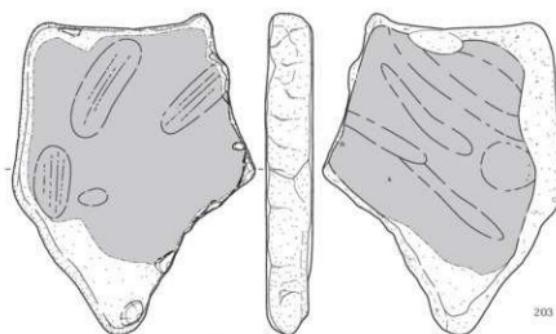
付着物には赤色顔料がある。内訳は石皿 2 点、台石 13 点で台石の多くは磨耗痕が発達する。出土地点は第 1 遺物集中区 1 点、第 4 遺物集中区 2 点である。

表III-4-2-9 石皿・台石類の地区別出土数表

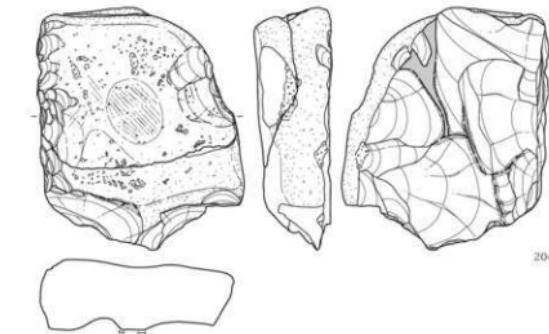
	SK 内	SX01	第 1 遺物 集中区	第 2 西遺 物集中区	第 2 東遺 物集中区	第 3 西遺 物集中区	第 3 東遺 物集中区	第 4 遺物 集中区	第 5 遺物 集中区	第 6 西遺 物集中区	第 6 東遺 物集中区	集中区外	計	
石皿	1	9	2		1			2					43	58
台石 I 平 b	3	5	34	4	18	2		11	2	1	2	366	448	
台石 台石敲		9	6	1		1		6				60	83	



202



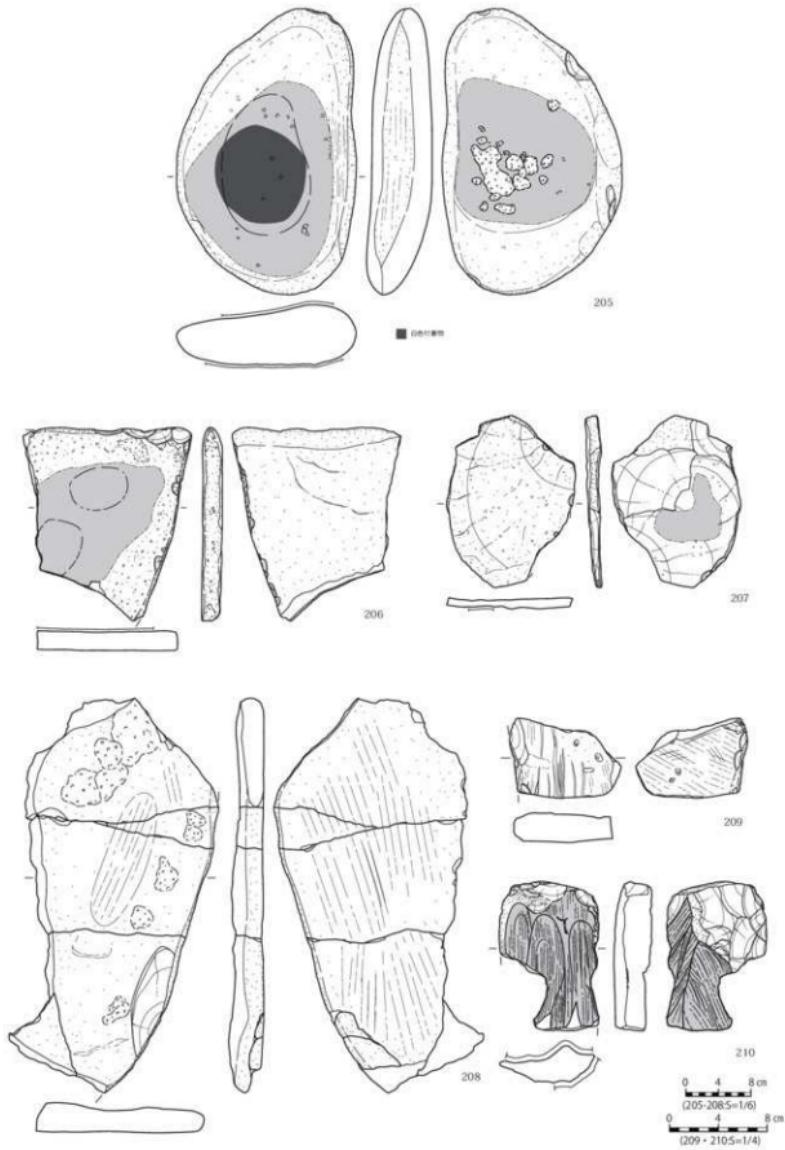
203



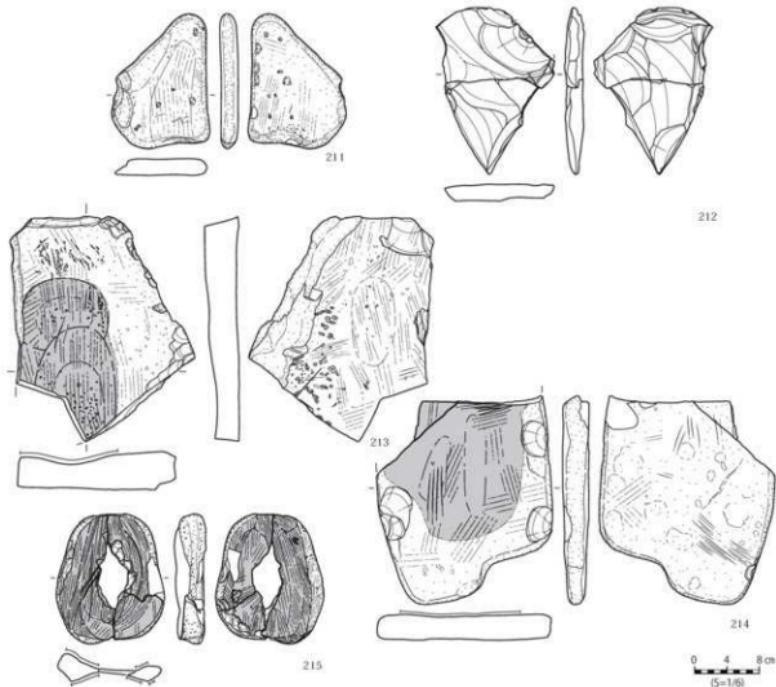
204

0 4 8 cm
(S=1/6)

図III-4-2-17 遺構外出土石器(14)



図III-4-2-18 遺構外出土石器(15)



図III-4-2-19 遺構外出土石器(16)

(14) 砥石 (表III-4-2-10、図III-4-2-18-207～図III-4-2-20-221)

細粒の石材を利用した、帯状の底面をもつ資料。740点、67,518g出土した。すべて置き砥石で、砥面幅が広い砥石と、砥面幅が1cm以下と狭い玉砥石（玉砥）がある。砥石は663点（208～216）、玉砥石57点（217～221）出土した。重さ平均は砥石397gで最大は6kgである。砥石の研面幅は5cm前後と磨製石斧の刃部幅に合致するものと10cm以上と幅広いものがあり、石刀などの石製品の作成に用いられたとみられる。玉砥石は平均119g、最大531gである。ほとんどは小片となっている。石材は安山岩、砂岩と凝灰岩があり、なかでも玉砥石には粗さのより細かい凝灰岩が用いられる。

遺構・集中区ごとにみると砥石が出土する集中区では玉砥石も検出されており、相関性がうかがえる。SX01、第1遺物集中区、第5遺物集中区に多い。一方石器の出土量が比較的多い第4遺物集中

表III-4-2-10 砥石の地区別出土数表

個数	SK内	SX01	第1遺物 集中区	第2西道 物集中区	第2東道 物集中区	第3西道 物集中区	第3東道 物集中区	第4遺物 物集中区	第5遺物 物集中区	第6西道 集中区	第6東道 物集中区	集中区外	計
砥石	7	11	9	7	2	1	1	1	1	7	3	632	680
玉砥石	2	10	9	1	1	2		1	1	2		32	60

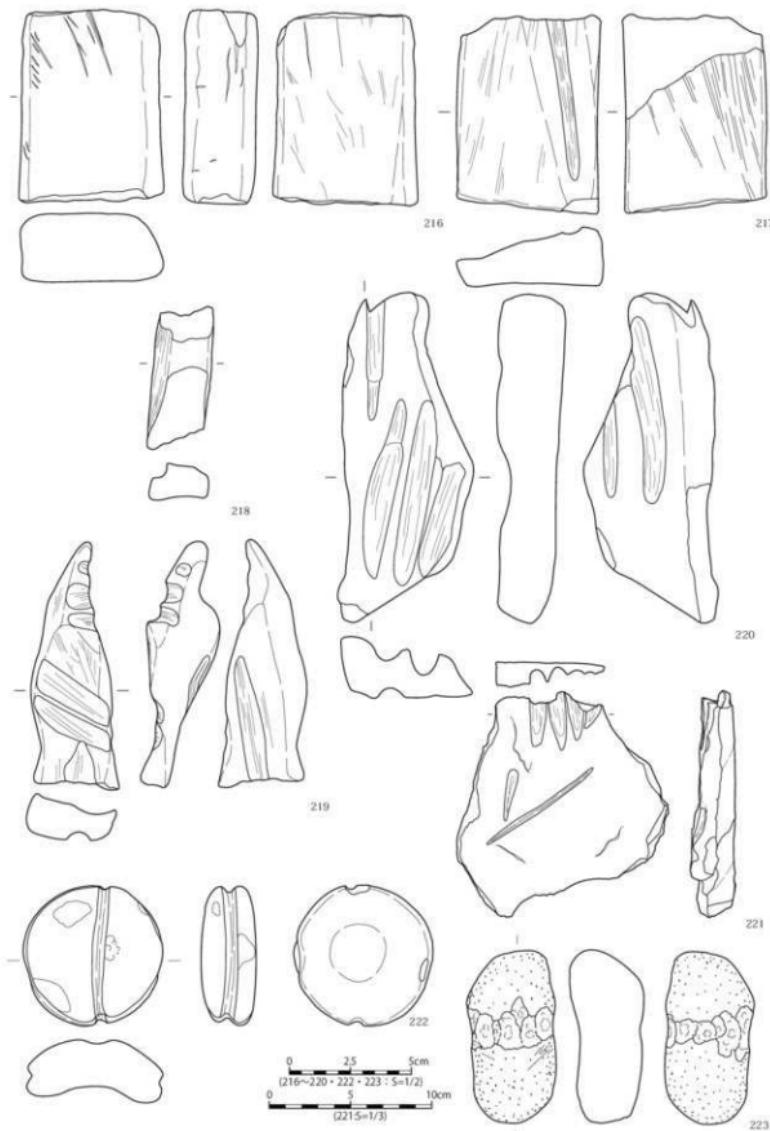


圖 III-4-3-20 遺構外出土石器(17)

区では数が少ない。

(15) 石錘（図III-4-2-20-222・223）

紐掛けの部位があり、錘としての機能が想定される資料。2点出土した。石材は安山岩である。全て敲打によって抉り部を形成した礫石錘である。大きさ平均 $13 \times 7.5 \times 5.0\text{cm}$ 、重さ 800g で比較的重い。

(16) 磨製石斧（図III-4-2-21-224～図III-4-2-22-261）

全面もしくは一部を研磨加工によって刃部が形成された資料。188点、11,054g 出土した。すべて定角式で、連続敲打・あるいは研磨によって、全体形を整えられる。完形は少なく、頭部もしくは刃部片が多い。また製作途中での廃棄品とみられる擦切痕が残る資料（245・246・261）が約一割ある。後述する擦切具も多数検出されていることから、本遺跡での磨製石斧製作が推定できる。

大きさは、大型品と小型品に分別できる。大型品は長さ最大 12cm、幅 8cm、重さ 300g である。小型品（224～227）は長さ 3cm、幅 1.5cm、重さ 5.6g とその差が明確である。小型品は破損品が少なく非実用品の可能性もある。

石材は、緑色岩、玄武岩、緑色片岩、青色凝灰岩があり、緑色岩が全体の 70% ほどを占める。特に緑色岩はアオトラ石と呼ばれ北海道産の可能性が高い。擦切痕が残るものは緑色岩と緑色片岩に限られ、石材によってその製作地が異なる可能性がある。

(17) 擦切具（図III-4-2-23-262～268）

擦切技法に用いられる板状の石器で縁辺に研磨痕を残す。57点、3,716g 出土した。石材は薄い板状節理のある硬質な安山岩が用いられている。ほとんどが破損しており、完形が復元可能なものから推定するとおおよそ長さ 13cm、厚さ 1cm、重さ 200～300g となる。遺物集中区別では第1遺物集中区、第2東遺物集中区、第5遺物集中区、第6東遺物集中区で検出されており、SX01などの遺構内にはみられない。

(18) 扁平石器

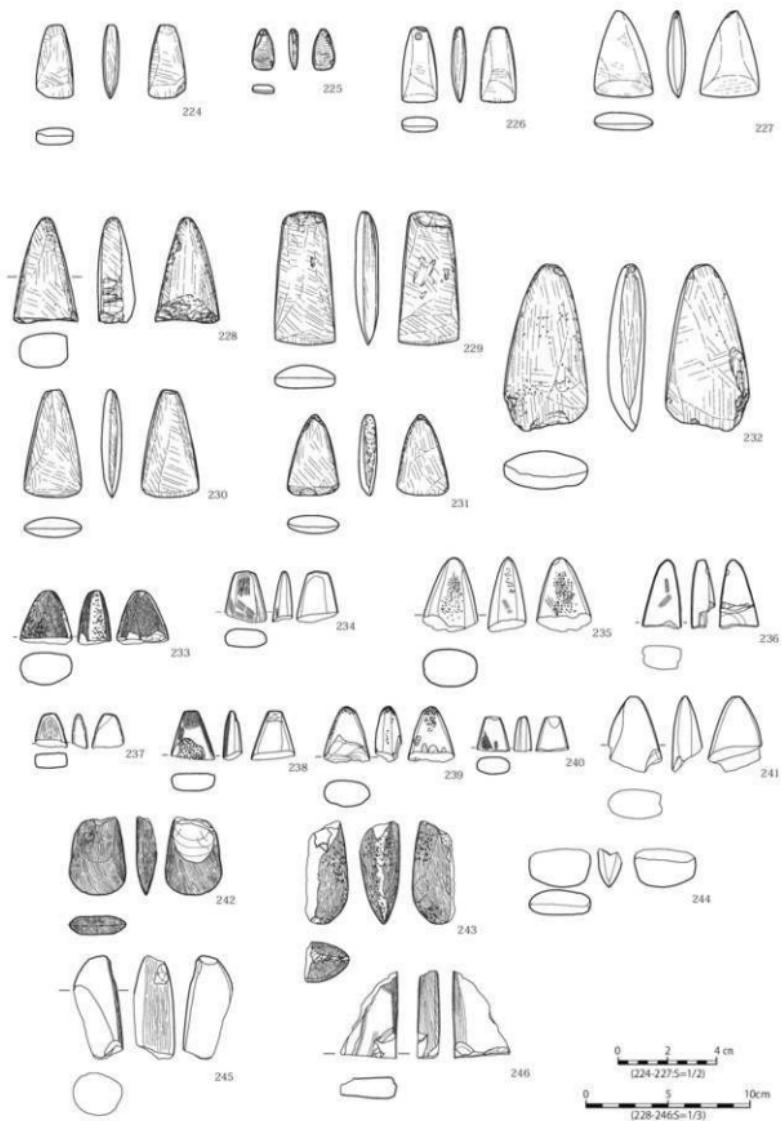
扁平な板状素材の周り剥離あるいは全面研磨し、その縁辺を使う石器で縄文時代前期中葉～中期前半の円筒土器文化期に盛行する。4点、1,410g ある。うち 1点が第1遺物集中区出土である。板状節理のある安山岩が用いられている。本調査では、遺構は検出されていないが、円筒土器の破片が複数検出されていることから、周辺の遺跡からの搬入品と推定される。

(19) 石核（表III-4-2-11・12）

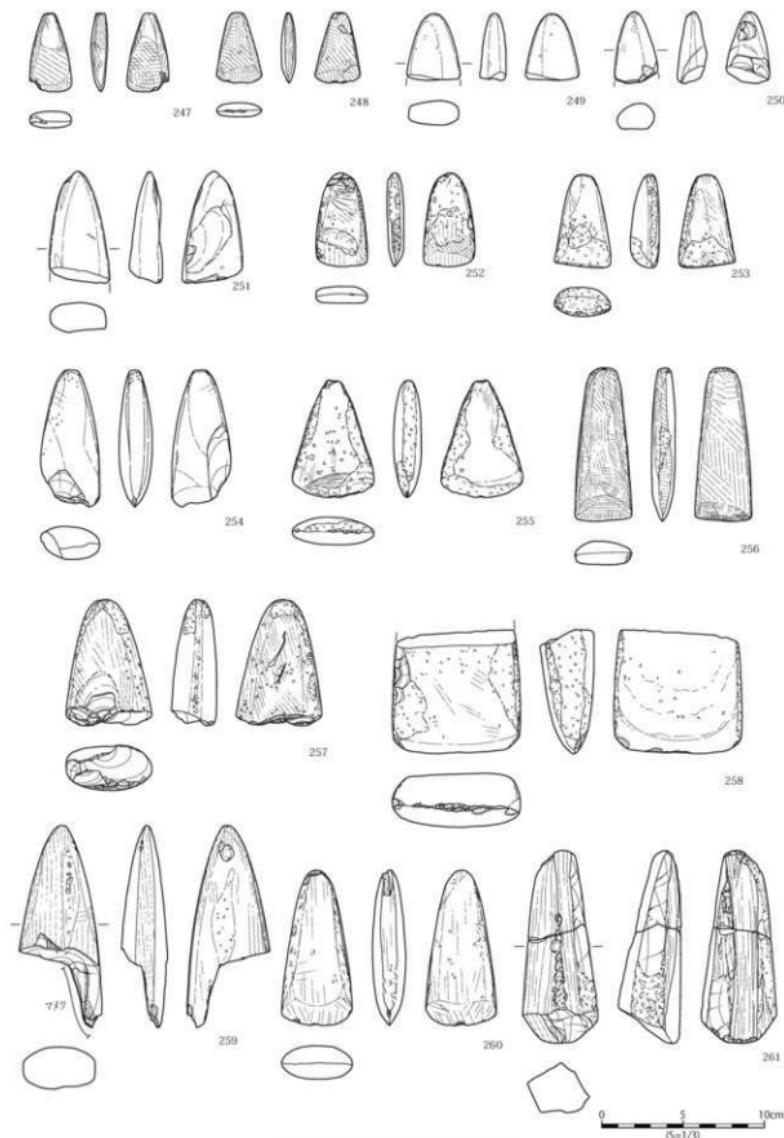
石核は、一度以上剥離作業が行われた資料である。そのほか、両極剥離痕を有するメノウの石核も 24点出土した。なお、原石は、自然面・風化面に覆われ剥片を取った痕跡が見られない資料である。磨石・敲石類と同じ素材があるため、「搬入礫」として後述する。

2,044点、92.597kg 検出した。重さの平均は 44.0g である。

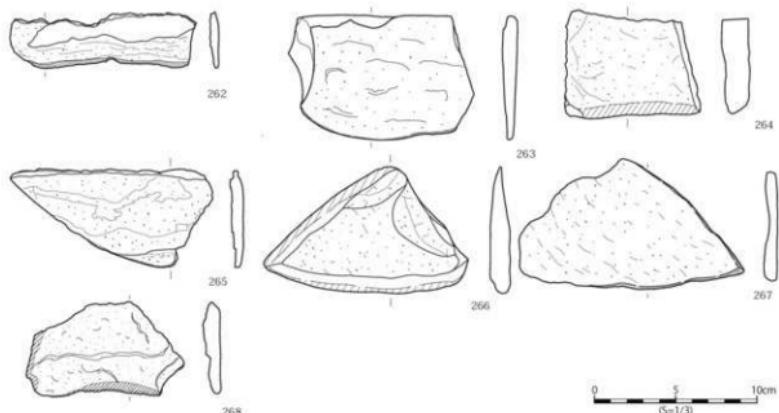
属性の検討は、上記のうち遺構内および遺物集中区抽出グリッドの 162点の資料を対象とした。



図III-4-2-21 遺構外出土石器(18)



図III-4-2-22 遺構出土石器(19)



図III-4-2-23 遺構外出土石器(20)

表III-4-2-11 石核の集中区別の石材別・分類別出土数表

地区	層位	分析数	石材			分類			
			頁岩	メノウ	黒曜石	上	上下	上下横	円盤
第1遺物集中区		25	17	8	0	6	8	11	
第2西遺物集中区		7	6	1	0	1	3	3	
第2東遺物集中区		20	10	10	0	3	6	8	3
第3西遺物集中区		9	6	3	0	0	7	2	
第3東遺物集中区		6	4	2		2	2	2	
第4遺物集中区		69	55	9	5	23	28	14	4
第5遺物集中区		3	2	1	0	1	2		
第6西遺物集中区		7	6	1		1	5	1	
第6東遺物集中区	II d	2	2				1	1	
	II f	9	8	1		3	6		
	II g	1			1		1	1	
5グリッド		3	3			1	1	1	

表III-4-2-12 石核の石材ごとの分類別出土数表

石材	分析数	分類					大きさ平均			
		上	上下	上下横	円盤	原礫面有	長さ	幅	厚さ	重さ(g)
頁岩	119	33	47	34	5	50	4.6	5.1	2.8	85.8
メノウ	36	7	19	8	2	8	3.3	3.4	2.1	33.7
黒曜石	6	1	3	2	0	5	2.2	2.7	2.1	17.9

a 分類

剥離の方法で4分類した。

上：打面を1箇所に設定し、ほぼ垂直に近い打角で、同一方向の打撃を加えて剥片を連続的に剥離したもの。41点。

上下：相対する上下両端に打面が設けられ、両設打面から交差するように剥片が剥離されたもの。69点。

上下横：打面が先の剥離作業の打撃方向に対して、ほぼ直交する位置にあるもの。45点。

円盤：原礫の片面に周縁から、求心的に剥片を剥離したもの。残核がおおむね円盤状を呈するもの。7点。

石材別にみると、頁岩・メノウ・黒曜石いずれも上下、上下横、上、円盤の順で多い。

b. 石材・大きさ

石材別では、珪質頁岩 119 点、メノウ 36 点、黒曜石 6 点である。大きさの平均は珪質頁岩 $4.6 \times 5.1 \times 2.8\text{cm}$ 、 85.8g 、メノウ $3.3 \times 3.4 \times 2.1\text{cm}$ 、 33.7g 、黒曜石 $2.2 \times 2.7 \times 2.1\text{cm}$ 、 17.9g である。珪質頁岩が長さ・幅に対し薄いのに対し、黒曜石が直方体・球形に近い。また重さは珪質頁岩に対し、メノウが半分以下、黒曜石が四分の一以下と小さい。

c. 集中区別検討

遺物集中区別に検討すると、まず石材についてメノウの割合が 30% 以上なのは、第 1 遺物集中区、第 2 西遺物集中区、第 2 東遺物集中区、第 3 東遺物集中区、第 5 遺物集中区である。黒曜石は数少ないものの第 4 遺物集中区、第 6 東遺物集中区 II g 層で検出される。

次に分類別にみると、上下横の石核が 30% 以上なのは第 1 遺物集中区、第 2 西遺物集中区、第 2 東遺物集中区である。数が少ない円盤形の石核は第 2 東遺物集中区、第 4 遺物集中区にある。

(20) 剥片・碎片（表IV -4-2-13・14）

剥離作業において、加工のされる属性をもった資料を剥片とし、その際産出された石器製作には適さない資料を碎片とした。

抽出したグリッド内のみで 59,720 点 (233.7kg) あり、本調査全体で 10 万点を超えると推定される。剥離作業において加工のされる属性を持ったものを剥片とし、その際産出された石器製作に適さない資料を碎片とした。

そのほか、メノウを主として小形・細長で小石刃状を呈するものが 664 点ある。

縦長剥片：幅に齊一性を持ち、目的的に剥離された縦長剥片もしくは、剥片の両側縁は並行でなく、不定形なもの。偶発的な剥離も含む。計 2,761 点 (15,922g)。うち頁岩 1,427 点 (10,286g)、メノウ 838 点 (4,512g)、黒曜石 496 点 (1,125g)。

横長剥片：翼状剥片など横長であり、不定形なもの。計 2,971 点 (16,539g)、うち頁岩 1,570 点 (9,663g)、メノウ 903 点 (4,976g)、黒曜石 498 点 (1,900g)。

碎片は、54,029 点 (191.9kg) ある。うち頁岩 26,318 点 (73,289g)、メノウ 20,288 点 (59,103g)、黒曜石 7,401 点 (14,825g)、赤チャート 3 点 (16.5g)、石英（水晶）19 点 (36g) である。

(21) 搬入礫（原石）（表III -4-2-1、図III -4-2-12）

調査区内の基盤は砂層であり、礫の混入はほとんどない。また包含層は、3m 以上の砂層に覆われているため、包含層形成後の礫の混入も考えられない。したがって本調査における礫のほとんどが搬入礫である。調査ではフリイがけを行いほとんどの礫を回収した。その結果、計 6,663.564kg の礫を回収した。なお、SX01 周辺でみられた重さ 10kg 以上の大型礫はここには含まれていない。

a. 分類

礫のほとんどは硬質頁岩の円礫・楕円礫・扁平礫である。礫の大きさによって二区分した。

礫大：磨石・敲石類と同じ大きさで、磨石・敲石類として、あるいは石器製作用の原石としての採集が推定されるもの。目安として最大径 3cm 以上のものを対象とした。

表III-4-2-13 剥片・碎片の出土数表(1)

遺構名	層位	石質	剥長		幅長		特片		計	
			個数	重さ(g)	個数	重さ(g)	個数	重さ(g)	個数	重さ(g)
SX01	II c 層	貝岩	74	383	59	194	850	1,137	983	1,714
		黒曜石	6	21	9	26	84	135	99	182
		メノワ	34	78	25	68	933	1,723	991	1,922
		赤玉砂利					19	36	19	59
	II e 層	貝岩					1	1	1	1
		黒曜石					726	1,013	859	1,553
		メノワ	30	34	32	47	159	207	221	268
	II f 層	貝岩	13	94	21	66	355	615	389	776
		黒曜石	3	7	3	12	77	84	83	103
		メノワ	5	41	4	20	251	931	265	956
	II g 層	貝岩	2	10	1	5	19	25	22	49
		黒曜石	1	2			6	11	7	11
		メノワ	3	29	14	30			17	59
		貝岩	8	36	8	52	92	294	108	382
	その他・不明	黒曜石	4	4	5	9	38	34	47	46
		メノワ	9	9	6	12	82	601	97	621
第2遺物集中区	II a 層	貝岩	113	1,061	105	1,020	2,000	7,182	2,418	9,263
		黒曜石	11	37	10	37	53	63	26	71
		メノワ	9	39	5	16	537	2,207	541	2,735
		貝岩	72	816	62	505	927	4,538	1,061	5,859
	II b 層	黒曜石	17	56	22	86	361	640	400	782
		メノワ	4	54	7	42	343	2,504	354	2,600
		貝岩	29	217	56	338	767	2,366	852	2,921
	II c 層	黒曜石	14	40	19	53	182	322	215	415
		メノワ	9	38	4	19	260	311	273	973
		貝岩	59	312	83	432	836	3,417	986	4,160
	II d 層	黒曜石	12	33	17	36	234	308	203	376
		メノワ	3	10	6	56	637	1,499	649	1,564
		貝岩	30	157	29	147	797	2,556	856	2,860
	II e 層	黒曜石	4	10			65	119	69	128
		メノワ	4	17	5	20	356	881	365	918
		貝岩	49	276	38	374	742	2,695	829	3,344
		黒曜石	4	4	2	2	68	122	74	128
	II f 層	メノワ	3	11	4	4	147	363	152	375
		貝岩	11	46	20	91	285	725	318	661
		黒曜石	1	1			51	53	12	14
	II g 層	メノワ	2	2	2	22	29	40	33	64
		貝岩	46	347	43	210	811	2,703	900	3,260
		黒曜石	7	15			57	61	64	76
	その他・不明	メノワ	6	12	7	28	75	509	88	549
第2東遺物集中区	II a 層	貝岩	29	264	25	227	947	2,350	1,000	2,841
		黒曜石	4	19	1	2	59	99	43	109
		メノワ	10	20	1	3	340	615	251	617
		貝岩	28	334	24	324	426	1,426	478	2,085
	II b 層	黒曜石	6	19	1	1	83	331	90	351
		メノワ	1	2	6	66	102	548	109	616
		貝岩	19	218	18	73	276	1,056	313	1,347
	II c 層	黒曜石	3	4	3	6	41	74	47	84
		メノワ	2	7			42	154	44	163
		貝岩	25	380	23	195	136	2,030	586	3,901
	II d 層	黒曜石	4	26	2	5	21	335	177	263
		メノワ	2	15	1	10	91	639	94	664
		貝岩	27	233	31	269	838	3,118	896	3,620
	II e 層	黒曜石	7	19	6	16	106	153	119	187
		メノワ	2	8	2	11	109	886	113	904
		貝岩	35	338	55	443	698	2,745	788	3,577
	II f 層	黒曜石	6	17	5	23	92	1,465	103	186
		メノワ	3	16	3	22	35	57	25	735
		貝岩	6	44	13	50	227	641	246	735
	その他	黒曜石	2	7	1	3	10	19	13	29
		メノワ					20	90	21	91
		貝岩	1	14	1	3	8	19	10	36
	II g 層	黒曜石	3	8	1	5	21	202	25	214
		メノワ	15	164	28	271	79	574	122	1,009
		貝岩			1	2	48	45	49	47
第2東遺物集中区	II c~d 層	黒曜石					7	181	57	147
		メノワ	9	119	4	24	138	304	131	447
		貝岩					1	3	3	1
	II d 層	黒曜石					3	5	3	1
		メノワ	1	59			19	220	20	278
		貝岩	9	14	11	15	179	349	199	378
	II e 層	黒曜石	21	77	20	51	468	674	509	802
		メノワ	41	281	46	403	418	2,366	505	3,059
		貝岩	6	25	8	22	29	697	437	729
	II f 層	黒曜石	21	63	35	118	407	1,115	463	1,267
		メノワ	54	291	76	417	1,141	3,275	1,223	3,981
		貝岩	18	25	10	20	136	219	164	263
	II g 層	黒曜石	2	4	3	18	158	389	163	411
		メノワ	61	320	74	387	1,816	6,374	1,951	7,081
		貝岩	2	28			15	57	17	85
	II h 層	黒曜石	2	16			60	158	62	174
		メノワ	2	6	3	23	22	133	27	169
		貝岩	5	34	5	28	53	57	43	57
	地山直上	黒曜石					53	92	51	71
		メノワ					166	444	176	506
		貝岩	5	34	5	28	43	148	43	148
	不明	貝岩					146	1,102	146	1,102
		黒曜石	17	187	21	343	317	1,215	355	1,744

表III-4-2-14 剥片・碎片の出土数表 (2)

遺構名	層位	石質	縦長		横長		砂片		計		
			個数	重さ(g)	個数	重さ(g)	個数	重さ(g)	個数	重さ(g)	
第3西遺物集中区	II a 層	貝岩	16	154	18	132	146	348	180	634	
		黒曜石	4	12	2	6	22	44	28	62	
		メノワ	2	5	5	24	95	642	102	671	
	II b 層	貝岩	6	110	2	33	15	57	203	721	
		黒曜石	2	7	1	6	36	67	39	67	
		メノワ	2	15	109	258	10	17	122	310	
	II c 層	貝岩	20	258	18	141	719	1,999	777	2,398	
		黒曜石	1	4	2	8	155	159	158	171	
		メノワ	2	7			415	1,170	417	1,175	
	II d 層	貝岩	16	132	17	107	189	296	222	538	
		黒曜石	9	43	7	77	45	99	74	104	
		メノワ	3	13	2	22	162	263	172	297	
	II e 層	貝岩	3	50	8	112	81	115	94	277	
		黒曜石	1	2	2	31	31	27	34	32	
		メノワ	4	39	2	18	58	95	64	157	
	II f 層	貝岩	8	102	5	51	192	208	210	360	
		黒曜石	1	1			17	24	17	24	
		メノワ	1	1			34	28	34	23	
	II g 層	貝岩	3	51			58	63	61	114	
		黒曜石					11	7	11	7	
		メノワ					24	34	22	34	
第3東遺物集中区	II e 層	貝岩	35	136	45	167	278	547	354	895	
		黒曜石	23	93	20	27	59	46	82	195	
		メノワ	23	26	6	6	259	750	288	787	
	II f 層	貝岩	18	57	26	96	152	291	196	444	
		黒曜石	3	2	3	4	22	26	28	32	
		メノワ	11	40	11	20	124	446	146	508	
	II g 層	貝岩	88	301	82	426	2,310	4,284	2,480	5,210	
		黒曜石	45	17	41	52	76	58	72	97	
		メノワ	88	422	67	228	2,575	3,947	2,730	4,597	
	II h 層	貝岩	147	1,134	156	896	2,566	8,139	2,869	10,169	
		黒曜石	64	151	51	134	875	1,633	990	1,917	
		メノワ	78	582	51	427	2,291	7,290	2,420	8,299	
	II i 層	貝岩	104	708	136	778	2,429	5,274	2,472	7,064	
		黒曜石	51	67	38	84	126	1,154	111	1,154	
		メノワ	38	114	29	53	1,226	4,506	2,053	4,703	
	II j 層	貝岩	52	268	62	353	1,172	1,457	1,286	2,079	
		黒曜石	21	43	21	53	341	309	383	405	
		メノワ	14	50	17	47	889	999	920	1,096	
	II k 層	貝岩	28	141	19	265	726	895	773	1,307	
		黒曜石	10	16	6	14	25	25	25	25	
		メノワ	13	60	6	21	517	2,651	2,651	6,251	
	II l 層	貝岩	1	2			26	18	27	20	
		黒曜石			1	2	9	8	8	9	
		メノワ					10	11	10	11	
	II m 層	貝岩	6	25	6	66	75	129	87	220	
		黒曜石	1	1			10	9	11	11	
		メノワ					28	15	28	15	
	II n 層	貝岩	14	61	13	38	220	432	247	531	
		黒曜石	6	9	8	22	68	96	82	126	
		メノワ	14	22	4	7	140	284	158	317	
第4遺物集中区	II o 層	貝岩	13	93	7	92	154	244	131	362	
		黒曜石	1	2	3	5	5	53	55	57	
		メノワ	1	1			63	118	64	119	
	II p 層	貝岩	12	50	12	64	53	262	77	386	
		黒曜石	16	39	13	20	44	67	73	125	
		メノワ	1	0	6	16	51	107	58	121	
	II q 層	貝岩	5	58	14	39	104	302	123	392	
		黒曜石	4	9	3	2	85	75	91	144	
		メノワ	8	61	5	17	91	262	104	340	
	II r 層	貝岩	6	9	4	9	35	49	45	67	
		黒曜石	4	1			33	121	37	124	
		メノワ	3	18	3	20	118	354	124	392	
	II s 層	貝岩	1	17	11	3	103	292	105	337	
		黒曜石			1	15	32	92	33	107	
		メノワ				9	11	9	11	11	
	II t 層	貝岩					14	52	14	51	
		黒曜石					15	53	16	71	
		メノワ					15	23	15	23	
	II u 層	貝岩	1	8			11	82	12	96	
		黒曜石	21	47	14	25	180	210	215	282	
		メノワ	3	8			7	12	10	21	
	II v 層	貝岩	9	20	24	52	44	68	77	140	
		黒曜石	8	13	54	684	156	1,181	218	1,877	
		メノワ	50	382	122	679	385	1,635	557	2,696	
	II w 層	貝岩	1	4	1	8	7	10	9	23	
		黒曜石					13	144	27	262	
		メノワ	4	49	10	69	13	43	4	47	
	II x 層	貝岩	4	19		1	5	31	43	47	
		黒曜石					1	15	15	15	
		メノワ					2	102	17	169	
	II y 層	貝岩	4	13	7	49	45	289	56	351	
		黒曜石	4	29	2	11	24	324	30	364	
		メノワ	23	208	11	130	26	417	60	755	
	II z 層	貝岩	1	14		1	54	15	174	12	217
		黒曜石	2	354	111	167	16	255	127	377	
		メノワ	80	354	0	41	29	85	22	313	
	II aa 層	貝岩	1	2	1	21	18	220	22	246	
		黒曜石	2	99	13	156	36	146	63	400	
第6西遺物集中区	II bb 層	貝岩	1	14		1	54	15	174	16	227
		黒曜石					16	255	127	377	
		メノワ					17	85	22	313	
	II cc 層	貝岩	4	49	10	69	13	144	27	262	
		黒曜石	4	49	10	69	13	144	27	262	
		メノワ	4	19		1	5	31	43	47	
	II dd 層	貝岩	4	19		1	5	31	43	47	
		黒曜石					1	15	15	15	
		メノワ					2	102	17	169	
	II ee 層	貝岩	4	13	7	49	45	289	56	351	
		黒曜石	4	29	2	11	24	324	30	364	
		メノワ	23	208	11	130	26	417	60	755	
	II ff 層	貝岩	1	14		1	54	15	174	12	217
		黒曜石					16	255	127	377	
		メノワ					17	85	22	313	
	II gg 層	貝岩	1	14		1	54	15	174	12	217
		黒曜石					16	255	127	377	
		メノワ					17	85	22	313	

礫小:玉類と同じ大きさで、小型石器製作用あるいは石製品用の原石としての採集が推定されるもの。目安として最大径 1cm 以上 3cm 未満のものを対象とした。ただし緑色凝灰岩の円礫については玉類の原石である可能性が高いため、ここでは扱わず、別途玉類の製作に関する箇所「7. 石製玉類」で触れる。

検討の結果、礫大 128,652 点、6,259kg、礫小 545.0kg となった。なお礫小については点数が莫大なため途中で、重さのみを計測し、点数の合計は出していない。しかしその量の半分、重さ 226,617kg の段階で 189,034 点あったことから、全体を数えたとすれば、礫小の合計は約 38 万点にのぼると推定される。

b. 大きさ

重さの平均は礫大 47.7g、礫小 1.19g である。最大は礫大 7.9kg である。

c. 分布

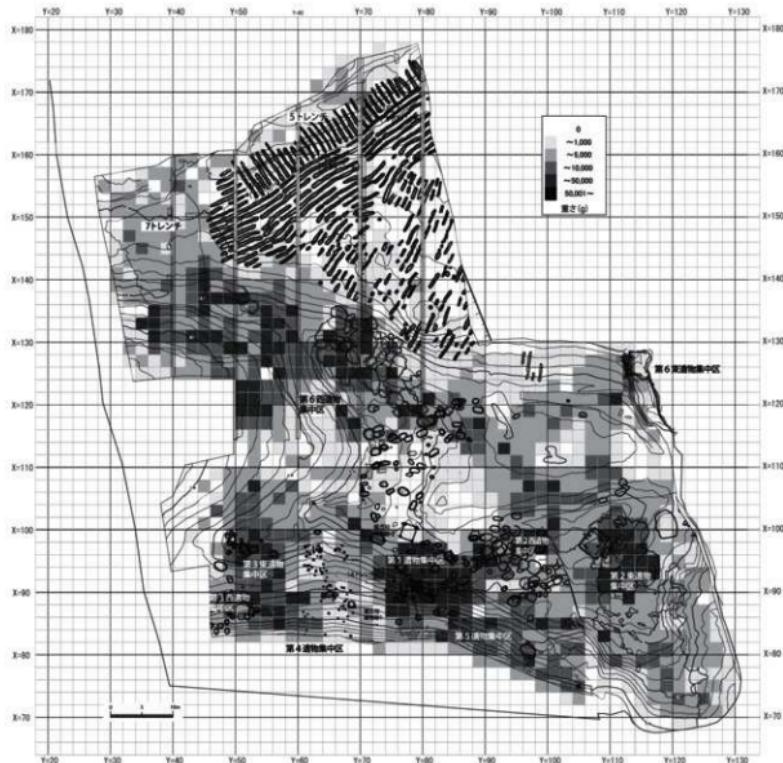
搬入礫の分布は調査区のうち古代の畝状遺構の範囲と X=100 ~ 110, Y=80 ~ 90 の範囲に空白域がある。また各集中区で多くの礫が検出される。特に第 1 遺物集中区と第 2 遺物集中区に多いが、調査を一部に留めた第 6 西遺物集中区から 7 トレンチにかけての範囲に多い。搬入礫の分布は、土坑墓群の範囲とはあまり対応しておらず、土坑墓群の空白域である X=110 ~ 120, Y=90 ~ 110 の範囲にも分布する。

しかし、X=100 ~ 110, Y=80 ~ 90 の範囲を中心とすると、やはり丘陵斜面の各集中区に沿って、環状に礫が分布しているようである。また他の集中区は斜面に沿って帯状に分布するのに対し、SX01 および第 3・第 4 遺物集中区が独立的に存在する点もみてとることができる。

(上條信彦・小泉翔太・石川世将・成田真美・池田一登)

引用・参考文献

- 上條信彦 (2015)『縄文時代における脱殻・粉碎技術の研究』六一書房
 鹿又喜隆 (2014)「第 9 章 北小松遺跡出土石器の機能と色」『北小松遺跡 第二分冊』(宮城県文化財調査報告書 234) pp.111 - 134
 町田勝則 (2002)「『刃器』研究に向けて」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会 pp153-172



図III-4-2-24 搬入蝶分布図

3. 土 製 品

(1) 概要 (表III-4-3-1)

ここでは土偶以外の土製品について述べる。土偶を除く土製品は、土偶、動物形土製品、ミニチュア土器、土製耳飾、蓋形土製品、玉象嵌土製品、類玉象嵌土製品、棒状装飾土製品、環状土製品、円板状土製品、イモガイ形土製品、棒状土製品、土冠、陽物形土製品、土版、線刻土製品、筒形土製品、土面、土鍤、ボタン状土製品、球状土製品、円錐形土製品、その他小片、の22種計671点が出土した。うち、15種523点が遺構外・集中区外出土である。数は円板状土製品320点、ミニチュア土器59点と続く。

表III-4-3-1 土製品の地区別出土数表

器種	地点	SK・SF 内	SX01	第1遺物		第2遺物		第3遺物		第4遺物		第5遺物		第6遺物		第7遺物		集中区外 集中区	計
				集中区	集中区														
土偶		5	100	9	1	3	1	3	9	11	2	2	176	322					
動物形土製品			1																1
ミニチュア土器				5		2	2		3	2		7	59	80					
土製耳飾	4	6	6	2	1	2			1	1	1	1	33	58					
蓋形土製品					1														1
玉象嵌土製品						1													1
類玉象嵌土製品							1												1
棒状土製品																			1
環状土製品	1		2	1							1							25	30
円板状土製品		6	8			21	2		3		15	8	320	383					
イモガイ形土製品			1	1														1	1
棒状丸印土製品			1						1	2	2	2	33	39					
土冠																		2	2
陽物形土製品																		3	3
土版											1							4	5
線刻土製品																		1	1
筒形土製品											1								1
土面						1			1									13	15
土鍤	1	1																	2
ボタン状土製品			1									1							2
球状土製品			1																1
円錐形土製品			1																1
その他小片		7	2			1	1			1							1	22	35
計	10	121	38	6	30	8	3	3	19	17	20	22	699	993					

(2) ミニチュア土器 (図III-4-3-1-1～図III-4-3-2-57)

集中区内21点、遺構外・集中区外59点、計80点出土した。器種は皿・台付皿形2点、浅鉢形6点、鉢・台付鉢形20点、深鉢形1点、壺形22点、注口土器1点、蓋形1点、不明6点である。鉢形と壺形が多い。37は形態的な特徴から大型のスプーン形土製品である可能性がある。なお、内容物が分かれる例として遺構外のX=98,Y=102グリッドII d層で、壺形のミニチュア土器に丸玉の素材(玉類の節で後述)、や赤色顔料が入っていた例がある。

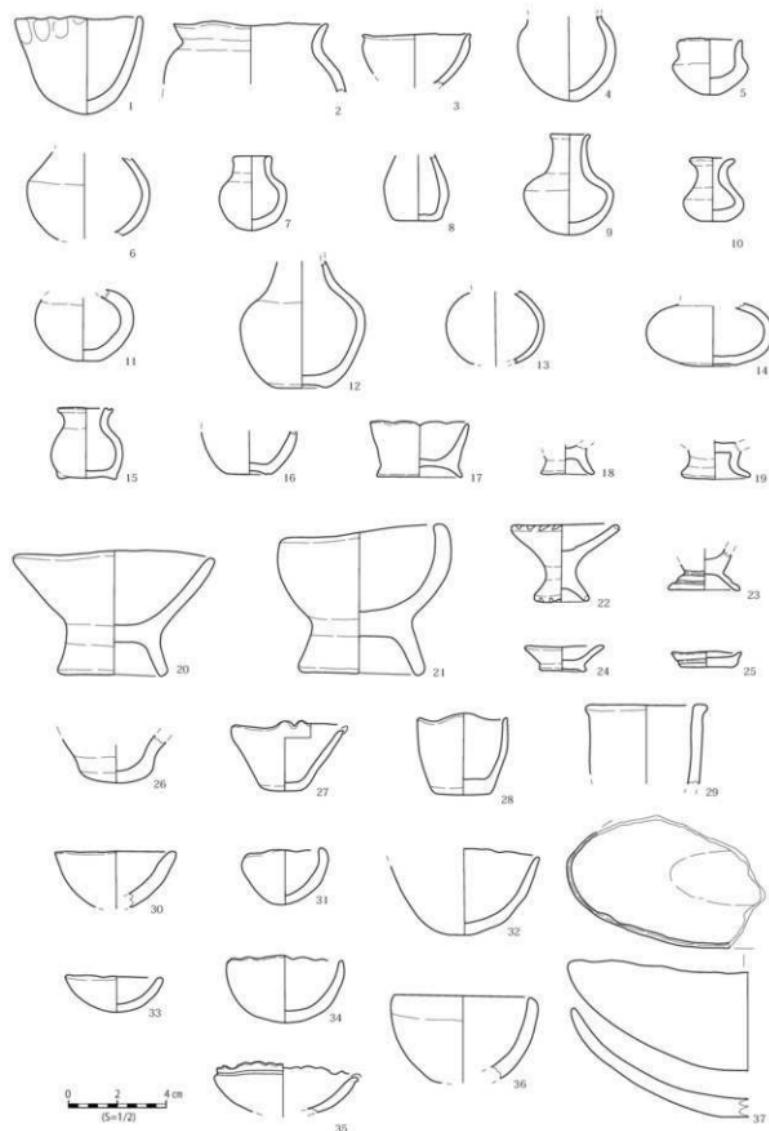
(3) 土製耳飾 (図III-4-3-6-58～図III-4-3-7-90)

SK内4点、SX01で6点、集中区内15点、遺構外・集中区外33点、計58点出土した。

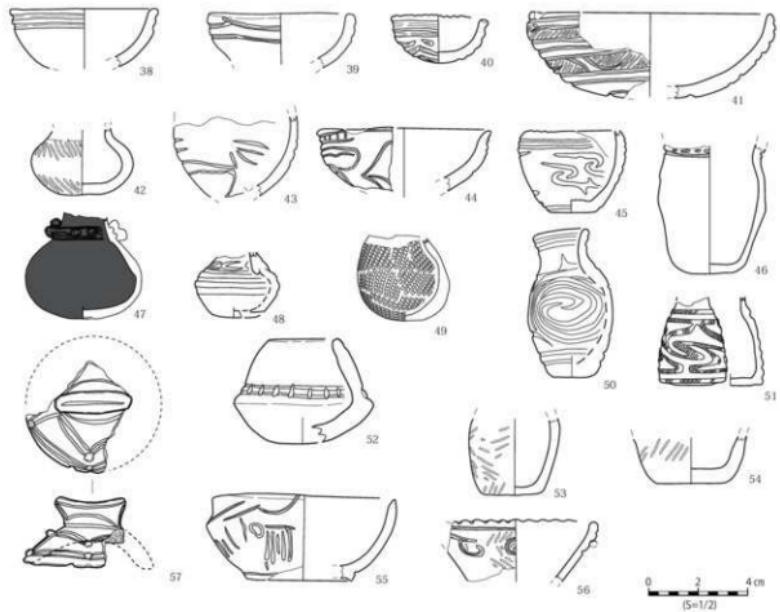
a. 土製耳飾の分類 (図III-4-3-3)

土製耳飾は樋口清之『滑車形耳飾考』(1941)に基づいて分類した。断面形態や孔の有無により以下のように6つに大分類した。

I類：白形で、断面形態が上部と下部が僅かにくぼむもの。(58～62・88・89)



図III-4-3-1 遺構外出土ミニチュア土器(1)



図III-4-3-2 遺構外出土ミニチュア土器(2)

II類：滑車形で、両端の長さの差があまりなく椎骨形のもの。(63～72)

III類：滑車形で、II類と比べ両端の長さの差が大きく断面盃形に近いもの。(73～82)

IV類：栓棒形

IVa類：断面漏斗形になるもの。(83)

IVb類：断面ネジ形に近いもの。(84～86)

V類：断面三角形で円錐形をなすもの。(87)

VI類：大型で内側が空洞になる椀形のもの。(90)

また貫通孔の有無で2つに細分した。

I類：穴のないもの

2類：穴のあるもの

58～62・88・89は白形(I類)である。5点ある。うち58・59・88・89が無孔(11類)で全て無文である。その他は有孔のI・2類である。89が本調査最大で径43.1mmである。

63～72は滑車形(II類)である。10点ある。63～70が有孔、71・72が無

I	1	2
I	○	◎
II	□	△
III	○	◎
IVa	○	◎
IVb	○	◎
V	○	◎
VI	○	◎

土製耳飾の分類

図III-4-3-3 土製耳飾模式図

孔であり、有孔が10点中8点を占める。最大は63で径25mmである。70は口縁部に刻みが施される。

73～82は断面盃形（Ⅲ類）である。今回の調査で最も数が多い。73・74が無孔（Ⅲ1類）でその他の有孔（Ⅲ2類）である。有孔が10点中8点と多い。73のように花弁状の波状口縁のある例がある。75には口縁に刻みが巡る。Ⅲ2類の場合、77～82のように器壁が薄く、全面に赤色顔料が塗られる例が多い。

83～86は栓棒形（IV類）である。2～4がいわゆるネジ形である。

87は断面三角形で円錐形（V類）である。数は少ない。沈線で十字文が施される。

90は楕形（VI類）である。表面には渦巻文が施される。径が36.4mmと大きい。

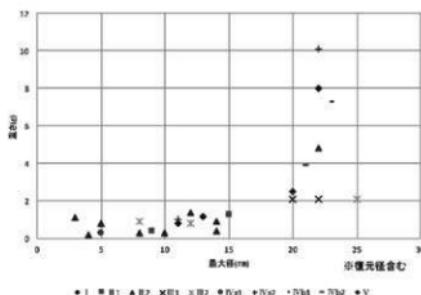
b. 土製耳飾の大きさと重さの分析

土製耳飾の最大径は表面径を、最小径は最もくびれる部分（着装部）として計測した。平均最大径は14mm、平均最小径9mm、平均厚さ12mm、平均2.2gである。欠損の少ない25点の土製耳飾の最大径と重さの分布図をみると（図III-4-3-4）、最大径は大きく分けて15mm以下のグループと20mm以上のグループの2つに分かれる。最大径15mm以下のグループは最大径5～15mm、重さ0.3～1.5gに集中する。形態はI類、II類、III2類、IVa1類、IVa2類、IVb1類があり、形態は多岐である。20mm以上のグループは最大径20～25mm、重さ2.0～10.0gの範囲にまとまる。形態はI類、II2類、III類、IVa2類、IVb1類、IVb2類、V類があり、多岐である。

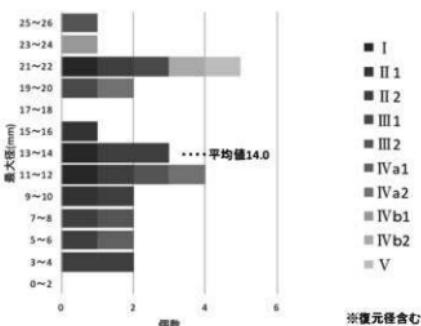
c. 土製耳飾の径と個数の分析

最大径ごとの個数をみると（図III-4-3-5）、17mmを境に19～22mmの大型品と3～16mmの小型品の2つのピークがある。大型品にはI類、II1類、III1類、IVb2類、V類が含まれ、小型品にはI類、II1類、III2類、IVb2類が含まれている。大小のピークの各形態は穴の有無の違いがあるが、形態差はない。また、数の多いII1類は4～14、21～22mmと大きさが多様である。

また、平均値を境に大小の各個数を見ると、大型品が10点、小型品が15点と、平均値以下の土製耳飾の数が多い。上記のc大きさと重さとの関係をふまえると、各分類それぞれに大型品と小型品



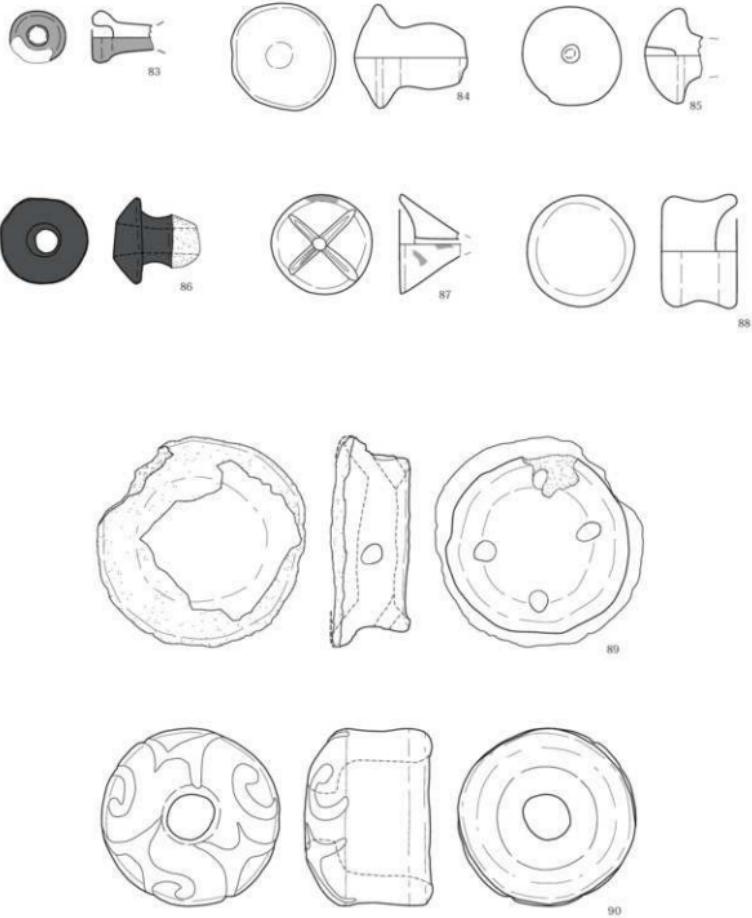
図III-4-3-4 土製耳飾の大きさと重さ



図III-4-3-5 土製耳飾の大きさと重さ



図III-4-3-6 遺構外出土土製耳飾(1)



図III-4-3-7 造構外出土土製耳飾(2)

0 1 2 cm
(S=1/1)

があり、大きさによって形態が異なるわけではないことが分かる。

d. 赤色顔料の付着

31点中15点に赤色顔料が付着していた。すべて全面に付着するため、赤塗装であったとみられる。特にⅢ類、Ⅳb類の付着率が極めて高い。赤色顔料は携帯型蛍光X線分析装置による分析の結果、鉄元素(Fe)と水銀元素(Hg)のピークが検出された。鉄はベンガラ、水銀は水銀朱が赤色顔料の素材になっていたとみられる。ベンガラは4点、水銀朱は5点に塗られる。分類別の内訳は、ベンガラはⅠ類、Ⅱ2類、Ⅲ1類、Ⅳa1類、水銀朱はⅡ1類、Ⅱ2類、Ⅲ1類、Ⅲ2類に塗られ、形態差がある。

(4) 玉象嵌・類玉象嵌土製品・棒状装飾土製品(図III-4-3-8-91~97)

玉象嵌土製品は集中区1点、集中区外2点、計3点、類玉象嵌土製品は集中区外4点、棒状装飾土製品は集中区外1点で総数8点出土した。すべて弧状あるいは棒状で両端部に装飾のある土製品として一括した。なお、端部にアスファルトが付着し、玉を入れるための象嵌があったとみられる資料を玉象嵌土製品とし、そのほか端部に象嵌はないが、ケムシ形、弧形、腕輪状の土製品を一括して類玉象嵌土製品とした。91は長さ31mmで、下部が欠損する。玉が失われるものの、端部の3つの凹みと中央突起部に玉を埋め込むための接着剤として入れたアスファルトが付着する。全体に赤色の跡が残る。92も端部とみられ、3箇所の凹みにアスファルトの痕跡が残る。93~95は類玉象嵌土製品の端部片である。96は横からみると三日月形になる。97は棒状装飾土製品である。カマボコ形で弧文と三叉状の文様を隆起で表現する。両端部は顔のように見え、大洞A式の動物形突起に類似する。

(5) 環状土製品(図III-4-3-9-98~図III-4-3-10-122)

土坑内1点、集中区内4点、遺構外・集中区外25点、計30点出土した。平面形と断面形、施文から5分類した。

I a類：無文の断面円形のドーナツ形。(98~103・105~108)

II a類：無文の断面平坦形の貝輪形。(104)

I b類：施文・装飾のある断面円形のドーナツ形。(110~113~117)

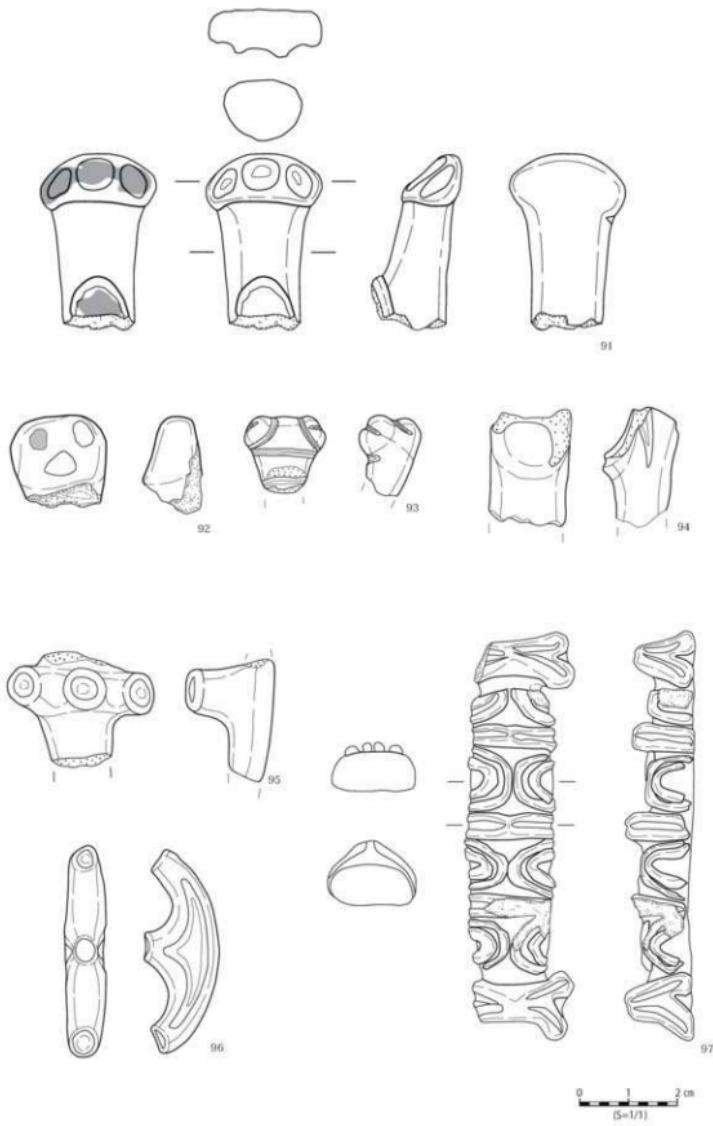
II b類：施文・装飾のある断面平坦形の貝輪形。(111~112)

III類：菱形環状土製品あるいはそれに類する土製品。(118~122)

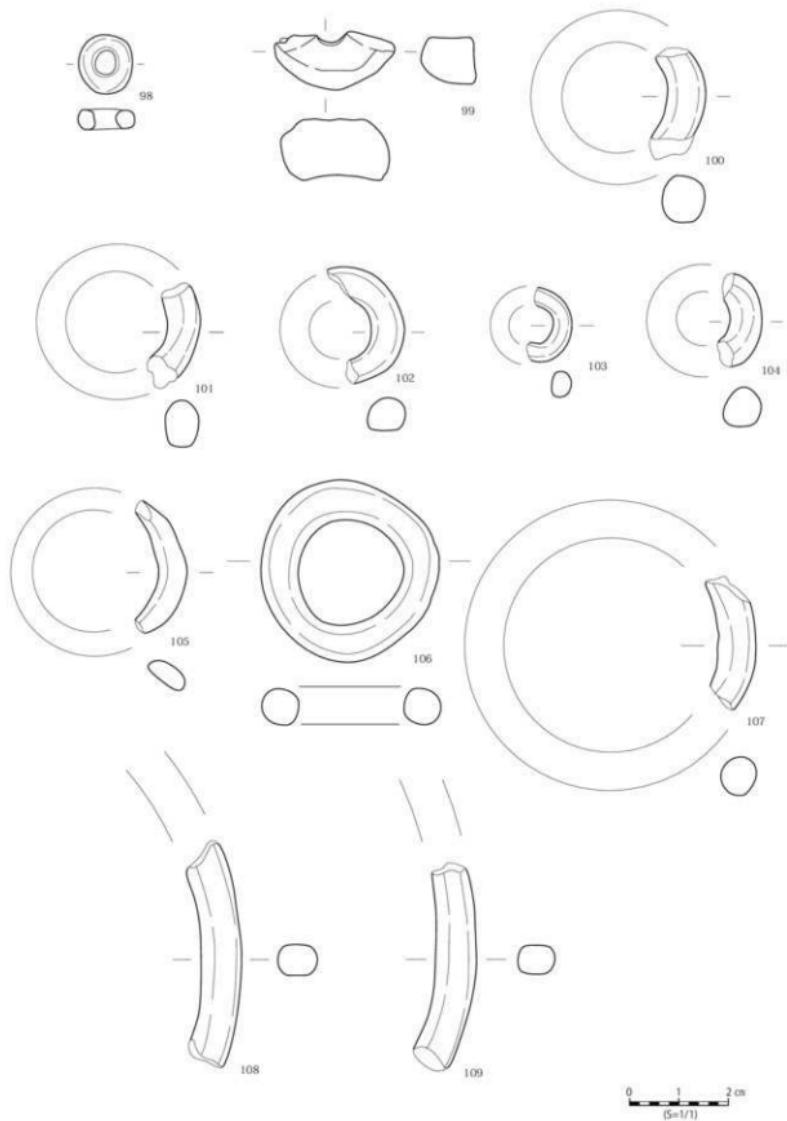
104は復元径3~4cmで、オオツタノハ製の貝輪を模した形態である。108~109は復元径10cmを超える。

110はドーナツ形で沈線が施される。111~112は断面平坦形で表面に複数の突起とその間に渦巻文を挿入する。突起のある貝を模した可能性がある。113は表面に多数の突起がある。114~116は沈線を巡らした後、その隙間を刺突文で埋める。114は側面に穿孔がある。117には連弧文が入る。118~122は菱形環状土製品あるいはそれに類する土製品で多様性に富む。

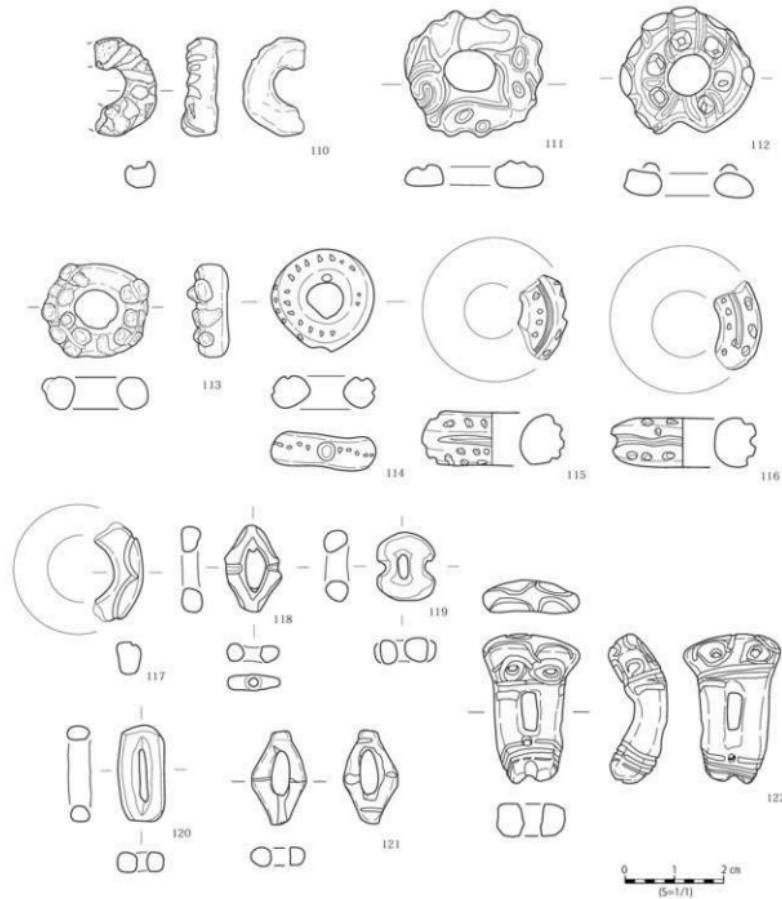
復元径を含めて、大きさを検討すると最大径の平均は4.4cmである。分類別にみると、I a~II b類の多くは最大径1.6~3.6cm、内径0.5~2cmの範囲に収まるが、108~109のようにI a類の



図III-4-3-8 造構外出土玉象嵌・類象嵌土製品



図III-4-3-9 遺構外出土環状土製品



図III-4-3-10 遺構外出土環状土製品(1)

み最大径 15cm 前後、内径 14cm 前後の一群が認められる。後者は腕に入る大きさであり、腕輪としての機能が推定される。

出土状況をみると、X=80～98,Y=96～116 グリッドに I a 類、II a 類、II b 類がまとまって出土している。また X=118 以下,Y=74 以下のグリッドに I a 類がまとまる箇所がある。

(5) 円板状土製品 (図III-4-3-11-123～130)

SX01で6点、集中区内57点、遺構外・集中区外320点、計383点出土した。土製品のなかで最も数が多い。ほとんどが鉢の体部片を利用した土器片利用製品である。土器片は地文のみの例が多い。有孔と無孔の2つに区分される。遺構外319点中無孔122点である。123・124は無孔で、123は内面に穿孔途中の凹みがある。こうした穿孔途中の例は319点中32点とほぼ1割にあたる。125～130は有孔である。

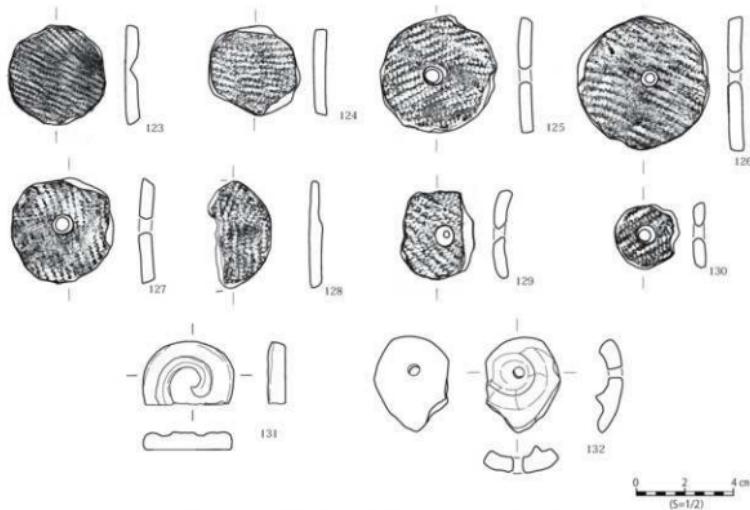
遺構外319点の大きさは最大径平均4.1cm、重さ12gである。

(6) イモガイ形土製品・土器片利用製品（図III-4-3-11-131・132）

イモガイ形土製品は内面に渦巻文のある土製品である。集中区内2点、遺構外・集中区外1点、計3点出土した。土器片利用製品は文様のある土器片の割れ面を磨き、円板状にしたもので、円板状土製品と異なり、文様そのものを意図的に残す点が特徴である。遺構外・集中区外からイモガイ形土製品と土器片利用製品、各1点出土した。131は土器片利用製品である。土器片の渦巻文部分を残して周辺を円形に磨く。そのため、イモガイ形土製品に類似する。

(7) 棒状土製品（図III-4-3-12-133～165）

集中区内6点、遺構外・集中区外33点、計39点出土した。粘土紐を転がしただけの簡単なものから、沈線を巡らせたものまである。133～158は粘土紐を転がした簡単なもので先端が尖るものが多い。159～161は勾玉状に曲げられる。162は穿孔途中であり、こうした棒状土製品が土製玉類の素材であることをうかがわせる。163は先端をつぶして平坦にしたもので、小型のスプーン状土製品のようである。164・165は沈線を巡らす。



図III-4-3-11 遺構外出土円板状土製品・イモガイ形土製品

(8) 土冠 (図III-4-3-12-166・167)

遺構外・集中区外から2点出土した。166・167は土冠の頭部とみられる。166には入組三叉文が施される。

(9) 陽物形土製品 (図III-4-3-12-168～170)

先端が膨らむ土製品である。遺構外・集中区外から3点出土した。168・169は破片である。170は石棒状で円柱状の頭部がある。

(10) 土版 (図III-4-3-13-171～174)

集中区1点、遺構外・集中区外4点、計5点出土した。171は表面に渦巻文を施す。172は中央に縦の沈線と左右に重弧文を配す。173は複数の穿孔がある。174は三角形である。

(11) その他 (図III-4-3-13-175～185)

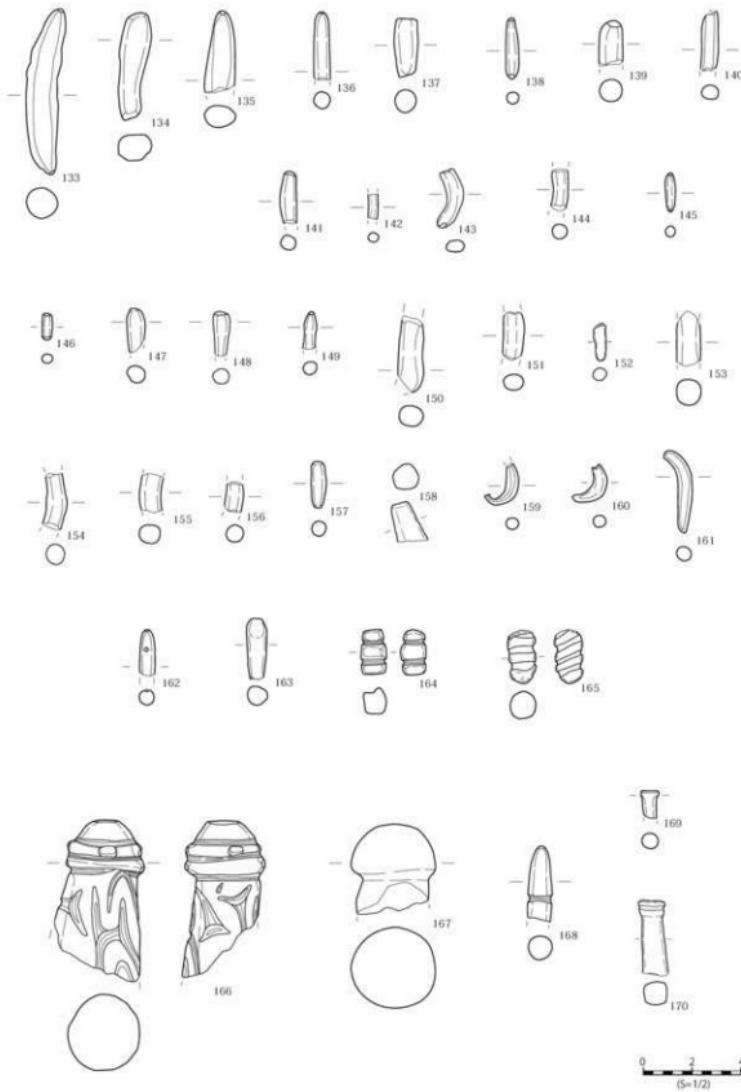
小片のため器種が特定できなかった資料をまとめた。175は皿状である。176は刺突文が巡り土玉の可能性がある。177は中空形の土製品の一部である。178は多孔底土器の底部とみられる。179は円板状であるが側面に穿孔する垂飾品の可能性がある。180はC字状で、土製勾玉の未成品とみられる。181は本遺跡にはほとんどない後期中葉の土器口縁部の突起の可能性がある。182は頂部に穿孔のある容器形の土製品で巻貝形土製品の可能性がある。183は把手形あるいは突起形の土製品である。184は棒状で、185は多数の刺突文が施される。

(12) 土面 (図III-4-3-14-186～図III-4-3-15-198)

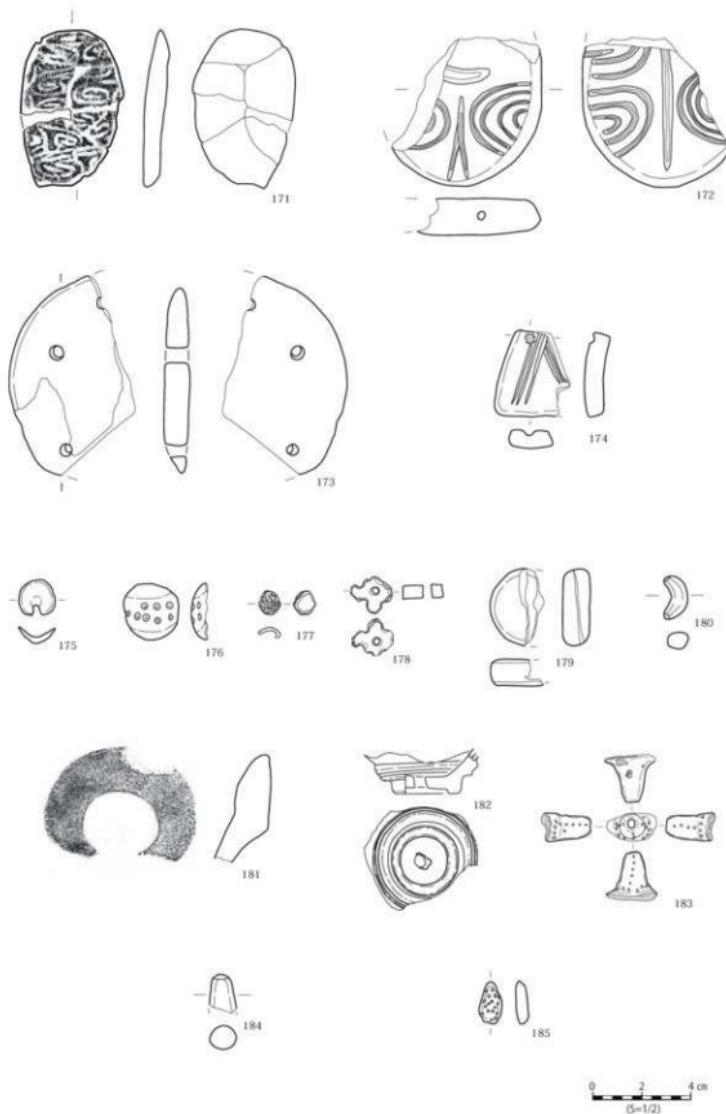
集中区2点、遺構外・集中区外13点、計15点出土した。顔面の特徴から縄文時代晚期後半（大洞C2～A式）に属するものが多い。186は裏面に上下二対の渦巻文がある。187・188は下半部に工字文がある。196～198は裏面に渦巻文がある。194は遮光器土偶の顔面に類似し、他のT字形の眉と鼻とは異なり、曲線である。したがって、他より古い大洞C1式に属するとみられる。赤彩は186・187・190・191の4点に見られる。

各出土グリッドをみるとX=94～98,Y=114～118の範囲とX=100,Y=116～118の範囲にまとまり、他は少ない。双方とも第2東遺物集中区に近く、この集中区の土器相と合致する。

(上條信彦)



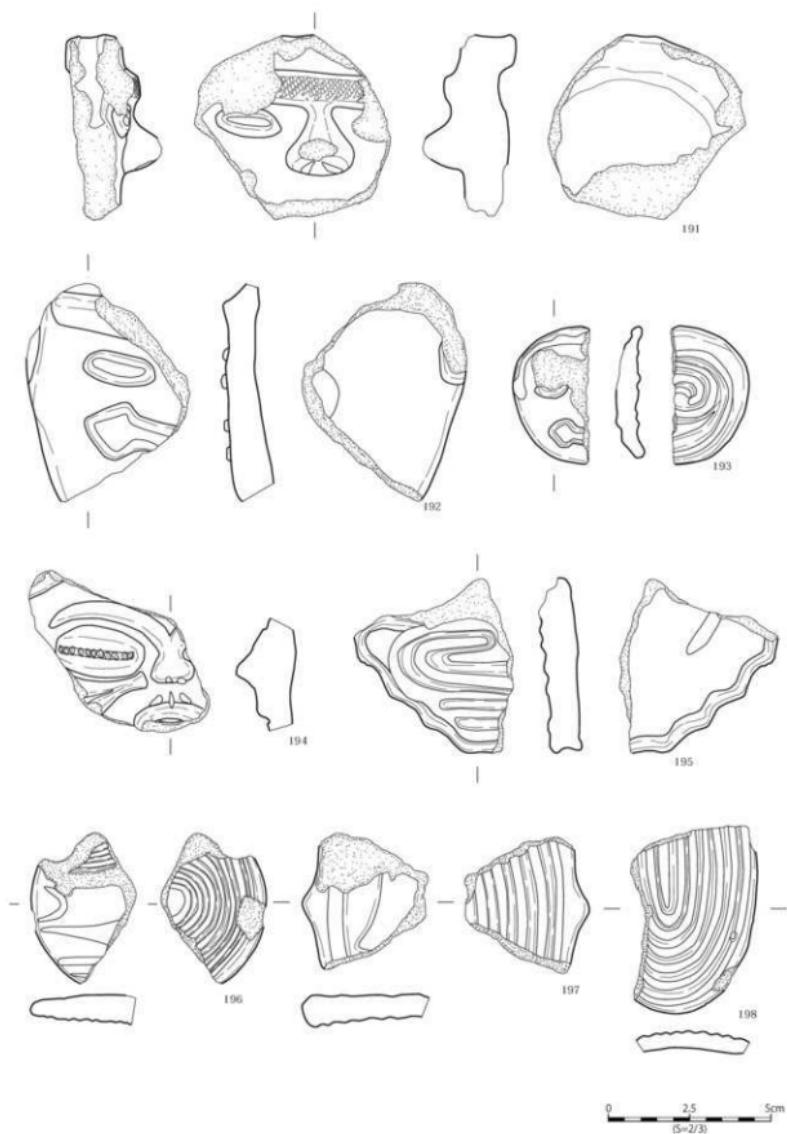
図III-4-3-12 遺構外出土棒状土製品・陽物形土製品



図III-4-3-13 遺構外出土土版・その他



図III-4-3-14 遺構外出土土面(1)



図III-4-3-15 遺構出土土面(2)

4. 土偶

ここでは分析グリッド以外から出土した土偶について、遺構外として掲載・報告する。なお、ここでは層位別に掲載した。

III層上面（図III-4-4-1-1～4）

ここではII層が飛砂によって焼失し、III層上面に沈下した土偶を取り上げているため、磨滅したものが多い。1は全体に刺突文を施したもので、磨滅している。中空土偶と思われる。2は腕部をまっすぐ横に伸ばしたもので、肩が膨らんで肩パット状となる。肩に沈線文が入る中実土偶である。全体に磨滅している。3は脚部で、腰部分に沈線が入る。中実土偶である。4は脚部の中空土偶である。全体に磨滅している。

II h層（図III-4-4-1-5・6）

5は脚部とみられる土偶であるが、文様もなく詳細は不明である。6は全体に刺突文が施された中空土偶である。

II f層（図III-4-4-1-7～14）

7は遮光器土偶の腕部である。磨消縄文による雲形文や腕部付け根に刺突文が巡る。全体に磨滅している。8は大型字X形土偶である。頭部や四肢、右乳房が欠損している。表裏両面に体の側縁を二条の沈線文で区画する。乳房・腹部は大きく膨らみを持たせている。正中線は沈線の中に刺突列で表現し、直交するように脚部分に2条の沈線の中に刺突列を施している。陰部はB状突起で表現されている。背中にも正中線と正中線に直交するように脚部と肩部にそれぞれ2条の沈線+刺突列を施している。また、正中線の中央には刺突列と沈線による2重の円文が描かれている。9は大型のX字形土偶の体部下半である。端部が二股に分かれている。10は体部下半の中空土偶で、縄文で表現されたパンツ状の区画文が施されている。背中側は大きく欠損し、アスファルトが付着している。11は両腕、左脚が欠損した中実土偶である。腹部が膨らむ。割れ口にアスファルトが付着している。文様も顔の表現も全くない。12は中空土偶の腕部である。瘤状突起が沈線に入り込んでいる。13は中実土偶の脚部であり、両端部が欠損している。脚が屈折する屈折土偶である。全体にきれいなミガキ調整を施している。14は中実土偶の脚部で、足首が屈折している。膝から太もものかけて2条の刺突列が施される。

II e層（図III-4-4-1-15～19）

15は遮光器土偶の頭部で、沈線と隆帶による大きな目をもつ。鼻はB状突起で表現され、口は穿孔している。16はX字形土偶の類型に含まれるとみられる抽象土偶である。完形品で、手足とみられる突起もかなり抽象的である。また、股下と胴横に穿孔がみられる。17は中空土偶の脚部で、端部に刻目を入れて指先を表現している。18は中実土偶の脚部である。体部にはR L縄文がみられる。下方に1条の沈線が巡る。19は中実土偶の脚部である。腰部分に渦巻沈線文を施している。

II d 層（図III-4-4-2-20～24）

20は頭部、右腕、両脚を欠損した中実土偶である。手の先端に抉りを入れて、二股にしている。正中線は大振りな刺突列を施す。乳房・腹部は大きく膨らみを持たせている。21は中実土偶の胸部である。腰部分に渦巻き沈線文を施している。22は中実土偶の脚部と思われるが、かなり短足である。23は中実土偶の脚部と見られる。多数の沈線が巡る。24は中実土偶の脚部とみられる。屈折土偶である。

II c 層（図III-4-4-2-25～35）

25～27は中空の遮光器土偶である。25・26は胴～腕部で、体部には雲形文がみられる。両方とも丁寧なつくりである。25は亀ヶ岡遺跡出土の大型遮光器土偶（重文）と類似する資料で、26は小型品である。27は胸部とみられる。28はX字形土偶の完形品である。右乳房が欠損しているが、現代の欠損である。頭部・四肢は二股に分かれている。乳房に膨らみをもつ。29は中空土偶の胸（肩）部である。肩には弧状の沈線がみられるが文様は不明である。30は中実土偶である。両腕、右脚が欠損している。正中線は沈線で現され、体部には入組沈線文が施される。頭部の内側はソケット状になってしまっており、口を表現した穿孔部分は後頭部を突き抜けている。そのため、土偶の使用に際しては口から紐を通してぶら下げた可能性が考えられる。31は中実土偶の胸部である。頭部や四肢が欠損している。正中線は刺突列で表現されており、大きく膨らむ右乳房が残る。32は頭部が欠損した中実土偶である。膨らみをもつ両方の乳房がみられる。また、両腕は元々なかったのかはっきりしない。両脚はかろうじて抉りを入れているために分かる程度のつくりである。33は中実土偶の胸部とみられる。端部に沈線を入れて、手を表現している。34は土偶かどうかやや疑問に残るが、正中線を示す隆帯や陰部を示す刺突と考えられる。上部は欠損して不明である。35は中実土偶の腕部とみられる。端部をつまみ出して、沈線を加え、手を表現している。腕に沈線を多数施している。

II b 層（図III-4-4-3-36～47）

36・37は遮光器土偶の胸部である。36は縦位に山形状の沈線文、37は入組沈線文をそれぞれ施している。36は全体に磨滅が激しい。38は中空土偶の脚部である。磨消繩文に工字文がみられる。39は中空土偶の胸（肩）部である。沈線による工字文が施されている。

40～42はX字形土偶の頭部である。40は角状突起が2つ欠損している。41・42は突起状に頭部をつくり出している。43は中実土偶の脚部で、端部をつまみ出して脚を表現している。44は中実土偶の胸部である。頭部と四肢、左乳房を欠損している。乳房・腹部は大きく膨らみを持たせている。へそに刺突を施す。LR繩文でパンツ状区画文を施す。45は中実土偶で、高さ1.2cmの超小型の完形品である。頭部と四肢が明瞭である。顔の表情はない。46は中空土偶の胸部で、パンツ状区画文を前後に施す。47は中実土偶で、頭部と右腕が欠損している。乳房・腹部は大きく膨らみを持たせている。また、腹部には刺突文が充填されている。手・脚ともに短い。また背中は抉り取られるように欠損している。

II a 層（図III-4-4-3-48～65）

48・49はX字形土偶の頭部で、それぞれ角状突起をもつ。50は中実土偶の頭部である。全体に

磨滅しており、文様等が不鮮明である。目・鼻の穴・口は沈線で施され、眉毛と鼻は隆帯で施される。頭頂部は山形状の突起をなす。後頭部には弧状の沈線が巡る。51は中実土偶の頭部で、目は隆帯上に沈線、口は沈線を入れて表現している。眉毛と鼻は隆帯で表現している。右頬に貫通孔がみられる。全体に磨滅している。52は中実土偶の胴部である。頭部、両腕、体部下半は大きく欠損している。全体に磨滅している。乳房に当たる箇所には沈線による円文を施している。正中線は三叉文から2条の沈線で表現されている。53は中実土偶の胴部である。頭部、両腕、右乳房、体部下半が欠損している。乳房は大きく膨らむが、腹部は平坦である。54は中実土偶の胴部・右腕側であり、割れ口にアスファルトが付着している。腕には沈線間に刺突列を施している。首から胸にかけても刺突文がみられる。55は中実土偶の脚部である。端部に刻目を入れて、指先を表現している。56は中実土偶の胴部で全体が磨滅している。かろうじて刺突列の正中線がみえるので、正面が分かる。内部には棒状工具の痕跡を示す穿孔がある。57は中実土偶の胴部である。頭部や両腕、体部下半が大きく欠損している。正中線は刺突列で表現されており、体部には渦巻沈線文が施されている。乳房は隆帯となって両方が連結されている。背中側はひどく磨滅している。58は中空土偶の胴部で、刺突文が施されている。また、大きな穿孔部の痕がみられる。59は中空土偶の胴部であり、沈線文に刺突文が充填されている。60は中空土偶の胴部である。体部上半や両脚が大きく欠損している。全体に磨滅が激しく、文様が不鮮明である。正中線は刺突列で施され、腹部はわずかに膨らんでいる。パンツ状区画文が膚膿されている。61～65は中実土偶の腕部と思われる。62は肩部に、64は端部に沈線を施している。65は磨滅が激しい。

遺構外カクラン

ここでは盜掘土坑によるカクラン層から出土した土偶について、土偶分類ごとにまとめて概要を報告する。

1) 土偶1類（図III-4-4-4-66～70）

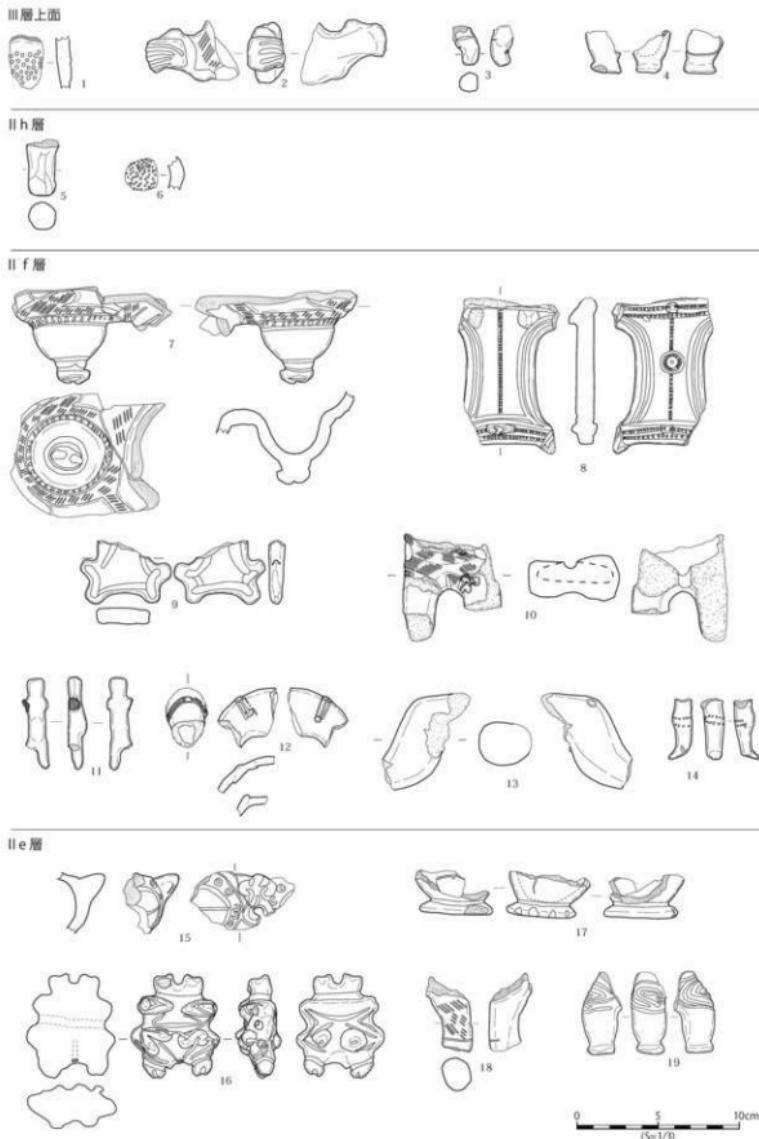
ここでは遮光器土偶を図示した。すべて中空土偶である。66は頭部、67～70は胴部である。66は眉毛～鼻を隆帯で仕上げ、鼻の穴を刺突文、口を穿孔で表現した。赤色顔料のベンガラが痕跡として沈線内に残っている。69は磨消縄文による入組沈線文、70は同じく工字文を施す。

2) 土偶2類（図III-4-4-4-71～87）

ここではX字形土偶を図示した。すべて中実土偶である。頭部には71～73・81～87のように角状突起を施すものがある。正中線には71・72・74・76・77・79・80のように刺突列によって表現するもの、78のように沈線文による表現するものがある。72～75、77・80～82では、四肢の端部が二股に分かれている。71は全体に入組沈線文、73は赤色顔料のベンガラが付着している。

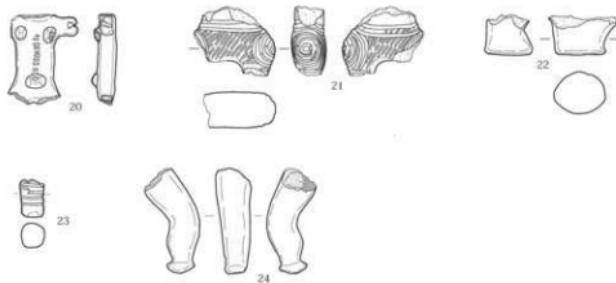
3) 土偶3類（図III-4-4-5-88～113、図III-4-4-6-114～139）

ここでは1類・2類以外の土偶を図示しており、特徴的な点を述べる。なお、細分類は今後の課題とする。88～96は頭部である。97～113は胴部、114～116は腕、117～139は脚部である。88は頭部が結髪状になり、後頭部は隆起して渦巻沈線文を施す。結髪には沈線による工字文が施さ

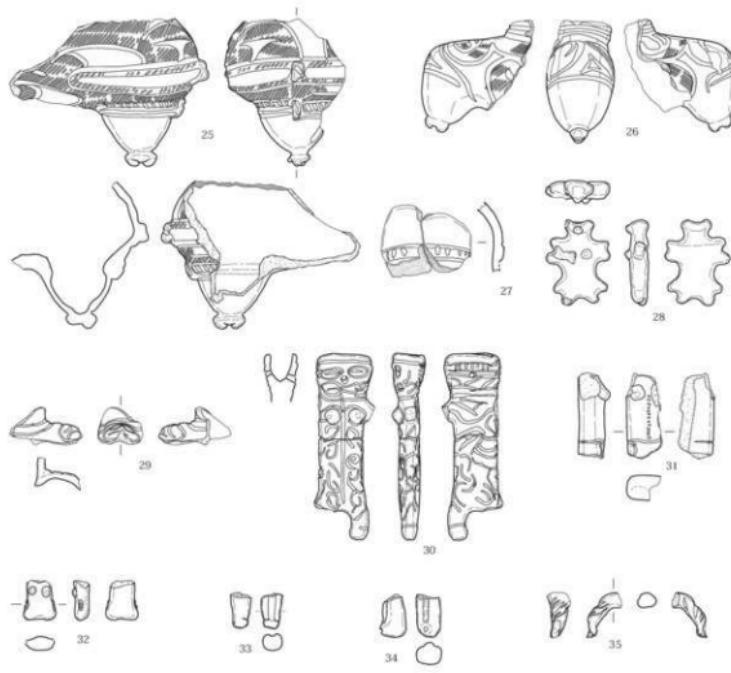


図III-4-4-1 遺構外出土土偶(1)

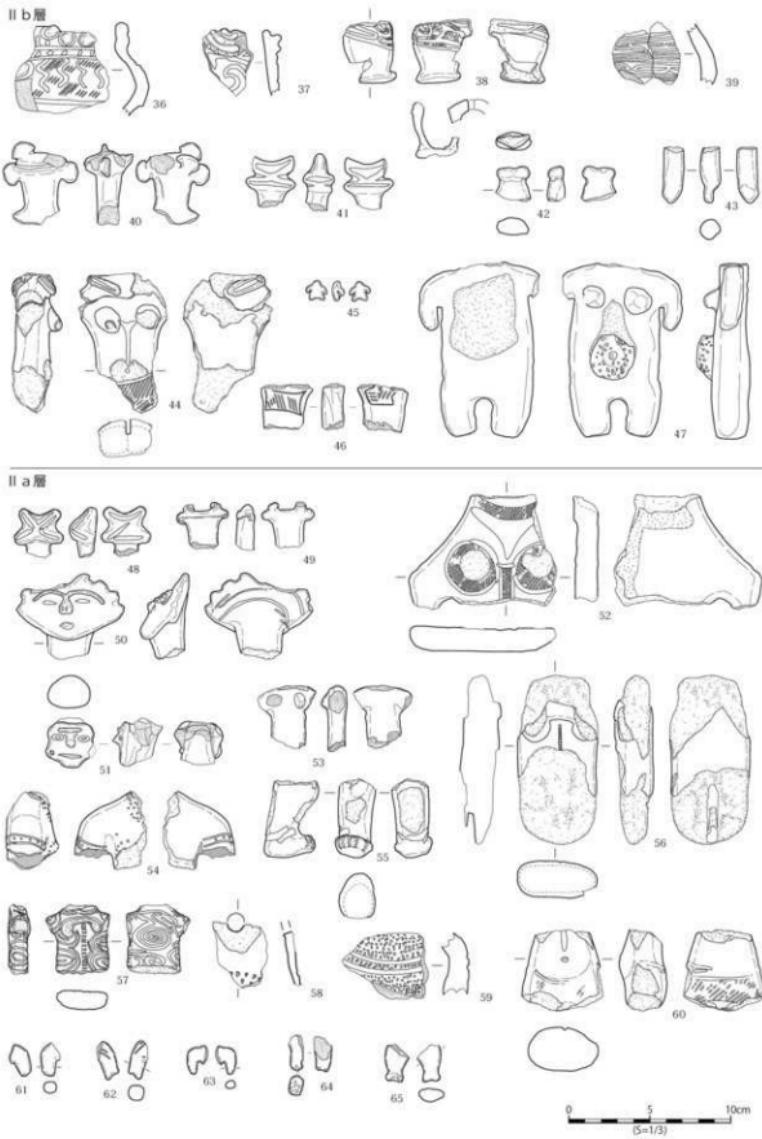
II d 層



II c 層

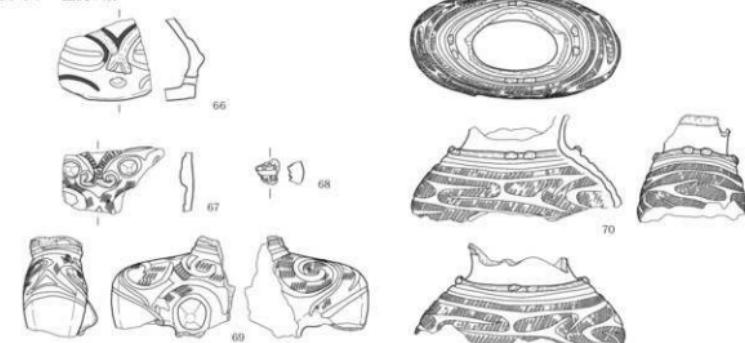


圖III-4-4-2 遺構外出土土偶(2)

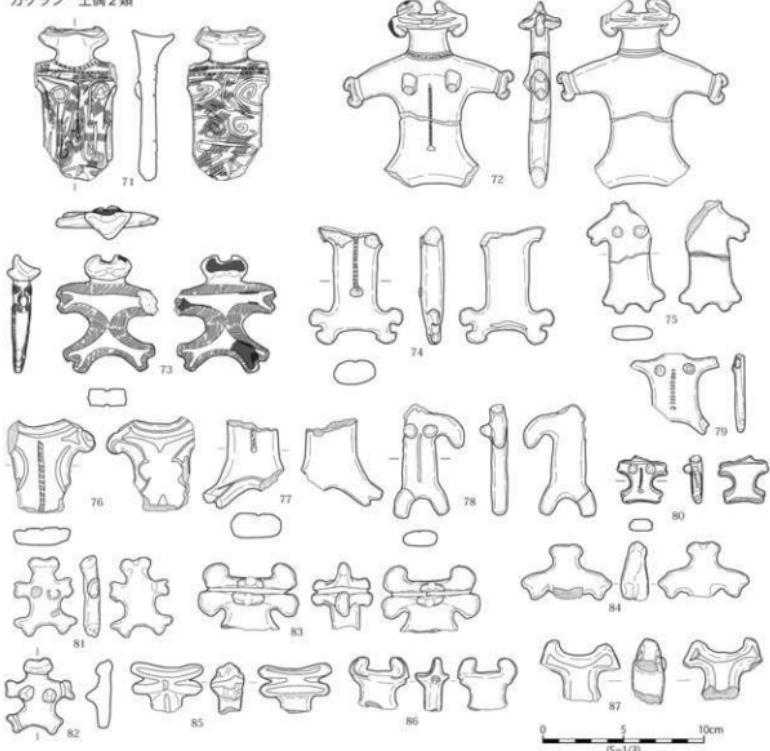


図III-4-4-3 遺構外出土土偶(3)

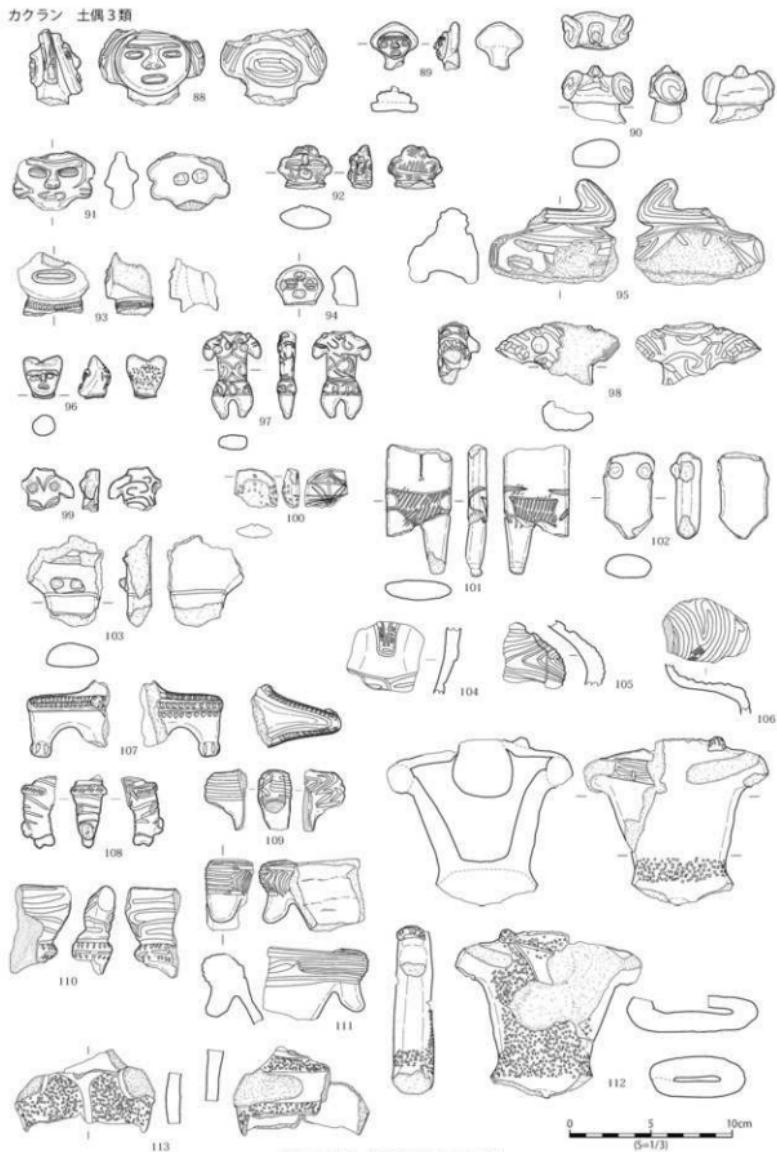
カクラン 土偶 1類



カクラン 土偶 2類



図III-4-4-4 遺構出土土偶(4)



図III-4-4-5 遺構出土土偶(5)



図III-4-4-6 遺構外出土土偶(6)

れる。89も頭部が結髪状となるが、文様は特にない。90は大きな目が両側縁に取りつく。91は後頭部に二つの突起が付く。92は後頭部にC字状の沈線文が施される。95は頭部が結髪状の大きな角状突起がつく。97～99は体部に入組沈線文を施している。97・99は小型品である。97・98には割れ口にアスファルトが付着している。100は腹部に刺突文、裏側には弧線による沈線文を施す。101はパンツ状の区画文が施されている。102は全体に磨滅が激しい。105・106は肩部に施された入組沈線文である。107・110・112・113は刺突文を特徴とする土偶である。109は矢羽根状文、111は工字文が施されている。114は肩部に弧線文、115は端部に抉りを入れ三股にして、手先を表現している。117・122・123・128・136・138は端部に刻目を入れて、脚の指先を表現している。125は両脚の端部に十字に刻目を入れて、脚を表現している。135には刺突文を施している。

(柳原)

5. 石 製 品

(1) 概要 (表III-4-5-1)

本調査では異形石器、石棒、石剣、石刀、小型石棒、石冠、独鉛石、軽石製石製品、有孔石製品、ボタン状石製品、C字状石製品、環状石製品、棒状石製品、岩偶、岩版、魚形石製品、円板状石製品、線刻縫、用途不明石製品、碗形石製品、20種計240点が出土した。うち遺構外・集中区外が15種179点ある。数は刀剣形石製品(石棒・石剣・石刀)97点、異形石器41点が多い。1点のみであるが北海道道南地域に多い魚形石製品に類する資料がある。

表III-4-5-1 石製品の地区別出土数表

	SK・SD 内 内	SX01	第1遺物 集中区	第2西遺 物集中区	第3西遺 物集中区	第3東遺 物集中区	第4遺物 集中区	第5遺物 集中区	第6西遺 物集中区	第6東遺 物集中区	集中区外	計	
異形石器	1			2					1	2	41	47	
石棒		6		2	2		8	3	1	62	84		
石剣										4	4		
石刀		4		1	2			1	2	31	41		
小型石棒										4	4		
石冠		2					2			5	9		
独鉛石								1			1		
軽石製石製品										1	1		
有孔石製品				2						1	12	15	
ボタン状石製品	1	1									4	6	
C字状石製品					1						1		
環状石製品						1				2	3		
棒状石製品				1						2	3		
岩偶					1				1	1	1		
岩版											1		
魚形石製品										1	1		
円板状石製品										2	2		
線刻縫		2								7	9		
用途不明石製品		1									1		
碗形石製品		4									4		
計	2	20	0	2	7	5	0	11	4	3	7	179	240

(2) 異形石器 (図III-4-5-1-1～図III-4-5-2-41)

剥片石器のうち、機能が推定されていない定型石器を一括した。土坑内1点、集中区5点、遺構外・集中区外41点、計47点出土した。

1～8は鎌形で異形石鎌も含まれる。1は独鉛石で中央部が抉れ、両端部が尖る。2は凹基鎌に類似するが両側面に抉りがある。3～6は有茎鎌に類似するが茎部下辺に凹基鎌状になる。7・8は有茎鎌に似るが両側面がくびれる。

9～12は釣針形あるいは三日月形である。9は釣針形である。10～12は三日月形である。13～17は三叉形で15～17のように端部に抉りをいれる場合がある。

18～26はH字形あるいは工字形である。27～29はつまみ部がある横型石匙形である。刃部に複数のノッチがあることから異形石器と判断した。32～35は石偶形である。37～41は複数の抉りを入れることで放射形あるいはアーバ形にみえるものである。

(3) 刀剣形石製品 (図III-4-5-3-42～図III-4-5-7-96)

石棒・石剣・石刀がある。棒状の磨製石製品のうち、石棒は断面円形で無刃のもの、石剣は左右両側面に刃部、石刀は片側面に刃部のあるものとした。SX01からは石棒6点、石刀4点、集中区か

らは石棒 16 点、石刀 6 点、計 22 点、遺構外・集中区外からは石棒 62 点、石劍 4 点、石刀 31 点、計 97 点出土した。総計で 129 点出土した。

石棒・石刀が多く、石劍は少ない。遺構外・集中区外出土品の多くは破損品である。本調査での完形品は第 1 遺物集中区出土の石棒 1 点のみである。石材は粘板岩 74 点 (76%) と主体的であり、統いて安山岩 8 点 (8%)、凝灰岩 6 点 (6%)、片岩 6 点 (6%) である。そのほか、ネフライト、蛇紋岩がある。これらのうち、粘板岩や蛇紋岩はこの周辺地域では採集困難であり、未成品などがないことから製品が搬入されてきたとみられる。安山岩や凝灰岩は近隣での採集が可能であり粗製石棒に多く用いられる。

a. 石棒 (42 ~ 49・54 ~ 63)

遺構外・集中区外は 62 点ある。形状により 4 区分できる。

A 類：両頭石棒 断面円形、平面柱状、頭部亀頭形。(42・43)

B 類：両頭石棒 断面円形、平面柱状、頭部円筒形、頭部鉢巻状隆帯があるもの。頭頂部が平坦。

(44)

C 類：無頭石棒 断面円形、無刃、平面柱状、両端近くが細る。把握部との境界を沈刻線で表す。

(45 ~ 49・56・58)

D 類：粗製無頭石棒 断面多角形、無刃、平面柱状、無研磨で柱状節理のある棒状礫をそのまま、あるいは剥離によって外形を粗く整える。(60 ~ 63)

破片のため分類困難なものが多いが、D 類が最も多く、統いて C 類が最も多い。

42 には S 字状入組文が施される。44 は鉢巻状隆帯の破片である。45 ~ 47 は C 類の先端部である。60 ~ 63 は柱状節理のある安山岩製である。

b. 石劍 (50 ~ 53)

遺構外・集中区外で 4 点出土した。50 は把頭部が球形で、三叉文が施される。51・52 は剣先部でいずれも先端は尖らずに平坦な長方形になる。

c. 石刀 (64 ~ 92)

遺構外・集中区外で 31 点出土した。形状により 3 区分できる。

A 類：刀身は直真で直刀状をなす。把頭は台形もしくは長方形で、淨彌様の彫刻は施されず、単純な沈刻線か幾何学的文様がわずかに見られるもの (64 ~ 66・84・85・87・89 ~ 91)。

B 類：刀身は内反りで、刃闊が明瞭につく。把頭は断面扁平で長方形もしくは台形のもの (67 ~ 70・73・76 ~ 81・92)。

C 類：刀身は内反りで、刃闊が明瞭につく。把部は断面楕円形で把頭は逆台形のもの。(74・75)

D 類：刀身は内反りで、刃闊が不明瞭だが、把部と刀身との区別がされる。刀身の幅が広く、把頭は扁平で略球形状のもの (71・72)。

64 は原礫面を残す。2 は凝灰岩製の未成品である。側面に剥離痕を残す。70 は把部に弧文を施す。71 は数少ない完形品で刃部に數箇所刻みを施す。74・75 は断面楕円柱形の把部で、把頭部が逆台形になる。76 ~ 78 には断面扁平で台形の把頭部である。80・81 には沈刻線が入る。81 は S 字状入組

文で、近隣では宇鉄遺跡に類例がある。83の棟は把頭部側面に玉抱き三叉文が施される。85は長方形の把頭部のみで刀身を欠くが類例から直刀状をなすとみられる。87・89・90は直刀状である。88の刃先は細いのに対し、89～91の刃先は方形である。92の刀身は内反りで刃間が明瞭につく。

d. 小型石棒（93～96）

長さ10cm未満の全面研磨された石棒である。遺構外・集中区外で4点出土した。93は両端に沈刻線を巡らす。95は柱状で端部が細い。縱方向に丁寧に研磨される。

e. 分布

石棒B類はX=100,Y=74で第1遺物集中区付近、石棒C類はX=100,Y=74,X=98,Y=104ほか、第1遺物集中区・第2西遺物集中区付近、石棒D類はX=130,Y=66～68で第6西遺物集中区付近に分布する。石劍はX=90～92,Y=102～104の第2西遺物集中区、およびX=84～86,Y=90の第5遺物集中区付近に分布する。石刀A類は、X=98,Y=118の第2遺物集中区・東およびX=122～126,Y=112の第6東遺物集中区付近に分布する。石刀B類はX=98,Y=54のSX01付近およびX=130,Y=72～74の第6西遺物集中区付近、石刀C類はX=100,Y=60のSX01付近およびX=134,Y=72の第6西遺物集中区付近、石刀D類はX=92～94,Y=102～104の第2西遺物集中区付近に分布する。

第1遺物集中区付近には石棒B類・C類、第2西遺物集中区付近には石棒C類・石劍・石刀D類、第2東遺物集中区付近には石刀A類、SX01付近には石刀B類・C類、第5遺物集中区付近には石劍、第6西遺物集中区付近には石棒D類・石刀B類・C類、第6東遺物集中区付近には石刀A類という分布差があり、各集中区の時期差を反映していると考えられる。

(4) 石冠（図III-4-5-7-97～101）

SX01で2点、集中区で2点、遺構外・集中区外で5点の計9点出土した。湾曲した体部中央に突起をつけるタイプと、三角柱状の扁平なタイプに2区分される。97～101は湾曲した体部中央に突起をつけるタイプである。石材は整形加工しやすい安山岩のほか、他の器種では少ない砂鉄や緑色凝灰岩を用いる。97には側面と底部に敲打による凹痕がある。砂鉄製で比重が大きい。98は底面に凹部を作り出す。100は安山岩製でC字文を施す。101は三角柱状の扁平なタイプである。

分布はX=82～84,Y=114～118に2点あり、第2東遺物集中区付近に分布する。

(5) 軽石製石製品（図III-4-5-8-102）

遺構外・集中区外で1点出土した。102は左右上下に穿孔がある。沈刻線を巡らす。

(6) 有孔石製品（図III-4-5-8-103～114・図III-4-5-9-124）

緑色凝灰岩やヒスイなどの玉類と異なる材質が主体で、全面が研磨整形されない意図的に穿孔された石製品である。集中区内3点、遺構外・集中区外13点の計16点出土した。石材は穿孔しやすい砂岩や凝灰岩が多いが、比較的硬質なメノウや頁岩もある。穿孔の位置と数で3区分した。

中央単孔：素材の中央に一ヶ所穿孔されたもの。5点。（103・105～108）

垂飾形單孔：素材の一方に一ヶ所穿孔されたもの。4点。(104・109・110・124)

垂飾形双孔：素材の一方に二ヶ所穿孔されたもの。ボタン状石製品に類似する。4点(111～114)

中央单孔である103・105～108は自然礫面の凹みにより厚さが薄くなった箇所を使って穿孔する。103は円板状礫が用いられるほかは不定形礫が用いられる。105には線刻がある。垂飾形單孔である。104は円板状礫が用いられる。109・110は不定形礫で、109はメノウが用いられる。111～114は垂飾形双孔である。111は中央の孔から放射状に沈刻線が入る。112・113は不定形礫に穿孔される。124は長さ20cm以上の大型品で垂飾形單孔に属する。安山岩の大型剥片の一端に穿孔されたものであるが、穿孔のみで、研磨や調整剥離などそのほかの加工は行われていない。

(7) ボタン状石製品(図III-4-5-8-115～117)

断面が湾曲し双孔のある石製品である。SK内1点、SX01内1点、遺構外・集中区外4点の計6点出土した。有孔石製品と異なり、硬質な頁岩が用いられる。115・116は皿状の自然礫に穿孔される。117は工字形に整形された素材に穿孔される。

(8) 環状石製品(図III-4-5-9-118・119)

用途不明の環状の石製品を一括した。118・119とも計2.5cmほどの自然礫に大きな穴をいれただけで、表面は研磨されない。

(9) 棒状石製品(図III-4-5-9-120・121)

用途不明の棒状の石製品を一括した。遺構外・集中区外で2点出土した。120は多孔質安山岩製で上端部のみの破片である。石棒もしくは石冠の一部と考えられるが、本調査では類例が見いだせなかつたためここに掲載した。121は粘板岩を断面方形に研磨した後、端部に沈刻線を巡らす。小型石棒に類するとみられるが、断面を方形に研磨する点から石棒とは異なる器種と判断した。

(10) 岩偶(図III-4-5-9-122)

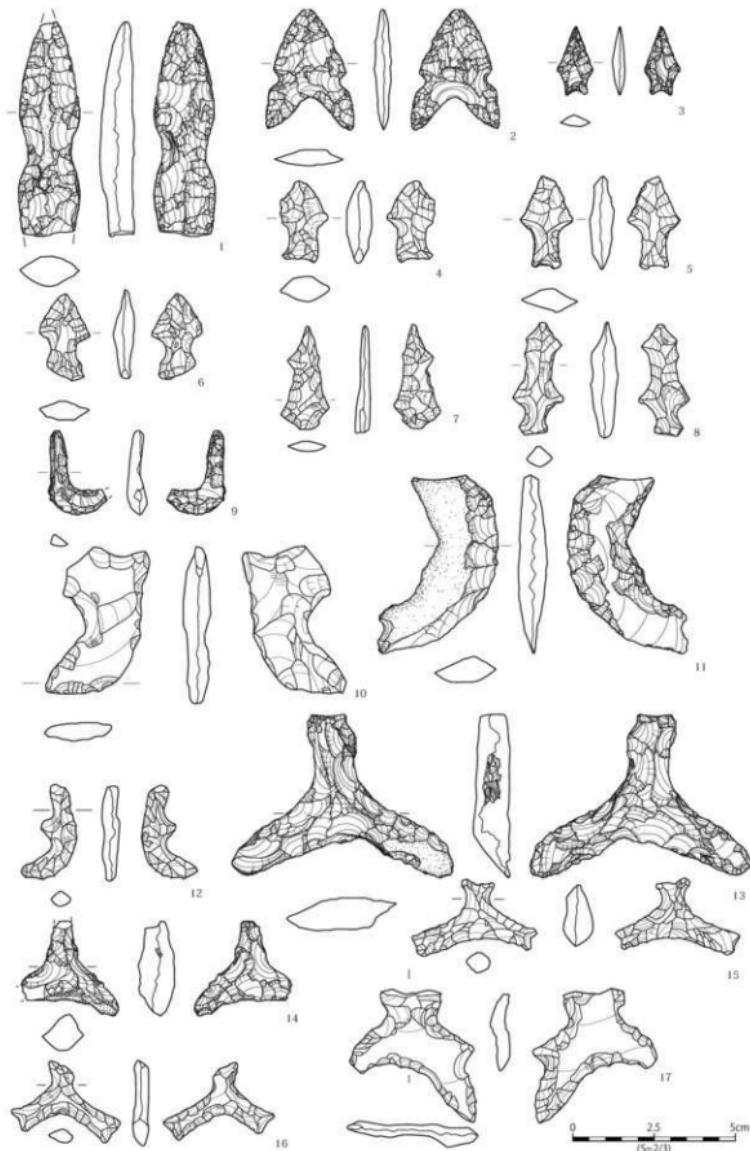
遺構外・集中区外で1点出土した。122は岩偶の片腕から胴部の破片と見られるが、全体形の復元が困難である。凝灰岩製で背面肩部に重弧文、胴部に縱方向の線刻が施される。

(11) 魚形石製品(図III-4-5-9-123)

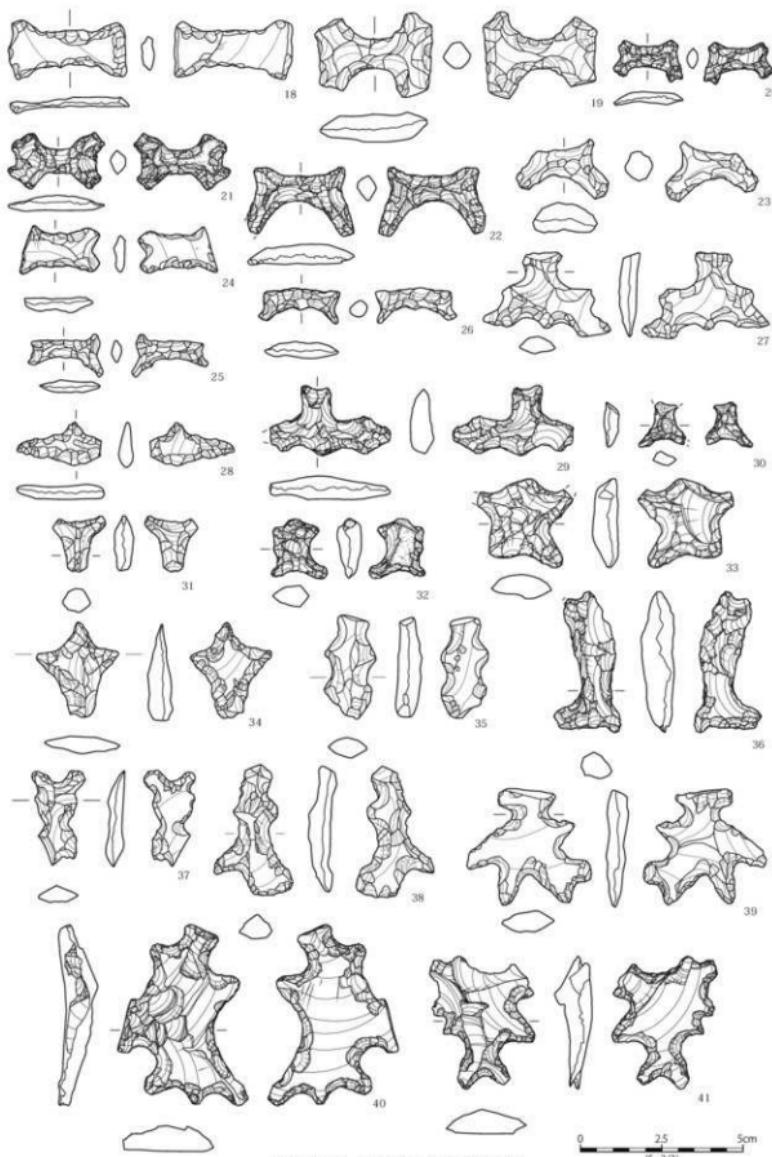
釣りの擬餌と推定されている石製品である。1点出土した。凝灰岩製で長さ14cm、厚さ2.5cm、重量143.5gである。上部に3本の沈刻線をいれる。

(12) 円板状石製品(図III-4-5-10-125・126)

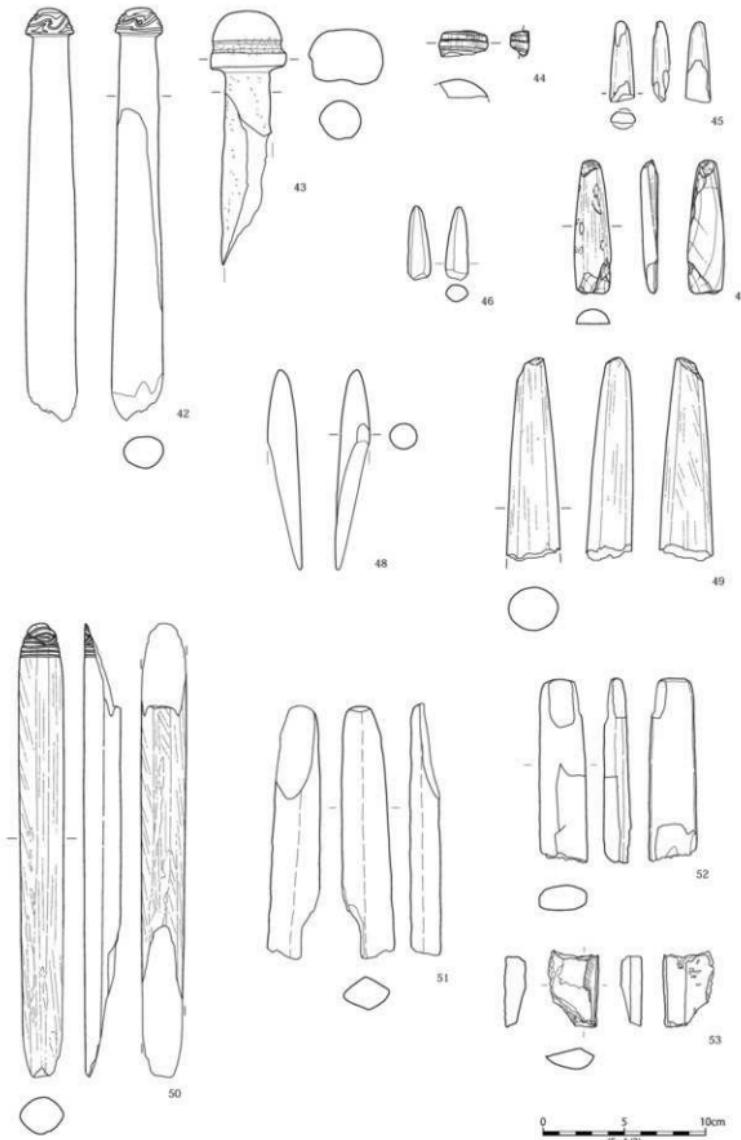
2点出土した。他の遺跡に比べると数が少ない。125は円板型の礫の表面に円形の沈刻線を施す。縄文時代晩期に多い縁辺を剥離して円形に整える円板状石製品とは異なる。126は円盤状礫の縁辺を粗く剥離する。



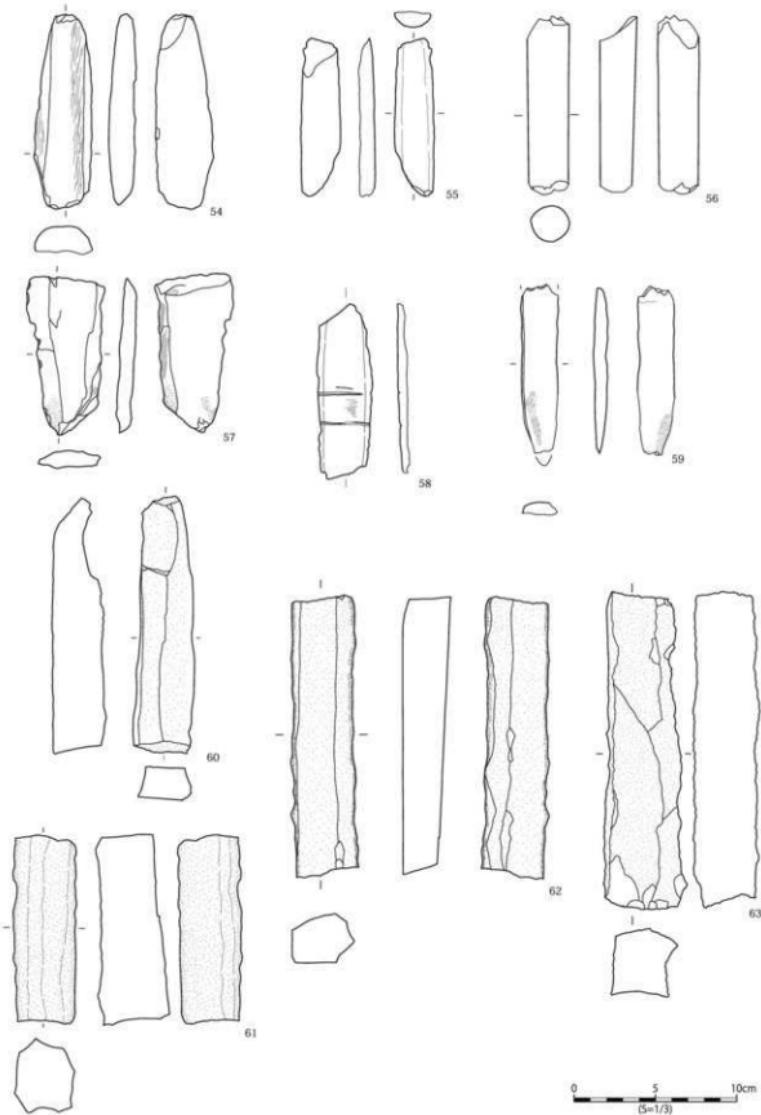
図III-4-5-1 遺構外出土異形石器(1)



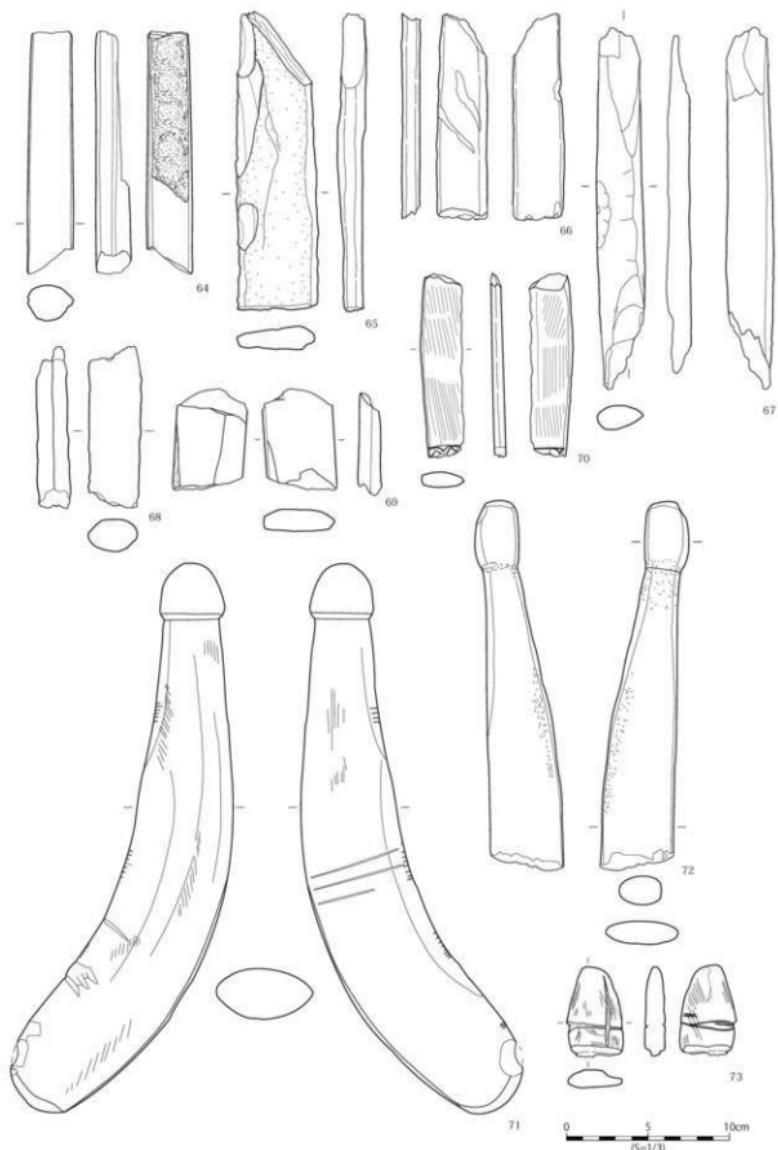
圖III-4-5-2 遺構外出土異形石器(2)



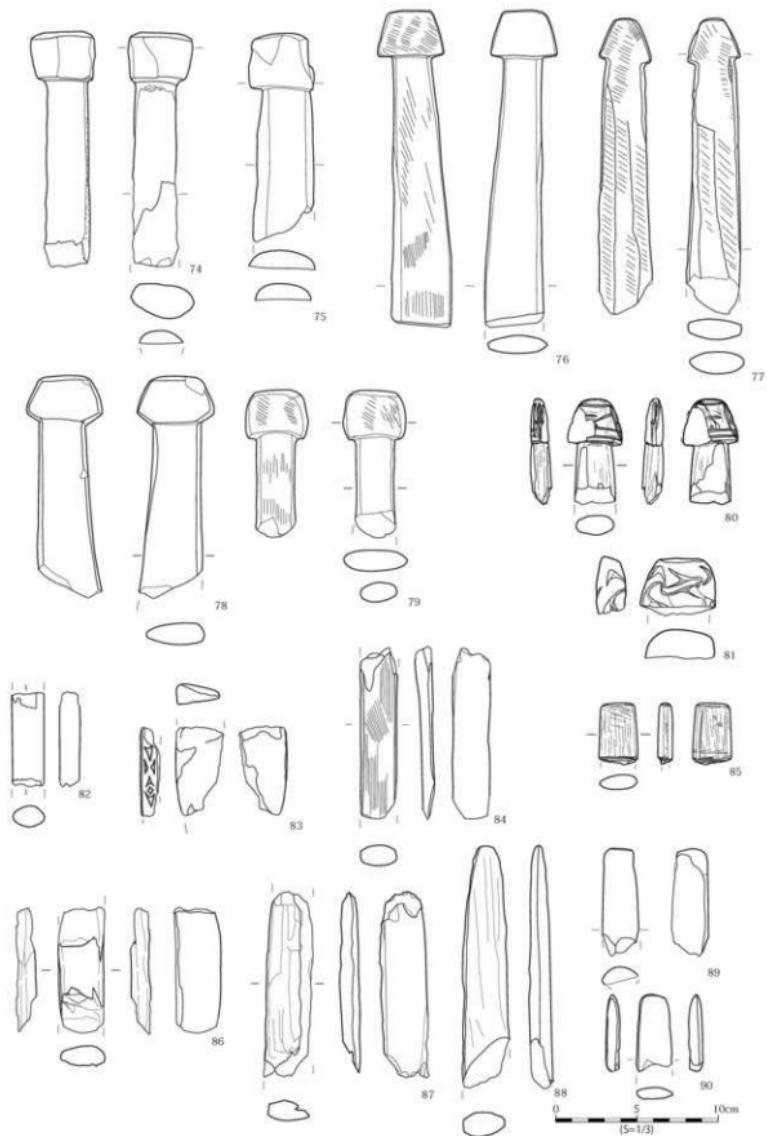
図III-4-5-3 遺構外出土石剣・石棒(1)



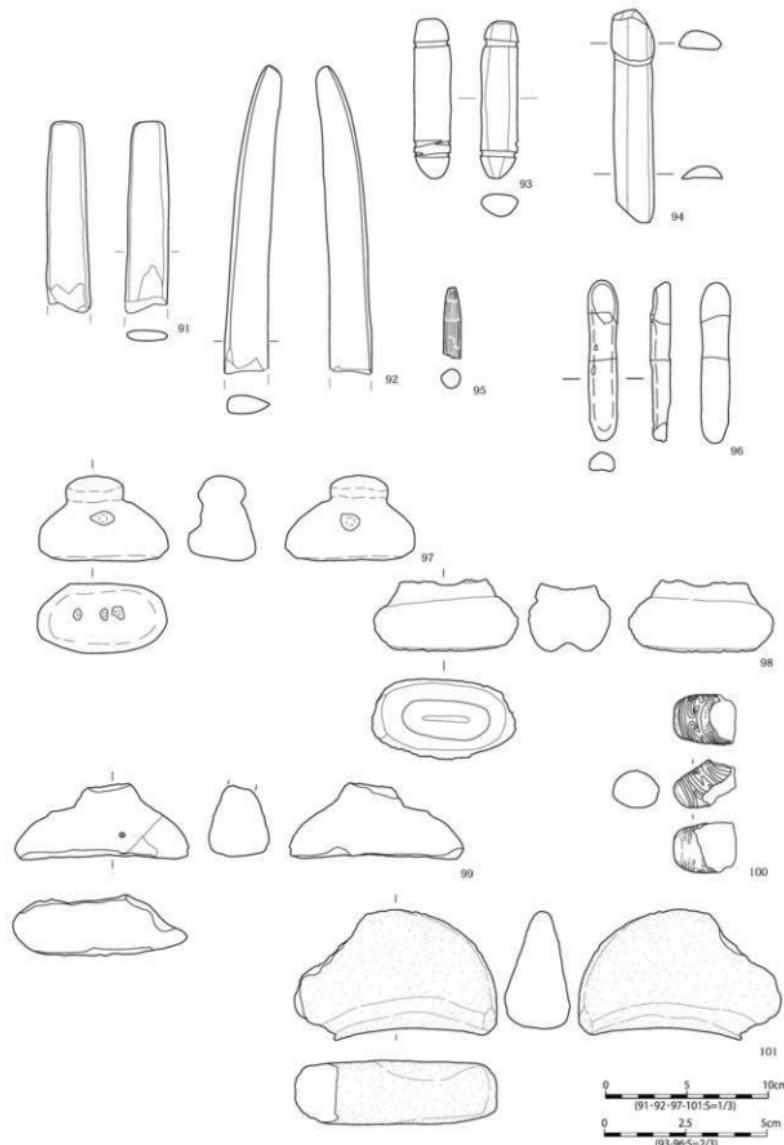
図III-4-5-4 遺構外出土石棒(2)



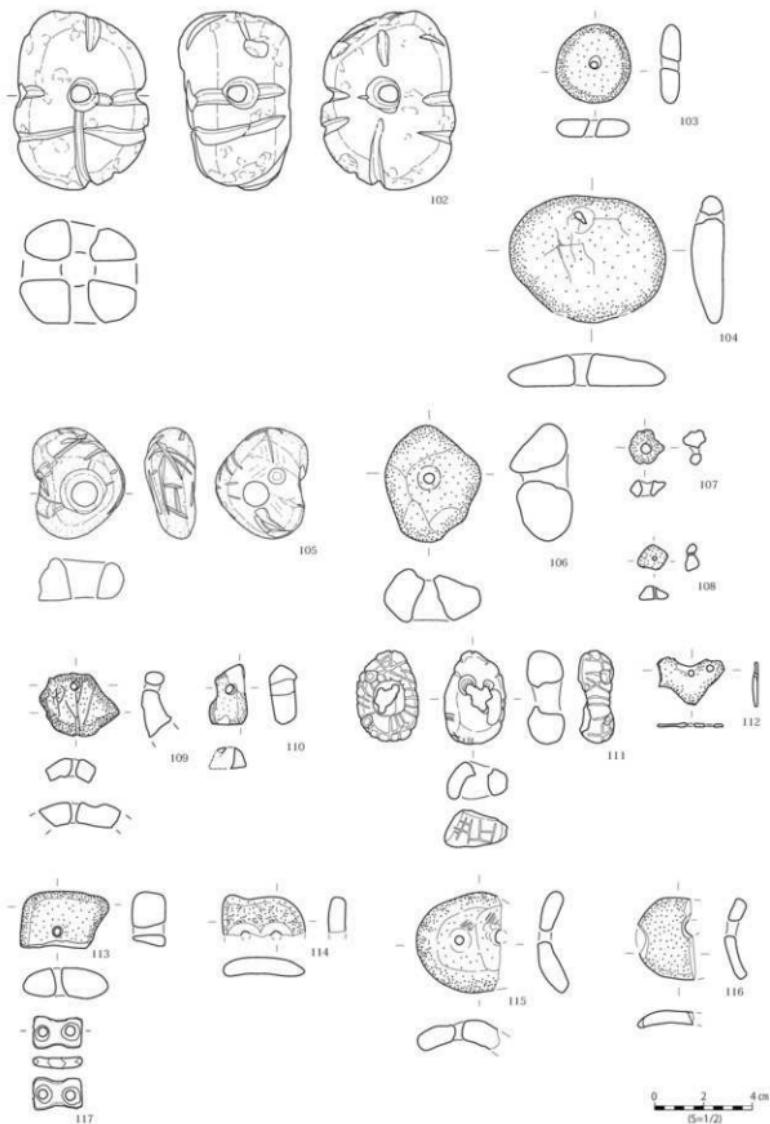
図III-4-5-5 遺構出土石刀(1)



図III-4-5-6 遺構外出土石刀(2)



図III-4-5-7 遺構外出土石刀(3)・石冠



圖III-4-5-8 遺構外出土輕石製石製品・有孔石製品

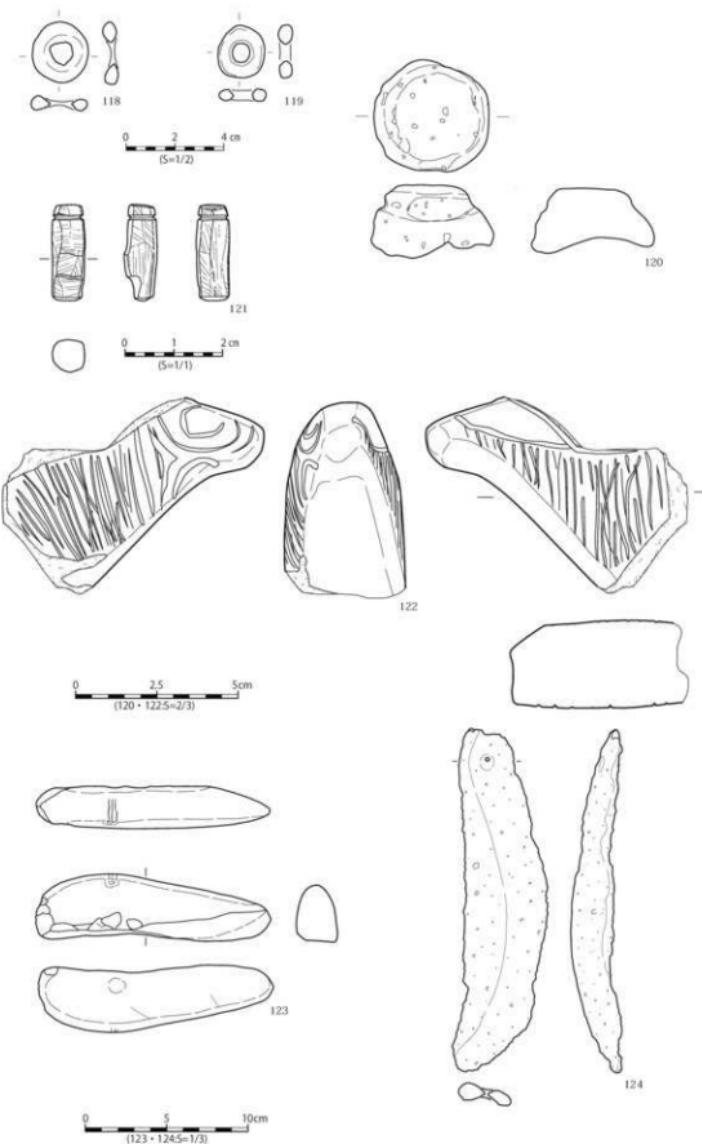


図 III-4-5-9 遺構外出土石製品



図III-4-5-10 遺構外出土円板状石製品・線刻礫・岩版

(13) 線刻礫 (図III-4-5-10)

研磨がなく自然礫面に沈刻線がみられる資料である。SX01で2点、遺構外・集中区外7点ある。127は横方向の刻線がある。128は細く鋭い斜め方向の刻線がある。129～131は縦方向の刻線がある。132は十字方向の刻線、133はランダムな方向の刻線がある。

(上條信彦)

6. 土 製 玉 類

(1) 概要

土製玉類（土玉）は丸玉、管玉、勾玉、異型玉、垂飾の5種がある。丸玉は、球状やラグビーボールのような長球状の礫の短軸方向に穿孔面のあるもの、管玉は長球状や中央が膨らんだ柱状の礫の長軸方向に穿孔面のあるもの、勾玉は平面形がC字状やコの字状を呈すものとした。また、丸玉・管玉・勾玉のどれにも属さない穿孔のある石製品を垂飾とした。丸玉187点、管玉62点、勾玉51点、異型玉11点、垂飾74点の計385点検出した（表III-4-6-1）。

表III-4-6-1 土製玉類・石製玉類の地区別・種別出土数表

	SK-SF内 ブロック	玉 SK01	第1適物 集中区	第2適物 物集中区	第3適物 物集中区	第4適物 物集中区	第5適物 物集中区	第6適物 物集中区	第6適物 物集中区	集中区外	計
土製丸玉	9	4	3	3	17	1	1			1	148 187
土製管玉				8	9						43 62
土製勾玉	4			1	6		1				39 51
土製異形玉								1		10	11
土製垂飾	37	1		1	1			2			32 74
土製玉類計	52	5	3	13	33	1	2	0	2	1	0 272 385
石製丸玉（原石）	20			5	74	27	70	2	1	56	18 10 126 3,227 4,136
石製丸玉（未成品）	8			7	79	3	42	1	1	30	11 9 54 1,162 1,407
石製丸玉（成品）	317	12	8	13	3	15			9	3	31 363 774
石製管玉（未成品）									1		18 19
石製管玉（成品）	3	1			2				2		13 21
石製勾玉（未成品）									1		3 4
石製勾玉（成品）	8			2	2	2					17 31
石製垂飾（未成品）						1		1			19 21
石製玉類計	2				1						1 22 26
計	410	18	23	181	71	131	5	2	102	33	20 212 5,616 6,824

分析に際しては、遺構内を含む全ての資料を対象に分析を行った。丸玉、管玉、異形玉は縱横の長さと厚さ、重さを計測した。うち勾玉と垂飾は穿孔のある方向を上とし、計測を行った。

(2) 分類

土玉及び土製勾玉は樋口清之『垂玉考』(1940)に基づいて分類した。外形、断面形態、装飾性により以下に分類した（図III-4-6-1、以下III-4-6は省略。）。

I類：土製丸玉。球形、円形、平形を呈すもの。187点。

I a類：小玉。主に球形、円形を呈すもの。125点。（1～4・20～23）

I b類：平玉。平形を呈するもの。61点。（5～19・24～26）

I c類：そろばん形。菱形や算盤玉に近い形のもの。1点。（28）

II類：土製管玉。管状を呈するもの。62点。



図III-4-6-1 土製玉類の分類模式図

- II a 類：円筒形の管状を呈した管玉。22 点。(27・29～31)
- II b 類：棗玉。側面が中脛らみするもの。36 点。(32～35)
- III 類：土製勾玉。湾曲しており、穿孔のあるもの。51 点。
- III a 類：牙形。歯牙の形を呈するもの。20 点。(37・38・40・42・43・46・47・49・51・55・47・59～63・66)
- III b 類：くし形。櫛のように湾曲し端部に刻み目のあるもの。16 点。(45・52～54・67・69)
- III c 類：L 字形。L 字に湾曲するもの。15 点。(36・39・41・44・48・50・56・58・68・70)
- IV 類：異型玉。装飾性が有り、また I ～ III 類の中にあてはまらないもの。11 点。(71～75)

土製垂飾は川添和暉『縄文時代後晩期の土製垂飾(玉類)について』(2015)に基づいて分類した。立体的形状や断面形態により以下のように分類した(図 III-4-6-2)。

- I 類：牙形をなすもの。3 点。(78)
- II 類：楕円形をなすもの。13 点。
- II a 類：楕円形で一方に穿孔のあるもの。5 点。(76・77・79・80・83)
- II b 類：不定形で中央に穿孔のあるもの。8 点。(81・82)
- III 類：円盤形をなすもの。4 点。
- IV 類：三叉形をなすもの。2 点。(84・85)
- V 類：分銅形をなすもの。50 点。(86～98)

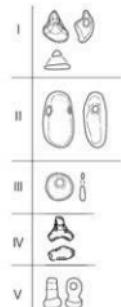


図 III-4-6-2 土製垂飾の分類模式図

25・26 には文様がある。26 には工字状文が施される。22 は本調査最大級の土玉で径 2cm を超える。42・43・48・55・56 は文様のある勾玉である。43 には三叉文が施される。48 の上端部には十字の沈線がある。55 には列点文、56 には S 字状文が施される。49～56・59～70 の断面は平坦で上下に刻み目を施す。65 の下端部には十字の沈線が施される。71～73・75 は複数の沈線を巡らす。74 は十字の沈線が巡る。74・75 の沈線には赤色顔料が残る。76～85 は径 1cm 以上の大型の垂飾である。82 は穿孔途中である。84・85 は三叉形の垂飾である。86～98 は長さ 1cm 以下の小型の分銅形垂飾で 96～98 には赤色顔料が残る。SK206 からは 37 点まとめて出土した。

(3) 土製玉類の大きさ

形態ごとに大きさをみると、丸玉(I 類)について、I a 類は径 3.8～22.6mm、平均 6.5mm、重さ 0.1～9.6g、I b 類は長さ 2.5～6.0mm、平均 5.6mm、重さ 0.1～1.0g である。I a 類のほうが大きい。

管玉(II 類)については、II a 類が長さ 15.0～25.0mm、重さ 1.0～2.0g、II b 類が長さ 10.0～14.0mm、重さ 0.4～1.0g である。

勾玉(III 類)については、III a 類が長さ 9.5～26.5mm、重さ 0.3～3.2g、III b 類が長さ 14.0～25.5mm、重さ 0.3～2.0g、III c 類が長さ 15.0～18.5mm、重さ 0.3～1.0g である。土製勾玉の大きさは分散する傾向にある。

IV類は長さ 6.5 ~ 12.5mm、重さは 0.1 ~ 1.0g に集中する。

重さは、全分類 0.1 ~ 2.0g が半数以上を占め、軽い。

土製垂飾について、形態ごとにみると、楕円状をなす II a 類は半数が長さ 15mm、幅 12 ~ 19mm に分布する。柱状の II b 類は長さ 13 ~ 18mm、幅 8 ~ 10mm の範囲に集中する。II a 類と II b 類の重さは類似する。分銅形の V 類は長さ 8 ~ 10mm、幅 3 ~ 7mm、平均値 1.0g 以下と、小型品で軽い。

(4) 付着物

赤色顔料が丸玉 70 点 (30%)、異形玉 3 点 (27%)、垂飾 12 点 (35%) とおおよそ 3 割に付着する。特に、SK206 や玉プロック 2 といった保存環境の良い遺構の丸玉は、その全てに赤色顔料が塗布される。したがって、風化などで失われたものを含めると実際には多くの玉類が彩色されたとみられる。

(5) 分布

概要

土製玉類は、土坑内から丸玉 9 点、管玉 2 点、土製勾玉 4 点、土製垂飾 37 点の計 52 点が出土した。SK01 では丸玉 3 点のみと、他の遺物の豊富さに比べて、数少ない。土製垂飾は遺構外が多い。遺物集中区分では、第 1 遺物集中区と第 2 西遺物集中区に偏る傾向がある（表III-4-6-1）。

a. 遺構内出土状況

SK28 から小玉 1 点、SK57 から小玉 1 点、管玉 1 点、SK65 から管玉 1 点、SK73 から平玉 3 点、土製勾玉 3 点の計 6 点、SK113 から平玉 1 点、SK115 から小玉 1 点、平玉 1 点、勾玉 1 点の計 3 点、SK157 から丸玉 1 点、SK206 から小型垂飾 37 点が出土した。このように土坑内からの出土は勾玉 1 点が含まれる土坑が多い一方、SK 206 のように垂飾が多数検出される例がある。

そのほか、玉プロック 1 から丸玉 1 点、玉プロック 2 から土製垂飾 1 点、丸玉 2 点、平玉 1 点の計 5 点が出土した。

b. 遺構外出土状況

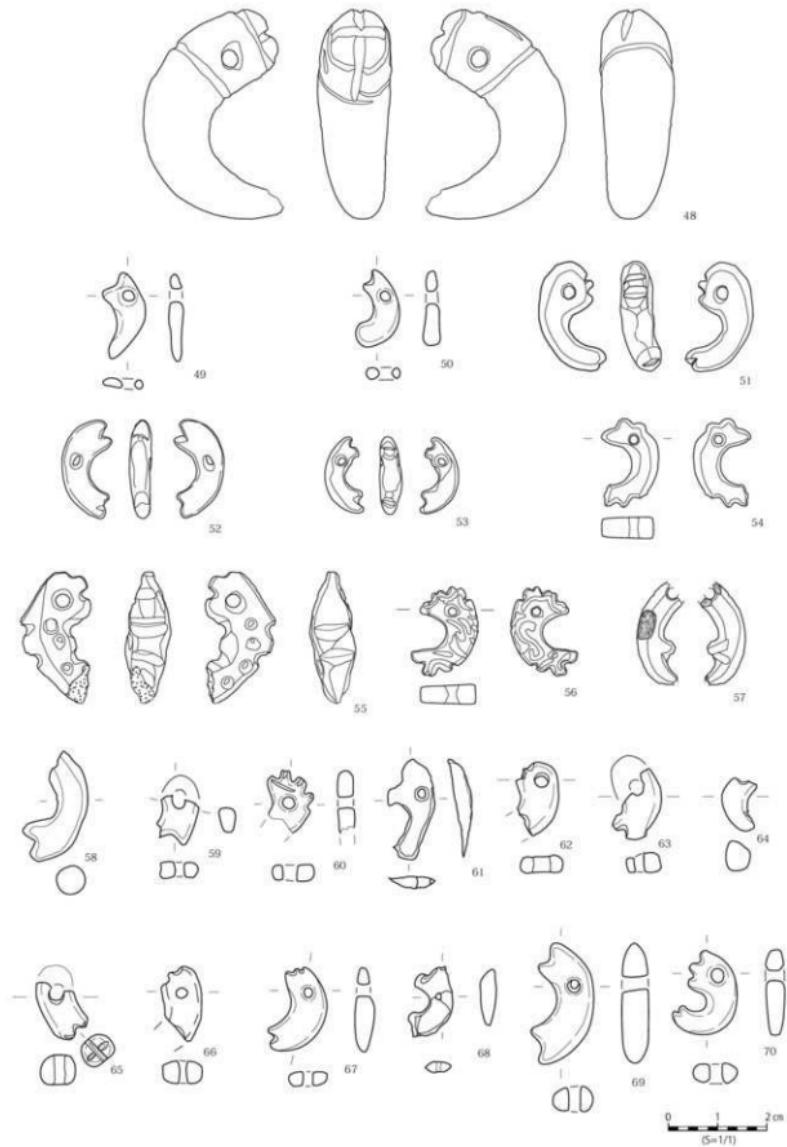
土玉及び土製勾玉は X=82 ~ 142, Y=32 ~ 124、盗掘土坑内からの検出が多い。このうち X=80 ~ 100, Y=80 ~ 120 に多数の形態が集中する。ここからは土玉 I 類、II a 類、III 類がまとまって出土する。一方、X=120 ~ 130, Y=60 ~ 80 には土玉 I a 類、I b 類、II b 類、III 類がまとまって出土する。土玉 IV 類はこれら 2 つの集中範囲からずれる。

土製垂飾は X=88 ~ 164, Y=42 ~ 110 の幅広い範囲に散布し、特定のグリッドに集中する傾向はない。

先述の土製耳飾や環状土製品を含めた装身具全体の傾向をみると、土製玉類の I 類、II 類、III 類が多い X=80 ~ 100, Y=80 ~ 120 では、環状土製品が分布する。環状土製品は I a 類、II a 類、II b 類が含まれる。土製垂飾 II・IV 類、土製玉類 I a・I b・II b・III 類が多い X=120 ~ 130, Y=60 ~ 80 では土製耳飾と土製垂飾が分布する。特に土製耳飾は II 1 類、III 類、IV b1 類、IV b2 類が多い。このように、土製品の組み合わせに分布差が認められる。



図III-4-6-3 遺構外出土土製玉類(1)



図III-4-6-4 遺構外出土土製玉類(2)



図III-4-6-5 遺構外出土土製玉類(3)

7. 石 製 玉 類

(1) 概要

玉類は副葬品とみられる土坑出土資料だけでなく、その製作に関わる資料が多数出土した。ここでは、本遺跡で大量に出土した丸玉、管玉、勾玉、垂飾およびその他の石製玉類について述べる。

本調査では、遺構内 391 点、集中区内・遺構外 6,048 点、計 6,439 点の石製玉類が検出された。種類別の内訳は丸玉 6,317 点（遺構内 377 点、集中区内・遺構外 5,940 点）、5,449.1g、管玉 40 点（遺構内 4 点、集中区内・遺構外 36 点）、勾玉 35 点（遺構内 8 点、集中区内・遺構外 27 点）、垂飾 47 点（遺構内 2 点、集中区内・遺構外 45 点）である。

素材は緑色凝灰岩、珪質頁岩、ヒスイ質、オンファス輝石、蛇紋岩、滑石、琥珀、デイサイト、砂岩、流紋岩、高師小僧のほか、石材以外では骨があり、多種にわたる。なお、ヒスイ「質」を称するには石材の判別は主に肉眼のみで行っており、厳密にヒスイという確証が得られないためである。丸玉においては、全体の 86% が緑色凝灰岩で原石、未成品が九割以上を占める。なお、未成品は研磨の有無を問わず、穿孔済みの資料を完成品とした。原石、未成品を除いた完成品は丸玉 759 点（原石・未成品を合わせた合計の 12%）、管玉 21 点（53%）、勾玉 4 点（89%）、垂飾 26 点（55%）にのぼる。

形態別の石材の内訳は、丸玉が緑色凝灰岩 5,726 点、珪質頁岩 390 点、ヒスイ質 119 点、オンファス輝石 19 点、蛇紋岩 11 点、琥珀 4 点、滑石 4 点、その他の石材 40 点である。管玉が緑色凝灰岩 36 点、ヒスイ質 4 点である。勾玉が緑色凝灰岩 28 点、ヒスイ質 5 点、蛇紋岩 2 点である。垂飾が緑色凝灰岩 32 点、ヒスイ質 2 点、その他の石材 13 点である。周辺での採集可能な緑色凝灰岩が圧倒的に多いが、新潟県姫川流域で採集されるヒスイ質や、北海道産のオンファス輝石と蛇紋岩、岩手県久慈産の可能性が高い琥珀が一定量含まれる点が注目される。特に勾玉はヒスイ質や蛇紋岩の割合が高く、形態別の石質の違いがうかがえる。

観察は丸玉については数が非常に多いため、同じ層位・グリッドの玉を一括して重さを計測した。管玉、勾玉、垂飾については長さ・幅・厚さ・重さを計測した。

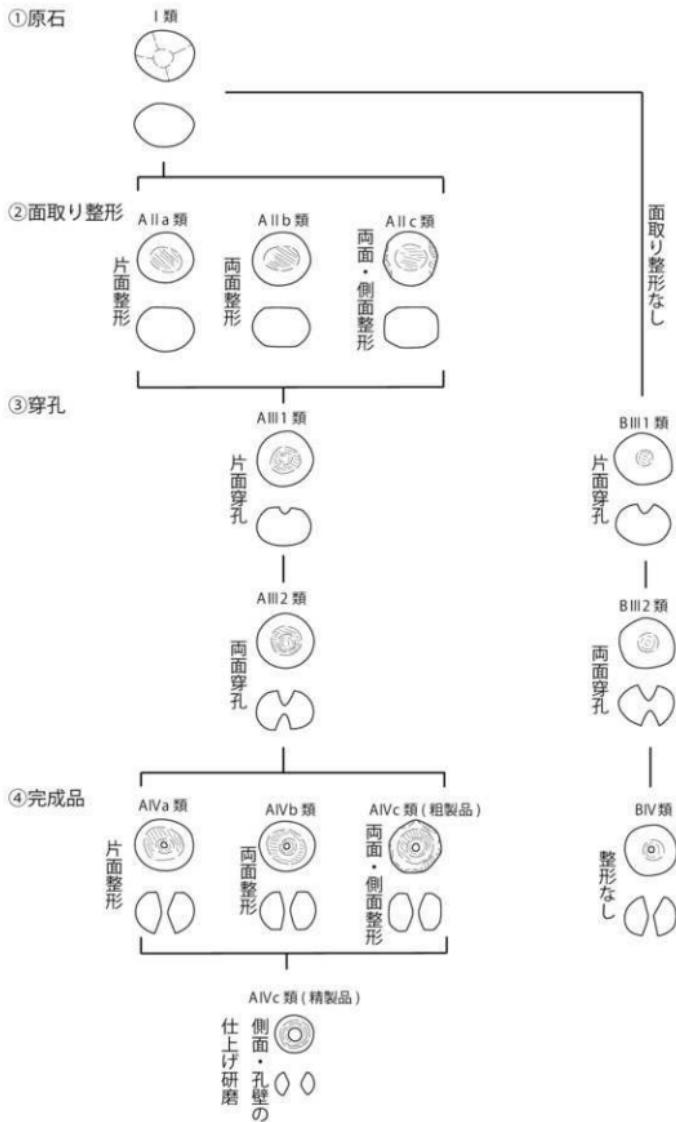
(2) 分類

玉の種類と製作工程に注目して分類した（図III-4-7-1、以下III-4-7 は省略）。玉類は丸玉、管玉、勾玉、垂飾の 4 種ある。

製作工程別には未成品が多数ある緑色凝灰岩製の丸玉・管玉・垂飾を中心に、製作過程で生じる形態によって分類を行った。なお、勾玉に関しては未成品の数が 2 点しかなく、製作技術を明らかにすることが難しいため、工程の分類は行っていない。

A 類・B 類は、研磨による面取り工程の有無を基準に分類した。A 類は面取りが確認できるものや穿孔後の仕上げとして研磨されたもの、B 類は面取りや仕上げ研磨が全く行われないものとした。

I 類・II 類・III 類・IV 類は工程の順序を示し、I は原石、II は面取り、III は穿孔、IV は完成の段階と仮定した。I はまだ人の手が加わっていない玉類の素材とみられるもの、II は孔がなく面取りだけが見られるもの、III は未貫通の孔が見られるもの、IV は孔が貫通するものである。IV 後に研磨によって丸く整形されるものがあり、仕上げ研磨の段階も存在したとみられる。しかし仕上げ研磨が行われないものでも、粗製品として利用されていた可能性があるため、穿孔が完了した時点で完成とみなし



図III-4-7-1 五月女遺跡における緑色凝灰岩製丸玉の製作工程

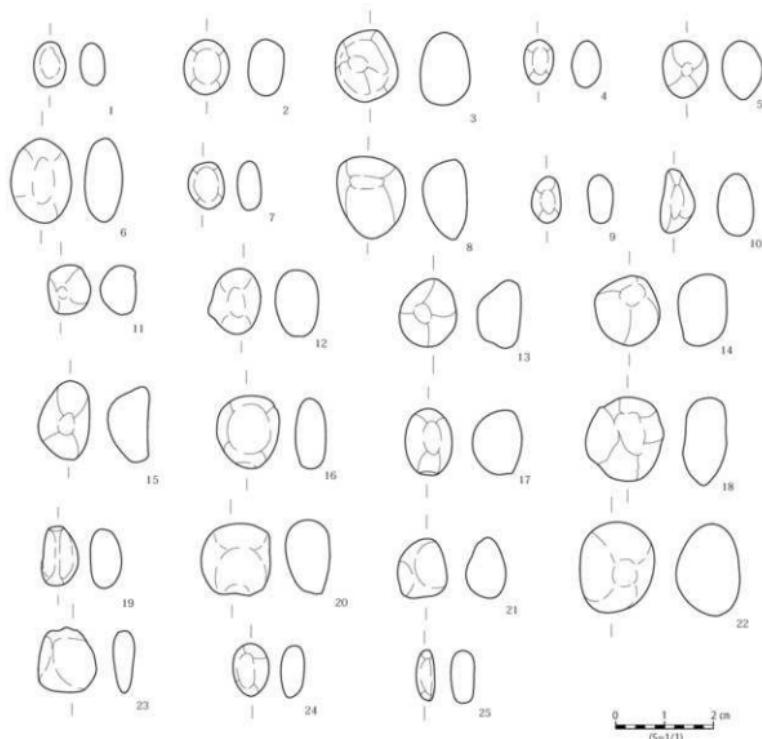
た。なお、I段階目ではまだ加工されないためA類とB類の区別はしなかった。また、B類は面取りが行われないためII段階目は省いた。

a類・b類・c類は施された面取りの位置を分類基準とした。a類は片面だけ平坦になるように面取りされるもの、b類は両面とも平坦面を作出されるもの、c類はa類・b類と同様、平坦面の作出に加えて、側縁部の凹凸を研磨によって整形されるものとした。ただし、素材となる原礫そのものがはじめから平坦面がある場合には、平坦面作出を行わずに側縁の整形のみを行うものもあり、これをc類とした。

1類と2類は穿孔の手順を示す。1類は片側から、2類は両側から孔が穿たれており、なおかつ未貫通のものとした。

以下、製作工程順に分類をまとめる。

I類：原石：面取りや仕上げ研磨がない玉素材。丸玉4,136点（遺構内25点、集中区内・遺構外4,111点）。（1～25・27～36）



図III-4-7-2 遺構外出土石製玉類原石

A類：面取りや仕上げ研磨が施されるもの。

II類：面取りのみが施されるもの。丸玉1,000点、管玉3点、勾玉2点。

A II a類：片面のみ面取りが施されるもの。

丸玉264点（遺構内1点、集中区内・遺構外263点）。（37・38）

勾玉1点（集中区内・遺構外1点）。

A II b類：両面に面取りが施されるもの。

丸玉350点（遺構内4点、集中区内・遺構外346点）。（39～41）

管玉1点（集中区内・遺構外1点）。（71）

勾玉1点（集中区内・遺構外1点）。（101）

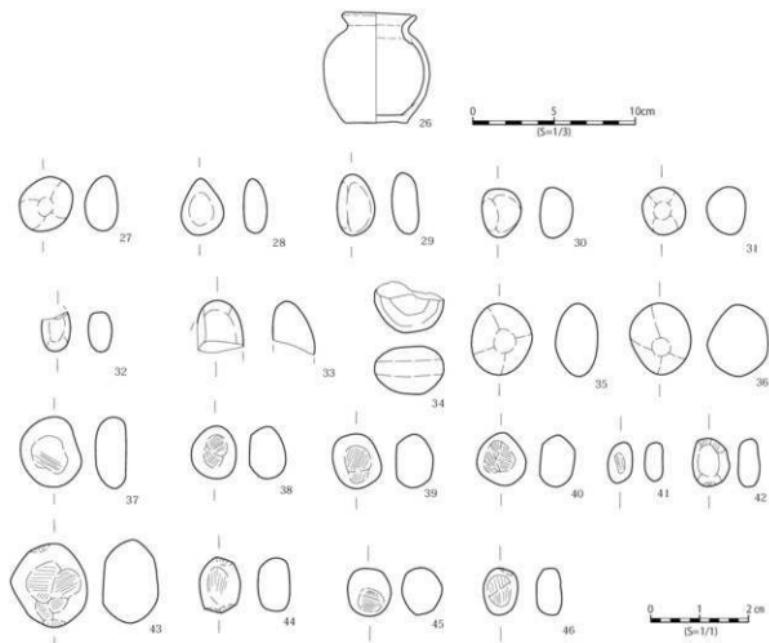
A II c類：両面に面取りが施され、側縁部の凹凸が削り落とされたもの。両面の面取り工程が省略されるものも含む。

丸玉386点（遺構内5点、集中区内・遺構外381点）。（42～46）

管玉2点（集中区内・遺構外2点）。（72・73）

III類：穿孔途中のもの。丸玉284点、管玉11点、勾玉2点、垂飾4点

A III 1類：面取りが施され、片面にのみ未貫通孔のあるもの。



図III-4-7-3 遺構出土玉類(1)

丸玉 96 点 (集中区内・遺構外 96 点)。(47 ~ 50)

管玉 5 点 (集中区内・遺構外 5 点)。(74・75・77・84・85)

勾玉 2 点 (集中区内・遺構外 2 点)。(102・103)

垂飾 2 点 (集中区内・遺構外 2 点)。(123・124)

A III 2 類：面取りが施され、両面に未貫通孔のあるもの。

丸玉 188 点 (遺構内 2 点・集中区内・遺構外 186 点)。(53 ~ 55)

管玉 11 点 (集中区内・遺構外 11 点)。(76・78 ~ 83・86 ~ 88)

垂飾 2 点 (集中区内・遺構外 2 点)。(129・141)

IV類：貫通孔のあるもの。完成品。

A IV a 類：片面のみ面取りが施され、貫通孔のあるもの。

丸玉 18 点 (遺構内 4 点・集中区内・遺構外 14 点)。(60 ~ 63)

管玉 1 点 (集中区内・遺構外 1 点)。(97)

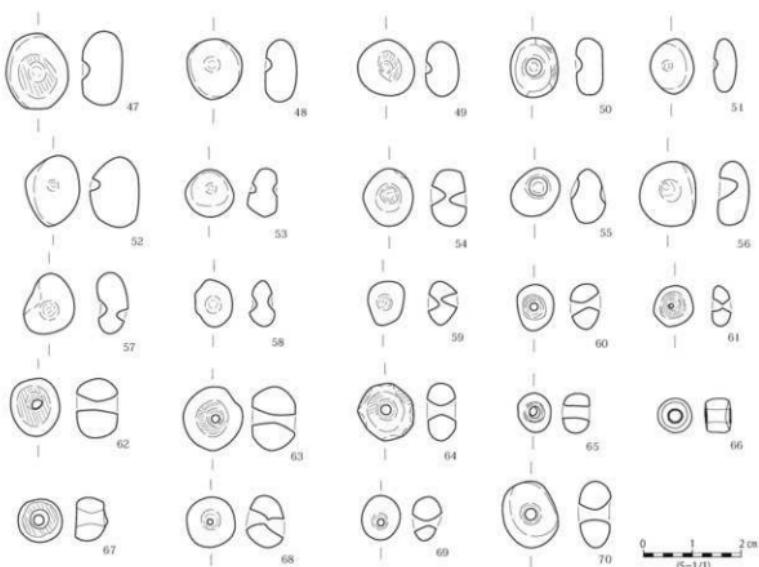
垂飾 2 点 (集中区内・遺構外 2 点)。(160)

A IV b 類：両面に面取りが施され、貫通孔のあるもの。

丸玉 90 点 (遺構内 8 点・集中区内・遺構外 82 点)。(64・65)

A IV c 類：両面に面取りが施され、側縁部の凹凸が削り落とされており、なつかつ貫通孔のあるもの。両面の面取り工程が省略されるものや仕上げ研磨が施されるものも含む。

丸玉 592 点 (遺構内 311 点・集中区内・遺構外 281 点)。(66・67)



図III-4-7-4 遺構外出土玉類(2)

管玉 9 点 (集中区内・遺構外 9 点)。(89・92・93・96・98 ~ 100)
 勾玉 29 点 (遺構内 8 点、集中区内・遺構外 21 点)。(104 ~ 122)
 垂飾 10 点 (遺構内 1 点、集中区内・遺構外 9 点)。(146 ~ 150・155・159・161 ~ 163)

B 類：面取りがないもの。

III 類：穿孔途中のもの。

B III 1 類：面取りがなく、片面にのみ未貫通孔のあるもの。
 丸玉 80 点 (遺構内 1 点、集中区内・遺構外 79 点)。(51・52)
 垂飾 13 点 (遺構内 1 点、集中区内・遺構外 12 点)。(126・128・130 ~ 137・139)
 B III 2 類：面取りがなく、両面に未貫通孔のあるもの。
 丸玉 69 点 (遺構内 1 点、集中区内・遺構外 68 点)。(56 ~ 59)
 垂飾 6 点 (遺構内 1 点、集中区内・遺構外 5 点)。(125・127・138・142)

IV 類：孔が貫通するもの。完成品。

B IV 類：面取りがなく、貫通孔のあるもの。
 丸玉 82 点 (遺構内 16 点、集中区内・遺構外 66 点)。(68 ~ 70)
 管玉 9 点 (遺構内 3 点、集中区内・遺構外 6 点)。(90・91・94・95)
 垂飾 16 点 (遺構内 1 点、集中区内・遺構外 15 点)。(140・143 ~ 145・151 ~ 154・156 ~ 158・164・165)

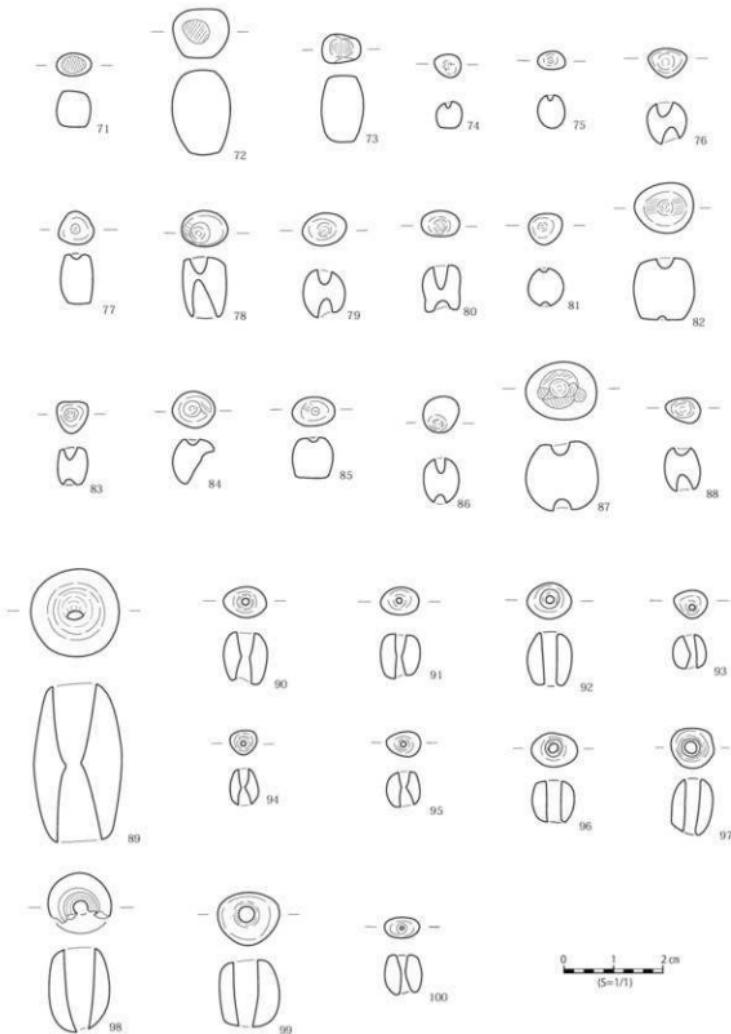
1 ~ 36 は丸玉の玉原石 (I 類) である。18・23 は珪質頁岩でそのほかは緑色凝灰岩である。27 ~ 31 は 26 のミニチュア壺形土器の中に入っていた 56 点の原石の一部である。37 ~ 59 は丸玉の未完成品 (II・III 類) で、面の研磨や穿孔途中のものである。60 ~ 70 は完成品 (IV 類) である。図 67 はオンファス輝石製の精製品で全面が丁寧に研磨される。

71 ~ 88 は管玉の未完成品 (II・III 類) で、面の研磨や穿孔途中のものである。90 ~ 100 は完成品 (IV 類) である。断面形はナツメ玉状に断面長楕円形で中央が膨らむ。89 は長さ 3cm を超える大型品である。98・99 はヒスイ質で緑色凝灰岩製の管玉と異なり、片面からのみで穿孔される。

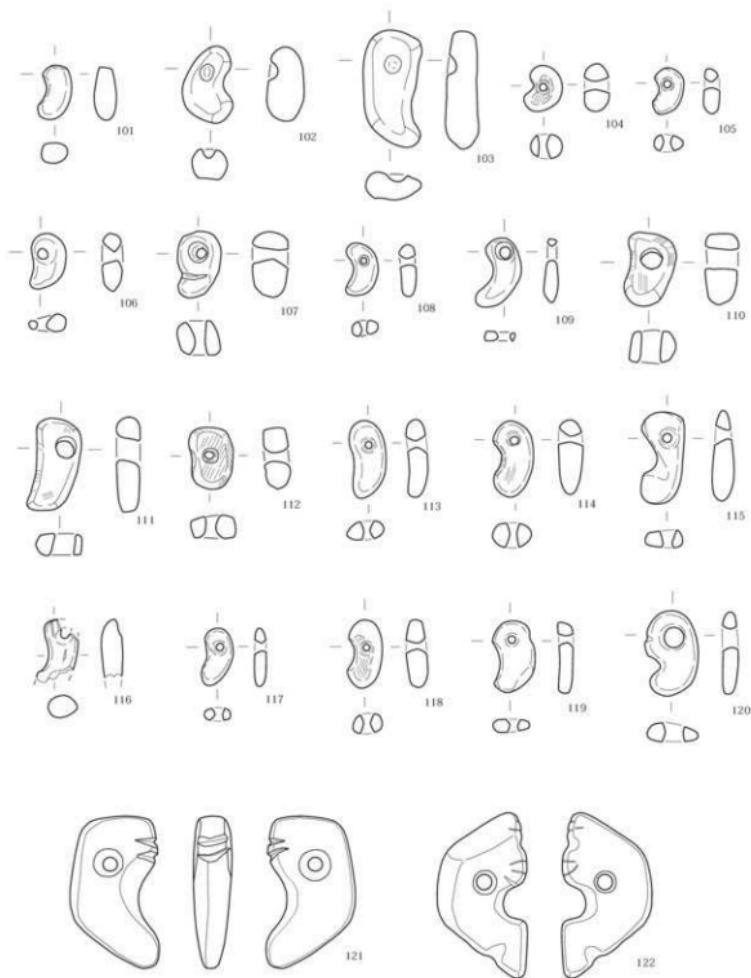
101 ~ 122 は勾玉である。101 ~ 103 は緑色凝灰岩製の未完成品である。104 ~ 122 は完成品 (IV 類) である。120 ~ 122 は上端部に刻みがある。120・122 がヒスイ質であるほかは、全て緑色凝灰岩製である。

123 ~ 165 は垂飾である。123 ~ 139・141・142 は未完成品 (II・III 類) である。127 は面研磨されるが、そのほかは丸玉類と異なり、整形されずに穿孔工程に入る。140・143 ~ 165 は完成品 (IV 類) である。上記のように整形されずに穿孔工程に入るため、完成品も面取りのない B IV 類が多い。B IV 類以外の垂飾は、形態が全面整えられ、文様を刻む精製品である。146 は凝灰岩製で台形状に形を整える。147・148 も凝灰岩製で穿孔部を中心に B 突起と沈刻線を巡らす。149 は頁岩製で穿孔が 2箇所あり、骨角器状である。151 ~ 154 はディサイト、155 は滑石、150・162 はヒスイ質、157・165 は珪質頁岩、161 は砂岩で、石質が多岐にわたる特徴がある。

丸玉をみると、素材 (I 類) が 65%、未完成品 (II・III 類) が 22%、完成品 (IV 類) が 13% を占める。石材別にみると緑色凝灰岩 I 類 3,740 点、II・III 類 1,374 点、IV 類 377 点である。一方、ヒス

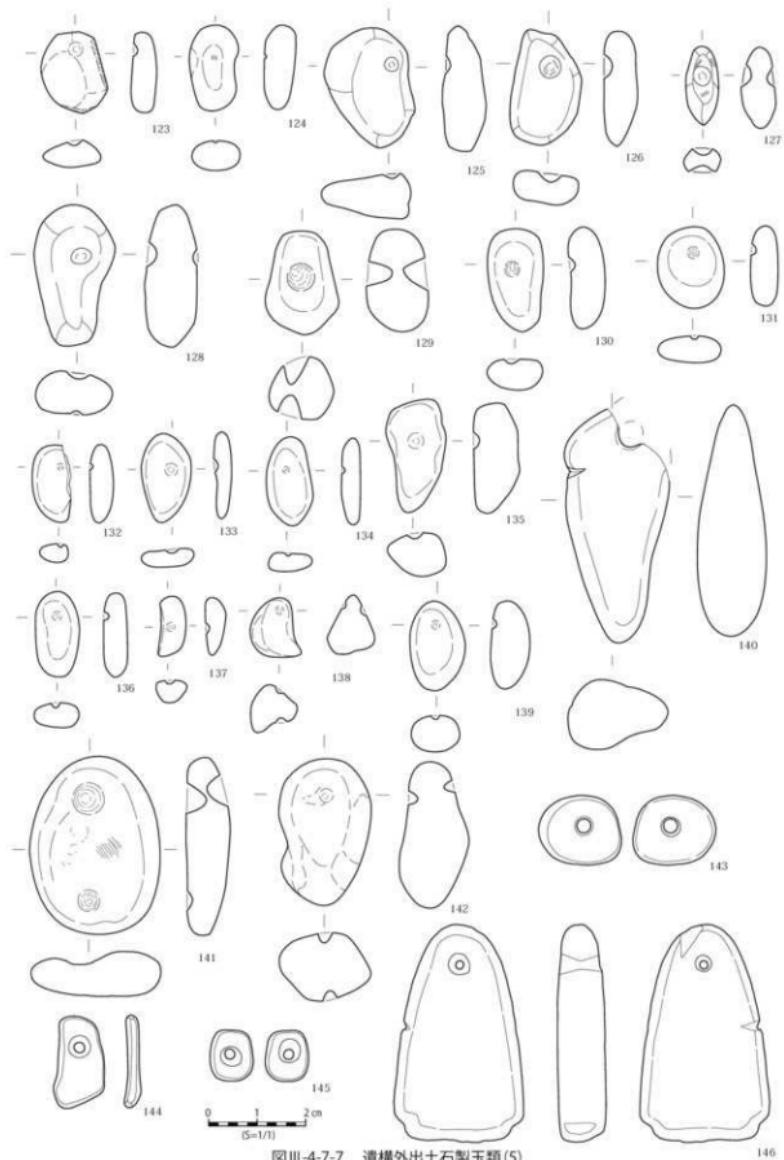


図III-4-7-5 遺構外出土石製玉類(3)



0 1 2 cm
(5=1/1)

図III-4-7-6 遺構外出土石製玉類(4)



図III-4-7-7 遺構外出土石製玉類(5)

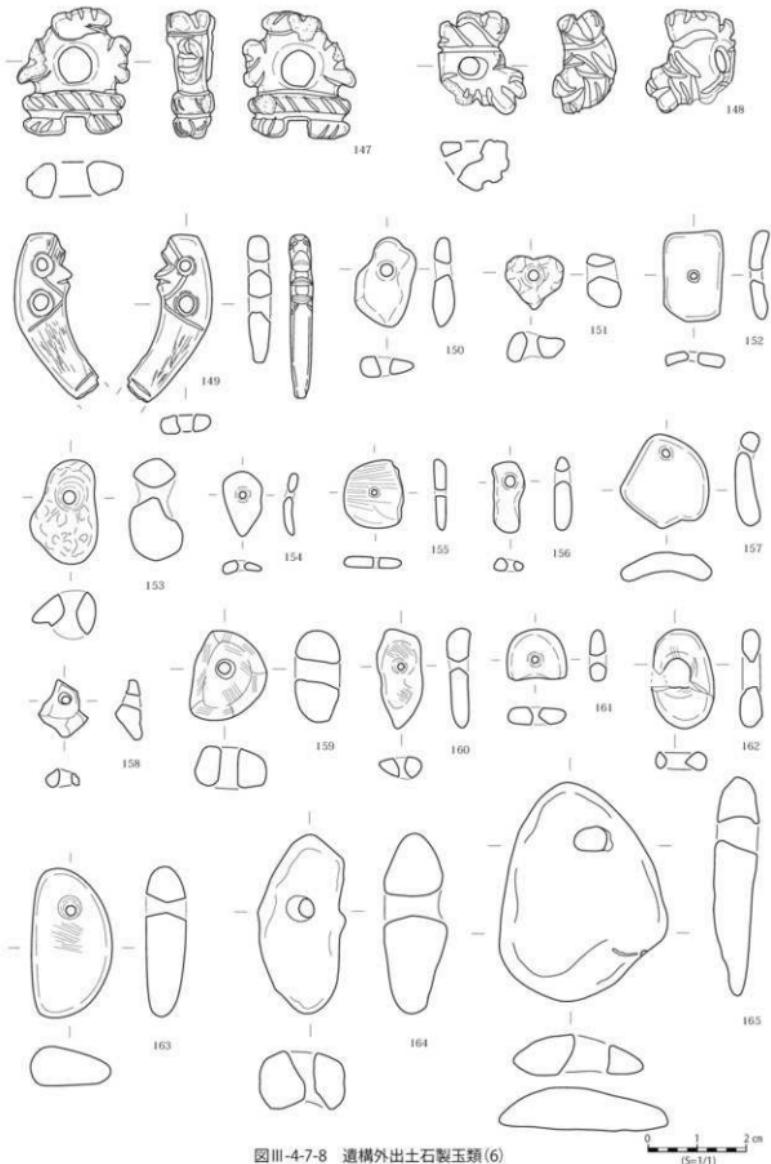


图 III-4-7-8 遗構外出土石製玉類(6)

0 1 2 cm
(S=1/1)

イ質・オンファス輝石・滑石はA IV c類のみでほぼ全てが完成品である。ただし同じ遠隔地性素材である琥珀はI類1点、II・III類2点、IV類1点と原石と未成品がある。同様の傾向は管玉、勾玉、垂飾でもうかがえる。また、ヒスイ質の管玉は片面からの穿孔で孔が空けられ、製作手順も異なる。したがって、完成品のみのヒスイ質・オンファス輝石・滑石製玉類は完成品が本遺跡に搬入されたと考えられる。一方、琥珀は原石が流通した可能性が高い。

(3) 玉類の大きさ

遺構内および集中区の完形品を中心に丸玉408点、管玉38点、勾玉32点、垂飾42点を計測した。丸玉の直径は2.3～25.8mm、平均径8.7mmである。厚さは2～14mm、平均厚5.3mm、重さは0.03～5.4g、平均重0.6gである。製作段階別ではI類(原石)が平均径12.5mm、平均厚7.2mm、平均重1.2g、II・III類(未成品)が平均径11.2mm、平均厚6.4mm、平均重0.8g、IV類(完成品)が平均径7.8mm、平均厚4.9mm、平均重0.5gである。完成品になるにつれ小型化、軽量化が進んでいることが分かる。完成品について石材別の平均をみると、緑色凝灰岩径7.4mm、重さ0.3g、ヒスイ質径8.5mm、重さ0.9g、オンファス輝石径10.2mm、重さ1.2g、蛇紋岩径7.7mm、重さ0.4gと、ヒスイ質製およびオンファス輝石製のほうが緑色凝灰岩製よりも大きくて重い。

管玉の長さは5.5～30.7mm、平均長10.5mm、径は5.4～17.4mm、平均径8.5mmである。平均径は丸玉とほぼ同じである。重さは0.1～9.2g、平均重1.0gである。完成品について石材別の平均をみると、緑色凝灰岩径7.4mm、重さ0.3g、ヒスイ質径8.5mm、重さ0.9g、オンファス輝石径10.2mm、重さ1.2g、蛇紋岩径7.7mm、重さ0.4gと、ヒスイ質製およびオンファス輝石製のほうが緑色凝灰岩製、蛇紋岩製よりも大きくて重い。

勾玉の長さは9.5～33.8mm、平均長16.7mm、幅は6.2～18.5mm、平均幅9.3mmである。厚さは2.6～12.3mm、平均厚5.7mmである。幅に対して厚さはその半分程度であり、断面が長方形あるいは長楕円形になるものが多いことが分かる。重さは0.1～7.3g、平均重1.4gであり、管玉より重い。完成品について石材別の平均をみると、緑色凝灰岩長さ14.7mm、重さ0.8g、ヒスイ質長さ24.5mm、重さ4.6g、蛇紋岩長さ17.3mm、重さ1.2gと、ヒスイ質製のほうが緑色凝灰岩製、蛇紋岩製より突出して大きくて重い。

垂飾の長さは3.1～39.1mm、平均長18.0mm、幅は5.7～27.0mm、平均幅11.6mmである。厚さは2.0～15.0mm、平均厚6.3mmである。幅に対して厚さはその半分程度であり、断面が長方形あるいは長楕円形になるものが多いことが分かる。重さは0.3～12.1g、平均重2.5gであり、管玉や勾玉より重い。完成品について石材別の平均をみると、緑色凝灰岩長さ13.3mm、重さ1.5g、ヒスイ質長さ24.5mm、重さ2.8g、デイサイト長さ18.2mm、重さ2.6gと、ヒスイ質製とデイサイト製のほうが緑色凝灰岩製より突出して大きくて重い。

(4) 遺構内の出土分布

まず、遺構内出土玉類について述べる。丸玉は土坑内及びSF01より345点、SX01より20点、玉ブロック12点、計377点が検出された。管玉は土坑内3点、玉ブロック1点、計3点、勾玉8点と垂飾2点は土坑内より出土した。

a. 丸玉

遺構内における緑色凝灰岩製丸玉出土点数は合計 321 点である。出土点数が最も多い遺構は SK131(159 点) である。SK131 で出土した緑色凝灰岩製丸玉は、破損のため分類できなかったものを除いてすべて完成品で、A IV c 類(152 点) が最も多く、その他には B IV 類(2 点) と A IV a 類(1 点) が出土した。SK131 と同様に完成品が多く出土した遺構には SK71、SK120、SK122、SK206、SK238 などがある。未完成品は SK53、SK73、SK176、SX01 にあり、SX01 以外はその位置から遺物集中区からの混入品とみられる。

ヒスイ質丸玉は緑色凝灰岩製丸玉の次に多く合計 77 点である。出土点数は SK153(21 点)、SK06(19 点)、SK63(7 点)、玉ブロック 1(7 点) の順に多い。玉ブロックにおいて出土した丸玉はヒスイ質製のものだけである。

オンファス輝石製丸玉は遺構内では合計 18 点出土しており、SK06(9 点)、SK131(2 点)、SK153(2 点) の順に出土点数が多い。

遺構内では蛇紋岩製丸玉が多数出土し、SK06(10 点) で最も多く出土した。また SK06 では他の石材で作られた丸玉が 3 点あった。

以上をまとめると、完成品が多い遺構と未完成品が多い遺構があることがわかる。完成品が多い遺構では玉類は副葬品として利用されたとみられる。さらに、緑色凝灰岩製丸玉 B IV 類が多い SK71 やほとんどが A IV c 類の SK131、他所から搬入された石材(ヒスイ、オンファス輝石、蛇紋岩)の丸玉は多いが緑色凝灰岩製の丸玉はまったく出土しなかった SK06 など、遺構によって出土した玉類の石材や形態に差がみられる。

b. 管玉

緑色凝灰岩製管玉は SK131(2 点) と玉ブロック 1(1 点) で完成品が出土した。ヒスイ質管玉は遺構内では出土しなかった。

管玉は丸玉の次に出土点数が多いわりに、遺構内の出土点数が少なく、未完成品は出土しなかった。丸玉が多かった SK131 で出土したことから、丸玉と組み合わせて利用された可能性がある。

c. 勾玉

緑色凝灰岩製勾玉は SK131(4 点) に集中する。ヒスイ質勾玉は SK06(1 点) と SK162(1 点) で出土した。蛇紋岩製勾玉は SK136(1 点) で出土した。なお、SK136 はアオザメの上顎側歯 8 点を伴う。

d. 垂飾

垂飾は SK06、SK153 で 1 点ずつ出土した。SK131 では勾玉と管玉が伴って出土したが、垂飾は出土しなかった。

(5) 遺構外の出土分布

ここではグリッドごとに玉類の出土点数をみていき、遺跡内における空間的分布を把握する。発掘調査時のグリッドは 2 × 2m に設定されており、X 軸が南北、Y 軸が東西に延びる。

a. 丸玉

緑色凝灰岩製丸玉は出土点数が最多のは X=120 ~ 128, Y=110 ~ 118 で、次いで X=90 ~ 98, Y=110 ~ 118 と X=130 ~ 138, Y=70 ~ 78 である。これらは集中区としては第 6 東遺物集中区、第 2 遺物集中区、第 6 西遺物集中区付近にそれぞれある。いずれも原石、未完成品、完成品の順

に出土点数が多く、その他の多くのグリッドでも同様の出土傾向がある。一部の例外として掘立柱建物跡が検出された X=90～98, Y=70～78 は未成品(68点)、原石(37点)、完成品(10点)の順に多い。他にも X=90～98, Y=50～58 などは未成品の占める割合が大きい。

珪質頁岩製丸玉は X=120～128, Y=110～118 の出土点数が最も多く、原石(32点)と完成品(2点)が出土した。どのグリッドも完成品と未成品の出土点数は 3 点以下である。ヒスイ質製丸玉は X=78, Y=116 における出土点数が最も多く 4 点である。その他の丸玉は X=126, Y=114 の出土点数が最も多く、未成品(2点)、完成品(1点)が出土した。

また X=98, Y=102、II d 層において、壺形のミニチュア土器(図III-7-3-26)のなかに緑色凝灰岩の玉原石(1類)が 56 点、27.5g(27～31)入った状態で見つかっている。

以上をまとめると、X=120～128, Y=110～118 では緑色凝灰岩と珪質頁岩が最も多く出土しており、どちらも原石が多い。未成品の占める割合が最も大きい X=90～98, Y=70～78 付近には玉製作で生じた失敗品や未成品を捨てていたものと推測され、この付近が製作址であった可能性が高い。

b. 管玉

緑色凝灰岩製管玉については X=138, Y=48 の出土点数が最も多く、未成品(3点)が出土した。ヒスイ質製管玉は X=96～102, Y=96～98 に 2 点集中する。

以上のことから X=138, Y=48 では丸玉と同時に管玉を製作していた可能性がある。広く分散して出土しており、特にこれといった傾向は見出せない。

c. 勾玉

緑色凝灰岩製勾玉は X=90～98, Y=110～118 にまとまる。ヒスイ質製勾玉は特にまとまりがなく、出土グリッドが分散する。蛇紋岩製勾玉は X=124, Y=76 で出土した。

緑色凝灰岩製丸玉が 2 番目に多く出土したのと同じ X=90～98, Y=110～118 は緑色凝灰岩製勾玉の出土点数も多い。その要因として、丸玉と勾玉をセットで副葬したことなどが考えられる。

d. 垂飾

緑色凝灰岩製垂飾は X=96～102, Y=108～114 に B III 1 類(3点)がまとまる。その他の垂飾は X=92～98, Y=116～118 の範囲に B IV 類が 2 点まとまっており、その近くの X=92～94, Y=112～114 では A IV c 類(1点)出土した。

以上、垂飾は X=92～102, Y=108～114 に多く出土しており、緑色凝灰岩製の丸玉や勾玉が多く出土したのと同じ範囲にまとまりがみられる。

(6) 五月女遺跡における玉類の製作工程の復元(図III-4-7-1)

五月女遺跡において製作された玉のほとんどは比較的軟質で加工しやすい緑色凝灰岩製のものである。なかでも最も盛に行われていたのは緑色凝灰岩製の丸玉である。緑色凝灰岩製丸玉について、あらかじめ設定した基準に沿って分類を行い検討した結果のほかに、多数出土した玉作り関連資料をふまえつつ、製作工程を復元したい。

①原石採取：大きさ約 1cm 前後の緑色凝灰岩小礫を採取する。採集地は石器の節で述べた搬入礫の礫小同じ、付近の海浜が考えられる。

②面取り整形：穿孔しやすくしたり、ある程度丸く形を整えたりする目的で砥石を用いて面取りを行う。この段階では面取りを片面だけ行う場合や両面とも行う場合、側面に行う場合など複数の手順

がある。原石の段階から平坦面があるものや形が比較的整うものは、この工程が省略される場合がある。

③穿孔：穿孔具を回転させて両面から孔を穿つ。多数検出されたメノウ製の小型石錐の利用を考えられる。片面を半分ほど穿孔してから、もう片方の面から穿孔し貫通させる場合が多い。

④完成・仕上げ研磨：仕上げの研磨整形を行わずに孔が貫通した時点でそのまま使用されるものと、仕上げとして側面を玉砥石で研磨されるものがある。この段階で孔壁を研磨する場合もある。

また、丸玉とは形状が異なるが、管玉もほぼ同じ工程を経て製作されたと考えて良いだろう。

(上條信彦・中村優子・和歌山由菜)

8. その他

(1) 概要

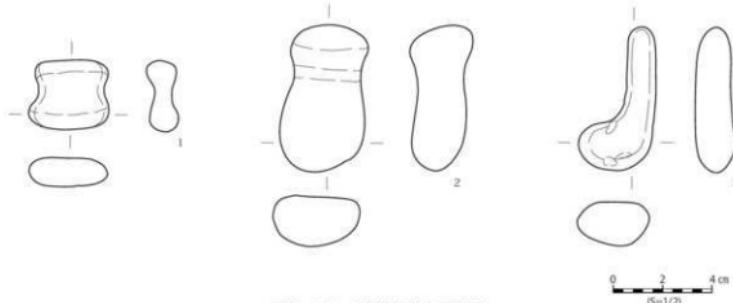
異形礫といった採集礫のうち採集意図が不明な自然資料および、赤色顔料（塊）・アスファルト・粘土塊といった製品製作に関わる原材料、漆製品について述べる。

(2) 異形礫

バナナ状礫やスタンプ形礫を含む変形礫をくびれ石、自然作用による穿孔がある礫を有孔礫とする。ここでの有孔礫には凹凸礫（いわゆる雨だれ石）も含む。この種の礫は SX01 で 279 点、83.9kg と大量に検出された。集中区および遺構外ではくびれ石 86 点、有孔礫 59 点を回収した。これらの石材のほとんどは硬質な頁岩で、近くの海浜で拾うことができる。

a. くびれ石（図III-4-8-1-1～3）

1・2は中央がくびれる。3は中央で湾曲するバナナ形の礫である。くびれ石の重さは 0.8～356g で幅があるものの、平均は $52 \times 27 \times 14\text{mm}$ 、46.7g で、ベンダント程度の大きさが多い。出土地点は SX01 が 162 点と極端に多い。集中区分別では第1遺物集中区と第2東遺物集中区およびその周辺のグリッドに多い。第1遺物集中区では II c 層以下、第2東遺物集中区では II f 層以下と比較的下層に多いという特徴がある。



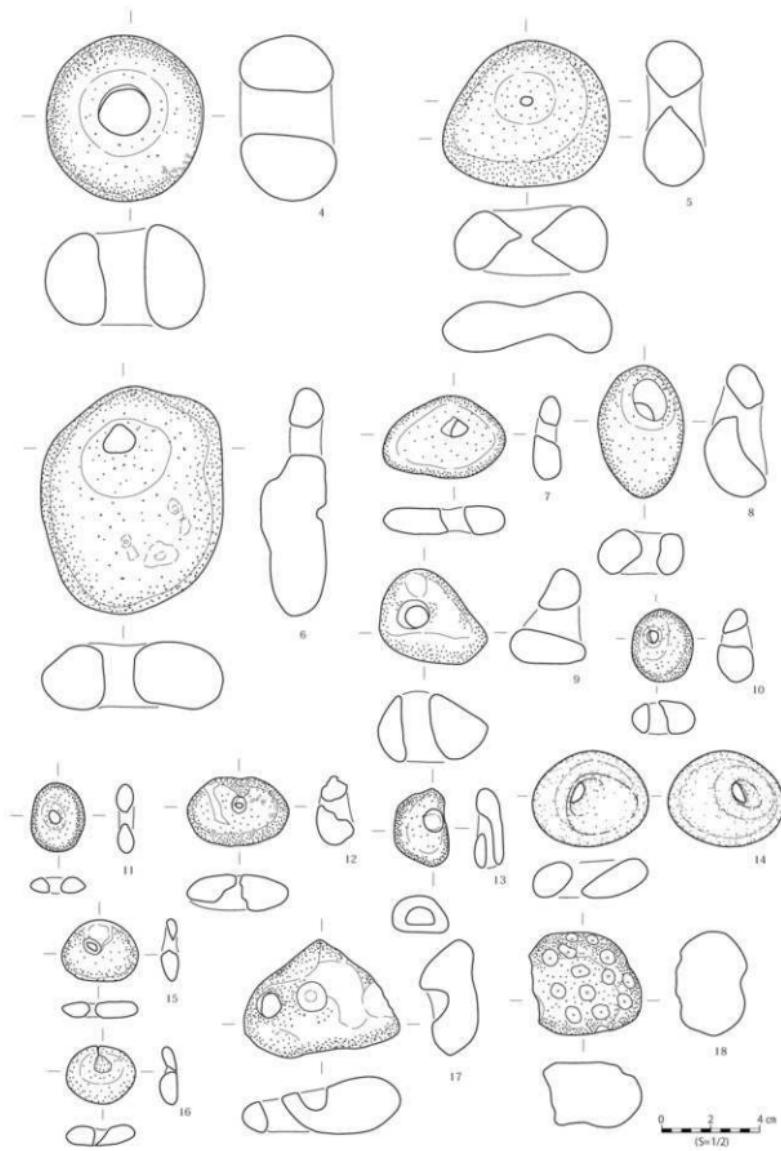
図III-4-8-1 遺構外出土異形礫

b. 有孔礫（図III-4-8-2-4～18）

形状と大きさによって区分することができる。

4～6は径 5cm、100g を超える大型品である。7～9・14は径 3～5cm、20～70g の中型品である。10～16は径 3cm 未満 m 5～10g の小型品である。中型・大型品の石材は頁岩が多く、小型品には凝灰岩や安山岩が多くなる。17は凹みがあるが貫通していない。18は多孔のもので凹凸礫あるいは雨だれ石とも呼ばれる。

出土地点は SX01 で 46 点と突出する。その他グリッド別では X=80～102, Y=80～90 の範囲でまとまっている。これは第1遺物集中区の周辺に位置する。そのほか、X=124～128, Y=106～114 にもまとまりがある。これは第2東遺物集中区の周辺に当たる。

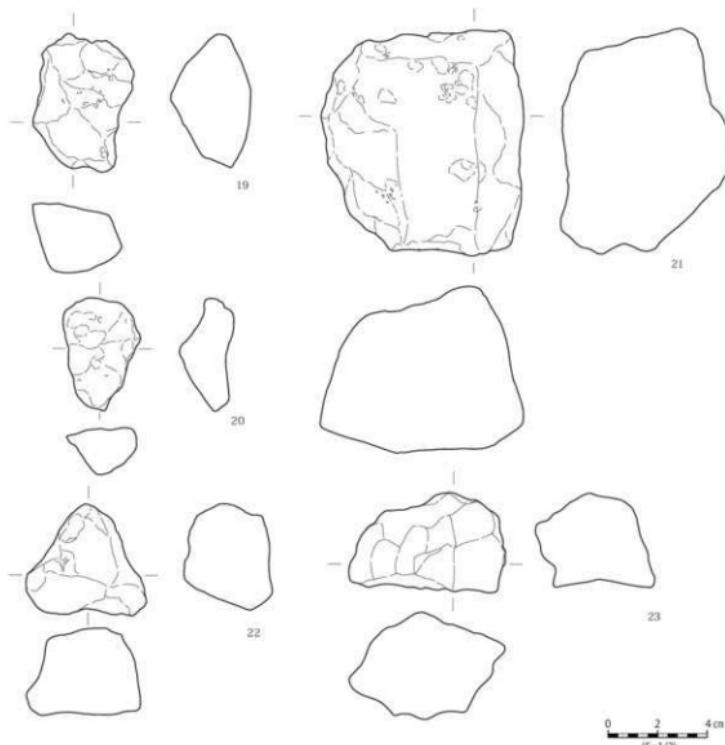


圖III-4-8-2 遺構外出土石製品(有孔礫)

(3) 赤色顔料塊 (図III-4-8-3-19～図III-4-8-4-28)

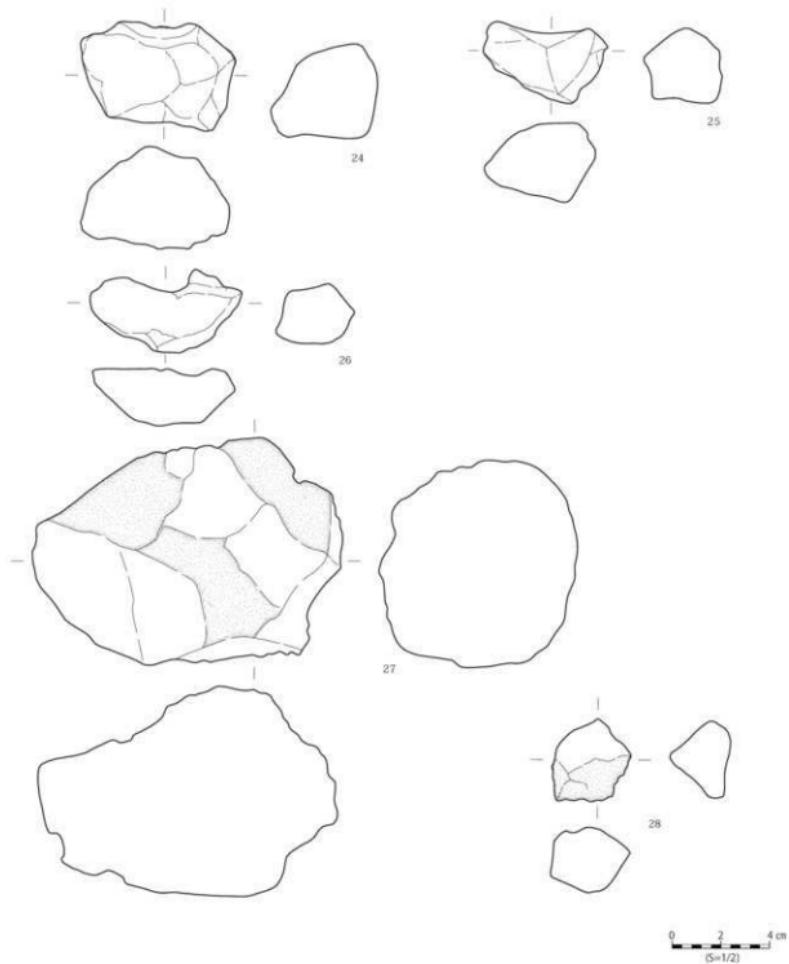
赤色顔料の原料となるベンガラ塊である。遺跡周辺では採集が困難であり、全て搬入品と推定される。ベンガラの採集地としては本遺跡より約25km離れた今別町の赤根沢が知られており、多くはこの赤根沢付近より搬入されたと推定される。1,155点、51.8kg検出した。大きさは、0.1～834.7g、平均44.8gであり、径4cmのピンポン玉程度の大きさが多い。ほとんどは多孔質な角礫であり、円礫はない。やや軟質で顔料としての質が良く、不純物が含まれず、触ると赤色粉が指につく。したがって、水流による摩擦作用の起こる河川や海浜での採集ではなく、露頭から採集されたとみられる。

出土の分布は、土坑内45点、631.5gで、うち44点が覆土内であることから、副葬品ではなく、土坑埋土中の混入とみられる。集中区分では第1遺物集中区2.0kg、第2西遺物集中区0.3kg、第2東遺物集中区1.5kg、第3西遺物集中区0.8kg、第3東遺物集中区0.01g、第4遺物集中区0.9kg、第5遺物集中区0.08kg、第6西遺物集中区0.04kg、第6東遺物集中区0.5kgで第1遺物集中区、



図III-4-8-3 遺構外出土ベンガラ塊(1)

第2東遺物集中区での出土量が多い。そのほか集中区外のグリッド別にみると、200g以上の塊が出土するグリッドはX=124～128,Y=56～62の範囲と、X=94～96,Y=84～92の範囲が目立つ。前者は第6西遺物集中区西付近、後者は第1遺物集中区付近に当たる。まとめると赤色顔料塊は第1遺物集中区、第2東遺物集中区東、第6西遺物集中区周辺の三ヶ所に集中するとみられる。



図III-4-8-4 遺構外出土ベンガラ塊(2)

(4) アスファルト塊（図III-4-8-5-29・30）およびアスファルト付着土器（図III-4-8-6-31～図III-4-8-8-70）

アスファルト塊は10点出土した。うち、形がよく残る2点を図示した。29は径7cm、179.7gである。楕円形で、袋などに入れられて保管されたとみられる。30はSX01内で検出された。径3cm、77.8gである。破損が著しいが残存する面をみると、本来は楕円形であったとみられる。

31～70はアスファルト付着土器である。顯著に付着する39点を図化した。31～47、60は破断面に付着しており、ひび割れの補修に用いられたことが分かる。

31・32は壺の頸部、33～41・43～47、48・49・55・56は壺の体部、42、50～53は壺の底部に付着する。54・59・60は注口土器の注口部の付け根部分である。58のみ鉢形土器で内面にべつとりアスファルトが付着する。これはアスファルトの貯蔵容器として用いられたためとみられる。同様に61も鉢の内面から口縁部にかけて付着するうえ、外面にしたたり痕がある。このことから、アスファルトの加工用に用いられた可能性がある。63・64は穿孔による補修とともにアスファルトによる接合が行われる。65～70は注口土器の注口部付け根に当たる箇所にアスファルトが付着する。これらの注口部は後期後葉の土器である。

以上のように、アスファルトの貯蔵や加工に用いられた鉢を除けば、補修された器種は壺と注口土器に偏る。これらの器種は液体の貯蔵と関連する点をふまえると、液体の漏れを防ぐためにアスファルトが用いられたと考えられる。

そのほか、アスファルト付着資料としては玉象嵌土製品（図III-4-3-8）がある。

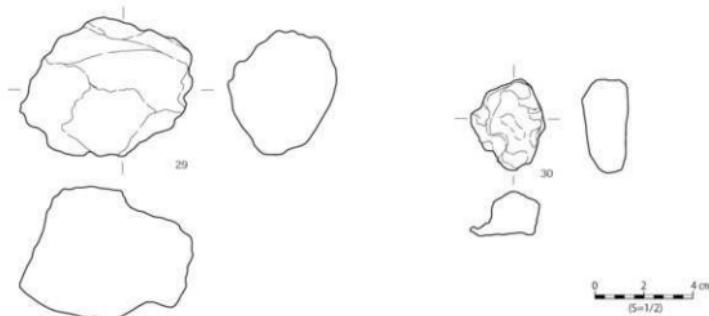
なお、後述するように、アスファルト塊については、その産地分析を実施している。

(5) 軽石（図III-4-8-9）

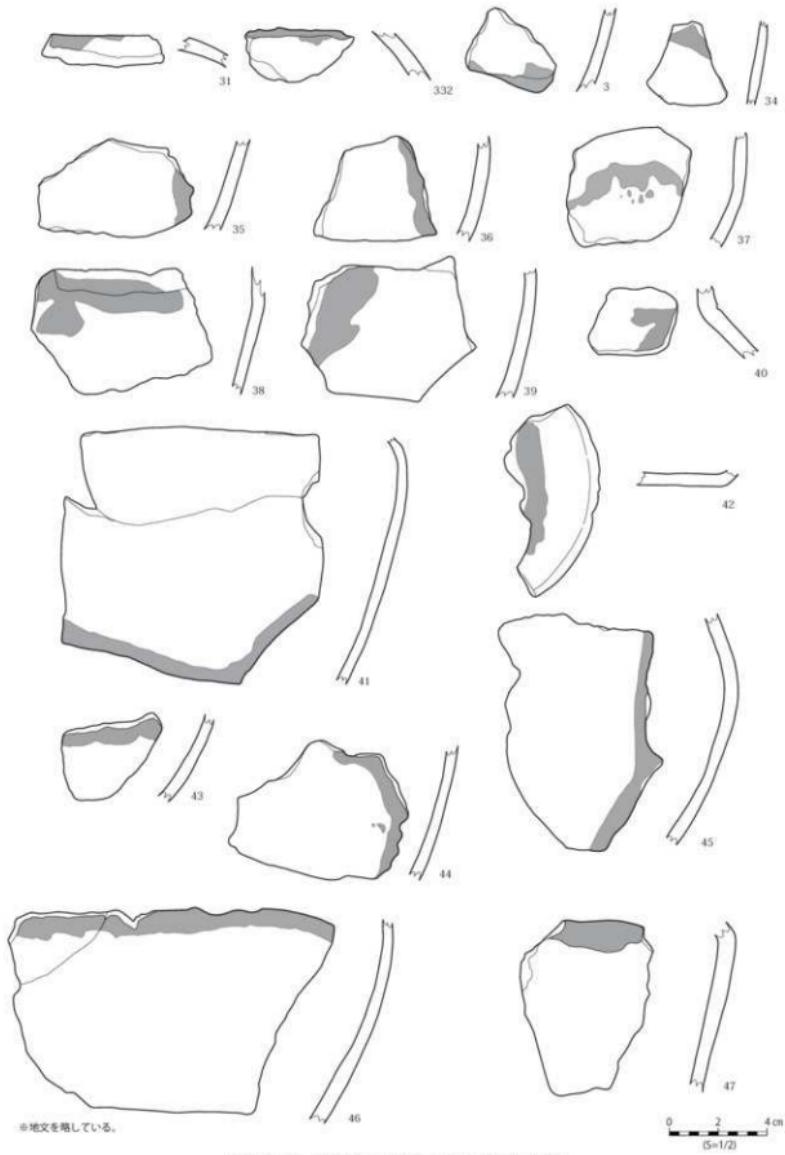
本調査では軽石に手を加えた石製品のほか、軽石も多く検出されている。57点2,248.1g回収した。大きさは径2cm～10cmで平均47g、最大216gで鶴卵大のものが多い。71～74は不定形である。75は楕円形である。76は自然にできた凹みがある。

(6) 未焼成・焼成粘土塊（図III-4-8-10）

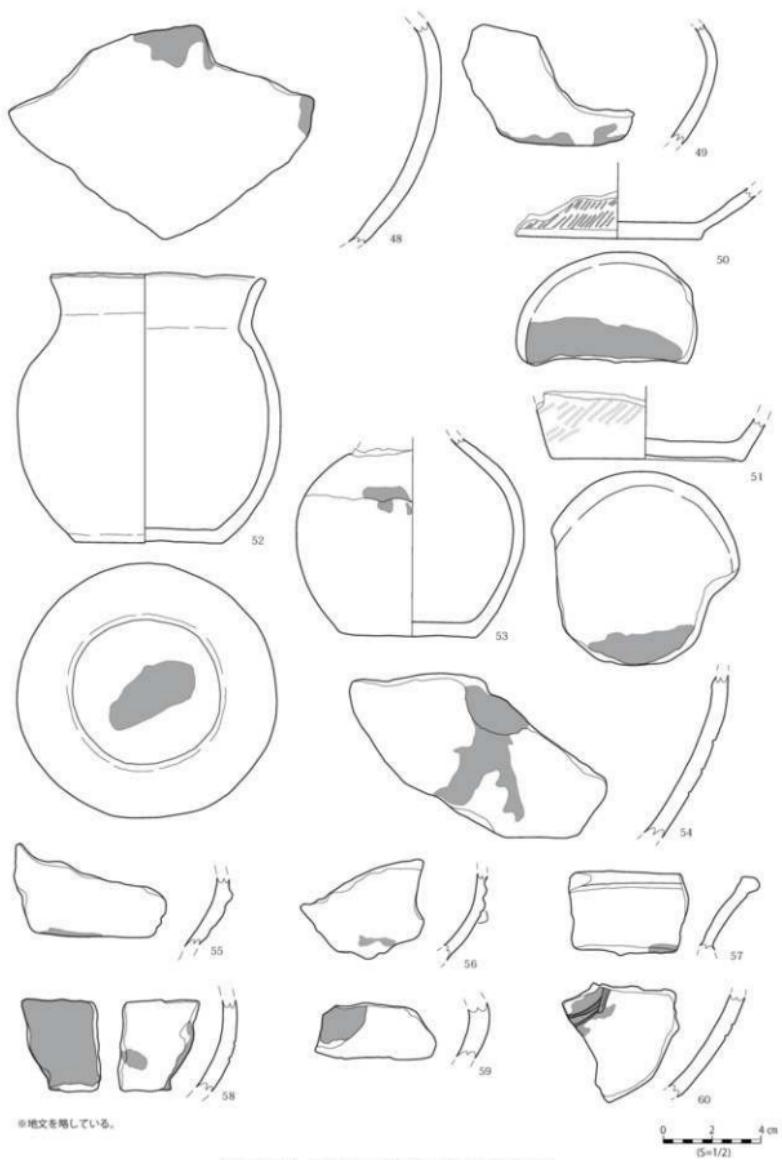
不定形の粘土の塊で土器製作との関わりがある資料である。2,064点、12,739.3g出土した。本調



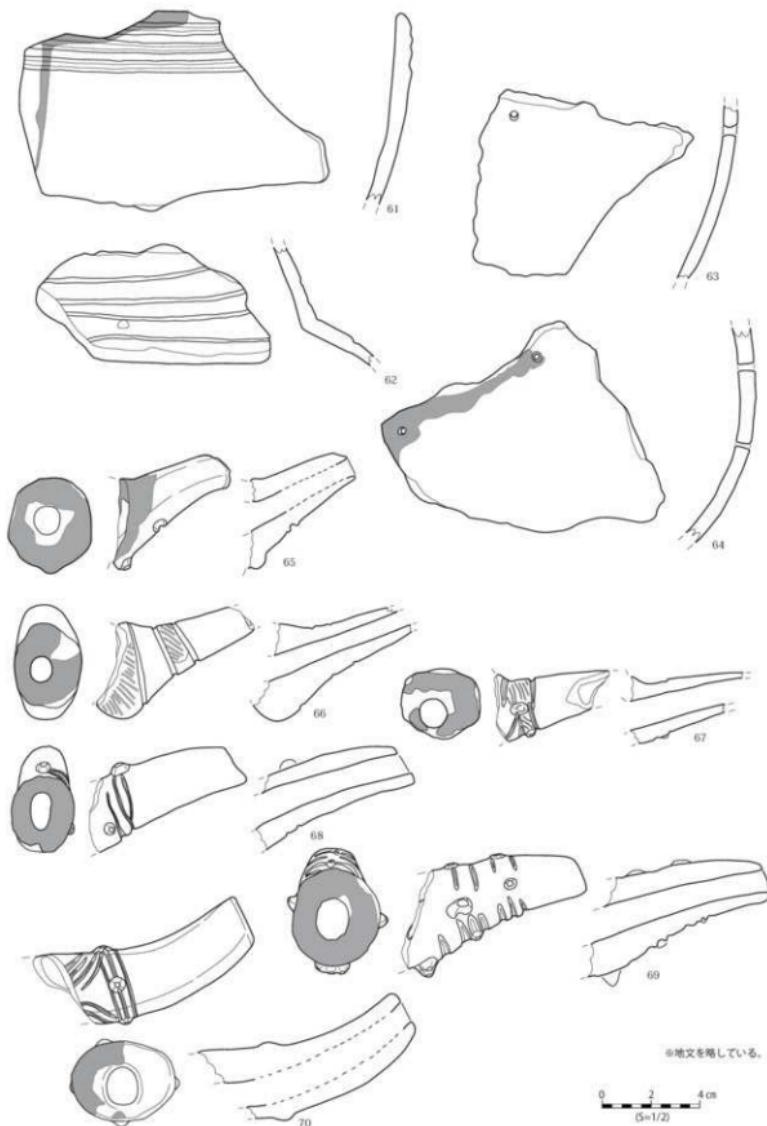
図III-4-8-5 遺構外出土アスファルト塊



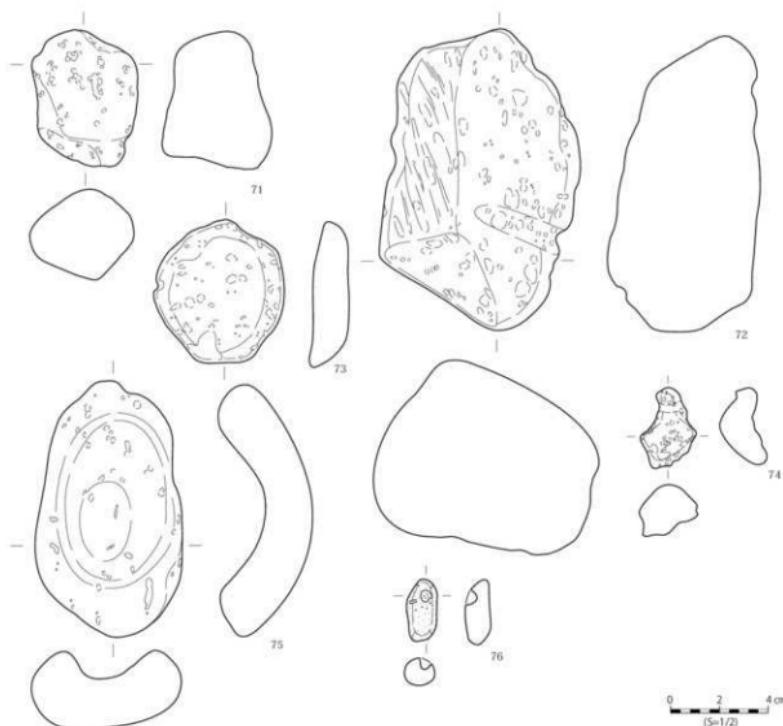
図III-4-8-6 遺構外出土アスファルト付着土器(1)



図III-4-8-7 遺構外出土アスファルト付着土器(2)



図III-4-8-8 遺構外出土アスファルト付着土器(3)



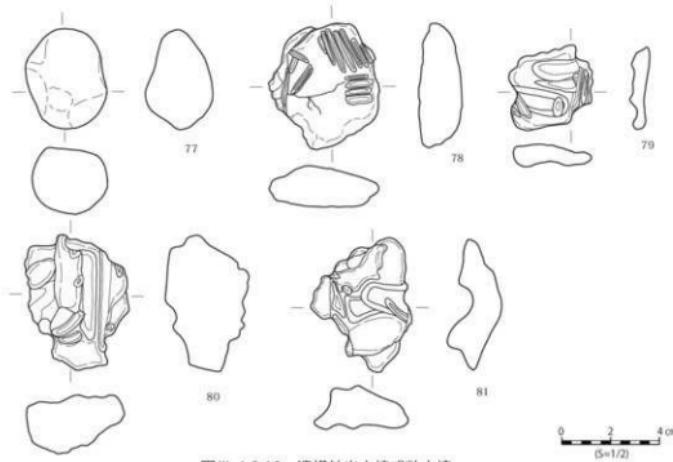
図III-4-8-9 遺構外出土軽石

査ではフルイがけを行って資料を回収したほか、包含層が砂層であり粘土塊として残りやすくかつ、調査時の識別が容易であったため、多数回収することができた。大きさは径1~10cm程まで、0.2~775gまである。平均は6.2gである。

形態は表面の凹凸がほとんどなく団子状を呈するもの（77）と、凹凸が激しく指圧痕や植物茎の痕跡が見える場合があるものの（78~81）に大きく区分される。団子状の前者は軟質かつ軽質で粘土のきめが細かく混和材が入っていない。また色調が灰白~黄橙色（標準土色帳10YR7~8）に相当する。よって未焼成粘土塊と判断した。一方、凹凸の激しい後者は、土器胎土と同じく硬質で、色調が褐~黄褐色（10YR3~5）である。よって、焼成粘土塊と判断した。ただし、これらの内部には砂などの混和材が入っているものは少ない。量は団子状の未焼成粘土塊が多く、全体の8割以上を占める。また本来ひと塊の粘土塊が砕けて複数になったものも多く、20個以上の小塊に分かれる場合もある。

分布は100g以上出土した遺構・集中区・グリッドをみると、SX01および第3東遺物集中区のIIe層以下とその周辺グリッドに多く、この周辺で土器や土製品が製作された可能性がある。特に

SK37周辺では焼土が確認されており、この焼土とともに周辺から粘土塊が検出される。

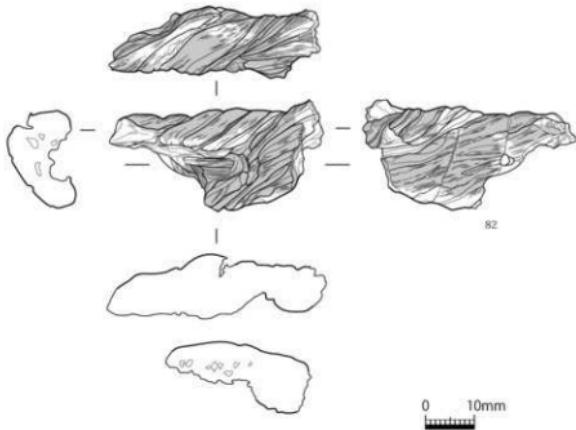


図III-4-8-10 遺構外出土焼成粘土塊

(7) 漆製品（図III-4-8-11）

漆製品は第6東遺物集中区の低湿地層であるIIg6層より3点出土した。器種は漆漉し布1点、漆器（器種不明）1点、漆櫛1点である。82は漆漉し布で幅43mm、高さ20mm、厚み14mmである。その他は保存状態が悪く、図化できなかった。なお、分析の詳細は第5章第2節を参照されたい。

（上條信彦）



図III-4-8-11 漆漉し布

9. 五月女瀬遺跡のアスファルトの分析結果

上條信彦（弘前大学）、南武志（近畿大学）、高橋和也（理化学研究所）

(1) 分析の目的

アスファルトは、原油中の軽質分及び潤滑油留分を取り除いた残油で、黒色粘着性の常温で半固体状の物質と定義されている（石油学会 2005）。アスファルトは、縄文時代前期以降、東北地方を中心に、北は北海道、南は奈良県まで出土している。その多くは土偶の破損面や石器の基部に付着しており、高い粘性と撥水性を有し、熱を加えると容易に融解する性質を持つため、接着材として利用されていたことが分かる。アスファルトの産出地である主要な石油鉱床地帯は北海道稚内から石狩低地帯、渡島半島南部を経て本州の青森から新潟県域までの日本海沿岸に分布している。出土アスファルトは太平洋沿岸域などの鉱床地帯から 100km 以上離れた遺跡からも数多くみられ、広域な交易活動があつたと推察される。こうした物質の流通過程を知ることは集団どうしの交流関係を知るうえで重要であり、縄文社会の構造解明につながる。

イオウは原油中において炭素・水素に次いで多く含まれその含有量は产地によって大きく異なる。原油の硫黄同位体組成は 1950 年代末ごろから測定され始め、原油の同定や原油の成因的な分類、移動経路の推定、変質過程の追跡などに利用できる。日本においては加藤・梶原 1997 がこれに注目し、地域的なイオウ同位体比の違いを見出しているが、ほかの文献は見当たらない。文化財におけるイオウ同位体比分析の応用は朱の原産地推定で実施されている（たとえば河野・南ほか 2014）。

そこで、イオウ同位体比に注目して、日本における新たな原産地分析の有効性を検討したい。

(2) 分析試料と方法

分析では五月女瀬遺跡出土のアスファルト塊 2 点である。五月女瀬 1 は X=94,Y=114 カクラン出土（図 III-4-8-5-29）、五月女瀬 2 は SX01 № 462（図 III-4-8-5-30）である。

比較試料として、天然アスファルトの产地として知られる秋田県潟上市豊川油田のほか、新潟県新津天ヶ沢油田、北海道木古内町釜谷油田などの主要な油田から採取された原油（液体）を 200 度で固化させたアスファルト状態の各標本 37 試料を用いた。

試料は酸素（高純度）共存下で燃焼させ、酸化反応管（酸化タンゲステン）と還元管（純銅）で、硫黄成分を二酸化硫黄として調整し、精製カラムで分離し IsoPrime100 へ導き同位体分析を行った。

(3) 結果及び考察

分析の結果、五月女瀬 1 のイオウ同位体比は 3.16%、五月女瀬 2 は 6.50% であった。

いずれの資料もプラス値を示した。油田標本との比較を行うと、五月女瀬遺跡から近い油田標本と

表 III-4-9-1 アスファルトのイオウ同位体分析の結果

都道府県	試料名	試料	出土地点	%
青森	五月女瀬 1	遺跡出土アスファルト	塊 (X=94,Y=114 カクラン)	3.16
青森	五月女瀬 2	遺跡出土アスファルト	塊 (SX01 №.462)	6.50

しては、秋田県駒形や豊川では 1.00%以下、青森県前田野目と北海道釜谷油田はマイナス値である。一方、秋田県二ツ井が 3.00%以上の高い値を示す。

以上より、イオウ同位体比分析においては、五月女遺跡のアスファルトの産地としては秋田県二ツ井周辺の可能性が高い。

引用・参考文献

- 加藤進・梶原良道・中野孝教（1997）「東北油田地域における原油の硫黄分と硫黄同位体組成」『石技誌』62-2, pp.142-150
- 河野摩耶・南武志・今津節生（2014）「九州北部地方における朱の獲得とその利用：硫黄同位体比分析による朱の産地推定」『古代』132, pp.27-38, 早稲田大学考古学会
- 石油学会（2005）「アスファルト」石油学会編集『石油辞典』p.74, 丸善

第5節 弥生・古代・中世の検出遺構と出土遺物

五月女泡遺跡では、主体となる縄文時代晚期の生業、祭祀活動が晚期後葉後半（大洞A'式）になると一旦やめなくなることが判明している。その後、弥生時代中期後葉、続縄文（古墳時代）、奈良時代（8世紀）、平安時代（9～11世紀）、中世（12～15世紀）と長期にわたって活動の痕跡を示す遺構や遺物がわずかに出土している。ここでは縄文時代晚期以降の検出遺構や遺物について報告する。

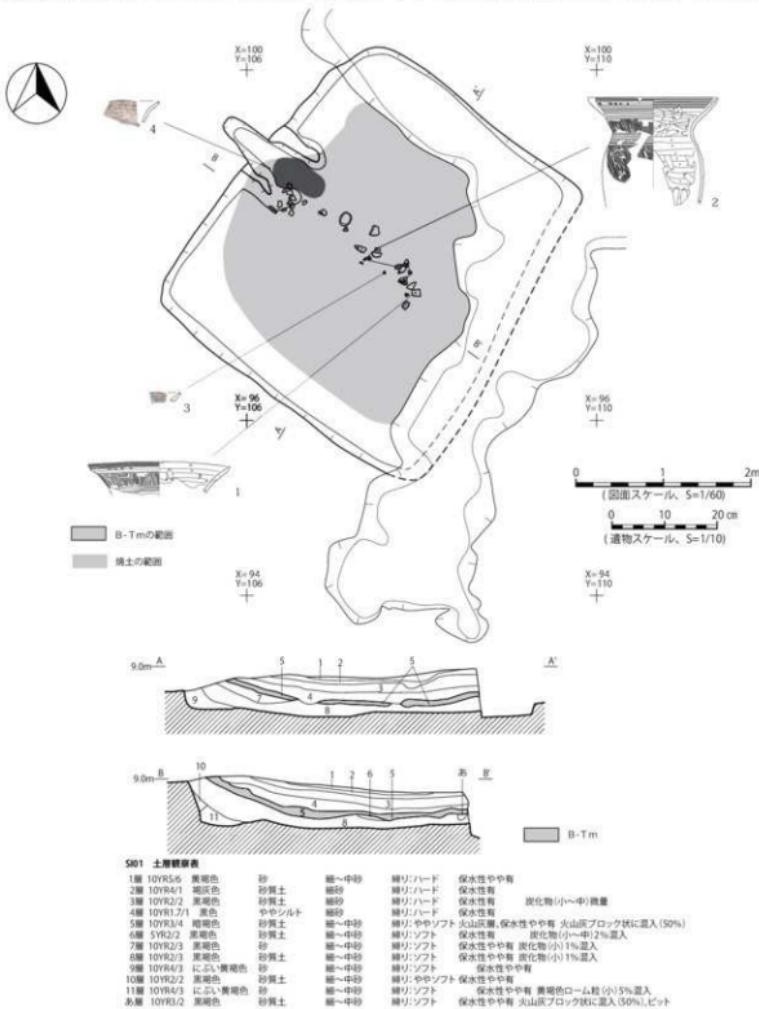
1. 穫穴住居跡

調査区南東部の台地緩斜面から、竪穴住居跡2棟を検出し、その内の1棟（SI01）を調査した。なお、もう1棟のSI02は平面形や覆土の状況がSI01と同様であることから、縄文時代のものではなく、この時期の竪穴住居跡と判断した。

第1号竪穴住居跡（SI01）

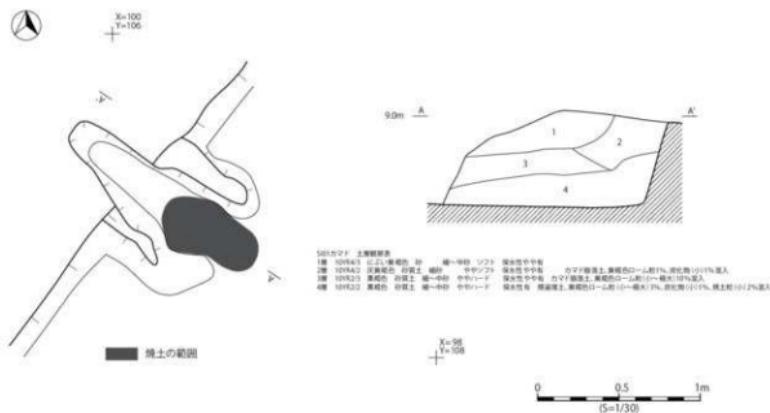
【位置・確認】調査区の東端部、グリッドX=100,Y=110に位置し、Ⅱb層上で確認された。【重複】重複もなく、竪穴住居の造り替えもない。【規模・形状】南東壁が盗掘土坑によって消滅しているが、床面の痕跡から規模の復元は可能であった。北西壁3.9m、南西壁3.7m、南東壁推定4.0m、北東壁3.2mである。長軸4.0m、短軸3.7mのやや不整な方形を呈し、推定床面積は14.8m²である。建物の主軸方向はN-52°-Eである。【壁・床面】壁高は20cm～50cmであり、北西側の残り具合が良く、やや高い。床面はほぼ平坦で、張り床の痕跡は確認できなかった。張り床のない底面は、砂地による立地環境のためか非常に軟らかい状況であった。壁溝は確認できなかった。【柱穴・ピット】柱穴なし。建物を支える主柱穴や壁沿いの柱穴は確認できなかった。また、住居外にも本住居跡に関連する柱穴は確認できなかった。【カマド】北西壁のほぼ中央にカマドを検出した。カマドの両壁には構築材として黄色粘土が用いられ、底面から焼土が検出された。また、カマドは長煙道タイプであり、竪穴壁を完全に掘り込んで、住居外まで伸びて造られている。また、土層断面観察によると、煙道が地下下に水平に造られている地下式タイプで、天井部が崩落土によって埋没したことが分かる。なお、カマドの改築は認められなかった。【堆積土】11層に細分したが、全体的にレンズ状の堆積を示しており、自然堆積の様相を呈している。覆土中位の5層とした厚さ10cmの火山灰層は分析の結果、白頭山・苦小牧火山灰（B-Tm）であることが判明している（「第5章10節」を参照）。【出土遺物】1～3は床面、4はカマド内、5は竪穴住居の覆土から出土した第12a群土器の土師器である。なお、覆土から出土した縄文土器は混入品として除外した。1～4は甕である。1・3・4は口縁部片、2は口縁部～体部片で、それぞれ口縁部の器形は大きく「く」の字に外反する。1～4は口縁部に明瞭な沈線というよりも段差の作り出しによって生じる段状沈線が認められる。1・3・4の口唇部には沈線状に凹む特徴を持つ。また、1の外面には縱方向のハケメ調整が明瞭である。2は口縁部と頸部に多条化された段状沈線（多条沈線）が巡る。また、外面には縱方向のハケメ調整が明瞭であり、内面は口縁上部が横ナデ調整、口縁下部～体部にかけて横ナデ調整が施されている。5は甕の口縁部片である。体部下半に段状沈線が認められる。内外面にはミガキ調整と黒色処理が認められる。【所見】床面出

土の土器器から、奈良時代（8世紀）の堅穴住居跡であることが判明した。なお、カマド内から出土した炭化材の炭素年代測定では、7世紀後半～8世紀後半の確立が高いという結果となり、土器との関係は整合的であった（「第5章11節」を参照）。その一方で、覆土中位から10世紀前半のB-Tm（A

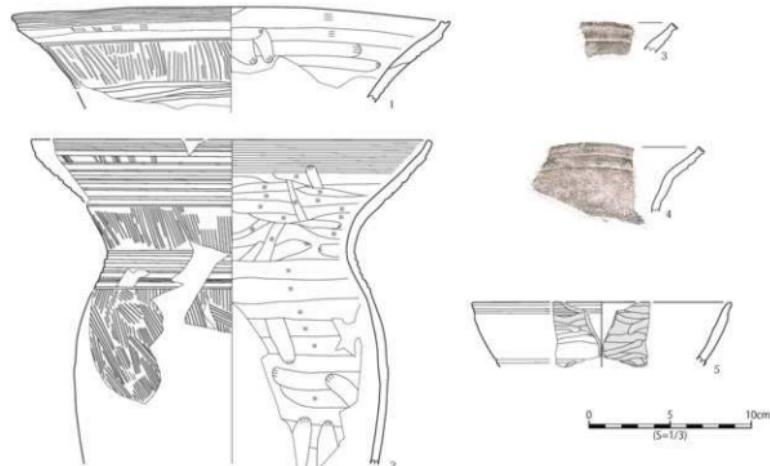


図III-5-1-1 SI01 遺構平面図・断面図

D 946)の層が検出されており、床面から火山灰層までの覆土が約15cmと極めて薄い堆積状況である。このことから、住居廃絶後からB-Tmの降下前までの期間は、少なくとも極めて安定した気候や環境であったことが分かる。



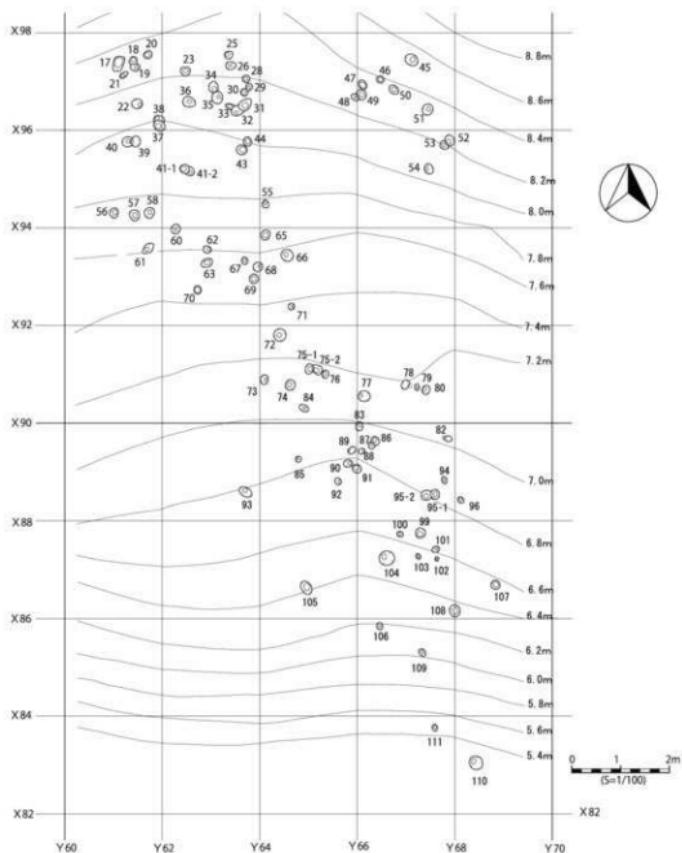
図III-5-1-2 SiO₂ カマド 平面図・断面図



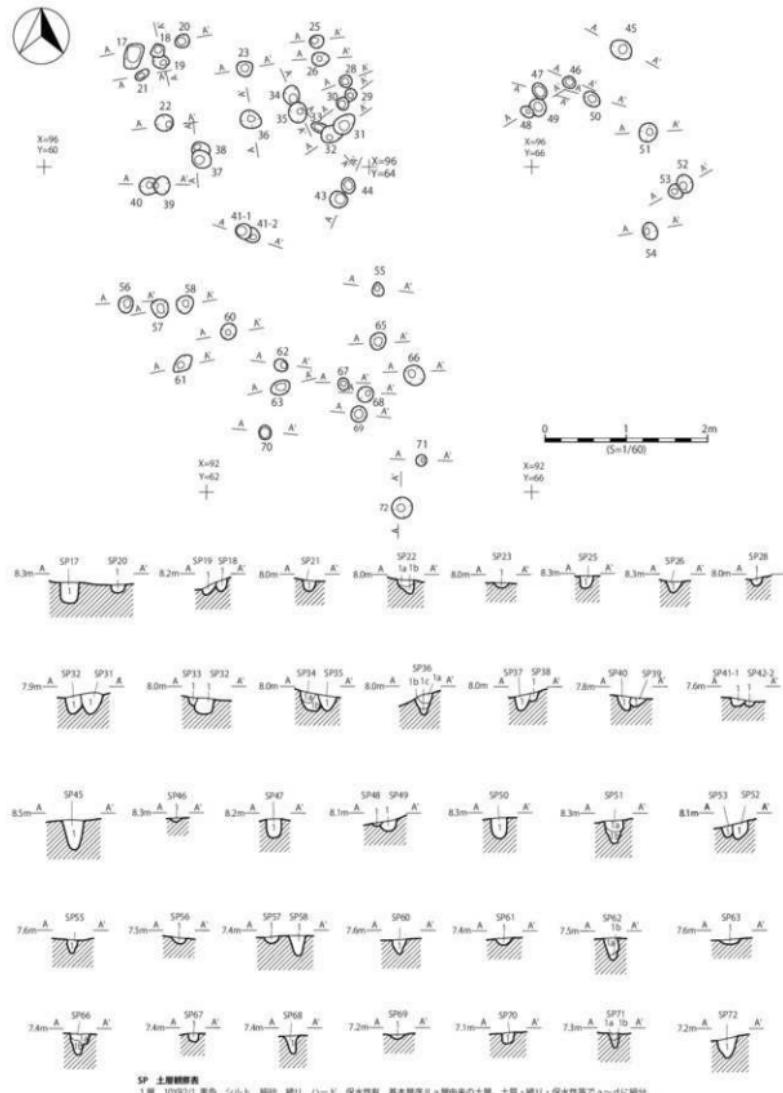
図III-5-1-3 SI01 出土遺物

2. 柱穴跡

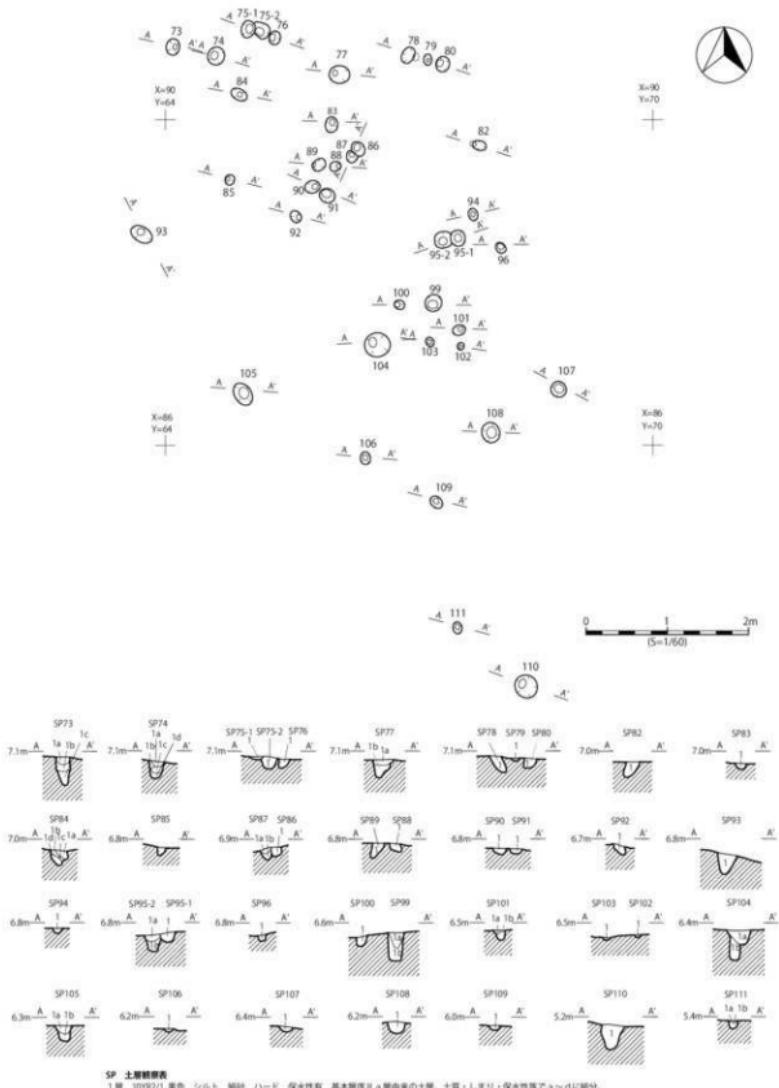
調査区南側の台地緩斜面中央、グリッド X=82 ~ 98, Y=60 ~ 70 の範囲に位置し、II b 層上で多数の柱穴群を検出した。台地の南側緩斜面に形成された柱穴群で、規則的な配列は認められない。また、柱穴もすべて小規模で、深さも極めて浅いため、掘立柱建物跡とは考えられない。なお、柱穴の覆土はすべて 10 世紀前半の B-Tm の降下後に堆積した II a 層由来の黒色シルト土が含まれていることから、平安時代以降の柱穴群である。また、調査区北端部の 5 トレーナーにおいても、同時期とみられる柱穴跡を確認した。ここでは、柱穴跡の平面図及び土層断面図を図示する（図III-5-2-1～4）。



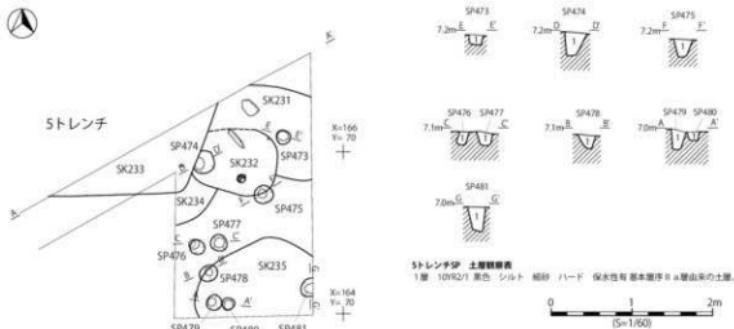
図III-5-2-1 平安時代以降の柱穴群 平面図(X=82-98, Y=60-70)



図III-5-2-2 平安時代以降の柱穴跡群(1)



図III-5-2-3 平安時代以降の柱穴跡群(2)



図III-5-2-4 平安時代以降の柱穴跡群(5トレーナ)

3. 敵状遺構（畠跡）

調査区北半部、グリッドX=124～176,Y=46～100の範囲に位置し、3mほどの厚い砂丘砂(I b層)を剥ぎ取ったII a層上から、畠跡とみられる敵状遺構を検出した。面積は約1,125m²(50m×45m)にも及ぶ。地形的には台地北側の緩斜面中位から低地にかけて分布している。II a層直下には白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm)が堆積していることから、10世紀前半以降に造られた畠跡である。なお、畠跡には敵の主軸方向やまとまりの違いにより、大きく3群に分類可能である(図III-5-3-1)。

畠跡1群

調査区北端部に位置し、南西から北東方向に向かって並列する。敵の主軸方向はN-33°-Eであり、起伏の明瞭な溝跡と敵跡が連続する。

畠跡2群

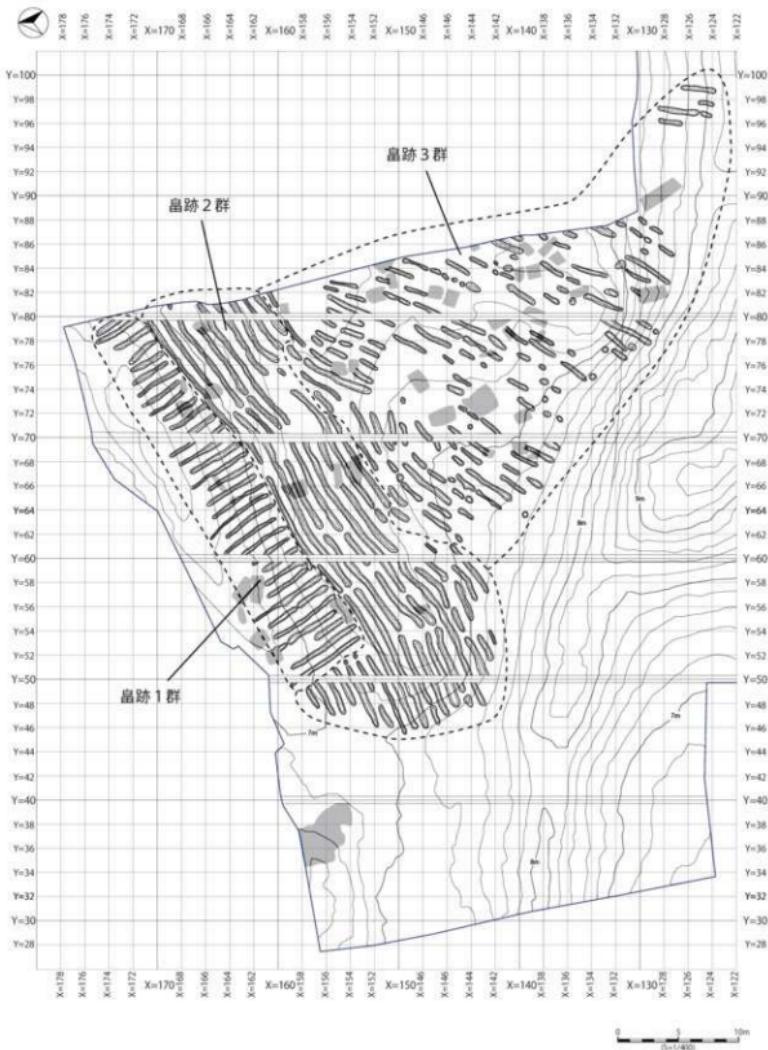
敵の主軸方向はN-33°-Wである。やはり起伏の明瞭な溝跡と敵跡が連続する。1群と3群に挟まれた窪地状の低地に位置する。雨が降ると水溜りとなつた。南西から北東方向に向かって並列するが、畠跡1群と直交する。

畠跡3群

敵の主軸方向はN-22°-Wである。台地北側の緩斜面に位置し、畠跡2群と接する。

溝跡や敵跡がはっきりしない箇所も多く、畠跡の痕跡が不明瞭であった。

このように3群に分類した畠跡は、ほぼ同時期に存在したものと思われるが、わずかな遺構の切り合い関係から、畠跡1群が最も古く、次に畠跡2群、畠跡3群と順に広がつていったものと考えられる。なお、畠跡で栽培された作物の同定分析調査を行つたが、明らかにすることはできなかつた。また、近隣では、つがる市の牛潟(1)遺跡、牛潟(2)遺跡からまったく同様な砂丘の立地環境において白頭山・苦小牧火山灰(B-Tm)降下以後に造られた平安時代の畠跡が確認されており、五月女遺跡で検出された畠跡も同時代のものと考えられる。



図III-5-3-1 歪状遺構（石跡）

4. 遺構外の出土遺物と分布

第10～13群までの土器・陶磁器及び鉄製品が出土しているので、群別土器の分布図と合わせてここで報告する。

第10群土器（図III-5-4-1）

調査区南東部、台地の南側緩斜面で分布が認められる。1～9は甕、10～12は鉢と思われる。1は口縁部～体部片で、口縁部には端部に縱長の刻みを入れ、縦位に撫糸文が施される。また、頸部と体部中位に沈線文と起伏の少ない連続山形文を施す。沈線文の間は無文帯となる。体部下半には縦位の撫糸文が施される。2～9は同一個体と思われる体部片である。2は最も残りが良く、体部は沈線文によって重層する菱形文が施される。頸部と体部中位には沈線間に交互刺突文が施される。3・5は沈線間の交互刺突文や起伏の少ない連続山形文が施されている。10は口縁部の内外面に沈線が施されている。11・12は口縁部に2条の沈線と起伏の少ない連続山形文が施されている。なお、口唇部にも繩文が施されている。

第11群土器（図III-5-4-1）

数量が少なく分布傾向ははっきりしないが、調査区南東部、台地の南側緩斜面の端部で出土した。13・14は甕で同一個体と思われる口縁部片である。13は口縁部に2条の隆帶が巡り、口縁部突起から垂下した位置に1条の隆帶を施す。弧状の沈線文の間に繩文と爪形の刺突列を施す。また、口唇部にも刺突列を施す。

第12群土器（図III-5-4-3）

調査区南側、台地の南側緩斜面の広い範囲で分布が認められた。1～11は甕、12～16は壺である。1・2は略完形、3～10は口縁部片、11は底部片、12～15は口縁部～体部片、16は体部片である。1は長胴甕で、口縁部を「く」の字に外反させ、口唇部の面取り調整も丁寧で、口縁部を丁寧に横ナデ調整で仕上げている。粘土紐輪済み成形後、体部外面はハケ目調整の後、わずかにケズリ調整の痕が認められる。内面は横ナデ調整が施される。胎土も良好で、全体に丁寧なつくりである。2も長胴甕であるが、口縁部と体部の境目が明瞭で、段状沈線を施す。また、口縁部は大きく肥厚する。外面にはハケ目調整が明瞭で、内面は横ナデ調整が施される。胎土に砂礫が多く含み、粗雑なつくりである。3は口縁部に明瞭な多条沈線が巡る。4は口縁部に2条の段状沈線が巡る。5は頸部が大きく屈折し、口縁部が「く」の字になっている。口縁部には不明瞭な3条ほどの沈線が認められる。6は口縁部が外反するが、無文である。7は口唇部が丁寧に面取り調整されており、口縁部内外面も丁寧な横ナデ調整が施されている。口縁部は無文であるが、縦方向のハケ目調整が明瞭に認められる。8は口唇部が外折している。口縁部は無文で、やはり「く」の字に外反する。9は口縁部外面には横方向のハケ目調整がみられるが、全体に粗雑なつくりで、口縁部には不明瞭な沈線が認められる。10の口縁部は丁寧なつくりで、口唇部に凹みがあり、丁寧に面取り調整されている。11は外面に縦方向のハケ目調整が認められる。なお、1～11の甕はSI01に共伴する土師器に時期的にやや後続する土器と考えられる。12は同一個体と思われる5点の破片資料で復元した。復元口径は17cmである。口唇部

は真直ぐにのびる。内外面はミガキ調整のあと、全体に黒色処理されている。13の復元口径は14cmである。体部下半に段状沈線が巡る。段状沈線を境に体部上半がやや肥厚する。口唇部は丁寧に面取り調整されている。全体に丁寧なつくりである。黒色処理はない。14・15は復元口径10~11cmのやや小型の杯である。口唇部はまっすぐにのびる。体部下半に段状沈線が巡る。黒色処理は内面全体と外側は体部中位辺りまで施されている。16は体部外面に段状沈線が巡るが、不明瞭である。

第12 b群土器（図III -5-4-4）

調査区中央東寄り、台地の中央部を中心に分布し、さらに北側や西側にもわずかに点在する。1~25は須恵器、26~29は土師器である。1~22は壺甌の体部片で、内面に青海波状の當て具痕が認められる。12・15は外面にカキ目痕、それ以外は擬格子の叩き目がみられる。これらは同一個体の可能性が高い。23は杯である。復元口径11cmである。外面は灰色だが、胎土はやや赤褐色である。口唇部は真直ぐにのびる。24・25は五所川原産須恵器の長頸壺の底部片である。同一個体の可能性がある。26~29は把手付土器の把手部分とみられる。

第13群土器（図III -5-4-4）

数量が少なく分布傾向ははっきりしないが、調査区東側から南側に点在する。1は龍泉窯系青磁皿I類の口縁部片である。口縁部は直に薄く引き出したもので、復元口径は12cmである。年代は12世紀後半~13世紀前半に比定される。隣接する中世港湾の十三棗遺跡でもほとんど出土しない貴重な中世前期の資料である。2は珠洲焼の甌体部片である。外面の叩き目の条数から、吉岡編年の珠洲V期に相当する15世紀前半の資料とみられる。3は古瀬戸後期様式の碗型鉢の口縁部片である。復元口径は20cmである。口縁部は肥厚し、内外面に灰釉が施される。年代は15世紀前半である。

鉄製品（図III -5-4-4）

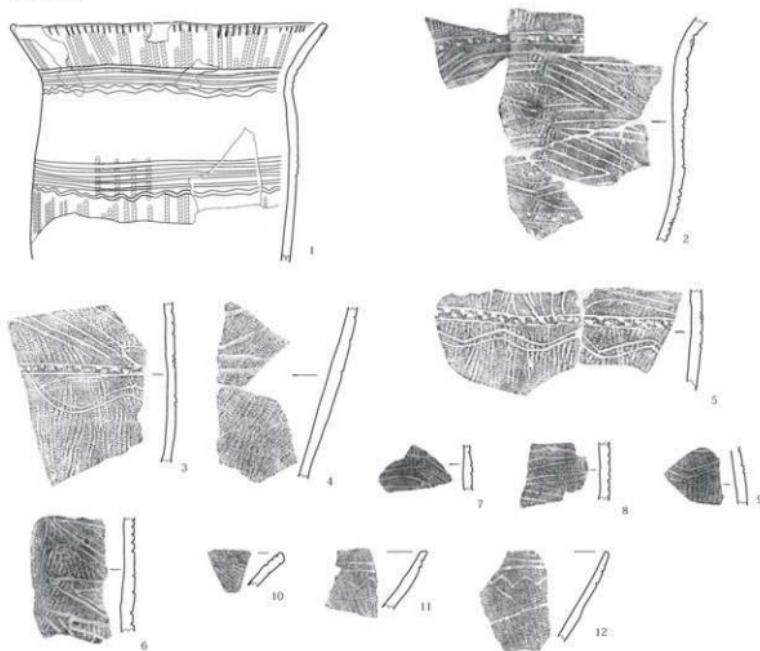
1・2は鉄釘、3は鎌、4は鉄鎌、5は刀子である。鉄製品は非常に少なく、時期も不明である。

(榎原)

引用・参考文献

- 横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
 吉岡康暢（1994）『中世須恵器の研究』吉川弘文館
 藤澤良祐（2008）『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 つがる市教育委員会（2009）『牛潟（2）遺跡3』つがる市遺跡調査報告3
 つがる市教育委員会（2010）『牛潟（1）遺跡5』つがる市遺跡調査報告書4

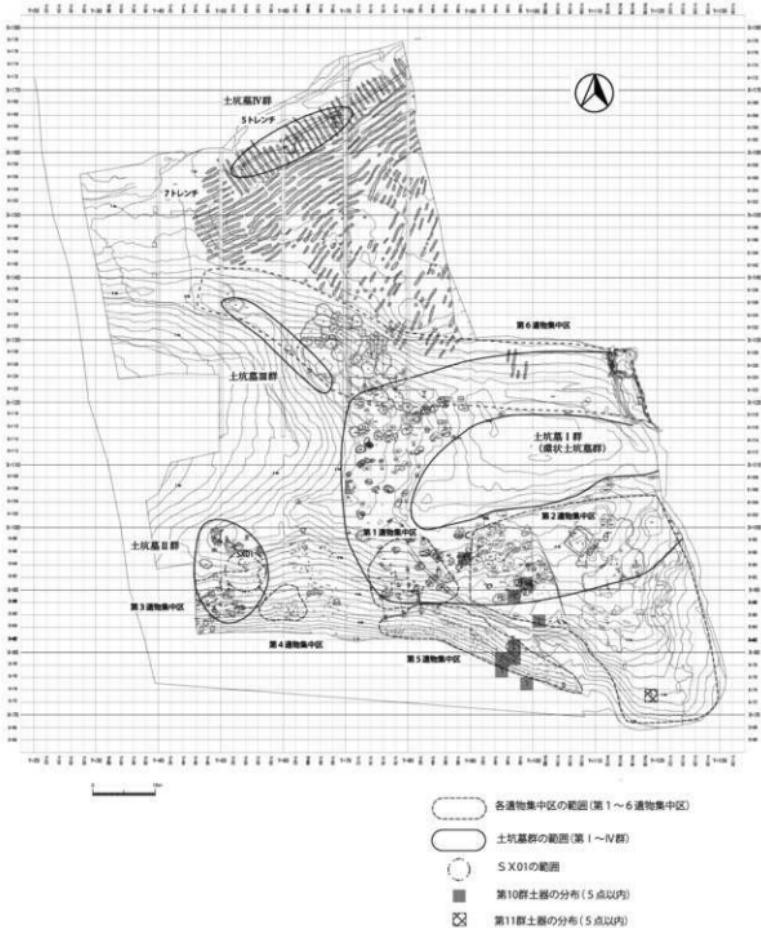
第10群土器



第11群土器

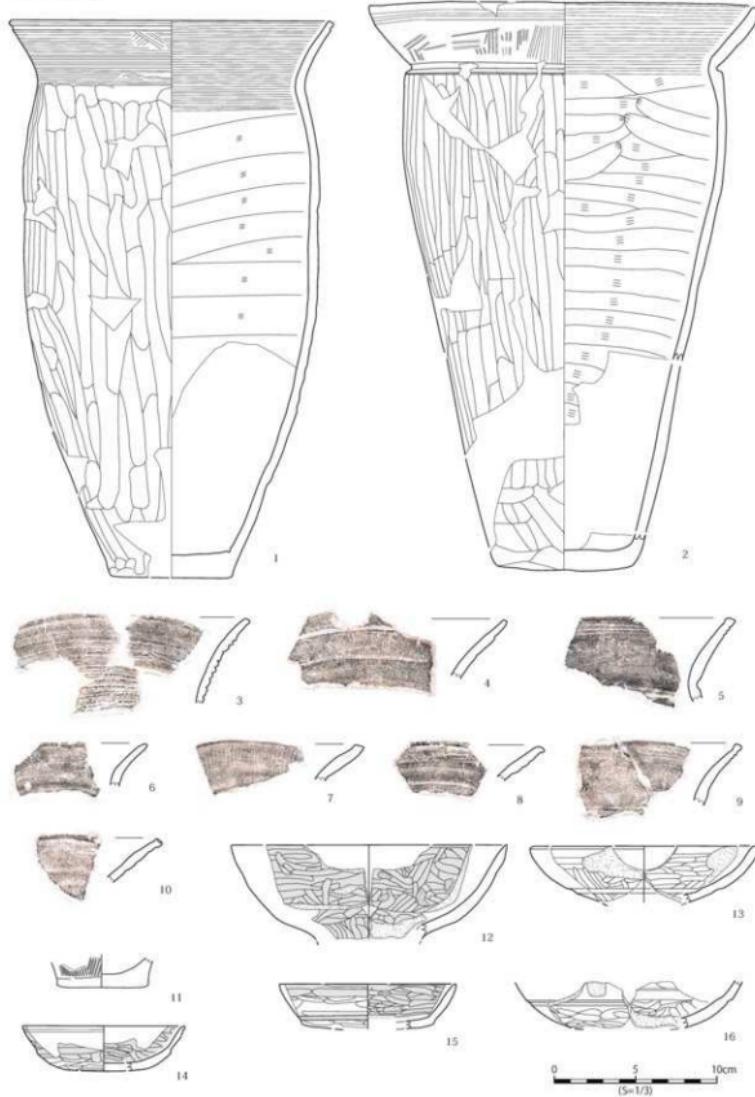


図III-5-4-1 遺構外 第10・11群土器



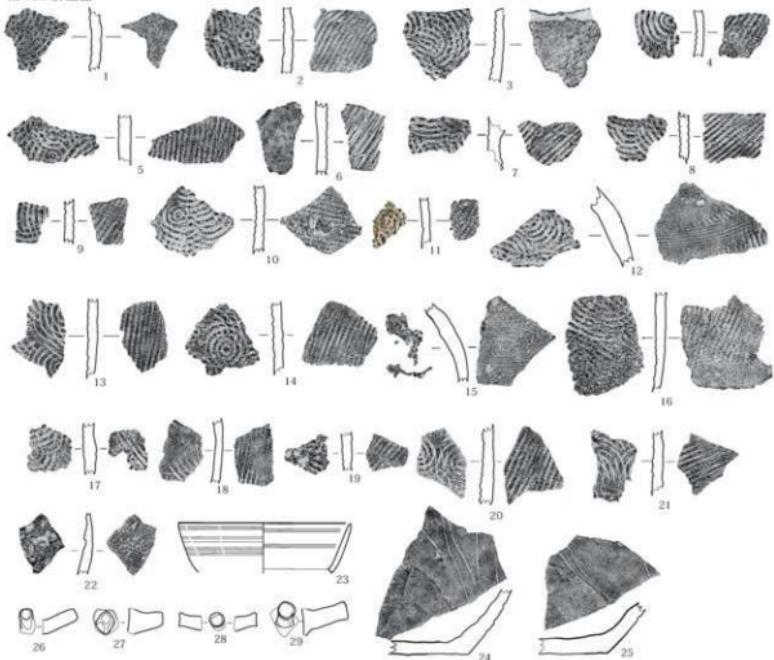
図III-5-4-2 第10・11群土器の分布状況

第12a群土器

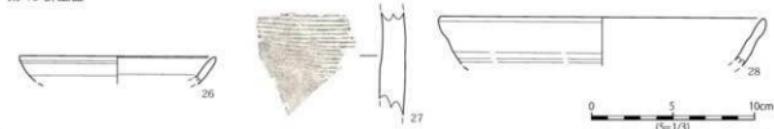


図III-5-4-3 遺構外 第12a群土器

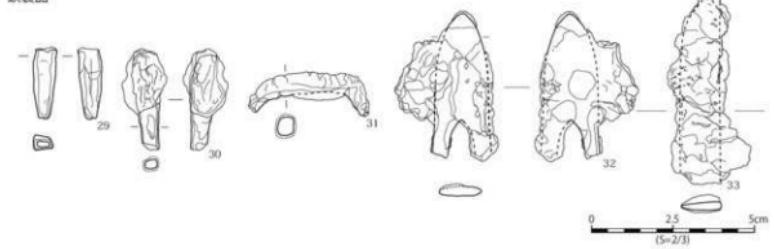
第12b群土器



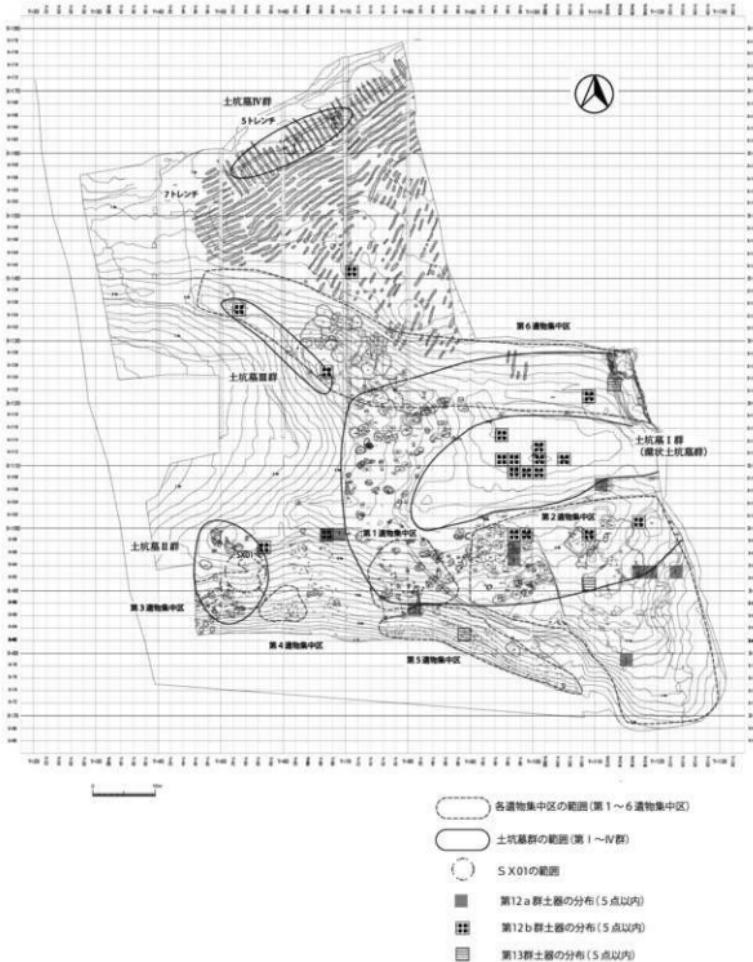
第13群土器



鐵製品



圖III-5-4-4 遺構外出土第12b群土器・第13群土器・鐵製品



図III-3-4-7 第12a・12b・13群土器の分布状況

第4章 考 察

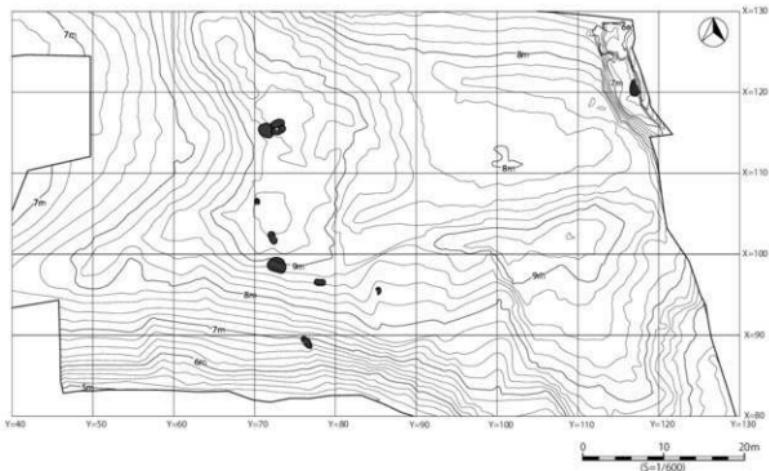
第1節 土坑墓の分布と変遷について

第3章第2節で述べた土坑の内、その形態、構造、堆積物及び副葬品により、墓と認定されたものは、全部で138基である。この内時期が判明したものは92基であった。土坑墓全体を見ると、遺跡丘陵部には、墓が元々無いのか、風雨により消滅したのかは不明であるが、丘陵頂部を取り囲むように緩斜面に形成されている。また、土坑墓の基本形態は楕円形を呈し、長軸方位に規格性は無く等高線に平行に長軸方位を設定している土坑が多く見られる。

墓の築造時期は、2b群から8群までと長期にわたるが、2b群から3群に関しては、散発的であり、変化が認められないこと、7・8群は変化が無いことから一まとめとし、2b～3群(11基)、4群(12基)、5群(17基)、6群(24基)、7・8群(28基)に分類した。以下各時期における、1. 土坑墓の分布、2. 形態・構造、3. ベンガラの有無、4. 副葬品の出土状況等を述べていくことにする。なお、土坑墓内で確認された赤色顔料は蛍光X線分析の結果全てベンガラと同定されている。

1. 土坑墓の分布

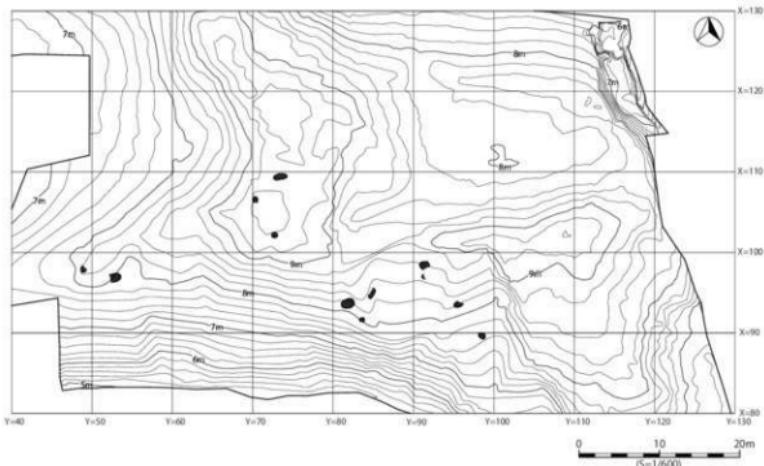
2b～3群の分布状況を図IV-1-1に示す。これによると、標高9m前後の丘陵頂部付近を中心によ



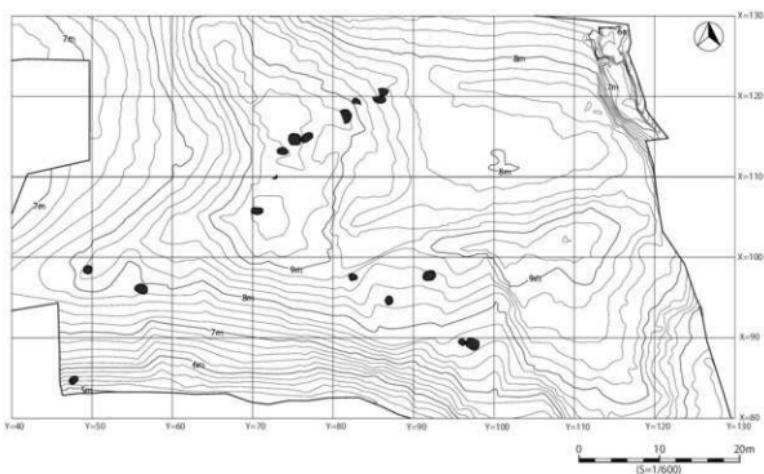
図IV-1-1 2b～3群の土坑墓分布図

となりが見られるものの、東端部や南端の急斜面上にも見られる。

4群の分布状況を図IV-1-2に示す。これによると、分布の中心は2b・2c・3群の分布と変化は無いが、東西方向(Y=50～100)に分布の幅が広がっている。標高も9mから丘陵緩斜面の先端部付



図IV-1-2 4群の土坑墓分布図

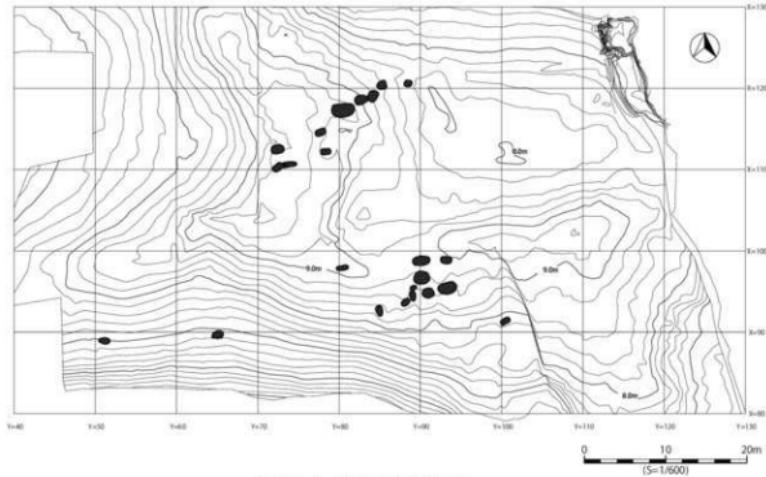


図IV-1-3 5群の土坑墓分布図

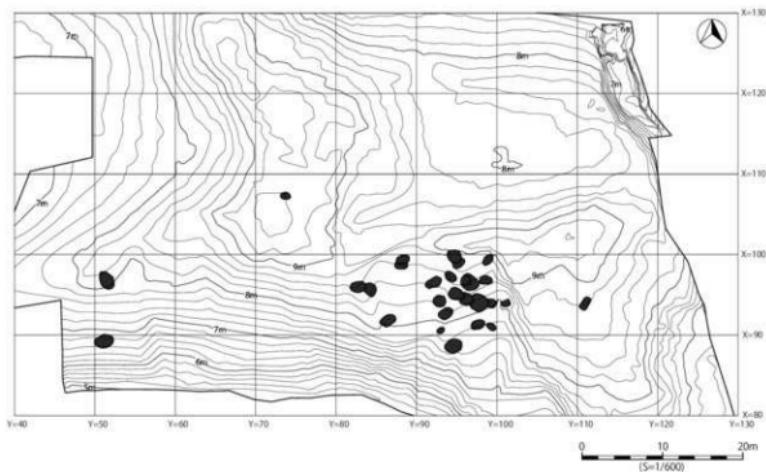
近までその範囲を広げている。

5群の分布状況を図IV-1-3に示す。これによると、4群とその分布範囲にあまり変化は見られないが、X=120,Y=90付近やX=90,Y=50付近の急傾斜地にも構築されるようになる。

6群の分布状況を図IV-1-4に示す。これによると、丘陵頂部には構築されなくなり、頂部を挟ん



図IV-1-4 6群の土坑墓分布図



図IV-1-5 7・8群の土坑墓分布図

で南北方向（X=120 と X=90～100）に構築されるようになる。

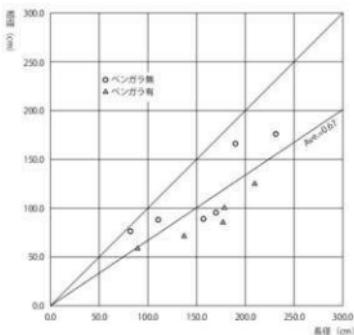
7・8群の分布状況を図IV-1-5に示す。これによると、丘陵頂部の北側には構築されなくなり、第1・2遺物集中区を中心として、構築されるようになる。以上のように各時期において、構築される場所

には若干の移動が伴っており、その移動は遺物の廃棄場所と連動していることがわかる。そのことから、墓の構築及び遺物の廃棄は同様の概念によって形成されていたものと考えられる。

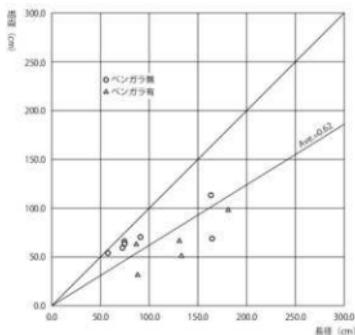
2. 形態・構造

各時期ごとの土坑墓の法量をみていくことにする。図IV-1-6は2b～3群の土坑墓の長径・短径グラフであり、長径では最小のものが81.9cm、最大のものが231.4cmで平均157.3cmを測り、標準偏差は48.0である。短径では最小のものが59.2cm、最大のものが175.8cmで平均99.4cmを測り、標準偏差は37.8である。短径に対する長径の比は最小0.49、最大0.94、平均0.67である。土坑墓の大きさにはかなりバラツキが生じている。

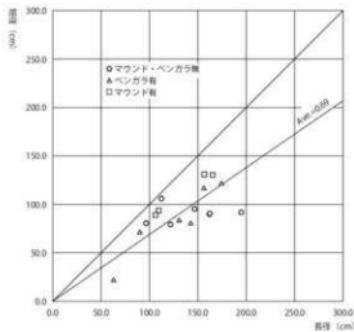
図IV-1-7は4群の土坑墓の長径・短径グラフであり、長径では最小のものが57.6cm、最大のものが181.0cmで平均109.6cmを測り、標準偏差は40.2である。短径では最小のものが32.1cm、最大のものが113.3cmで平均67.1cmを測り、標準偏差は21.0である。短径に対する長径の比は最小0.36、最大0.89、平均0.62であり、前時期比で、土坑墓の大きさが平均で長径が46.0cm、短径で32.3cm小さくなっている。前時期に比べれば大きさに縮まりがみられる。



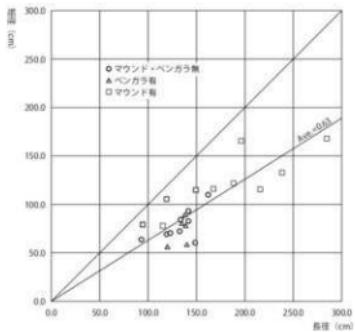
図IV-1-6 時期別法量グラフ (2b-3群)



図IV-1-7 時期別法量グラフ (4群)



図IV-1-8 時期別法量グラフ (5群)



図IV-1-9 時期別法量グラフ (6群)

図IV-1-8は5群の土坑墓の長径・短径グラフであり、長径では最小のものが63.0cm、最大のものが194.8cmで平均134.7cmを測り、標準偏差は34.9である。短径では最小のものが22.1cm、最大のものが131.0cmで平均92.6cmを測り、標準偏差は25.6である。短径に対する長径の比は最小0.35、最大0.94、平均0.69であり、前時期比で、土坑墓の大きさが平均で長径が23.1cm、短径で25.5cm大きくなっている、前時期に比べれば大きさに分散傾向がみられる。

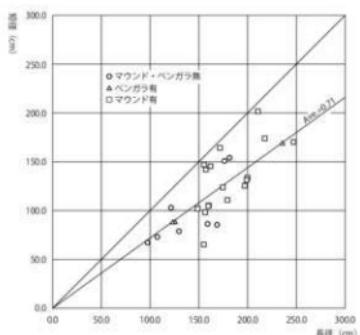
図IV-1-9は6群の土坑墓の長径・短径グラフであり、長径では最小のものが93.0cm、最大のものが284.6cmで平均151.5cmを測り、標準偏差は45.0である。短径では最小のものが56.4cm、最大のものが167.9cmで平均94.4cmを測り、標準偏差は31.0である。短径に対する長径の比は最小0.41、最大0.89、平均0.63であり、前時期比で、土坑墓の大きさが平均で長径が17.0cm、短径で24.6cm大きくなっている、前時期に比べれば大きさに分散傾向がみられ、マウンドを有する土坑墓の中には、長径2mを超える大きな土坑墓が出現する。

図IV-1-10は7・8群の土坑墓の長径・短径グラフであり、長径では最小のものが97.5cm、最大のものが247.3cmで平均167.1cmを測り、標準偏差は36.4である。短径では最小のものが65.3cm、最大のものが201.8cmで平均121.1cmを測り、標準偏差は36.7である。短径に対する長径の比は最小0.42、最大0.96、平均0.72であり、前時期比で、土坑墓の大きさが平均で長径が15.6cm、短径で26.7cm大きくなっている、前時期と同様の分散傾向があり、マウンドを有するものやベンガラが確認された土坑墓の中には長径2mを超える大きなものがある。

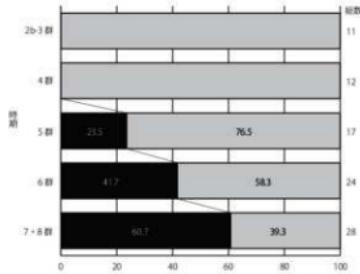
以上のことから2b・2c・3群では分散傾向のあったものが、4・5群では2mを超える土坑墓は皆無となり、法量にもまとまりがみられたが、再び6群～8群にかけて土坑墓の大型化が進むことによって分散傾向が高まり、一部では2mを超える大型の土坑墓がみられることが判明した。

マウンドの有無による各時期別のグラフを図IV-1-11に示す。これによると、マウンドが出現するのは5群からであり、全体の23.5%を占め、それ以前には検出されていない。6群ではその割合が増加(41.7%)し、最も割合が高い7・8群では、60.7%を占める。

底面に溝を有する土坑墓の有無による各時期別のグラフを図IV-1-12に示す。これによると、溝を有する土坑墓が出現するのは6群になってからであり、その内マウンドを有するものがその過半を示していることから、マウンドを形成する土坑墓の出現後にやや遅れて、溝を有する土坑墓がその付

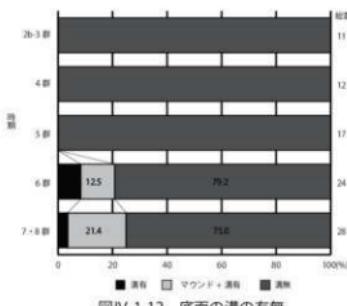


図IV-1-10 時期別法量グラフ(7・8群)

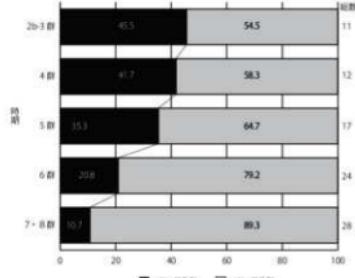


図IV-1-11 時期別マウンドの有無

帶施設として構築されたものと考えられる。しかし、最も多い7・8群でも全体の4分の1程度であり、当該期の土坑墓の中では特殊な構造であると考えられる。



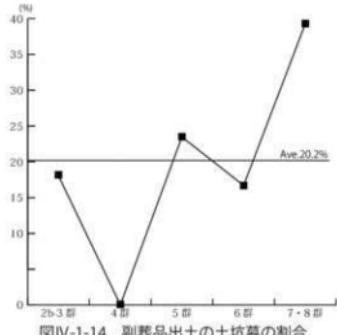
図IV-1-12 底面の溝の有無



図IV-1-13 時期別ベンガラの有無

3. ベンガラの有無

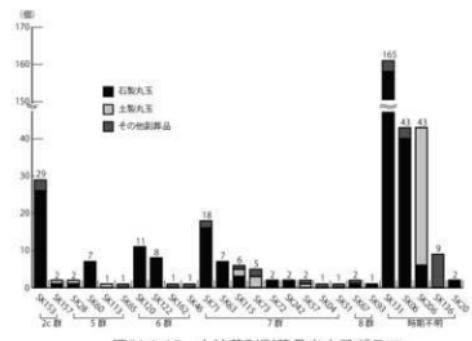
ベンガラの有無による各時期別のグラフを図IV-1-13に掲載した。これによると、2b～3群では約半数の土坑墓からベンガラが確認されている。4群までは、約4割の土坑墓で確認された。5群になるとベンガラが確認された土坑墓は約3分の1まで減少し、時期が下る6群では、5分の1まで減少し、最終段階の7・8群ではさらに10分の1まで激減する。これはマウンドを有する土坑墓の割合と反比例することから、5群を画期としてベンガラ散布からマウンドの形成へといった墓構造の変化が窺える。



図IV-1-14 副葬品出土の土坑墓の割合

4. 副葬品の出土状況

副葬品に関しては、土坑墓の立地状況が、遺物廃棄場所と同一であるため、土器・石器に関しては、完形の土器・石器の出土がほぼ無いため廃棄遺物の流入品と考え、副葬品からは除外し、確実に副葬品といえる装飾品に限定することとした。その結果、土坑墓139基の内、調査を実施した土坑墓129基中26基(20.2%)で副葬品が確認されている。時期別に副葬品の出土する土坑墓の割合につい



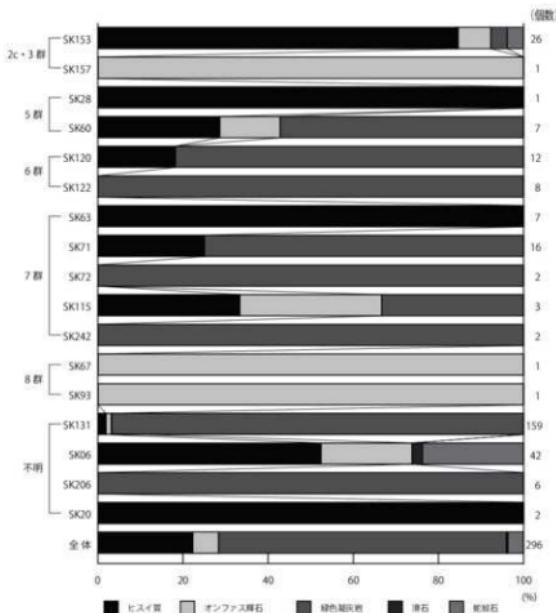
図IV-1-15 土坑墓別副葬品出土量グラフ

であるが、2b-3群では11基中2基(18.2%)、4群では12基中0基(0.0%)、5群では17基中4基(23.5%)、6群では24基中4基(16.7%)、7・8群では28基中11基(39.3%)となり、6群までは4群の0%を除けば、全土坑墓の2割前後であるのに対し、7・8群になると4割弱まで増加している(図IV-1-14)。そこで、全時期を対象として各土坑墓における副葬品の出土数を概観する。

図IV-1-15に土坑墓別の副葬品の出土数とその種類のグラフを示す。これによると副葬品の主体は、石製の丸玉であり、最多の土坑墓はSK131の158点であり、以下SK06の40点、SK153の26点、SK71の16点、SK120の11点で以下10点以下であり、土坑墓1基あたりの平均出土数は11.23個となる。次いで出土量が多いものが土製の丸玉であり、最多的土坑墓はSK206の37点を数える。しかし、石製丸玉と異なり、他の土坑墓では多くても3個体であり、土坑墓1基あたりの平均出土数は1.77個である。その他の副葬品としては、石製の管玉(SK131)、石製勾玉(SK06、SK131、SK153、SK162)、土製管玉(SK65)、土製勾玉(SK73、SK115)、土製耳飾(SK04、SK51、SK67)アオザメの歯(SK136)が出土している。

主要な副葬品である石製丸玉について、石材別にみていく(図IV-1-16)。全体では、緑色凝灰岩製が全体の74.3%、輝

石類が28.4%、その他が7.3%となり、在地で製作された緑色凝灰岩が約4分の3を占めている。次に時期別に見ていくと、2c群から5群までは、輝石類が主体を占めるのに対し、6群からは、緑色凝灰岩が大半を占めるようになり、6群までその傾向は変化しない。7群では輝石類が主体となる土坑墓と緑色凝灰岩が主体となる土坑墓との分化が始まり、8群では、再び輝石類主体となる。このことから、輝石類の使用頻度は時期によって変化ではなく、緑色凝灰岩製の製作・使用が5群から7群にかけて積極的に行われることにより、時期的な組成の変化がみられたものと考えられる。



図IV-1-16 土坑墓別石製丸玉石材組成グラフ

(藤原)

第2節 五月女范遺跡出土縄文土器の編年と組成

関根 達人（弘前大学）

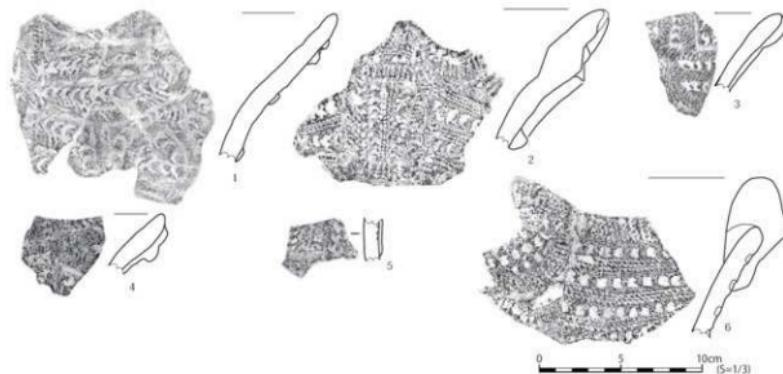
1. 出土土器の特徴

(1) 1群土器

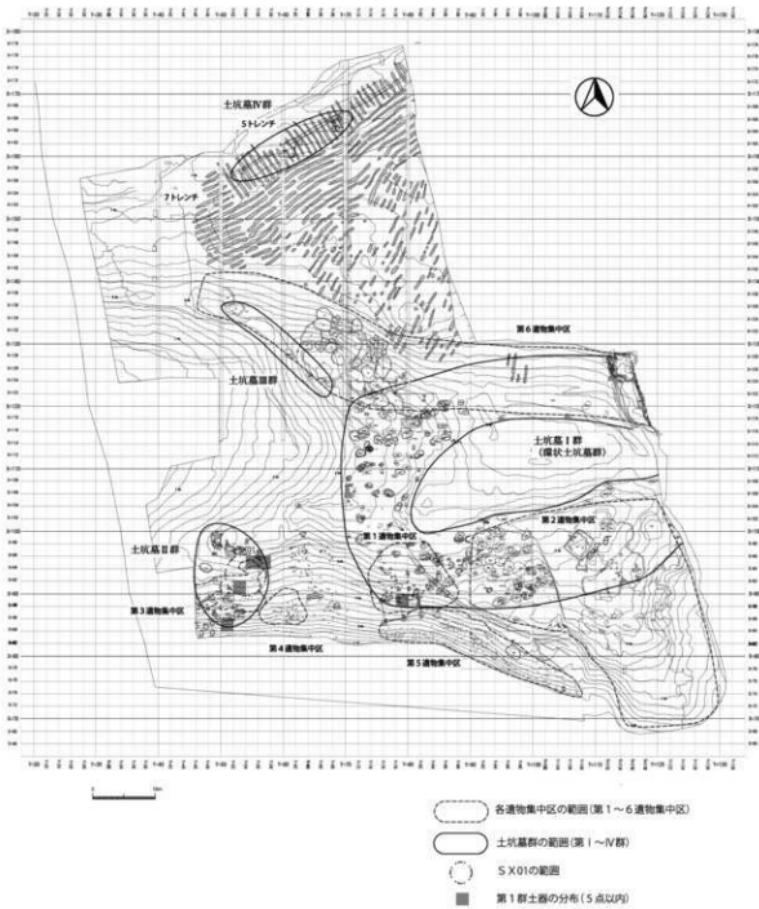
1群とした縄文時代中期の円筒土器（図IV-2-1）は、SX01から4点（1～4）、その南に隣接する第3遺物集中区南端のX86・Y52 グリッドII b層から1点（5）、第1遺物集中区南端のX90・Y80 グリッドII d層から1点（6）の計6点出土している（図IV-2-2）。6点中5点は円筒上層b式の深鉢の口縁部破片であり、残る1点も口縁部に近い破片である。1群土器の半数は、隆帶文を伴うM字状の大型突起部（1・2・6）である。いずれも隆帶に沿って押圧縄文を施し、その間を馬蹄形の押圧縄文で埋めている。

1群土器はこの6個体以外に体部や底部破片は全く出土しておらず、遺跡内に中期の集落が存在していたとは考えにくい。おそらくは晩期の縄文人が別の場所で大型突起部など目につく土器片を拾い、遺跡内に持ち込んだのである。1群土器のうち4点が晩期中葉から後葉に形成された祭祀遺構であるSX01に集中することから、祭祀に関連して持ち込まれた可能性も考えられる。

本遺跡の南東約1kmには縄文前期・中期の笹畠貝塚、同じく南東約1.5kmにはオセドウ貝塚（市浦村教育委員会 1992）が十三湖北岸の標高20m前後の丘陵上に存在しており、1群土器は、そのいずれかで拾われたものではなかろうか。



図IV-2-1 第1群土器



図IV-2-2 第1群土器の分布状況

(2) 2a群土器

丘陵頂部から南側斜面およびSX01から出土しているが、特定の場所に集中する傾向は見られない（図IV-2-3）。1群とした中期の土器と異なり、不完全ながらも器種のセット関係が認められることから、遺跡内に集落が存在したと思われる。第1遺物集中区ではX92・Y84グリッドの最下層であるIIg層・IIf層から2a群土器が出土しており、五月女遺跡の集落形成は、後期中葉の2a群土器の時期に始まったとみられる。しかし2a群土器の出土量が3群土器以降に比べ少ないと、3群土器との間を埋める土器群が欠落していることから、後期中葉の集落の主体部は調査区外にあったと考えられる。

2a群とした後期中葉の土器（図IV-2-4）は、十腰内II群（1～11）と十腰内III群（12～17）に大別できるが、後続する十腰内IV群に相当するものは確認できない⁽¹⁾。

十腰内II群に比定される土器には、深鉢・鉢（1～7）、浅鉢（8～10）、注口土器（11）が認められる。

深鉢・鉢には、鈴木克彦が「華獨土器」と呼び宝ヶ峯式（齊藤報恩会編1991）を特徴づける器種の一つに挙げた（鈴木2004）、3単位の波状口縁で波頂部に捻りの加わった団扇状突起（1・2）や円錐形の大型突起（3・4）をもつ装飾性に富む深鉢、4単位の無文波状口縁の深鉢（5）がある。前者は何れも肥厚した口頸部が鉢形に外傾し、胴部は円筒形で、底部はやや外側に広がる。後者は底部から直立気味に立ち上がり、途中でややカーブを描きながら口縁部に向かって外側に開く。深鉢の口縁部装飾には渦巻ないし曲線的な隆帯の貼り付けが多用されている。

浅鉢は口径に比べ底径が小さく、体部中央に屈曲部をもつもの（8）と、体部が直線的に開くもの（9・10）とがある。何れも口縁直下は無文帶で、体部中位に文様帶がめぐる。文様は、縄文帶内に太めの平行沈線を数条引き、縦方向の弧線で区画したもので、弧線の配置の仕方と、弧線間の一部を磨り消すか否かで文様にバリエーションが生じている。

注口土器（11）は、短く立ち上がる口縁部、碗を伏せた形態の頸部、上下につぶれた球形の胴部からなり、口縁部には装飾深鉢と同様の捻りの加わった団扇状突起がみられる。注口は胴部最大径部にあり、注口下部には突起が付く。胴部最大径部には縄文を施した幅の狭い隆帯が巡るとともに、胴部全体に太めの沈線による区画文が施されている。

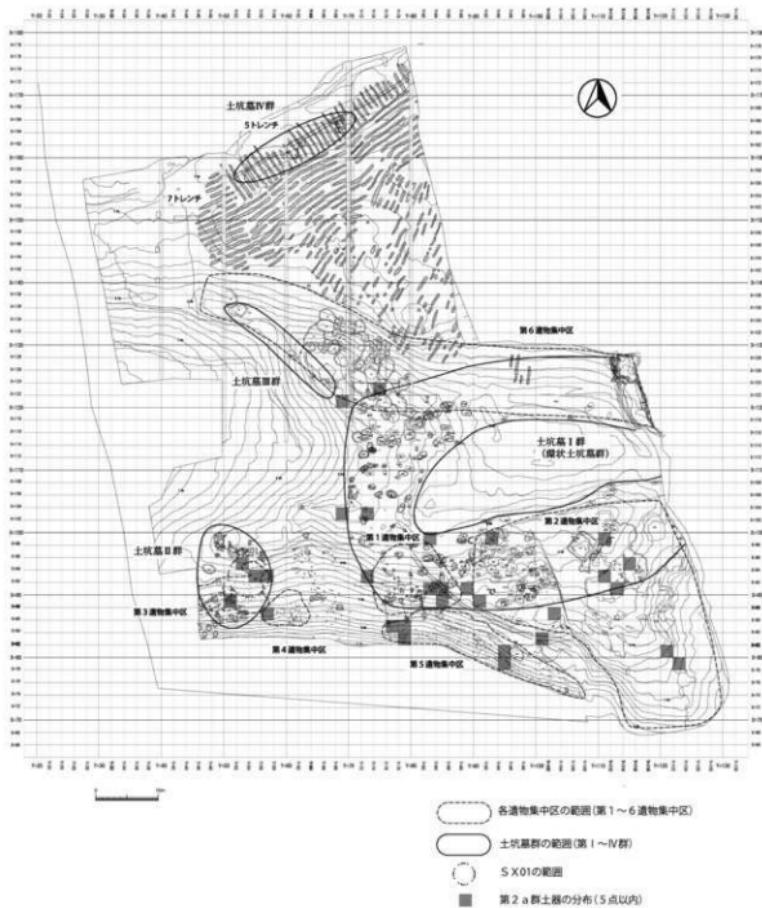
十腰内III群に比定される土器には、深鉢（12・13）と鉢（14～17）があり、装飾は刻目列と同一原体の回転方向を変えることにより作り出した羽状縊文（12・16・17）が特徴的である。

深鉢の口縁は5単位の大波状を呈し、口縁に沿って刻目が巡る。波状部の形状は、緩やかに弧を描くもの（12）と三角状に立ち上るもの（13）とがある。

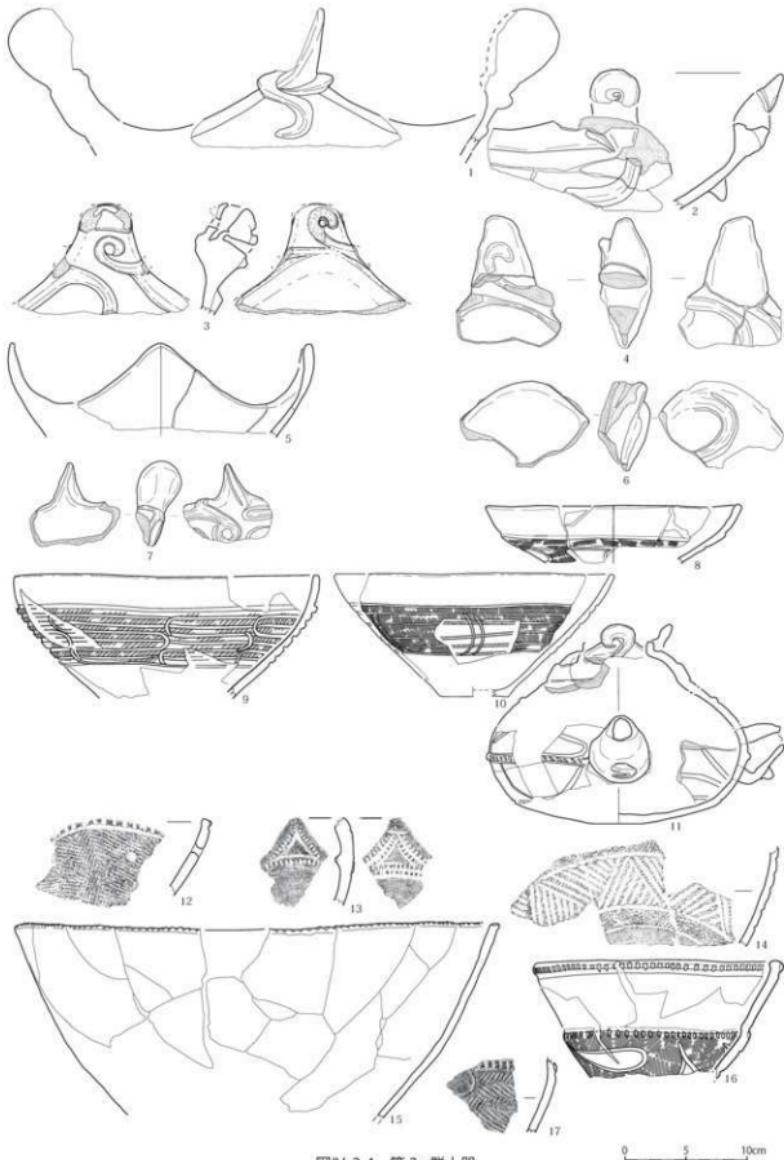
鉢には体部中央に屈曲部をもち、口頸部と胴部が分かれるもの（14・16・17）と、体部が直線的に開くもの（15）とがあり、前者は胴部に文様体をもつ。14は縊文を地文とし、その上に斜めの太い平行沈線を交互に施文している。15は沈線により幅広の鍵状ないし変形入組文を描き、区画の一部に縊文を充填している。

(3) 2b群土器

第1遺物集中区の下層を中心に出土しており、特にX94・Y76グリッドでは最下層のIIf層にややまとまりがみられる。また、晩期中葉から後葉に形成されたSX01からも2b群土器は出土しているが、注口土器の注口部に偏っており、晩期の人が祭祀行為のなかで男性の性器を象った2b群土器の注口



図IV-2-3 第2a群土器の分布状況



図IV-2-4 第2a群土器